魔法先生ネギま！～カレカノ・ライフ～

皐月二八

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法先生ネギま!～カレカノ・ライフ～

【Ｎコード】
Ｎ６５３８Ｔ

【作者名】
皐月二八

【あらすじ】
自称平凡ひ弱な大学生、綺羅川榛名はネギまの世界にトリップすることに。彼が望んだものは護りにしか使えない力と、最強万能な従者だった。ちょっと変わった彼と最強万能な彼女の何の償いもない物語、細々と始動!

第零話　カレ（前書き）

こんにちは、皐月二八です。

こんなの始めました。どうか宜しくしてやってください。

第零話　カレ

うん？……どこだろう、ここ？
確か……え～と、今日起きて……いつも通りに大学に行こうとしたら……。

あ……あ～そうだそうだ！

信号渡ってたら、車に突っ込まれたんだっけ……。やっちゃったなぁ……。
こんなんだったら高校生時代までやっていたように、キチンと手を挙げて渡っていればよかったかなぁ……。ん？　関係無いかな？

というよりこの……うん、“白い部屋”としか呼べない所は何処だろう？　病院？　最近の病院はなかなかにしてスタイリッシュじゃないか。もっと入院するべきだったかな？

「あの～……そろそろいいかの？」

ん？　そこの、立派なお髭をお持ちの御老体はどなたですか？
……あぁ、医者の方ですか？

「ちょいと違うの。儂はこの『世界』、そして周辺『世界』をさらにいくつか管理している者じゃ。有体に言うと、神様じゃよ」

へぇ、医者と神様の違いって、ちょっとなんですか。

「……言葉の綾じゃよ。というより、突っ込むところがおかしくないかの？」

いやいや、別段おかしくないと思いますよ？　僕は人間心理学の専門家ではないので、こういう時に統計的に考えてどんな反応が普通かは知りませんけどね。
僕は一介の社会学科専攻の大学生ですから。

「……まぁいいわい。それでお主、転生してみんか？」

テンセイ？　“Ｔｒａｎｓｍｉｇｒａｔｉｏｎ（＝転生）”の方のヤツですか？

「その転生じゃ。他に何があるんじゃ？」

えっと“Ｎａｔｕｒｅ（＝天性）”とかありますよ。
すみませんね、何しろ現代平凡日本人にとっては聞き慣れない言葉ですから。

「まぁいいかの。それで、実はお主はすでに死んでおる」

ですよねぇ。あれで生き残ってたら、自分でも吃驚仰天です。

「しかしの、それは儂にとって想定外なんじゃよ。詳しい説明は省くが、こちらとしても人間に突然死なれては困るのじゃ。管理手続きとか色々あるからの。だから何時何処で誰が死ぬかは、儂等は漏れることなく把握しておる」

しかし、僕は漏れてしまったと。

「その通りじゃ。しかし、お主の死は此方も想定外だったためにお主の魂を置く場所が無い。それに、こんなことは始めてじゃからのう。お主を転生させ、その魂を観察させてほしいのじゃ」

なんだ、そんなことですか？　減るものでもないのでバンバンしちゃって結構ですよ。こっちも生き返れるのなら万々歳ですし。

「いや、“生き返る”のではなく“転生”じゃ。お主が今までいた『世界』や身体ではない」

へぇ、では何処に生まれるのでしょう？

「それは、お主の世界にほど近い『世界』じゃ。あと、正確には“

……送られる”じゃな。死んだ時のお主……つまり２０歳の、以前とは違った身体でいってもらう。
ちなみにそこは魔法が存在する世界じゃ。もっというと、『魔法先生ネギま！』の『世界』じゃ。
ちなみにどう生きるかは、お主の自由じゃぞ」

そいつはいいですね、若者なら皆憧れるファンタジーな世界か……。
ん？　ネギま？……聞いたことないなぁ、う～ん……。

「じゃが同時に危険も多い。そこで、君が望む能力ｅｔｃを五つだけ叶えよう」

大判振る舞いですね、有難うございます。

「こちらの勝手な判断じゃからな。ちなみに能力はマンガや小説のものでも良いぞ？」

逆に無茶ぶりですねぇ……そんなにマンガも小説も読まないんだけれど。わかりました。
まず一つ目、絶対防御が欲しいです。

「……ほう？」

“絶対防御”、そうですね……どんな攻撃……魔法、物理、超能力、とにかく何でも防げるシールドみたいなのを展開できるようになりたいです。あ、常時展開ではなく、僕の意志でＯＮ／ＯＦＦ出来るようにお願いします。

「……理由を聞いても？」

痛いのが嫌ですので。
僕の身体能力、知ってます？　バリバリのインドア派ですよ。喧嘩すらやったことありません。痛いのは勘弁です。

「……うむ、諒解した。肉体を強化させることもできるが？」

それはいいですよ、そんなモノ手にしても、振り回されるのは目に見えてますし。
二つ目……従者を下さい。

「従者？」

はい。家事とかもこなせる女の人でお願いします。性格は……うん、僕をしっかりサポートできるような感じで。
一人で行くのは寂しいですし。

「諒解した」

で、残りの願いなんですけど、従者に関することで良いですか？

「ほ？　それは構わぬが……」

では三つめ。その従者の身体能力・魔力他スペックを、その『世界』最高・最強のモノにしてください。それと、そのスペックを使いこなせるだけの才能と技術もお願いします。従者としての性能も勿論最高で。

「諒解じゃが、なぜ自分ではなく従者を最強にするのじゃ？」

戦うのは嫌なので、いざとなれば従者に護ってもらえるようにするためです。絶対防御はあっても護るだけではどうにもならない時もあるでしょうしね。

あと、強い女の人ってグッときますしね。僕はひ弱ですけど。

四つ目は……そうですね、その従者ですけど、壊れることも死ぬことも無いようにしてください。失うのは嫌ですので。万が一のためにお願いします。

「諒解した、次で最後じゃな」

そうですね、では五つ目は……あ、ペンダントで。

「……ほう？」

アレですよ、僕が生前いつも身につけていたイルカのペンダント。妹から貰った大切なものですから、アレを下さい。勿論僕が身に付けていたヤツ、そのものを。

「……ふむ、諒解じゃ。では、いってくるがよい」

有難うございます……あ、最後に。

「何じゃ？」

僕の名前ってどうなるのでしょう？

「好きにして構わぬよ。生前の名前を使っても、新しく考えてもよい」

そうですか。親から貰った名前ですし、そのまま以前の名前にします。

「そうかの……では、また逢う日まで、綺羅川（きらかわ）　榛名（はるな）君」

わかりました。神様もお元気で……。

これが、僕の第二の人生の始まりとなった。

第零話　カレ（後書き）

こんな感じでやっていきます。

御意見御感想宜しくお願いします。

第壱話　カレとカノジョの出会い（前書き）

原作突入まで少しあります。

基本、主人公は事なかれ・平和主義です。

第壱話　カレとカノジョの出会い

ある日のこと、僕はいつも通りに目を開けた。すると、

「おはようございます、マスター」

超が付くくらい綺麗な女の人の顔があった。それも弩(ド)アップで。
黒い瞳が、僕の顔を映している。

「あぁ、君が従者か」

「はい、私が従者です」

「名前は？」

「マスターの意のままに」

「え？　いいの？　適当でも」

「意のままにと適当はイコールではありません、というより掠(かす)りもしていません」

「成程、日本語の文法は完璧か」

「はい、日本語の文法は完璧です」

この会話の間に、腕時計の長針が一回りした。
僕はベットに寝ている。というより寝かされている。
少しだけ顔を持ち上げ、周りを見ている。

すぐ左に窓があった。木漏れ日が気持ちいい。窓の外には何かの樹の枝が見える。葉っぱの色は青青しい。勘だけど、たぶん初夏。日差しからしてそう思う。あと、ちょっと空いた窓から風が入って来てカーテンが揺れている。
何かイイ。

そんでもってそのベットに半分乗っかるように、長身の美女がちょうど僕の顔を覗き込むような態勢で僕の顔をじっと見ている。
美女は黒と白のメイド服を着ていて、細身だがでるべきところはすっごく出ている。ていうか当たっている。
純白の長髪をストレートにしている。たぶんだけど膝裏くらいまであるだろう。嘗て見たことが無いくらい長い。いや、女性の髪を凝視した事なんてないけど。
肌はとっても白い。肌色というより白色だ。白磁のように輝きそうな白。
凄くイイ。

「僕の名前は知ってる?」

「綺羅川(きらかわ)　榛名(はるな)です」

ハイ正解。前世（でいいのか?）と同じ名前だ。やっぱりいいね、しっくり来る。

ていうか、フルネームで呼ばれたのは出席確認で名前を読み上がられた時以来だと思う。結構珍しい名字だと思うけど、なぜかフルネームで呼ばれた。

ちなみに家族からはハル、友達からは名字で呼ばれるのが僕の日常。いや、前日常。

だからマスターと呼ばれるのは新鮮だ。当たり前か。

「君の名前、金剛(こんごう)か比叡(ひえい)か霧島(きりしま)の内どれが良い？」

「一先(ひとま)ず戦艦から離れるべきだと思います」

「じゃあ赤城(あかぎ)で」

「巡洋戦艦改造の空母も止めてください。いっそフネから離れてくださいマスター」

「じゃあハク、綺羅川　ハクで」

「何の脈略もありませんが、それでお願いします」

「宜しくハク」

「はい、マスター」

従者の名前が決まったところで、上半身を持ち上げる。相変わらず我が従者は零距離言葉のキャッチボールが好きらしく、一向に僕か

ら離れる気はない。
めっちゃ見つめられている。おまけに頬を擦(さす)ってくる。

「ところで、ここは何処？」

「マスターと私の愛の巣(スウィート・ホーム)です」

「オーケー、君の英語の発音がとっても素敵だということはよくわかった。詳しく頼むよ」

「はい、ここは日本国、麻帆良(まほら)という場所です。位置的にはマスターが生まれた時代で言うと埼玉県に当たります」

「へぇ、で、この部屋……というか家は？」

「私が建てました」

「……は？」

「私がこの家の建築を計画・実行しました」

「……何時(いつ)？」

「マスターはここに来た時――つまり昨夜の深夜ですが――お休みになられていたので、マスターを固く汚い地面に寝かせるわけにはいきませんので、造りました」

「……どうやって？」

「樹を斬り、錬金し、造りました」

「そんな事が出来るんだね」

「マスターのために必要な力です」

知らなかった。最近の従者は建築が必須科目なのか、凄いな。

「ていうか、錬金って？」

「石やら土やらを元に、金属などを創造する術です。埃からでも金を造れます。生命以外なら何でも可能です」

なにそれ凄い。

想像よりずっと万能なんですが。神様、貴方の基準がわかりません。

「で、今は何時？西暦で頼むよ」

「はい、西暦１８３５年です」

「え、マジで？」

「はい、マジです」

「江戸末期って……。ていうかここ、普通に水道とかあるんだけど。盗賊とかこないかなぁ」

「結界を張っております。太陽が直撃しても罅（ヒビ）一つはいりませんのでご心配なく。もし不届き者がこの楽園（エデン）に汚らわしい脚で踏み込んできても、即座に私が始末します」

そいつはすごい、本当にハイスペックだな。

神様、予想以上もいいところです。

というか、先刻一瞬目が怖かったんだけど。あと、そろそろマジで零距離会話止めてほしい。あと頭を撫でないでほしい。

なまじハクの方が背が高いから、やりたい放題やられてしまう。おまけにこっちは下半身はベットイン状態。

「これから百年、十世紀、ずっとここで暮らしましょう」

……聞き逃せない単語が入ったんだけど。

うん、普通ヒトの人生（ライフ）は世紀（センチュリー）で表現しないと思うんだ。世紀の前に「半」とかが付けば話は別だけどね。「アイツの寿命が残りマッハで四分の三世紀」みたいな感じで。

「私という不老不死の従者との経路（パス）が繋がっているため、マスターも完全なる不老不死です。

ちなみに私はそもそもダメージを受けるということもありません。

この『世界』の如何（いか）なる存在でも、私に傷を付けることは叶いません。有象無象共の攻撃など、蚊の一刺しにも劣ります。

そして私が生き残っている限りマスターは死にませんし、その逆も然りです」

……リアリー？
神様、貴方と再会できる日は来ないかもしれません。

「地球が滅んでも、また別の星に移れば良いだけの話です。さぁ、人生（ライフ）を楽しみましょう。私と共に」

……だから、零距離言葉のシグナルビームはほどほどにしてほしい。

まぁいいか。気楽に、気長に、長閑に過ごさせてもらいますか。

ハクが作ってくれた朝食を食べながら、そんなどうでも良いことを考える。
めちゃくちゃ美味かった。
ちなみに食材も自在に生み出せるらしい。といっても野菜とか果物とか穀物とかの種を生み出し、植えて、成長させたそうだ。家の裏に畑やら水田やらがあった。
あと肉や魚は生み出せないので、ハクは直接うさぎを狩ったり川に行って釣ったりしてきてゲットしたそうだ。

要領が良すぎて泣けてくる。
というか本当に万能で僕のすることが無い。

ため息をつきながら、前世から持っていたイルカのペンダントを弄んだ。

転生生活一日目、飯食って風呂入って終了。

第壱話　カレとカノジョの出会い（後書き）

基本ほのぼのです。

御意見御感想宜しくお願いします。

第弐話　カノジョの接客術（前書き）

今回はハク視点です。

今作は榛名視点とハク視点、たまに第三者視点で展開していく予定です。

第弐話　カノジョの接客術

私がマスターに仕え、“綺羅川（きらかわ）　ハク”という名を賜ってから幾分か時が経ちました。

それ以降は特に記すべきではありませんが、それでも充実した日々でした。

毎日マスターのために働き、毎分マスターの麗しい御顔を見て、毎秒マスターと共に過ごす、最高の日々です。

私はマスターの従者として生み出されました。

だから、マスターに尽くすのは当然のこと。

しかし、それは決して束縛でも不自由でもありません。

初めてその御顔を見た瞬間から、私はマスターのことが大好きでした。純粋に、この人の役に立ちたいと思ったのです。その邪魔は誰にもさせません。私は永久にマスターのために在るのです。

ここ麻帆良ですが、無駄に存在感のある巨木がある以外は長閑で静かで平穏です。この国は今時代の節目を迎えていますが、そんな事は私の知ったことではありません。

巨木も山も森も川も、そして命も、ここのものは全てマスターのもの。マスターに搾取されるべきものです。

本当ならこの世界を丸ごと捧げても良いのですが、マスターはそんな事を望みませんでした。

「いや、こんなド広い土地があれば十分だって」

と仰りました。
マスターはこの星の凡人共全てに、八尋の海より深い御慈悲をお与えになったのです。ならば、私も無理に捧げたりはしません。

ですが、私はまだ生まれたばかりだからか、自分の感情をうまく出すことができません。そして、それを言葉に出すこともできません。ですから、私はもっとマスターを見つめ続けていたいのに、それを口にできません。
もっとマスターに触れていたいのに、それを言葉として吐けません。

感情を碌に出せない私は、憐れな小犬以下の存在です。
餌が欲しくても、寂しげに啼(な)いてご主人様(マスター)に尻尾を振ることすらできないのですから。

もどかしさに、身を裂かれるような痛みが走ります。
この身の全てを捧げられるのに。
マスターの嗜好から、趣味、性癖ｅｔｃ……全てを把握しているのに、それを口にする事が出来ないのは、とてももどかしく、そして恥ずべき事です。

粗相があってはなりません。なるべく速やかに改善しなくては。
そう思っていても、この愚かな口は言葉を吐くことができません。

自分から話しかけることすら上手く出来ません。一度会話が成立すれば、マスターが望む通りの言葉を返せるのですが。

仕方無しに、マスターが話しかけてくださるまでは淡々と黙々と、マスターの御世話をする他ありません。

マスターは私との会話が楽しいのか、何時(いつ)でも何処でも話しかけてくださるので、此方としては有り難いこと至極です。恥じ入るべき事ですが、今はマスターのその御厚意に甘えることしかできません。

その代わり、マスターの御世話に全力を出しております。何時(いつ)でも何処でも、一瞬たりとも手を抜いたことはありません。

マスターが御就寝なさっている時から御休みになられる時まで、常にマスターの御世話をしているのです。
ちなみに私に睡眠は必要ありません。寝ることは出来ますが、喩え一世紀寝なくとも疲れもしません。

マスターが悪い夢を見ることが無いよう、御休みになっている間に不埒な輩に襲われないよう、常に抱きつき、マスターの御身体を護っています。マスターの素敵な寝顔は何時間見ていても、決して飽きることはありません。

「なぁー、ハク？」

「はい、マスター」

「魚って、家の近くの川で釣ってきているんだよな？」

「はい、その通りですが？」

「じゃあ、このどう見てもアマゾン川にしかいないような大魚は何なんだ？」

「小ぶりな魚しか取れなかったので、小魚を元に再構成しました」

「え？　マジ？」

「はい、マジです。
御安心してください、品質・栄養ともに完璧です。味については言うまでも無いかと」

「うん、ピラルクの味がする。喰ったことないけど」

「至極恐悦です」

いつも通り御食事を取るマスターの背後に立って給仕をします。
マスターはいつも残さず食べてくださいます。
“食事は残すな”というのが、マスターの御父様の遺言の一つだそうです。

ちなみにマスターの御父様は、生きている内に百を超える遺言を残しているとか。マスターが前世でお亡くなりになった時は御存命だったそうですが。

そんな時です。

「……マスター、申し訳ありませんが……」

「へっ？」

結界付近を羽蟲が一匹、しつこく侵入を試みています。
麻帆良全土を覆う結界ですが、その強度は人間には何京人集まっても罅(ひび)すら入らないでしょう。
その羽蟲は強硬手段（結界への攻撃）は行っていないようですが、流石にここまでぶんぶん飛び回れると鬱陶しいですし不愉快です。

マスターの御世話以上に大事な事などありませんので放置していましたが、気が散ってしまっては元も子もありません。気が散った結果マスターの御世話に不備が生じるわけにはまいりませんので。

そのため私は、マスターが御食事を終えるや否や、早々に片付けて家を出ました。
いつもなら、食後のマスターの御顔を拝見する時間です。
それが邪魔され、私の頭は沸騰直前でした。

「――――――――――――――――――――殺す」

小さく呟くと、私は羽蟲の羽音が五月蠅(うるさ)い場所へと向かいました。

そこでは一匹の蠅が、蛆虫より汚らわしい雰囲気で結界（がある方向）を睨んでいました。

私は蠅の前に立つと、目を細めながら拳を握ります。

「何の真似？　マスターが狙いなの？」

「あ、貴方は？」

聞き返されるが無視します。そもそもこんな蠅の声を聞くくらいなら、芋虫が餌を食(は)む音を聞いていた方がまだ有益です。

「答えなさい。殺されたいの？」

「……私はメセンブリーナ連合の者だ。この土地の管理者に会いに来た」

土地の管理者。つまりマスターの事です。
つまり、この蠅は身分不相応にもマスターを狙っているということですね……大罪、神殺しが万引きに見えてしまうほどの大罪です。

「……死ね」

蠅の顔に拳を叩き込みます。拳は蠅の汚らわしい顔を突き抜け、蟲の体液を撒き散らしました。おぞましいことこの上ありませんが、我慢する他ありません。

私は汚れたメイド服と白い手袋を綺麗にすると、愛しいマスターの元へと帰ったのでした。

第弐話　カノジョの接客術（後書き）

連合？　そんなもの、ハクは歯牙にもかけません。
麻帆良の未来はどうなるか……？

御意見御感想宜しくお願いします。

第参話　カレの対面（前書き）

お気に入り登録数１５０越え、だと……。

まだ三日も経ってないってのに、何ですかね？　コレ。

息抜き半分お遊び半分で書いて、ハクの設定にいたっては風呂に入りながら『パンダヒーロー』歌ってたら考えついたやつなのに……。

もう、これメインで書いてもいいでしょうか？

第参話　カレの対面

皆さん、不老不死って残酷だと思いますか？

よく聞く不老不死の末路（テンプレの）って、愛する人が皆死んじゃって、死にたくても死ねなくて、そんでもって精神崩壊ＥＮＤって感じだと個人的には思っているんだけどね。

結構イイよ？　不老不死。

従者だけとの悠々自適な生活。ＰＣとか携帯とかがあったらずっと引き篭もっていられるような生活。もう割と月日が経ったけど、うん。

飽きる気がしない。

勿論前世（しつこいけど、これでいいのか？）の記憶とか思い出とかを思い出して、親より先に死んだ事を嘆いたこともあるけどね、嘆いたところで僕の生霊が両親と妹の元に現れて土下座するわけではもないし、泣いても得るものは何にもないしね。従者（ハク）が零距離でガン見してくること以外。

それに、元々さほど都会でもない所で生涯を終えた僕としては、こういうスローライフでも特に不便は感じなかったんだよね。携帯初めて買ったのが高校生の時っていう田舎者だよ。

寧ろハクという虚しくなるほど万能な従者がいる分、以前の生活よりずっと不便が無い。

一日中自由時間だけど、だからと言って飽きるわけじゃあないんだなぁ。新発見。

初めて知ったんだけど、僕は変わり映えしない生活の方が好みらしい。アドベンチャー野郎には向かないみたいだ。薄々感付いてはいたけどさ。

まぁ、悪くないと思うんだ。

寂しくないし、そもそも僕兎じゃないから寂しくても死なないし。

常日頃から従者がべったりくっついているんだよ？　ハクがいないのは風呂の時と寝る時、そしてハクが家事をしている時とかそのくらいだからね。おまけに風呂に入っている時ですら、扉一枚隔てたところで直立不動で立ってるんだよこの従者。

想像してみてよ、風呂上りに服を着ようと扉開けたら、メイドさんが直立不動でこっちをガン見している。

僕的には全然美味しくない。

ていうか見るならともかく、見られるなんて嬉しくない。

おまけにそのままとっ捕まって身体を拭かれるんだから寧ろ恥ずかしい。僕にだって羞恥心くらいはあるんだよ。

寝ているときだって、ドアの前でずっと立っているんだよ。せめて背中を向けていてほしい。

こんなだから、寂しくなりようが無い。鬱陶しいとも思わないけどさ。

最近になるまでもなくわかったことだけど、ハクは表情に乏しい。

あと、僕を見つめるのが大好きらしい。

暇さえあれば、僕の顔を覗き込んでくる。零距離で。

彼女身体のある部分がものすごく大きいから、零距離で見つめ合うことになるとどうしても当たる。ていうか当ててきている。絶対三

桁はあるよ、アレ。

僕の背丈は１７０ちょいで、ハクは１８０くらいなんだけど、ハクがちょっと屈んでも普通に僕に当たるんだよ、アレが。何かとは言わないけど。

嬉しくないとは言わないけどさ、僕もドキドキしたりはするんだよね。顔には出さないけど。ポーカーフェイスは得意なんだ。

ところでそんなハクだけど、最近ちょくちょく出掛ける。食糧確保とは別に。

本人は「蠅掃除」とか何とか言っていたけど、絶対あっちの類だと思う。

たまーにだけど、爆音が家（こっち）まで届いたりするんだよ。

それでよくよく聞いてみれば、最近“メセンブリーナ連合”を名乗る連中がたかって来ているそうだ。

どこだ、そこ？

これでも社会学科の大学生だったから、世界地理には少しは明るいつもりだ。

詳しく聞いてみると、“魔法世界”にある国らしい。

国というか、複数の国家の連合体。

うん、この世界がファンタジーな世界だってことをすっかり忘れてたよ。

だってここに来て、神様から貰った“絶対防御”の力、試したことが無いんだよ。

これはサボっていたとかじゃなくて、何でもかんでも防いじゃうから発動させても実感がわかないんだ。シールドも目に見えるわけじゃあないし。

一度ハクに攻撃してみてと頼んだら、「死んでもマスターを攻撃したりはしません」と怒られた。
あなた不老不死ですよね？

だから効果の確かめようがないんだよ。外敵はハクが倒しちゃうし、そもそも結界が張ってあるから盗賊どころか軍隊でも来れない。
この場合、“外敵”には野生の熊はおろか鼠すら含まれる。
だからハクによって、熊は殴り殺されるし鼠は踏み潰される。
こんな状態でどうしろと？

しかも何時（いつ）の間にやら、ここ麻帆良がまるまる全部僕の土地になってたんだよ。ちゃんと政府が発行した証拠もあれば、なぜか僕の血判までであった。

ハクが上手いこと偽造してくれたらしい。ほんと無駄すぎるほど手際が良いんだよなぁ。

話を戻すけど、どうやら連合の連中はこの土地一帯を狙っているらしい。ここはドが付くレヴェルの霊地で、しかもあの目立つ巨木（僕は“世界樹”と呼んでいる）には、知っている者が聞いたら飛び上るほどの魔力が内蔵されているそうだ。

要するに、連中にとっては此処は御馳走の山、というわけ。

で、最初それを“排除”したら今度は軍隊がやって来て、それを“排除”したらもっと大軍がきて――という感じでどんどん増えたそうだ。

うん、いつの間にか従者が国に戦争を仕掛けていたようです。

気付けよ、僕。

まぁそれはともかく、連合さんはとにかくしつこくて、もうずっと襲撃してきているらしい。

それで業を煮やした我が従者は、メセンブリーナ連合の首都、メガロメセンブリアに強力な一撃を叩き込んだらしい。

しかも此処から。

どんな射程距離だよ。

んで、連合の首都は半壊。

ハク曰く、『魔法の射手（サギタ・マギカ）』という初歩中の初歩魔法の遠弾、それも本気のヤツを一発叩き込んだだけらしいけど、少なくとも一発で首都を半壊にする様な術を“初歩中の初歩”とは言わないと思うんだ。

多分、核弾道ミサイルをブチ込まれたような気分だったろうねぇ。

どんな気分かしらないけどさ。日本人舐めるな。

「マスターを煩わせたくありませんでした」と言ってたけど、せめて事前通告くらいはしてほしかった。

そしたら将軍だか大佐だか知らないけど、とにかくエライ人が白旗振ってきた。

そして、何とか交渉させてほしいと言ってきたそうなんだ。

それをハクからの思念通話（テレパシーみたいなもの）で聞いて、まぁいいかと思って了承した。

ハクも不承不承だったけど頷いてくれた。

家から離れた所に会議用の大きい御殿っぽいのを（ハクが）建てて、そこでお偉いさんと対面することになった。

相手はアナトーレ＝カミュと名乗った。勲章をジャラジャラ付けていて尚且つ何食ったらこんななるんだと小一時間問い質したいくらい肥えていた。ここまで聞くとさぞかし迫力がありそうなんだけど、実際のところは全くない。

何故かって？　僕の後ろで凄みを利かせているハクがよっぽど怖いらしく、電気椅子に乗せられた囚人も顔色を失くすくらい震えているから。

いや、リアル電気椅子に乗せられた人なんて見たことないんだけども。

おまけに顔が、雪化粧した人並みに白い。

凍死した人でも、もうちょっと顔色いいと思う。

そんでもって向こう側の要求、いや願いなんだけど、極東のこの地に魔法使い（ていうか連合の）拠点が必要らしく、その候補が此処しかないそうだ。

だから是非ともこの地を拝借、できれば譲ってほしいと何度も頭を下げられた。

ていうかそれ以前に、後ろにいるハクの軍人さんを見つめる視線が怖すぎる。

具体的に言うと、「テメエとっとと出ていくか豆腐の角に頭ぶつけて死んじまえ」と目が言っている（みたい）。

オーラみたいなのが出ているし、おまけにこれだけ怖いのに目が冷たい。何の感情も感じない。
眼球を氷床の奥底に千年突っ込んでたんじゃあないかと言いたくなるくらい冷たい。
最高級の水晶玉が裸足で逃げ出すくらい、何も感じない無機質な目だ。
向けられる相手が僕だったら、間違いなく失禁している。若しくは心臓麻痺を起している。

とにかく怖い。ていうか、逃げたい。逃げて布団の中で丸まって震えてたい。
何、雷に怯える子供みたいだって？
雷がカメラのフラッシュに見えるくらい怖いんだよ、割とマジな話。

もういいや、さっさと終わらそう。
多分ハクに丸投げしたら、この軍人さん一秒で二階級特進することになると思う。
流石につい先程名前を紹介し合った直後に、相手がスプラッタなことになるのは勘弁してほしい。
平凡ひ弱な大学生には、荷が重すぎる光景だ。

取り敢えず向こうは学園都市を造る計画だった。
もぅいいよ、貸すから好きにやっちゃって。

そんな感じでＯＫした後、ハクによって色々と向こうに条件が与えられた。
結構な数になるんだけど、ぶっちゃけて言うと、「こっちに手を出すな」と「使っていい土地は（世界樹を含む）三分の一だけ。残りは入ることも禁止する」ということ。
そして最後に「散々こっちに迷惑かけたんだから金払え。あと、年

に一回租借料を払え」。

ちなみに今回此方に支払われる金は、小国なら破綻するほどの金額。
国家予算なんて比じゃないくらいの大金。
そんでもって年一で払われる租借料は、小国の国家予算の半分以上。

軍人さんは涙目で条約書にサインした後、すごすごと帰っていった。

「資金はあって困る事はありません」

ハクはそう言っていたけど、向こうの首都を半壊させてさらに法外な賠償金支払わせて、おまけにこれから先ずっと年に一回大金支払わせる僕達って相当悪なんじゃあないか？

ひょっとしなくても、これって棚ボタ？

第参話　カレの対面（後書き）

ちなみに本作の基本コンセプトは、「防御だけ最強、他最弱の主人公と最強万能従者の暴走コメディ」です。

ギャグ系を書ける人にすごく憧れておりまして……。面白い小説が書きたいです。

御意見御感想宜しくお願いします。

第肆話　カレと学園都市（前書き）

色々御感想をいただきました。感謝感激です。

ヒロインはハクオンリーを望む人が多かったですね。
私もそのつもりですが、サブヒロインくらいなら少し出しても問題無いかなー、何て思います。
ですから、ヒロイン増加の要望があったらなるたけ応えていきたいです。まぁ、多くて二人でしょうかね。あくまで“サブ”で。

あと榛名の性格、具体的にはハクが人を殺したことに何も感じていないことについて、御指摘をいただきました。

榛名はあくまで“自称”平凡ひ弱ですし、まぁ、ちょっと変わっています。ていうかズレています。
別に彼は冷淡なわけではなく、目の前で人が苦しめば相応に悲しみます。
唯、あまりにも嘗ての現実からぶっ飛び過ぎて、そして自身から離れ過ぎていて、まるでゲームの世界の話のように感じているだけです。

普通、いきなり転生して、遠くで見たことも聞いたことも無い国の人が死んだところで、号泣したり激怒したりすることはないと思うのは私だけでしょうか？

あとハクのヤン度について。

ハクのヤンデレは、あくまで「マスターの敵は許さない、マスターを狙うものも許さない、マスターとのライフの邪魔はさせない」く

らいのもので、主人公を殺すようなタイプのヤンデレとは違います。
ていうか、そんなヤンデレだったら物語が終わります。
私自身も、好きな人を手にかけるようなヤンデレは苦手……というより理解不能です。拉致監禁、洗脳は兎も角として、殺すのはどうなんだ？　と思います。

第肆話　カレと学園都市

条約が締結されるやいなや、魔法使いを名乗る連中が続々と麻帆良にやって来ていた。

あの後、何も知らされないというのは置いてけぼりを喰わされる気分だったから、ハクに麻帆良で起こったことを全て教えてくれるよう頼んだ。

ハクは無表情ながらに怒っていたけれど（最近はハクの表情・感情が何とか読み取れるようになってきた）、何度も頼むと最後には折れてくれた。

ハクとしては僕を煩わせたくなかっただろうけど、こっちとしても切実なんだよ。
何せ今更だけど、ハクは優秀で万能過ぎるから何でもこなせてしまう。

実際此処に来て、僕が家事をする羽目になったことは一度だって無いし、建築から機械（家電）の製造・修理、さらには農作業から猟まで全部ハク任せだ。

僕も農作業とかを少し手伝ったりするけれど、ハクのそれを“仕事”に喩えるなら僕のそれは“趣味”だ。つまりは、ほんのちょっとだけだということ。

こうなると、僕は飾りの土地管理者としての仕事くらいしかない。
それすらハクに丸投げしたら、完全に従者に寄り掛かりまくるダメ人間だ。暇、ではないんだけど、これはちょっとキツイものがある。

僕だって腐っても日本人なんだ。ワーカー・ホリックとは言わないけどさ、仕事の一つくらいは欲しいんだよ。精神的ダメージが半端ないから。

「現在、ここ麻帆良は二つに分かれております。即ち、マスターの土地と連合に貸している土地です」

紅茶を注いでくれているハクが、そう言って説明してくれた。
この紅茶だって物凄く美味い。僕の舌が肥えていたら、飛びあがって絶賛しただろう。
でも、庶民の味に浸かりまくったこの舌では、「美味い」という言葉しか出て来ない。お礼を言わないわけじゃあないけど。

ハクは褒められるのが好きみたいで、結構ご機嫌になる事も最近分かった。
あとハクは無表情とかじゃあなくて、単に表情に出すのが下手なだけだ、ということに最近になって気付いた。
正確には、“僕限定で”表情を出すのが苦手。
若しかしたら、単に恥ずかしがっているだけかもしれない。いや、それはどうだろうか？　最強万能な彼女に、こんなわかりやすい弱点があるなんて思えないんだけれど。

まぁ、僕だって何もかも全てホイホイ聞くわけじゃあないし、ハクだって僕に隠しておきたい事の一つや二つくらいあるだろう。
対してハクの方は僕のプライバシーなんて知った事かという感じで僕に密着してくるんだけど、それだって不快なものじゃあなく、節度もある。
ハクは、気遣いの面でも万能なんだよね。空気詠み過ぎて怖い感じ

だけど。

「面積的には麻帆良と言う土地で、マスターの土地が三分の二、連合が借りている土地が三分の一といったところです。
なお、私の結界は現在マスターの土地にのみ展開されております。
連合の蟻共を護る必要など微塵もありませんので」

「でも、貸しているだけで僕らの土地じゃあないのか？」

「貴方の土地ですマスター。確かに仰る通りですが、条約では麻帆良に貸している土地――もう“学園都市”と呼ぶことにしましょう、面倒です――学園都市の防衛・管理はあちらに一任させています。
私が守護するべきはマスターだけです。蟻塚（アリヅカ）を護ることなど、するわけがありません」

もう一つわかった事なんだけど、ハクは僕以外の人間に対して何故か物凄く辛辣だ。やたらと“凡人”呼ばわりしたり、“蟲”に喩えたりする。
別に僕としてはどうでもいいんだけど、メイド服を優雅に着こなす従者が毒舌の限りを尽くすのは結構、いや正直言うとめちゃくちゃ怖い。雰囲気も怖いし、何か空気が歪んでるようにも見える。

「それにあちらがヘマをやらかして土地が使い物にならなくなっても、再生は幾らでも可能です。
さらにマスターが“世界樹”と御命名された巨木ですが、アレにも大して価値はありません」

「え？　内臓魔力がものすっごいと聞いたんだけど？」

「あくまで基準と比べて、の話です。私と比べては、さして量は多くありません」

「具体的に言うと？」

「私の小指一本分の百分の一くらいでしょう」

「……え？　マジで？」

「はい、マジです」

ウチの従者は、やっぱり規格外なんだなぁ。

神様、貴方の“最強”の定義について聞きたいです。大学の一限くらい使って。

「そういえばさ、僕って魔力あるの？」

「それは……」

微妙な表情で、言い淀むハク。

まぁ神様に望んだのは“絶対防御”だけだからね、無い、といわれても仕方が無い。ぶっちゃけ使い道だって無いからね。ハクがいる限り、だけど。

「無いとは言いません」

おぉ、意外だ。魔法も何も無い日本出身者からしてみれば、あると言われる方が予想外だ。

「――ですが、はっきり仰いますとそれほど高くはありません。凡人共が身分不相応にも、マスターの内臓魔力を“平凡”呼ばわりするくらいです。
ちなみに、気についても同様です」

「“気”？」

「具現化された生命エネルギー、とでも申しましょうか。要はオーラのようなものです」

「ふぅん。ついでに聞くけどさ、ハクの気は？」

「そうですね……地球上の全生命の総合量を１６乗して、零（ゼロ）を２０桁くらい付けたくらいかと」

「……あ、そう……」

「ちなみに私は魔力や気の他に神力、妖力なども、同様の量を保有しています」

自慢するでもなく、淡々と真実を語る我が従者。

なんだか自分が惨めに思えてきたんだけれど。
すると、ハクは僕の顔を覗き込んで頬に手を伸ばした。白い手袋に包まれた長い指が、肌をなぞっていく。

「気を病まれる必要はありません、マスター」

「え？」

「私が付いております。私という“最強”を好きに出来るマスターこそが、この世で至上にして究極の御方ですから」

薄く微笑んで、ハクは喋り続ける。
うん、凄くキレイだ。クレオパトラが絶望して首を吊るくらい。

「私はマスターのためにしか動きません。だから、マスターがいてこその“最強”なのです」

「……うん、有難う」

イイじゃあないか。
お礼くらい、言ったってさ。

何か話がものっすごくズレた気がする。
ハクもそれに気付いたのか、再びいつものように、僕を零距離で覗

き込んできた。そして、喋り出す。

「連合はあちらの土地に、学園都市の建造をハイピッチに進めています。完成すれば、それなりのサイズの学園都市となるでしょう」

「へぇ……興味あるなぁ」

「此方からの干渉は自由ですし、そもそもあちらの愚鈍な脳ではマスターの御姿を捉えることも困難でしょう。マスターが望むなら、そこに行くのも吝かではありません。
資金も賠償金と本年度の租借料はすでに支払われております。為替の問題で、金塊で、ですけど」

そう、家の地下室に、今では大量の金塊が置かれているのだ。おまけに相当純度が濃いやつが。
向こうの金を貰っても何ともならないし、どの道この後、此方の世界（魔法側は“旧世界”と呼んでいるそうだ）で恐慌が起こって大変なことになるということはわかっているので、金塊で支払わせた。
それが無ければ宝石類。

何故かハクは、金塊や宝石の純度を調べる機材も知識も持っていた。
ホントに万能過ぎる。
だから、ニセモノを渡されるなんて事も無い。

勿論ハクの錬金があれば、金塊も製造できるんだけど、やっぱり土地を貸す以上はお金を取らないと体面的にも問題があるそうだ。
後は連合が馬鹿をやらないよう、搾れるところまで搾り取っておくため。

戦争するにも何するにも、やっぱりお金っていうのは一番大事だからね。

ハクはそのことをちゃんと理解していて、連合が財政破綻しないギリッギリの金をせしめた……というわけ。
それを聞いて、ホントに彼女が自分の従者で良かったと思った。

え？　「お前社会学科学生だろ」だって？
経済・金融方面は苦手なんだよ。センター試験で数学ワーストとったんだぞ、僕。
金融どころかエンゲル係数が限界だっての。

ましてや大学生に、お金の大切さやメカニズムを骨の髄まで理解しろ、と言う方が無理だと思うんだ。そういうのは、社会人になってから初めて身に沁みるものだと思う。
バイトもしていなかった僕は、単に消費するだけの金喰い虫だったからねぇ。

「向こうも此方に何か思う事があるでしょうが、そんな事は些事です」

いや、そんな些事の一言で片付けられても困るんだけど。
ていうか、首都を半壊させられたあげく法外な賠償金せしめられたんだから、こっちを恨んでいないわけがない。
まぁ、こればっかりは仕方が無い。
僕の従者を怒らせた向こうが悪いんだ。うん、向こうが悪い。

連合も、藪をつついてサイドワインダー百匹を出すような真似をし

なければよかったのに。
ていうか、僕は無関係です。

学校か〜、また行きたいなぁ……。

後になって思った。

これ、伏線（フラグ）じゃね？　と。

第肆話　カレと学園都市（後書き）

本作の麻帆良学園都市は、原作の麻帆良学園都市の三分の一くらいの面積だと思ってください。

理由ですか？

普通見知らぬ人が土地譲って下さいと言ってきて、全ての土地を譲ったりはしないと思っただけです。

あと、なんとなく麻帆良を弱体化させたかっただけです。いや、小さくなった分護りやすくなったのか……どっちみち、戦力は減ですね。

御意見御感想宜しくお願いします。

第伍話　カノジョとカレの能力と戦争の前兆（前書き）

榛名の能力について、色々と御指摘をいただきました。有難うございます。

今回はそれについての説明回でもあるのですが、多かったのは「絶対防御もそれを使ってぶん殴れでもすれば強いんじゃあないか？」的な質問でした。

……正直に言うと、その発想はありませんでした。ていうか失念しておりました。

ですけど、ちょっと私なりに“絶対防御”について考えてみたのですが、防壁を武器にするって結構難しいんですよね。不可視ですし。何しろ榛名は身体能力は高くありません。前世と全く変わってませんからね。容姿がちょっと変わっただけです。

おまけに魔力も気も人並です。寧ろ少ないと言っていいかもしれません。

そしてこれが一番の理由なのですが、当の榛名自身に戦う気がゼロなのです。

自分が戦いたくないからこそ、従者を神様に貰いましたからね。

そのため、こんな感じになりました。

第伍話　カノジョとカレの能力と戦争の前兆

マスターとここで暮らし始めてから、すでに数十年が経過しました。

一時期、蠅共がよってたかって纏わりついてきたこともありましたが、それ以外は平和な生活を満喫できました。

ええ……満喫できました。

昨日まで、そう昨日まではいつも通りのマスターとの日々だったのです。

最近のマスターは、自身の能力、即ち“絶対防御”に興味をお持ちのようです。

あの手この手で、能力の確認をしておられました。

ですが、全く進んでおりません。

それは決してマスターが愚鈍というわけでも、非才というわけでもありません。

ではなぜかというと、唯単に使う機会が無いのです。

マスターの能力“絶対防御”は、ざっくばらんに説明いたしますと“自身に不可視の最強の鎧を纏わせる能力（ちから）”と言えます。

この“鎧（アーマー）”は“防壁（バリア）”にも“遮蔽（シールド）”にもなりますし、極論さえ言えば、“攻め”にも使える“武器”となります（あくまで理屈上は、ですが）。

それは喩えるなら、楯でも振り回せば鈍器になりますし、手甲は手を護ると同時に裏拳の威力もあげるようなものです。

実際、防具と武器の両方を兼ねる武器はマイナーではありますが、ある意味ではベターとも言えます。

ところが前述したとおり、この能力は“不可視”なのです。おまけに探査魔法などにも引っかかりません。目視だろうが何だろうがそのままの意味での不可視なのです。

これは寧ろ有利（アドヴァンテージ）でしょう。完全装備で街中を歩くよりは、相手に警戒心を抱かせない意味でも、偽装的（カモフラージュ）な意味でもメリットがあります。

ですが、マスターにとってはある意味で大きなデメリットも齎（もたら）しました。

なんとなれば、その要因は“不可視”の一言に尽きます。

要するに、マスター自身にも見えないので、バリアがどのように展開しているのか……いや、そもそもそれ以前に本当に展開されているのかがさっぱりわからないのです。

おおよそマスターのイメージ通りになるようなのですが、何しろマスターも私も見ることができません。おまけに効果の程も、仮にマスターが戦場の真っ只中に御降臨されて敵の攻撃に曝されない限りはわかりません。

私がマスターを攻撃するなど天地が引っ繰り返っても有り得ません。実験とはいえ、いくらマスターの御命令とはいえ、私にも譲れないものがあります。

かといって、私がマスターを、鬱陶しい雀蜂（スズメバチ）が飛びまわっている様な所に、その御姿を曝させるようなことをするなど、それこそ有り

得ません。全くの迂言(うげん)です。

マスターを戦場に出したりはしません。その前に、私がその場にいる蟲を殲滅します。連中は蟲如きの分際で殺蟲剤が効かない上に、蟲ピンも効きません。さらにいくらでも沸いてくるので、一片たりとも気を抜くわけにはまいりません。細胞の一個たりとも残してはならないのです。

蟲の中には、無駄に知恵を働かせて自身の体内に子を匿うモノもいれば、四肢を千切ってもなお意地汚く地べたを這いずり生きるモノもいます。寄生蟲とおぞましく共生している蟲もいれば、姑息にも擬態して生き永らえようとする蟲もいるのです。

……少し熱くなってしまいました、申し訳ありません。

兎にも角にも慎重に事を進めて、困る事はありません。マスターと過ごす時間が減ってしまうのが最大の欠点ですが、長い目で見れば、確実に潰した方が楽になります。

幸いなことに、マスター自身は自ら戦う気は皆無の様です。「そんなことしたら、神様に君を付けてくれるよう頼んだ意味がパァになる」と仰いました。

正(まさ)しく雅言(がげん)で、それこそが私、綺羅川(きらかわ)　ハクというマスターの従者の存在意義です。

マスターは戦いに参加することを好みません。傷付くことを怖れています。

ならば私は、マスターの願いを叶えるのみです。マスターには戦場の様な汚れた地に、一歩たりともその足を踏み入れさせません。

マスターの御身体が、蟲共の体液で汚されるなど、あってはならな

いことです。

別に戦わずとも、自身の能力を把握する事は些事ではありません。私も非力ながら協力し、マスターは少しずつ、自身の能力をモノにしておりました。

流石はマスターです。凡人共が、武器を手に取るどころか息を吐く気力すら失う程の、圧倒的なまでの才能です。

私はマスターに何か起こらないよう、常にマスターの御傍に控えていなければいけません。だからマスターが訓練中の時でも、私は一瞬たりともマスターから目を逸らさず、その勇ましき雄姿を目に焼き付けているのです。

……そろそろ話を戻しましょうか。

兎にも角にも、先日まではそう言った平穏で愛しい日々だったのです。

ところが、そのような生活に蛆(ウジ)が沸きました。

「マスター」

「ん？　どうした？」

ソファで御休みになっているマスターの御顔を（吐息がかかる程の

至近距離で）見つめながら、私はマスターに唾棄すべき報告をあげます。

「連合が再び、私達に接触を仕掛けようとしています」

「……はぁっ？」

マスターは呆れたように首を振ります。
それも当然でしょう。私も、連合の阿呆加減には閉口しているのですから。

「え？　それってつまり、こりてない、ということ？」

「おそらくは、そうかと」

私がそう言うと、マスターは頭を抱えてソファに身を沈めました。
動きが逐一素敵です、マスター。
……それは兎も角、連合も舐めた真似をしてくれるものです。
何しろ理由が理由ですから。

「目的は？」

「平たく言えば、徴収です」

「徴収？」

「要は『戦争やるから、戦力と金寄越せ』と」

「……マジで？」

「はい、マジです」

麻帆良と私達とは、一応連絡が取れるようになっています。それは私に繋がるようになっていますが、そう簡単に連絡できるようなものではなく、現に今まで数十年間、一度も使われた事がありませんでした。

ちなみに一年毎の土地租借料については、決められた日に私が決められた場所に取りに来ています。
その時襲われた事もありますが、無論殺して世界樹に吊るし上げておきました。ちなみに生首で、顔の皮も剥いでおきました。

「大体こっちに、向こうの要請に応える義務は何一つないだろう？」

「仰るとおりです」

「よし、拒否しといて」

「畏(かしこ)まりました」

マスターはキッパリとそう言いました。
私も、それに異議を申し立てるような真似は致しません。

「……簡単に引き下がるかなぁ」

「また攻撃しましょうか？　今度は首都を全壊させてもいいでしょう」

「う～ん……」

マスターは起き上がると、腕を組んで唸ります。滅多に見せない真剣な表情に、思わずさらに顔を近付けて、マスターの頬に手を伸ばしてしまいます。

「……あの、ハク？」

「はい、マスター」

「……はぁ、いや、いいよ。……もういっそのこと、滅べばいいのになぁ、連合」

「畏まりました」

「ん～……はぁっ！？」

マスターが慌てたように、私の顔を凝視します。

心臓が高鳴るのがわかりますが、はしたなく頬を緩めたりはしません。いつも通り、落ち着き払って言葉を紡ぎます。

「はぁ、と言われますと？」

「いや……マジでやる気か？」

「はい、マジで殺(や)ります」

「……うん、今のは聞かなかった事にしといて」

「ですが――」

「しといて」

「畏まりました」

いけませんね、私ともあろう者が、マスターに口答えしてしまうとは。要反省です。
自分でも思っていたより、苛ついていたようですね。

「でも……あまりに鬱陶しかったら、ちょっと細工してみようか？」

「細工、と申されますと？」

「戦争が、とっとと終わる様にするとか」

「畏まりました。両陣営を殲滅するのですね」

「ハク、ドヤ顔でそんな事言われても承諾しかねるよ。ていうか、そんなテロリストのような思想は持ち合わせていないからね？」

「当然です。マスターがテロリストなら、此の世に善人などいなくなります。最初からいるかどうかは別として、ですが」

「……あ、そう……。そうじゃなくてさ、そんなことしていられないようにするんだよ」

「どうするのでしょう？」

「古今東西、戦争と言うのは“目標”を達成するためにするものだ。領土確保、国力増強、民族団結、或いは単なる殺戮とか。その目標が達成できれば、一時的に国力が衰退しようが、そもそも敗北したとしても勝利となる。
言い換えれば、目標が達成できないと悟った時点で、マトモに頭が働くヤツは休戦・停戦や講和を模索する」

「連合の戦略目標を調べ上げ、それが達成できない状態にする、ということですね」

「そういうこと。まぁ、大学生が考えた机上の空論だけどさ、割といけると思うんだよね。ハクがいれば、さ」

「勿論です。マスターの望みを叶え、マスターには出来ない事をする。私はそのために此処にいるのですから」

私はそう言って、マスターに深く一礼するのでした。

第伍話　カノジョとカレの能力と戦争の前兆（後書き）

お気に入り登録数５００越え、ＰＶ５４，０１５　ユニークアクセス１０，３０２人　……マジですか？

え？　ちょっと本気で叫び声をあげました。「はぁっ！？」って。だって一週間も経ってませんよ？

……頑張ります。もう、これメインで書いていきます。頑張って更新していきます。
本当に嬉しいです。

御意見御感想宜しくお願いします。

第陸話　カレとカノジョの国家崩壊プロジェクト（前書き）

連合が一時滅びます。

御意見や御感想を多数いただきました。有難うございます。

絶対防御の補足説明。

防御できるものの中には、防御時に発生する衝撃も含みますが、榛名自身も何も感じないというわけではなく、少しビリビリ感じます。それでも、ダメージが入るわけではありません。

あと、この作品のアンチ傾向について。

ハクの性格上、どうしてもアンチが入ってしまいます。

連合アンチや紅き翼アンチ、薬味アンチなどが入るかもしれませんが、そこまで酷くはしないつもりですので、大目に見てやってください。

第陸話　カレとカノジョの国家崩壊プロジェクト

えー、皆様、気分は重畳（ちょうじょう）でしょうか？

僕は今、魔法世界に来ております。

あれから矢の様な催促が連合から届きまくって、いい加減ウザかったので魔法世界と旧世界を繋ぐゲートをハクに頼んで全部壊してもらった。

徹底的にやったため少なくとも一年、長ければ五年は使い物にならないらしい。

ウザい連合からの催促は消えるし、旧世界も巻き込まれないで済むしで一石二鳥だ。

ちなみにハク曰く、「私ならゲートなど不要で魔法世界まで転移出来る」とのこと。

まぁそれは兎も角、最初はゲートを破壊したんだから無理に魔法世界に行って、参戦する必要は無いんだよなぁ、と思っていたんだよね。

生憎僕は、戦争やる程暇じゃあないんだ。最近あまりに従者が万能過ぎて、趣味に目覚めざるを得なかった。

どういうことかって？　趣味につぎ込むくらいしなきゃ、せっかくハクがくれた時間を無駄にするからだよ。

ハクが僕に負担をかけないように一生懸命働いてくれてるんだから、僕もだらだら過ごすというわけにもいかないよね。

時間は有限。不老不死だろうが何だろうがそれは変わらない。“今

”は“今”しかないからねぇ。

ちなみに趣味と言うのは例えば絵を描いたり、彫刻を彫ったりとか色々だ。慣れてくると、創作活動も悪くないかな、なんて思えてくる。

不思議なもので、以前の僕なら「創作物が人間に感動を与えるなんて幻想だ」と思っていただろうね。
学び盛りの大学生から不老不死にジョブチェンジしたんだ。
考え方の一つや二つ、変わって当然かもしれない。

「うん、“国破れて山河あり”――か。杜甫（とほ）は上手い事を言ったものだね。それとも、それを引用した芭蕉（ばしょう）かな？」

「マスター、連合はまだ滅んでおりません」

「鼠を見つけたコンドルのような目で国を睨みつけているハクが言っても、説得力は皆無だと思うよ。
ていうか君を相手にした時点で、無事な国なんて無いって」

「当然です。蠅共……マスターを賞金首にするとは、本気で死にたいようですね」

そうなんだ。

僕、そしてハクが賞金首になりました。

理由？　連合からの参戦要請を断りまくった挙句、ハクが使者を返

り討ちにしたから。
具体的に言うと、

「お願いします、どうか！」

と土下座した使者（何で連合からの使者が土下座知っているんだ？）に向かってハクが

「頭を下げてくれるとは、なかなかの気遣いね……助かるわ、殺しやすくて」

と言いながら使者の頭を踏み潰した（らしい）。
基本的にハクは僕を気遣ってくれていて、僕がいる前では絶対に人を殺さない。
最悪で百分の九九殺し……だってハク本人が言っていたけど、それってほとんど死んでいるよね？

不味いのが、連合（麻帆良）との契約時に僕達は本名で契約してしまったことだ。
御蔭で手配書には僕らのフルネーム、そして絶対本名で覚えたほうが楽な二つ名が書かれてしまっている。
賞金首と言う事は当然賞金が懸けられていて、僕は８０万ドル、そしてハクが１８００万ドル。
二つ名は色々あるけど、代表的なのは僕が『狂乱の主（カオス・マスター）』でハクが『絶望の白（ケール・ヘーメラ）』。

酷くない？
そりゃあ使者を殺したのは兎も角としてさぁ、参戦要請断ったら賞金首って何処の独裁者だよ。ロベスピエールが聖人に見えるよ。

特にハクは史上最高の賞金首になっているし、絶対ずっと前に首都を半壊させた事根に持っているよね？

ちなみに連合では、首都半壊事件は“研究中の術式の暴走による事故”と言うことになっているそうだ。そりゃあ、余所様の土地を借りようとしたら超反撃されましたなんて言えるわけ無いしね。言ったら元老院の権威がマッハで下がるのは目に見えている。

それは兎も角、このままじゃあ色々と拙いし、何より賞金首なんて僕が嫌だ。なぜか落ち込む。多分日本人としての健全な倫理観のせいだ。恨むぞ文科省よ。
だから、元老院とか連合上層部をぶっ飛ばして賞金をなかった事にしよう、と思ったわけ。

何、その発想はおかしいって？
一言だけ言おう、僕だって怒ることくらいあります。

ハクの力があれば洗脳とかも可能だから、適当に代役を見つけて命令すれば良いそうだ。

それに何より、ハクがものっっっっっっっすごくキレてた。
手配書を見て僕の似顔絵だけ切り取った後、手配書を燃やして似顔絵を懐に仕舞い込むくらいキレてた。
んで、その直後に小声でとっても物騒なセリフを小一時間程呟き続けるくらい。

ハク、貴女史上最高の賞金首になってますよ？

何て事を聞いたら、「私はマスターの従者です。賞金首に何の意味があるのです？」と首を傾げられた。

自分の事についてはどうでもいいみたいなんだよね、この従者。

そうそう、最近になってわかった事がある。

僕の能力“絶対防御”なんだけど、発生源は首からぶら下げているイルカのペンダントらしい。妹から貰った大事なもので、神様に頼んで持ってこれるようにしたヤツだ。

まずペンダントを中心にシールドが展開されて、それで僕の自由に動かせるようになるみたいだ（まだ制御できてないけど）。確証は無く、勘だけど。

このペンダントが発動体（キー）になっているのかどうかは不明だ。これが無いと発動できるのかも不明。実際よくわからないし、まだまだわからない事が多い能力だからね。

それは置いといて。

メセンブリーナ連合とヘラス帝国の戦争がとうとう始まった。

で、ハクが調べた結果、此の両陣営に『完全なる世界（コズモエンテレケイア）』なる組織が入り込んで引き起こしたらしい。

連中の目的は、世界を崩壊させる事。

はぁー嫌だ嫌だ。

テロリストには破滅願望があるうえに、それに他者を巻き込もうとするから性質（タチ）が悪いんだよなぁ。

そんなのに市民が巻き込まれるのは忍びないし、滅んだら滅んだで旧世界の安寧もぶっ飛びそうだ。

第一連合が滅んだら、お金が搾れなくなる、ってハクが言ってた。

錬金だってある程度手間がかかるそうだからね。

財布の守護に復讐や報復も兼ねて、世界を救うとしますかね。

ハクが。

まずは……うん、元老院を総入れ替えだ。阿呆だろうがマトモだろうが無関係。こういうのは、一新してこそ意味がある。

マトモな奴は、同僚が阿呆だったことを恨むしかないね。いるかどうか知らないけどさ。

それに戦時中に国家の最高権力者が暗殺されるなんて、割とよくある話だ。

ヒットラーとか、何回も暗殺されかけたそうだし。あの人は政務は兎も角軍務には向いていないよね。

元老院はヒットラー並のカリスマも無い。あるのはスターリンも真っ青の外道な考えを叩きだす頭だけだ。それと独裁者にはデフォルトでついている保身能力。

それも個人ではなく、元老院はあくまで“集団”。連合を運営するための政務機関にしかすぎないわけだ。

つまり一枚岩じゃあない。

内輪もめと言うことで処理しておこうかな、とハクに言うと、ハクはあっさり了承してくれた。「卓見です」と言われたけど、そうでもないと思う。

僕は修羅場をくぐりぬけた政治家じゃあなくて、唯の大学生だしね。

つまり――元老院内の厭戦派一人が暴走して、自爆テロ。

元老院の面子や高官が集まり会議をしていた立派な建物が、瓦礫の山となりました。

警護兵を除いて生存者はゼロ。

流石に軍人さんはよっぽど政治家より鍛えていたんだろう。瓦礫の中から自力で這い出していた。腐っても、国のトップの警護を任されるエリートだったんだろうな。

これで戦争も終わる。

――そう思っていた時期が僕にもありました。

第陸話　カレとカノジョの国家崩壊プロジェクト（後書き）

最近、私と同じようにネギまの小説を書いていらっしゃる方々から、多数の御意見や御指摘をいただくようになりました。
凄く励みになりますし、先輩の方々に指摘を受けるって感動します。

勿論、読みに徹している方々からの御意見や御指摘も、自分としては青天の霹靂の様な事を書いて下さっていて、本当に感謝感激しております。

私はあまりマンガを読まないので、他の作品との類似点などをを挙げられると「え？　マジで？」と吃驚します。

榛名がマンガに登場する能力を貰わなかったのは、私があまり読まないからなんですよね。

さて、次回は紅き翼とハクを戦わせたいと思います。

……念のために言っておきますけど、紅き翼の面々は殺しませんよ？　百分の九九殺しにはなるかもしれませんが。

御意見御感想宜しくお願いします。

第漆話　カノジョと英雄候補たち（前書き）

今回、『紅き翼』の初期メンバー（ナギ、詠春、アル、ゼクト）がヒドイ目に会います。ファンの方々は御注意ください。

思ったより早く執筆が進んだため投稿させていただきます。

サブヒロイン枠、現在木乃香に一票。

どうなるかは……未定です。

サブヒロインにするにしても、大恋愛にまでは発展しないと思いますけど。

第漆話　カノジョと英雄候補たち

一時期機能不全に陥ったメセンブリーナ連合ですが、ヘラス帝国に講和を申し込む気配はありませんでした。さらに当然ですがヘラス帝国も、相手に停戦の意思が無い限り、進軍を止めたりはしません。

しかし、一時期混乱していた連合は、帝国に押されっぱなしの状態になっていました。

当然でしょう。

愚かにもマスターを狙うような蠅共の国に訪れるのは、破滅のみです。

連合の国力は疲弊しています。首都メセンブリアの復興や、賢明な事にマスターに金を貢いだ結果、国庫は悲鳴を上げています。

ですが、ヘラス帝国もまた大国。

相手が大国とはいえ疲弊した国を相手に、あっさり白旗をあげるわけもありません。

私達は、この戦争の発端にして不確定要素、『完全なる世界（コズモエンテレケイア）』の処理に動きました。

連合を私達に隷属させるにしろ滅ぼすにしろ、帝国のテロリスト共を潰すにしろ、まずは邪魔者を消してからの方がよいでしょう。

しかしマスターは、こんな茶番劇に付き合わされる市民や兵士を不憫と思っていました。

そのため私はマスターのためにも、戦場に介入しては、五月蠅（うるさ）く飛び回る蠅共を鎮めています。

鎮めるといっても、両陣営の兵士を一人残らず気絶させるだけです。大抵の蠅ならば、少々気迫を見せるだけで失神してくれます。

本音を言うと、手っ取り早く始末したいところなのですが、魔法世界の国力が下がる事は旧世界の魔法組織やら何やらの混乱や離反を引き起こします。

麻帆良もそれに巻き込まれ、マスターの土地が血で汚されるのも問題です。

適度に魔法世界が弱まる事は兎も角、弱まりすぎてもそれはそれで問題です。

まぁそうなったら、世界を隔離するか別の星に向かってマスターの御世話をすればよいのですが、マスターは宇宙よりも広い心を御持ちなので、蟲とはいえ、死ぬのを好まないのです。あくまで“目の前にいる”蟲ですが。

そんな事をしている内に、私達は戦場に一時的な安寧を齎す事から『奇妙な休暇（ストレンジ・ヴァカンス）』というチーム名で呼ばれるようになりました。

私は自身の名声になど興味はありません。私が求める称号は唯一つ、“マスターの従者”ですから。

ですが、これはマスターが晒し者にされているようで、良い気分ではありません。

取り敢えずこの戦争が終われば、噂の元を断つことにいたしましょう。そして全魔法世界人を洗脳し、唯の“伝説”扱いにでもしておきましょうか。勿論、マスターの本名を曝すことなど許しません。

しかし――。

「マスター……」

「ん？　どうした？」

私は背中にしがみ付いているマスターの方を向きます。
マスターは身体能力があまり高くありません。そのため、移動時には私の背に掴まっています。勿論振り落さないよう、私とマスターを粘着魔法で固定しています。
マスターの感触はとても心地良く、何度歓喜の雄叫びをあげかけたことか。寸でのところで抑えましたが。

ちなみに私は基本メイド服なのですが、魔法世界に来てからは白を基調としたコンバットスーツを着込んでいます。あまり使いませんが、武器は異空間に収納しています。
此のコンバットスーツは、マスターのリクエストにお応えした結果です。
「純白の髪と一緒の白が似合うと思う」とマスターが言ってくれたため、此のスーツを錬金しました。

「前方から魔力反応です。此れは……そこそこの強さですね。この世界に来てから一番とも言えます」

「マジか？」

「はい、マジです。軽く駆逐してきますので、離れて“能力”を発動しておいてください」

「……わかった、気を付けてな」

「……マスターが信じてくれる限り、私は何京年何極年と戦い続けられます。そして――」

立ち止まってマスターを下しながら、私は小さく呟きました。

「マスターの従者に、敗北など許されません」

「……貴女は……」

目の前に現れた――というより出くわしたのは、四人の集団でした。

ふむ、やはり、今まで見た中では最高級の蠅ですね。せめて蜜蜂（ミツバチ）程度の強さである事を期待しましょう。

滅多に無い機会です。マスターを護るための、訓練相手になってもらいましょうか。

――マスターに手出しをしなければ、ですが。

「白の長髪、黒い瞳、白ずくめの戦闘服の美女……間違いありませんね、ナギ！　あの女性は『絶望の白（ケール・ヘーメラ）』です。噂に名高い『奇妙な休暇（ストレンジ・ヴァカンス）』の一人ですよ！」

ローブを纏った優男風の魔法使いが、リーダーらしき少年に声をか

けました。

それにしても、“絶望”とは失礼ですね。
私はマスターに身も心も捧げているだけで、別に殺人鬼（シリアルキラー）ではないのですよ？
大体おぞましい害蟲（ガイチュウ）を消したいと思うのは、人間の思考からすれば当然でしょう。

「ケール……？　よくわかんねぇが、ヤバいヤツなのかよ！？」

「ヤバいなんてものじゃあないのぅ、史上最高の賞金首ながら、ほとんど殺人をしない“無殺の極悪人”。どんなことをやらかしたのかもさっぱり不明じゃが、トンデモなく強いという噂じゃ……」

どことなく年季の入った雰囲気の子供が、私を見て唸りました。
“無殺”……確かにここ最近は、常にマスターと行動しているだけの事もあって蟲の完全駆除（殺害）はしていませんね。私の罪を明かせない以上、私は人殺しではないのでしょう。
確かに私が駆除しているのはあくまで蟲ですし、間違ってはいませんね。

「じゃあ、その後ろで立っているのは滅多に姿を見せないという『狂乱の主（カオス・マスター）』か……！」

野太刀を差した青年が、私の後ろで集団を観察しているマスターを睨みつけます。

……無礼な。
マスターの前でなければ、四肢を折って首を落として斬り刻んでやるところです。

ちなみにマスターが滅多に姿を現さないのは、単にマスターを戦場に入れないよう、私の分身体がマスターを後ろへ送っているだけの話です。

「とにかく強ェんだな!?　おい、お前らッ！　俺は最強の魔法使いナギ＝スプリングフィールドだ、勝負しやがれッ！！」

リーダー少年が叫びます。ふむ、戦闘狂（そっち）の蟲ですか。
こういう蟲はイイですね。潰してもしぶとく生き残れますから、お得です。何度でも潰せます。度が過ぎると、途端に鬱陶しくなるのですが。

「――いいわ、とっととかかって来なさい」

私は構えを取ります。同時にマスターが、後方に瞬動（高速移動の様なもの）で遠ざかるのを確認します。
……あそこの木の上に逃げましたか。
マスターもそれなりに気を使いこなせてきているので、あの程度は楽勝でしょう。
流石はマスターです。凡人共とは比較するのも冒涜となります。

兎に角、あの木には攻撃が通らないようにしなければいけませんね

……。

私は騒がれても面倒なので、姿がマスターにしか見えないよう調節した分身体を一体呼び出し、マスターの方へと送ります。

ちなみに分身体の実力は、私（オリジナル）の一京分の一もありません。ですが、人間千人くらいなら一秒以内に消せます。

そんなことをしていると、いきなりリーダー少年、ナギとやらが魔法を撃ってきました。

あれは……それなりに強力な雷魔法ですね。……一対一で使うものではありませんが。

どれ、味見でもしてみましょうか。

私は迫って来る雷に一指し指を伸ばします。途端に雷が、私に衝突して消えました。

「「「「なッ!?」」」」

四人が驚きの声をあげます。

……この程度ですか。蚊の一刺しにもなりませんね。

静電気以下の雷が効くとでも思っているのか……舐められたものです。

此の蟲はもういりません。

サンドバックにでもしましょうか……ダメですね、恐らく三発も耐えられないでしょう。

役立たずに興味はありません。

私はさっさと終わらせて、マスターの御傍にいたいのです。
顔面に蹴りを入れて吹き飛ばします。そしてそのまま、森の奥へと突っ込み、巨木の群れを薙ぎ倒しながら消えて行きました。

「うげッ！」

「ナギッ！」

剣士が前に出て来ますが、彼の振る刀を指で止めます。

「な……！？」

「ヌルい」

「ぐはぁッ！」

なかなかの使い手ですが、所詮は蠅程度。左手を手刀の形にし、蠅剣士の腹に一閃、同時に殴り飛ばします。蠅の刀――一丁前に、なかなか良い刀を使っていますね――も一緒に吹き飛んでいきます。
あまり近くに、マスター以外の存在を置いておきたくありません。
顔にかかった蠅の体液を拭い、残りの蟲を探します。

おっと、身体に少々重力がかかってきました。これは……重力魔法、あのローブ青年ですか。
同時に子供も突進してきます。

これは、動きを封じるタイプの重力魔法ですね。なかなかに強力です。私でなければ足止めされていたでしょう。

ですが――

「……汚らわしい」

腕を振って、重力をかき消します。

身体を蟲の魔力に包みこまれるなど、汚らわしい事この上ありません。

私の身体を包み込んでいいのは、マスターだけ……マスターの暖かさや優しさだけです。

これは、帰って丁寧に身体を洗わなければ……マスターに近付く事もできませんね。それまでは薄いバリアを張って、此の汚れがマスターに移らないようにしなければいけません。

そのまま、驚愕する子供に回し蹴りを叩き込みます。子供の身体は折れ曲がり、そのまま吹き飛んで行きました。

そして、あの汚らわしい重力蟲は……。

「消毒です……『魔法の射手・火の1矢』」

私の手から放たれた火の矢が、重力蟲に襲いかかります。

蟲は小生意気にも障壁を張りますが、そんなものは用を成しません。

「そんな、たった1矢で……」

その言葉を最後に、重力蟲は矢に貫かれ、同時に大爆発が起こりました。

森一つは確実に消滅するでしょう。

爆風に残りの蟲が巻き込まれます。

が、マスターは安全です。

マスターがお乗りになっている木は分身体に、マスターはマスター自身の能力に護られています。

すぐにマスターの元へと向かいます。マスターの御傍を離れるのは、ほんの一瞬でも辛いことです。寂しくて、悲しくて仕方がありません。

燃え盛る炎の中、私は先程の戦いを思い出していました。

つまらないことは事実でしたが、少なくとも今までの蟲の中では一番マシでしたね。

それにしても……それなりの実力者（ムシ）ですか。……蟲の中では使えますね。

マスターと私のために、動いてもらうのもありかもしれません。

蟲共も、マスターのために戦えるのならば本望でしょう。

“一寸の蟲にも五分の魂”といいます。精々、マスターのための贄（にえ）となってもらいましょうか。

「お疲れ様、どうだった？」

マスターが木から下りてきて、私に微笑みかけてくれます。労いの言葉をかけてくれます。

それだけで、蟲に纏わりつかれた嫌悪感など吹き飛んでしまいます。

同時に分身体を消します。

こんな塵の様なモノでも、マスターを御護りする事が出来ます。塵にも塵なりの使い道がある、ということでしょう。

「凡人共にしてはやりましたね。まぁ、所詮は凡人の域を出ませんが」

「そうか……うん、間違いない」

「何がでしょう？」

「『紅き翼』。最近連合について、帝国の快進撃を押し止めている連中だよ」

「……成程」

私は遠くの方で転がっている、炭の様な四つの物体を一瞥します。

生きてはいますよ？　ギリギリですが。

「蠅共の配下でしたか。道理で――」

――汚らわしい真似をしてくれるわけです。

「？……何か言ったか、ハク？」

「いえ……申し訳ありません」

思わず声に出してしまいましたか。
小声で良かったですね。

ですが、アレが『紅き翼』……とりわけ生きの良い蠅共でしたか。
アレが暴れているせいで、思ったより連合が弱っていないのです。
……邪魔ですね。

「潰しましょうか？」

「いや、いいよ……でも……」

そう言ってマスターは、四匹の蟲を見つめます。
……蟲の分際で、マスターに見つめられるという至上の幸福を享受するとは……。本当に潰したくなってきました。

「……ハク、目が怖いって」

「……も、申し訳ありません」

いけませんね……マスターに御迷惑をかけてしまいました。
此れは帰った後、いつも以上に御世話を頑張らなくてはいけません。

「……もうちょっとしたら、協力してもらおう」

「……そうですね……」

マスター、“協力”など、御遠慮する必要は無いのですよ？
蟲共に命令してください、マスターのために働けと。

そしたら私が、この蟲共を洗脳してさしあげます。無知な蟲共は、
マスターに従うことこそが、至上の存在意義であることを知るでしょう。
それでも駄目でしたら、言う事を聞くようになるまで殴り続けて、
言う事を聞かせます。拷問でも、何でもします。
そして、足元に平伏す蟲共に、如何様（いかよう）にも命じてください。

役に立たなければ、私が処理しますので……。

此の世の全ては、マスターの餌なのですから。

第漆話　カノジョと英雄候補たち（後書き）

ハクのヤン度はだんだん上がっていきます。
カンストすることなどありません。

御意見御感想宜しくお願いします。

第捌話　カレとカノジョとの愛と大莫迦組織（前書き）

紅き翼ファンから叩かれず、ホッとしている皐月二八です。

……おかしいな、当初は榛名がボケ役だったのに……。最近は尽く、ハクがボケてる（本人大真面目ですが）気がします。

ヒロインに関する御意見ですが、サブヒロイン無しが一番多いんですよ。次点で刹那、木乃香、エヴァ他、そしてオリキャラ。

オリキャラは増やすかどうか（出してもメインにするか）決めかねています。

刹那は、個人的には一番好きなキャラなんですよね。ヒロインにするかは置いといて、絡めたいところです。
あと木乃香の人気ぶりって凄いですね。

あと今回、榛名がちょっと熱くなります。
ウチの主人公は一応しっかりとした『芯』を持っています。それに反するのは許さない――とまではいかなくとも、イイ気分はしない、という感じ。
現代日本人にありがち（と自分では思っている）な、“一見流されるままでも、実はしっかりとした主義を持つ人”です。

熱い主人公、憧れますが、私ではちょっと書くのは無理そうです。
熱いセリフが思い付かない。ダウナーなセリフならポンポン浮かぶのに。

私、末期かもしれませんね。カラオケで勇〇王でも歌ってきたら浮

かびますかね……。

第捌話　カレとカノジョとの愛と大莫迦組織

戦争をして得をする連中ってのは、相場は決まっている。

政治家と資本家、武器商人。

大抵こいつ等だ。

でも、戦争の目的が“世界の破滅”だったら、もっと限られる。ていうか思い付かない。

つまり、ズレにズレまくって次元まで超えたヒロイズムに染まりきったホンモノの阿呆か、壮大な自殺を遂げたがるアクティヴなのかネガティヴなのかイマイチわからないヤツ。

大体、この二つに大別できると思う。

それで（ハクが）調べた限り、『完全なる世界（コズモエンテレケイア）』は結構巨大な組織なんだよね。大国はおろか中立国にすら入りこむような連中。

そんな組織にいる全員が、世界崩壊を望んでいるとは考えにくい。

ホントにそう思っていたら、どれだけ希望の無い世界なんだよ。“魔法世界”の名が泣くよ。

多分、本当の事を知っているのは幹部以上、若しかしたら大ボス（ラス）だけかもしれない。

酷い時代ってのは大抵よくわからん宗教とか、妙な秘密結社が幅を利かせるものだけど、それにしたって限度ってあるだろ。

取り敢えずそんな思想をもっている奴は、黙って桜でも見てろ。気

分が落ち着くから。

そんな事を考えていると、ハクが教えてくれた。

何でも此の魔法世界、別次元の火星に創られた人工的な世界で、そこの住人（所謂“亜人”）もまた創られた存在らしい。

そんでもって近い将来、魔法世界を構成する魔力素が切れかけるそうだ。

成程、それで「じゃあいっそドカンと燃え尽きようぜ！」と考える阿呆が出てくるわけか。

冗談抜きで頭悪いよね。

頑張って世界を開拓し、歴史を造ってきた先人達に土下座した方がいいと思う。先人達の努力を海にブチ込むような真似を企みやがって。

ていうか、駄目っぽいから滅ぼしちゃおうってどんだけ短慮なんだよ。魔法使いだろ、お前ら。

アメリカ人（ヤンキー）の開拓魂（フロンティア・スピリッツ）とか、コロンブスより前にアメリカに到達したバイキング（ノルウェー人）を少しは見習え。鍬（くわ）で土地耕して、帆船で海越えていったんだぞ、今よりずっと昔に。

魔法なんてとんでもない道具（ツール）持っといて、諦めるのはどうかと思う。

それともアレか。魔法を使えるから諦めるのかな？

ちょっと馬鹿すぎると思うんだよなぁ。

だったら科学とか化学とか、他に頼れるものくらいいくらでもあるだろうに。
日本人だって、取り込めるものは全て取り込んで維新やったてのけたんだし。良いか悪いかは歴史学者に丸投げするけどさ。

少しは努力したってバチは当たらないでしょうよ。
魔法世界という“箱庭”がパァになるのなら、別のとこにまた作るとか、旧世界の国連に救援要請するとかさ。
実現性は兎も角、藁にも縋るしかない状態なら試す価値くらいはあるんじゃあないか？

あれ？　何か物凄く腹立ってきたんだけど？
おかしいなぁ。

僕は平平凡凡ひ弱軟弱大学生だよ？

たまにテレビのニュースとか特番とかで見かける、ドヤ顔で阿呆な発言連発する政治家とか、テメェホントに大学でてんのかと言いたくなるような（自称）専門家に文句言ってるだけの男だよ？

キャンパスメイトと国の将来について語り合ったり、反日国家にだらだら愚痴言ったり、先生の態度が悪いだのとレポートムズいだのと文句言い合ったりしている男だよ？
ごくごく普通の、社会学科学生では珍しくも無いと思う、そんな人間だ。

“没個性”を地で行く男なんだけどなぁ……。

正義感なんて、あったっけ？

そんな感じで唸っていると、ハクがめちゃめちゃ怖い顔で俯きながら呟いてた。

「マスターを怒らせるとは」とか言っていたけど、うん、聞かなかった事にしよう。

ほら、チキンな人間なんだよ。
日本人に在りがちな、集団主義の人間、他人指向型人間なんだよ。
他の人の事情に、あまり首を突っ込むタイプじゃあないんだよ。

なのに、何故だろうね？
こんな連中、見てて嫌だ。

「ハク……」

「はい、マスター」

「『完全なる世界（コズモエンテレケイア）』……凄く、嫌いだ」

「畏まりました」

ハクは深々と一礼した。
凄く、頼もしい。

「マスターの嫌いなモノなど、此の世界に蔓延(はびこ)る資格もありません。速やかに駆除いたしましょう」

「……いや、駆除したら駄目だろ!?僕は連中を殺したいわけじゃあないからね!?」

「成程、奴隷化したいのですね？」

「僕ぁ～君が怖いよ……」

訂正、ものっっっっっっっっっっっっっっっすごく、怖い。

だって、光の無い目でうっすらと笑っているし。

握られた拳から血がしたたっているし。

「そうですか、いいでしょう。蟲にはマスターに跪くことすら許されない、ということですか」

「何でそんなに物騒な事を言いながらしたり顔するのかなこの従者は……。兎に角、連中を目覚めさせてやりたいんだよ」

「と、おっしゃいますと？」

ハクが首を傾げる。

そして……いつも通り、零距離で覗き込んでくる。

これ、もう慣れたよ。

ハクの身体のめちゃくちゃ大きくて柔らかい部分が、当たってくる感触を除いては、だけれど。

最近、ハクがスキンシップをさらに過激になってきているんだよなぁ。

この前なんて敵から護るためって理由で抱きしめられたし。三時間くらい。呼吸困難になるかと思った。

それだけじゃあなく、最近は顔を触ってくるだけじゃあなくてキスとか抱きつきとかも普通にしてくる。キスはヤバい方の。

しかも、目を潤ませて、頬を少し赤らめた状態で。

おまけに最近は、「愛しています」とか「大好きです」とか普通に言ってくるようになった。

そして……何となく、何時(いつ)かはこうなる気がしていたんだけど……喰われた。

紅き翼を撃退した日の夜、「汚らわしい腐蟲に纏わりつかれたので、マスターが私を消毒してください」と言ってきて、がっちりホールドされて……はい、従者に喰われました。

僕だって男なんだよ。
あんな超美人にせがまれて、断れるわけがないじゃん。
羽交い絞めされて、柔らかいところ押し付けられて、キスされまくって、理性もつわけ無いじゃん。
おまけにハク、出会ってから初めて涙目＋上目遣いになったんだよ。
逃げるなんて不可能だって。

……うん、話が逸れ過ぎた。

大分変わってきたハクだけれども、表情はまだまだ固い。
基本無表情か、小さく微笑むか、頬を染めるか、異常に怖くなるかのどれかだ。
個人的には四番目はいらない。

それでも最近は、ハクの考えている事がわかるようになってきた。
ていうか、ハクが積極的に言ってくれるようになってきた。
それだけじゃあなく、自分の望みとかも普通に言ってきてくれるようになった。

前のハクは受け答えばかりで、自分から話しかけてくる時は非常事態を除いて無かった。自分から意見を言う事も、希望を言う事もなかった。
そして僕との会話も、必要最低限の事しか話さず、長広舌など無縁だった。

それと比べれば、かなりお喋りになってきたんだよね。やっぱり口で言ってくれた方が意思疎通が楽だし、何より楽しい。唯一の家族と会話しなくて満足できる程、僕は淡白な人間ではないつもりだ。

だから、僕としても嬉しい限りだ。

……たま○っちを育てている様な感覚だとは、口が裂けても言えないけど。

え？　エロゲ？　チキンな僕はとても手を伸ばせませんでした。妹が平然と私物チェックとかしてきてたし。

「そうじゃあなくてさ、世界の素晴らしさを教えてやろうと」

「成程、マスターに跪かせるのですか」

「何故そうなるのか理解できないんだけど」

「世界の素晴らしさ＝マスターに平伏することだからです」

「……あ、そう」

でも、何でもかんでも答えてくれるのは、それはそれで問題かもしれない。

うん、ハクの感性について質問するのは控えよう。

「……取り敢えず、殴っとく？」

「畏まりました」

でも、結論はあんまり変わらなかったりするんだよね。

まぁ、僕自身、（見かけは）それ程年食ってもいないし、悟ってもいないけどさ。

説教くらいは、してみようと思う。

第捌話　カレとカノジョとの愛と大莫迦組織（後書き）

はい、主人公喰われました。

こんなの書いた経緯

榛名とハクの肉体関係について描写するかどうかマジ悩む
←
図書館に行きレポート用の資料をコピー
←
移動中にも考え込み、少しくらいはそういう描写を入れようかなと思う
←
帰ってみるとちょうどとある御方より榛名とハクの関係について御指摘が
←
即決。八割方できていた第捌話を大幅修正・追加

ということです。

どうでしょうか？　不快でしたら修正しますし、ＯＫならこれからもこんな描写をちょくちょく入れようかなと思います。

榛名は社会学科学生であり、現実主義でもあれば理想主義でもある人間です。

ですが、世界が見捨てられるということなど許しません。世界に多

くの歴史が内在し、大勢の人々の人生によって成り立ち、そして決して捨てたものではない事を知っているからです。
世界は最高にはなりませんが最悪にはなる。しかし同時に、最善にも成り得ます。それは、あくまで誰か一人にとっての“最善”だとしても。

自棄になるより前に頑張ってみろ。意外と熱血思考な人間でもあるのです。

お気に入り登録数1，０００突破……？　うわ、涙でそうです。
とてつもなく嬉しい。感激です。

御意見御感想宜しくお願いします。

＊榛名の考えについて不満や批判を幾つか頂きました。
ですが、榛名のこの考えは、不快という感情に任せた反抗心だけの“即興”反論と言っても良いものです。榛名は歴史や世界の崩壊に、不快感を覚えています。
そして榛名自身、まだ考えナシなところも、よくわかっていない所もあります。

ですのでこの先、『完全なる世界』と関わって主張や考えを変える可能性は十分あります。

色々と御不満な点もあるでしょうが、そう御理解ください。

……なんて言い訳ですけどね……。

まぁ、いきなりそんな万人が納得できる結論など出せるわけがあるか、ということで。
主義主張はぶつかり合っていくらでも変わるものですし。

考えナシなのは私ですね（汗）。こんな感じですが宜しくお願いします。

第玖話　カノジョの戦況報告（前書き）

今回、一気に時間が飛びます。
あとセリフがありません。
唯のナレーションみたくなってしまいました。

榛名の考え、造物主の考え、色々変わっていきますし、衝突します。
まぁそういう展開は次回くらいからでしょうけど。

……やはり榛名の考えは短慮すぎますよね。この先、変わっていくと思います。

はぁ、キャラクタの成長や性格・思想の変化を描写するのが難しい。
下手すれば別キャラになりかねないし、前提が壊れかねない。

あと、紅き翼とはこの先しっかりと話し合う機会がありますし、そこもしっかりと描写していくつもりです。

サブヒロイン候補、のどかと明日菜が急遽集中推薦。

まぁハクの性格上、べたべたし過ぎると殺されかねませんし、実際ハクって独占欲が強いんですよね。
サブヒロインという名の友人くらいのものだとお考えください。
それでも、麻帆良３―Ａ勢と絡ませてあげたいです。

ところで主人公の容姿ですが、今は御想像にお任せします。まぁ、平平凡凡くらいだとお考えください。
その内キャラ設定もする予定です。

……はぁ、コメディって難しい。

第玖話　カノジョの戦況報告

麻帆良でずっとマスターと暮らしていた時はわかりませんでしたが、最近になって気付いた事があります。

蟲共が蔓延る外界というものは、こうも鬱陶しいものなのですね。

危険に満ちあふれていて、そして何より……不愉快です。とてつもなく。

マスターはまるで果実です。

食欲の赴くままに蟲が群がってくる、あまりにも無防備で、あまりにも受動的な果実。

能力の有無なんて関係ありません。

マスターは至上の存在ですが、完璧ではありません。その御心は脆く、何より不安定です。

それは、ずっとマスターの御傍にいる私だからこそわかる事です。

ですから、私が護らなくてはいけません。

従者として、マスターを愛し、愛される者として。

……マスターにこの身を味わっていただいた時は、本当に死ぬかと思いました。

歓喜と罪悪感で、です。

歓喜は言うまでもありません。マスターに堪能してもらい、マスターを味わう事が出来たのですから。

ですが、あまりにも従者としては身分不相応で、はしたない行為で

す。鬱になるかと思いました。

マスターが許してくれなければ、本当に鬱になっていたかもしれません。

話を戻しますが……何でこれ程までに蟲が寄ってくるのでしょうか？
マスターのためとはいえ、私は魔法世界（ここ）に来てからは極力、完全駆除を避けています。気絶させるだけです。怪我すらさせません。

まぁ怪我をさせないのは、万が一にも、マスターの御身体に蟲の体液が付着することが無いようにするためなのですが。
それにマスターも、蟲共の体液を見るのが不快の様です。
当然でしょう。アレはとんでもなく汚らわしく、私も見てて気持ちの良いものではありません。

そのため副産物として、蟲共の恨みを買うようなことはありません。
もっとも私としては、マスター以外に恨まれたところで何も感じません。
普通の人間だって、歩いていて蟻を踏み潰して、蟻に恨まれる事を気にする人はそうそういないでしょう。それと似たようなものです。
おそらくは。

それはともかく、とにかく恨まれる要因は無いはずですし、賞金首とはいえ、戦争中に賞金稼ぎをする様な暇な蟲もそうそういないと思うのですが……なぜかしょっちゅう纏わりつかれます。

探査魔法を効かなくしても、戦場に介入したり、村に行ったり……
そんな事をしているだけで、不快な敵愾心の籠った視線で見られ、襲いかかられます。

それが鬱陶しくて仕方がありません。

変装したりすることも、私が嫌なので提案しておりません。
マスターに、蟲共から身を隠す必要などないのですから。
蟲共は駆除し、跪かせるモノです。怖れるモノではありません。

連中は、マスターの素晴らしさに嫉妬でも燃やしているのでしょうか？

そう考えてしまう程、とにかくしつこく狙われます。

後で知った事なのですが、『完全なる世界（コズモエンテレケイア）』がマスター（と私）を危険視して、連合と帝国に何が何でも始末するよう命じたようなのです。

大部分の兵士が納得していませんでしたが（仇を殺せと言われたのならともかく、戦闘を負傷者ゼロで終わらせた者を殺せと言われても戦意は上がらないでしょう）、それでも命令は命令。
必至に鼓舞をしまくり、挑む他ありません――ということらしいです。

あの組織、本当に何様のつもりでしょうか。もう手加減する気も失せてきました。
マスターの手前あまり口には出しませんが、いい加減に身の程を教えてやりたいです。

しかし、こうもしつこく狙われると肝心の『完全なる世界』の連中を潰せなくなります。
逃亡もしません。マスターが蟲相手に退くなど、あってはならないことです。
例外なく、襲いかかってきた蟲は気絶させます。

よって非常に不本意ですが、当初の予定よりだいぶ遅いペースで、重要拠点と思われる場所を片っ端から潰しています。

但し、連中を殺しはしません。マスターが嫌がりますから。

ただ、魔力と記憶とマスターへの反抗心を奪って、蟲ピンで押さえつけ、見ただけで吐き気がする様なおぞましい標本に変えてやっているだけです。

勿論マスターは分身体が後方に護送していますので、見ていません。憂さ晴らしも兼ねて、ちょっと連中を痛めつけましたが、マスターに見られていない以上は問題ありません。

要は、マスターが心を痛めたり、汚らわしい蟲の体液を浴びなければ良いのですから。

マスターさえ見ていないのならば、その時だけ私の傍にいないのならば、蟲相手に遠慮する必要など全くありません。

そう言えば、前に何処かの王国と帝国の姫が監禁されていた場所を潰した事がありましたね。
何か言っておりましたが、話に付き合う義理も無かったのでマスターを背負って転移しましたが。

そう言えば、あれからちょくちょく『紅き翼』と出くわすようになりました。
数が増えていました。それも戦闘狂タイプのが。他にも数匹増えていました。

話しかけられた時は黙って転移しましたし、戦闘を挑まれた時は八割殺しにして吹き飛ばしておきました。
ストレス発散にはちょうどイイ相手でしたね、やはり潰しても起き上る蟲は重宝します。適度に、ですが。
贅沢を言うなら、せめて私の攻撃に二撃は耐えてほしいものです。
急所だろうが何処だろうが、一撃で戦闘不能になる惰弱な蟲の相手は飽きました。

連中と深く関わってもメリットなどありませんし、寧ろマスターが汚れます。
マスターを蟲の群れに放り込むなど、言語道断です。

生きの良い蠅は、精々格下の蠅相手に武勇伝を生み出し、マスターと私の隠れ蓑になってもらいましょう。

マスターは協力してもらおうとか言っていましたが、流石に私は許しません。
マスターがどうしても望むのなら、承諾せざるを得ませんが。

最初は承諾しかけたのですが、『紅き翼』の蠅共を見ていると……
そんな気が失せました。

憂さ晴らしと隠れ蓑には使えますが、他の意味では全く使えません。
所詮は蠅。飛び回り、汚物を撒き散らすことしか能が無い蟲です。

マスターには私がいるのです。

あんな蠅共に頼るくらいなら、壊れるまで私をこき使ってほしいです。
私は壊れたりしませんが。

私なら何でもします。
何でも出来ます。
何だってしてみせます。

私も最近は、マスターにおねだりするようになりましたが……それでも結局、私はマスターの従者なのです。マスターだけの従者なのです。

遠慮など要りません。気遣いもいりません。
唯、機械人形に命じるように、私に命じてください。

マスターに尽くすことこそ、私の本分です。
マスターに尽くすのは、マスターが望み、マスターに選ばれた、私こそが相応しいのです。

他の者は、精々がマスターの奴隷、道具です。
従者ではありません。

私が、私こそが、私だけが――。

……ふぅ、興奮してしまいましたね。

そんな事をしている内に、いよいよ『完全なる世界』の半分以上の駆逐に成功しました。

その模様については、割愛します。蟲の駆逐など、詰まらないだけです。そして腹が立つだけです。

殺せないのが非常に残念です。……マスターの御命令ならば、是非もありませんが。

『紅き翼』も（蟲の分際で）殺蟲作業に従事していたようで、少しは遅れを取り戻せました。

その点については、礼を言っても良いかもしれません。

そして、マスターもとうとう『完全なる世界』の幹部に辿り着きました。というより、向こうから接触してきました。重要拠点一つを餌（罠）にされ、待ち構えられました。

それが不快ですが、せっかく会えたのですし我慢しましょう。

あとで、いくらでも殴って痛めつけることができますから。

その幹部は、今、マスターの前に立っている白髪の青年です。

あぁ、やっぱり潰したいです。殺意が沸いて仕方がありません。

それに……この程度ですか。姿を見れば、相手の実力はある程度わかります。

この蟲も、精々が蜜蜂ですね。
何体集まっても、雀蜂一匹に挑みかかるのがやっとの蟲です。

それでいて、此れまでの無礼の数々。
マスターへ隷属する事の悦びも知らない、無知で低脳な昆蟲。
汚らわしい。おぞましい。呪わしい。許し難い。度し難い。鬱陶しい。憎々しい。馬鹿馬鹿しい。

あの顔を殴りたい。全身の骨を例外なく折り、磨り潰してやりたい。
神経を斬り裂き、極上の苦しみを永久に味合わせてやりたい。目玉を抉り、マスターを拝めるという至上の栄誉を奪い去ってやりたい。
細胞の一片たりとも残さず焼き尽くし、腐肉の一欠片も残らないようにしてやりたい。

そんな思いが全身を駆け巡ります。

マスターが望まなければ、とっくに拳を振るっているでしょう。

そして、マスターが話し始めます。

一匹の蟲と。マスターが御相手をするには、あまりにも下等で下劣なモノと。

私は、蟲を絶えず睨み続けます。何時(いつ)でも、駆除できるようにします。

マスターに触れるか、暴言の一言でも吐けば――――――――――――――――――――その時が、此の蟲の最後です。

第玖話　カノジョの戦況報告（後書き）

榛名＆ハクのスタンスからして、王国、連合、帝国、何れにもほとんど関わりません。
たぶん『紅き翼』とセラスとか以外とは、あまり接点が出来ないと思います。

あと、大戦編はまだまだ続きます。
予定だと今話で、半分とちょっとが終わったような感じです。

ハクＶＳ物造主はまだまだ先のお話です。
結果はみえているかもしれませんが。
ていうかみえてますよね（汗）。

御意見御感想宜しくお願いします。

後これから先、更新速度が落ちるかもしれませんが、四日に一話は更新する予定ですので宜しくお願いします。

第拾話　カレと白髪人形（前書き）

ルビを振ると、「カレとサンドバック」。

今作の一番目フェイトは、榛名達に興味を示している影響か、ちょっとキャラが違います。

あと不憫です。

紅き翼の比じゃあないくらい。……まぁ、ハクを怒らせたものは皆不憫ですけど。

あと、あんまり進展も無しです。

次回くらいには、フェイトとの話も終わると思います。

第拾話　カレと白髪人形

はぁー、鬱だ。

いや、実際に『完全なる世界（コズモエンテレケイア）』の幹部を目にするとさ？　怒りよりも、若干恐怖とか諦観の気持ちの方が大きくなってくる。

合った瞬間わかった。

コイツ、唯の破滅願望のある馬鹿じゃあない。

この手のヤツが一番厄介だ。本人は命令に忠実なだけの道具を自認していても、信念が無いわけじゃあない。

歴史で一番、混乱時に頭角を現しやすいヤツ。

「やぁ、『狂乱の主（カオス・マスター）』。それとも、綺羅川（きらかわ）　榛名（はるな）と言った方が良いかな？」

白髪青年は、そう言っていたずらっぽく笑った。

……あれ？　思ったより、表情が多彩なんですけど。

それとも演技か？　いや、演戯か？

……よそう。僕に初対面の人間の嘘を見抜く能力なんてない。

目の前の白髪君は、最初は能面の様な顔で僕とハクを睨んでいた。

あの目はヤバかった。ハク程じゃあないけど……アレは、無機質な目だった。

人を殺すことに、何も感じていない目。

僕だって、戦場で遊んでいたわけじゃあない。
こう見えて、観察眼はそれなりに備えているつもりだ。

だから、わかる。

そういう輩は、殺人行為に快楽を覚えるヤツや無差別殺人鬼が可愛く見えてくるほどヤバい。

何故って、彼らにとって殺人とは目的でもないし、手段ですらない。
では何かというと、唯の行為だ。ハンバーグにフォークを刺すのと同じ。そういう感覚。

そう考えると、どう思います？
人を殺せば満足できる変人が、可愛く見えてくるでしょう？

「……気安くマスターの名を呼ぶな」

あ、ヤバい。

別の意味でヤバい。

いつの間にか、僕の後ろにいたハクが、白髪君の首を片手で絞めてる。それでいて、絞めていない方の腕を振りかぶって拳を握りしめて、今にもパンチを入れそうな態勢を取っている。

そして、ハクが超怖い。

此処からだとハクの表情は見えないけど、激怒しているのが雰囲気でわかる。

それでも白髪君は、一瞬驚いた後は笑っているのか嗤っているのかわからない、何とも微妙な表情になる。

「……離してくれないかい、『絶望の白（ケール・ヘーメラ）』。いや、綺羅（きら）か――」

瞬間、白髪君が吹っ飛んだ。

周囲に血が飛び散って、ハクの拳から雫が落ちている。

――あぁ、ぶん殴られたんだ。

これでも慣れた方なんだよ。

最初はハクの戦闘を見ていても、何をしたかが全く分からなかった。

あまりにも速いんだよ。

気で目を強化しても意味無くて、あまりに速すぎて見ているこっちが酔う――間も無いくらい速い。

「……蟲が。私の名を……マスターから初めて賜った大切な名前を口にするとは。

……もう、いいわ。……死ね」

「――――――――ちょぉおおおおおおっと待ったぁあああああ！」

ちょっと、何でいきなりそうなるんだよ！？
ハク、ちょっと落ち着いて！

「――――ッ！　これは、申し訳ありません。……マスターの御前で、蟲の体液が飛び散る様を見せてしまうとは」

すぐに僕の後ろに戻り、ハクは深々と一礼する。
反省するべき点がちょっとズレている点には触れないでおこう。
ハクにもハクなりの矜持があることだしね。

それに、白髪君も無事みたいだし。

うわ、立ったよ。傍目でもわかるくらい辛そうだけど。足めっちゃガクガクしてるけど。口から大量に吐血しているし、右頬が変に曲がっていて顎も変になっているけど。
無表情で。

見ていて、ハクとは違う意味で怖い。ていうか、グロい。

あと、腹抑えている。多分顔だけじゃあなくて、腹も殴られたんだろう。

「……低脳ですね。マスターの名をその口から吐き散らした時点で、学習するべきでしょう」

心底呆れた、と言わんばかりの表情で、思いっきり地球の核（コア）まで見

下したような（あ、此処火星だっけ）目で白髪君を見つめるハク。

だからさ、怖いんだって。
美女なのがよけいに。

「……ハク、あの人、何発殴ったの？」

「右頬、顎、腹に一発ずつです。極限まで手加減したヤツですから、死にはしません。
第一、殺すには早すぎます」

普通に答えられた。
ていうか、やりすぎでしょ、それ。

……あと、「早すぎ」って何さ？

あ、白髪君蹲（うずくま）った。腹抑えながら。
無表情で。
この人、表情豊かなのか違うのかわからないなぁ。
アレか、必死で耐えているのかな？

無駄だと思うけど。

うん、わかったよ。

さっきあの人をヤバいだの何だの言っていたけどさ、ウチの従者の方がずっと怖かったよ。

ていうか、こっちが悪人にしか見えなくなってきた。
立って傍から見ると、美女と平凡青年が美青年を私刑（リンチ）にしているようにしか見えない。たぶん。

「何をしているの？　さっさと立ちなさい。
怖れ多くもマスターが、蟲如きと対等に御話をされようとしているのよ」

そう言いながら、ゆっくりと白髪君に近付く我が従者。

うん、たぶんじゃない。
カンペキ私刑（リンチ）だ。

何か、自分の主義主張を言いまくってやると気合入れたのが莫迦らしくなってきた。

もう、放っとこかなぁ……駄目か。これじゃあ一方的に喧嘩振って逃げるだけだし。

「……蟲が。せっかくマスターとの話に支障が無いよう、ギリギリまで手加減してあげたのに。
惰弱、脆弱……。これだから、蟲は……」

そう憎々しげに呟くハク。
いや、無茶でしょ。

ハクのパンチだよ？
前に……そう、グレート・ブリッジとかいう要塞を、本人曰く「最低の力」で数発殴って、瓦礫すら残さず吹き飛ばしたヤツだよ？
あんなもの、三発も喰らって、肉体が粉微塵にならなければ上々だよ。

ちなみにハクが言うには、「私の近接スタイルは本来なら蹴りが主体なのですが、蹴りは威力が高すぎるのです。大体の人間は、腕力よりも脚力の方が強いですから」だそうだ。

うん、ハクには“蹴り技禁止令”を出そう。

そのままハクは、蹲った白髪君の腹をさらに蹴り上げた。

あ、“蹴り技禁止令”、施行前に破棄。
何処の国際法だよ。

白髪君は下から蹴り上げられ、空に吹き飛――ばなかった。
ハクの腕に頭を掴まれ、無理矢理立たされた。

蹴りが強烈だったのか、また吐血する白髪君を見て、苛立たしげに舌を打っているハク。

いや、普通そうなるから。

そして、右手で白髪君の頭を掴み、汚物を避ける様な感じで数歩下がった後こっちを振り向いて、

「……さぁ、マスター。御存分にどうぞ」

……えぇ～……。

「ハク、どうしろと？」

「仰りたい事があるのでしょう？

……あぁ、私の事なら、御気になさらずとも結構です。確かにマスター以外のモノに長時間触れているのは、汚らわしいことこの上ありませんが、マスターのためならば苦にもなりません」

「いや、こっちが困るよ。何処の世界に、片方がボコボコの状態で行われる言葉のキャッチボールがあるのさ」

これじゃあ“尋問”いや“拷問”みたいじゃあないか。いや、“みたい”どころかまるっきりそうだ。

「キャッチボール？　まさか、私がマスターに、この蟲の言葉を伝えさせるとでも？」

「……はい？」

「マスターが蟲の言葉に耳を傾けるなど、何処に必要性があるのでしょう。

蟲はマスターに跪き、許しを乞わなければ、地べたを這いずること

すら許されません。
そんなモノが、マスターに言葉を投げかける？　身分不相応にも程があります」

うわぁ～お。

久しぶりに長広舌を振るったら、この従者、どうやら僕と白髪君を会話させるつもりすらなかったらしい。

「いえ、会話程度は……許し難いですが、まぁマスターが望むのならば認めました。
ですが、この蟲はマスターの名を呼び、私の名を呼んだのです。万死に値します」

……ちょっと待って。口に出していないよね？　僕。

「マスターの仰りたい事は、私にとっては容易く想定できます」

ついにそこまでいったか、この従者。

「ハク？　せめて……喋れるくらいには、回復させてあげないかなぁ？……なんて……」

……情けないなんて言わないでよ、ホントに怖いんだからさぁ……。
モン○ンに出てくるラー○ャン１００体に囲まれる方がマシだよ、

これ。

「……御命令ならば」

それでも、ハクは不承不承といった感じをおくびにも出さずに頷き、ポケットから小瓶を取り出すと……うわ、瓶ごと口の中に突っ込んで、無理矢理噛み砕かせて飲ませてる。

行為が完全に外道の美女。
しかも戦闘服。

いや、いつものメイド服の方が怖いか。

そんな事を考えている内に、白髪君の治療が終わったらしい。

……文字通りの意味で、喋れるくらいには回復させたのかこの従者は。

喋るのが精一杯なくらいボロボロなんですけど。

「さぁ、御存分に」

そう言って、まだ白髪君の頭を掴んでいるハクの目が妖しく光る。

僕でもわかる。

あれは白髪君に、「これ以上マスターに無礼の一つでも働いたら…

…次は無いぞ」と言っている。
絶対にだ。

「え～と……」

「あ、僕はフェイト＝アーウェルンクス。まぁ、周りからは“一番目”って呼ばれているよ」

え、何この人。
普通に返してきたんだけど。

……あぁ、喋る事だけは問題ないのか。

「一応、組織の大幹部……ボスの側近ってところかな？　とにかくはじめまして。
それから、従者の人には済まないね。『狂乱（カオス）の――」

「あ、綺羅川　榛名だから、榛名で良いよ」

「マスター！？」

ハクが慌てたように言う。

そして、急に凄い目でフェイトを睨みだした。
「もし呼んだら、ぶっ殺すぞ」と言ってる。目が。

「いいって、ハク？」

「――はい」

ハクは小さく頷くと、フェイトの耳元で何かを囁いた。

途端に、ダラダラと汗を流すフェイト。

うん、何かごめん。

「それで、僕達と会いたかったんでしょ」

「その通りだよ。やはり、君達は良いね。『紅き翼』より、ずっと物分かりが良い……そして強い」

「まぁ、僕は従者に頼りっきりだから」

そう言って肩をすくめる。

「此の世界の事、知ってるよ。世界崩して自殺を――」

「いや、救うのさ」

フェイトは真剣な表情で言って、

「マスターの御言葉に、口を挟むな」

また殴られた。

……って、

「ハク、もうそろそろ限界！　その人限界だから！　ストップ！！」

完全にヤバい。一瞬目玉が飛んだかと思った。

そんくらい、顔がひんまがった。

……ハク、完全にボクシングの構えだよ。

殴る気満々だよ。

一言も見逃す気が無いよ。

……仕方が無い、こうなったら――。

「――――――――ハクッ！！！！！！！」

「ッ！！」

「……それ以上殴るな、絶対に、だ」

「……は……」

「殴ったら……本気で怒るぞ」

「申し訳ありませんッ！！」

そう言ってフェイトを投げ捨てて、土下座しかねない勢いで頭を垂れ、跪くハク。

……ってフェイトは？

……あ、地面に落ちた。

頭から。

……大丈夫だろう。

「わかったらいいよ。こっちにおいで」

「はい」

すぐに、僕の後ろに移動するハク。

頭を垂れたままのハクを撫でる。

うん、後で謝らないとなぁ。

……そして、フェイトにも。

第拾話　カレと白髪人形（後書き）

榛名が本当に怒鳴るの、初めてかもしれませんね。

次回は恐らくハク視点です。

御意見と御感想宜しくお願いします。

第拾壱話　カノジョとカレの生き方と終劇（前書き）

何とか書けました。

今話では、榛名の人生観が少し明らかになります。
何度でも言いますが、彼は少々ズレていますし、変わっています。

まぁ、これはあくまで榛名の結論ですので、あまり批判されても「こういうキャラ設定ですので」としか言えないのですが……。

それと、本作は独自設定の塊ですので、御理解下さい。

第拾壱話　カノジョとカレの生き方と終劇

「此の世界は、言うなれば“箱庭”だ。創られた空間。創られた生命。創られた世界。

しかし、それだけならどうにでもなる。極論さえ言えば、魔法世界（こちら）も旧世界（あちら）も“創られた”ものだ。

唯、生み出したものが“自然”か“神”かの違いだけさ。

……いや、若しかしたら、両方“神”によるものかもしれないね」

首を傾け、頭に響く蟲の羽音を聞き流します。

……それにしても、先程は、我ながら愚かな事をしてしまいました。

まさか、マスターを怒らせるとは。

まだまだ、マスターの完璧な従者にはなり得ていない、ということですか。

私にとって、マスター以外に正しい存在などありはしません。マスターの御命令こそが正しいのです。何があろうと、それは絶対に変わらない、世界の真理（しんり）です。

同時に、マスターが悪いなどということもあり得ない。

世界がマスターを“悪”と認識するのなら、そのような世界に何の価値もありません。

いや、元から価値などありません。

マスターが此の世界に訪れたことで、初めて価値が出てくるのです。
そう、マスターに搾取されるという価値が。

世界と繋がっていない存在などありません。神だろうがバクテリアだろうが、それは変わりません。
そして、マスターもまた、世界を必要としています。

だからこそ、蟲に塗れた汚らわしい世界でも価値が見出されます。
要はマスターの周囲だけが、綺麗であれば良いのですから。

……とにかく、私にとってマスターは絶対です。
目の前に蟲がいなければ、私は膨大な時をかけ、マスターに謝罪の言葉を献上するでしょう。此の世のあらゆる書物に書き写したとしても、まだ足りない程の謝罪の言葉を。

口惜しい事に、今はそれすらできません。
余計に蟲が煩わしくなりましたが、ここで蟲に手を出せば、マスターがさらに怒り、私を罵倒するでしょう。

最悪の場合、私は捨てられてしまうかもしれません。
それだけは嫌です。
罵倒や暴力などの辱めなら、マスターが満足するのなら幾らでも受けます。

ですが、捨てられる――必要とされなくなることだけは、耐えられません。

私の存在価値そのものが、崩壊してしまうのですから。

「でも、創造されたモノは何時(いつ)かは壊れる。硝子(ガラス)瓶に水とビー玉を入れておいていても、何時かは瓶に罅(ヒビ)が入る。そして、水は少しずつ流れ出し、その内罅は大きくなり、ついには壊れてしまう。水は零れ出て、ビー玉はコロコロと転がってしまう。そして、割れてしまうんだ」

それにしても、先程マスターに怒鳴られた時、不思議と恐怖よりも快楽の方が大きかった気がしますね……。
まぁ、それは置いておきましょうか。

マスターは本当にお優しい方です。此の世界で何よりも貴重なその慈悲を、たかだか蟲如きに与えるのですから。

それともマスターは、あの白髪蟲のグチャグチャになった間抜け面をもっと見ていたいのでしょうか？
でしたら、言ってくだされればマスターの御望み通りにグチャグチャにして差し上(ト)げましたのに……。

いえ、マスターの性格から察しますと、本当に御慈悲をかけただけなのでしょう。
本当に、お優しい。

しかしあの蟲も、礼の一つも言わないのは気に喰いませんね。
ここまでしても、自分の立場が理解できていないようです。

正しく低脳……ミクロサイズの脳しか持たない、下等で下劣な存在です。

おそらく、マスターの名を呼ぶ事が許されるという余りの栄誉に感

激するあまり、その愚図な脳からマスターへお礼を伝えることが吹き飛んでしまったのでしょう。
気持ちがわからなくもないですが、莫迦げたテロ思想を持つくらいなら、マスターへ礼を言うという人生（蟲生？）最大級の重要事項を忘れないのが普通でしょうに。

やはり、単に脳が欠陥品なだけかもしれませんね。

「それは摂理だ。決して止められない。よく言うだろう？“蟻の穴から堤も崩れる”さ。
ほんの少しのズレでも故障でも、“箱庭”にとっては大事となる。
ましてや、魔力が枯渇するという事態……こうなれば、“箱庭”は竜骨（キール）を失くしたフネにも等しい」

「だったら、キングストン弁を開いて自沈する……とでも言うつもりかい？」

マスターが険しい表情で、白髪蟲を睨みつけます。

……あぁ、まだ羽音は止んでいなかったのですか。
鬱陶しいですね。

「否定はできないけど、だからと言って僕達は乗務員全員を、それに巻き揉むつもりはないよ。
彼らには、より豪華な客船に乗り移ってもらうのさ」

「……それが、『完全なる世界』か？」

「そう、僕達の組織名でもあり、最終到達地点。そして、原点でもある」

「……信じ難いな。だったら、何で最初から『完全なる世界』とやらを創らなかったんだ？」

「『完全なる世界』は“楽園”さ。そこには必要なものが全てあり、必要なものなど無い。肉体も、魂も、何もかもが不要なんだよ」

「……馬鹿馬鹿しい」

マスターが吐き捨てるように言って、白髪蟲を睨みつけます。

「そんなの、生きているだなんて言わないじゃあないか。唯の集団自決だ。チープ過ぎて笑えない程に、馬鹿げてる……。中世の詐欺師の方が、もう少しはマトモな方便をするぞ」

「方便、とは？」

「そのままだよ。そのままの意味。第一、“楽園”？　冗談も程々にしてほしいよ、全く。魔法世界の住人が、一体何億人いると思っているんだ？　“楽園”

なんて人それぞれだ。
家族と普通に飯食える食卓だって、自由に人を殺せる無法地帯だって、猫だらけの草原だって、人間の価値観によって楽園にも地獄にもなる。
『完全なる世界』がどんな所かは知らないが、誰もが夢見る楽園なんぞ在りはしないんだよ。
あるとすれば、それは人それぞれの楽園が実現する場所――“夢”だけだ」

「言い得て妙だね」

白髪蟲が感心したように頷きます。
……殺していいですか？
腹が立ちます。

感心する意味など微塵も無いのです。唯、蟲はマスターに跪いていればよいのですから。
感心？　何様なんでしょうか、あの蟲は……。

「夢では、いけないのかい？」

「勿論。だって――」

マスターは、私の方を向いて、儚げに微笑みました。
それがとても美しく、私は思わず見惚れてしまいそうになりました。

「夢って、自分以外は、いや、若しかしたら自分ですら紛いものだろう？
そんなの、詰まらないじゃあないか。
そりゃあ僕は、ちょっと違う生涯の閉じ方を迎えて、ちょっと違う再スタートを切ったよ？
そして、ちょっと違う従者を貰ったよ？
その意味では、僕もハクも、この世界では“紛いもの”かもしれないけどさ。それでも――」

マスターは笑顔で、両手を広げました。
まるで、砂山が完成した子供のように、スコップを片手にはしゃぐ児童のように、瞳を輝かせました。

「僕って、生きているんだよね。ホンモノとしてさ」

マスターは、間抜け面で呆然としている白髪蟲を尻目に、両手を振りまわして、飛び跳ねんばかりに大声をあげます。

「良い事だよ？　生きているって。
満たされない？　辛い？　上手くいかない？
当然じゃないか！　生きているからね。
人生って、要は死ぬための過程だろ？
僕は死なない身体になったけどさ、だからと言って、生きていない

……わけじゃあない」

そう言って、マスターはますます笑みを深くして、白髪蟲と私を交互に向きます。

私は笑顔で、そんなマスターを見つめ返しました。

たまらなく、本当にたまらなく素敵です。

「いいじゃん。実現性が低かろうと、止められなかろうとさ。本当に楽園を望む人間が、一体何人いるか知らないけどさ。自壊なんて、阿呆らしいじゃあないか。夢の中でひたっすら紛いものの人生過ごすよりは、ずっとイイよ？」

「……イイ？」

「うん」

「……そんな理由で、僕達の作戦を否定するのかい？」

「勿論それだけじゃあないよ。すぐ諦めるのが気に入らないし、歴史とか、先人達の努力がパァになるってのもある。うん、こっちが本命かなぁ？」

「……ふぅん、君は変わっているんだね」

白髪蟲の言葉に一瞬カチンときましたが、嬉しそうなマスターの水を差す気にはなれず、私は大人しく、マスターの反応を待ちます。

勿論、無様に地面に座り込み、グチャグチャ間抜け面の白髪蟲への警戒は怠らずに。
私は蟲相手に全力は出しませんが、見くびったりはしません。
蟲が下等で惰弱なのは事実です。自惚れでも何でもありません。

「今まで『紅き翼』を筆頭に、僕達の邪魔をする者は何人もいたよ。でも、皆非人道的だとか、大殺戮になるとかで……。
イイかどうかとか、歴史とか、諦めるとかを言われたのは、初めてだ」

白髪蟲はマスターを貶(おとし)めるつもりも、侮辱するつもりも、呆れたつもりも無いのでしょう。青天の霹靂。単に驚嘆し、感心しただけ。

「生きている……？　面白そうだ」

白髪蟲は回復してきたのか、自力で回復術を自身に行使すると、立ちあがりました。

「あの御方に進言してみるよ。君達を敵にしても、良い事なんて一つもなさそうだ……色々な意味でね」

……ようやく、マスターに謝罪が出来ます。
蟲の消え際に、私はそんな事を考えていました。

第拾壱話　カノジョとカレの生き方と終劇（後書き）

セクストゥムの扱いについて、とある方より御意見を頂きました。
若しかしたら彼女、サブヒロイン化するかもしれません。
どっちにしろ、絡ませる予定です。

あと、ハクは榛名限定のＭです。ドＭではありません。たぶん。

御意見御感想宜しくお願いします。

第拾弐話　カレの世界と脳内環境（前書き）

前話のフェイトとの話から、数週間後の話です。

第拾弐話　カレの世界と脳内環境

フェイト（そう呼ぶように言われた）とは、ちょくちょく連絡を取るようになった。

それは、フェイト達にとっての最終ボス（ラス）（造物主（ライフメイカー）と言うそうだ）のことだったり、組織の動きについての説明だったり、唯の雑談だったりと本当に色々だ。

思いっきり情報流出だけど、フェイト曰く「造物主の許可は取っている」らしい。

それって、造物主が僕達の事をある程度認めてくれた、ということなのか――と思いたい。

唯、フェイトと連絡を取ったり直接会ったりする度に、ハクが凄く怖くなるけど。

それはまぁ、ハクにも譲れないものがあるだろうから咎めもしなかったし、一応“敵”だから悪くないと思う。

僕の場合、護る事は出来ても敵に打撃は与えられない。

僕にも魔力や気はあるから、勿論攻撃手段が無いわけでもないし、“絶対防御”を攻撃技に応用する事も出来る。

けど、前者は総量が少ないし、組織の大幹部がちっとやそっとの術で倒せるとは到底思えない。ていうか、有体に言って魔法戦や殴り合いで勝てる気がしない。

そして後者は、物凄く集中していないと成功しないし、時間もかかったりする。

その代わり、命中率は凄まじく良かったりする。
何しろハクでさえも知覚が出来ないから、そもそも気付かれない。
避けられないし、迎撃もされない。
されたところで効果も無い。

つまり、当たるとデカイが成功率はとんでもなく低い。
基本受け身だから、敵が撤退するか距離を取ればお終いなんだよ、この技。

つまり僕はフェイト相手に護る事は出来ても、手も足も出せない、というわけ。

だから攻撃は全部ハク任せだ。
そのハクが警戒してくれないと、寧ろ困るのはこっちだ。

おまけに僕は賞金首。

しかも、自分で言うのもなんだけど、僕の賞金（８０万ドル）はそれ程高くない。
ハクが１８００万ドルで、次点の『闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）』とかいう真祖の吸血鬼が６００万ドルである事を考えると、僕は“お手軽な”、悪い言い方で言うと“小物”の部類に入る。

まぁ、自分の事を“小物”なんて呼んだら、ハクが静かに激怒するのは目に見えているから、口には出さないけど。

当たり前の話だけれど、世間一般的には“懸賞金額の高い賞金首＝強者・危険人物（バケモノ）”と認識されている。

そしてそれはつまり、賞金稼ぎや傭兵・諸国軍にとっての危険度（リスク）を

も意味している。

要するに、余程豪胆か正義感が高いか、或いは莫迦でもない限りは、そうそうハクなどの“大物”に手を出さないというわけだ。
まぁ、世の中“莫迦”の分類に入る賞金稼ぎや諸国軍が圧倒的に多いのも事実で、ハク（ついでに僕）を狙う連中もしょっちゅう出てくるんだけどね。

兎に角、僕みたいな“小物”は、返り討ちにあって生涯に幕を閉じる羽目になる可能性が低い。

だから、結構狙われやすいんだよ。賞金稼ぎからすれば、僕を倒せば８０万ドルが手に入るんだ。
我ながら、ボロい商売だよね。

もっとも僕を狙ってきた賞金稼ぎは、全部ハクによってトンデモない目に合わされている（と思う）。
おまけにハクは、どうやっているか知らないけど事前に敵の位置を察していて先手を打つから、僕の目の前に敵が来る事は滅多にない。

ハクは教えてくれないけれど、あの激怒ぶりは凄まじいの一言に尽きる。
だから一発や二発ぶん殴って、それですませたとはとても思えないんだよ。

勿論、僕はハクに全幅の信頼を預けている。
ていうか、他に縋るものも頼るものも無い。カッコイイ言い方だと“信頼している”、カッコワルイ言い方だと“丸投げ”。

でも、用心するに越した事は無い。

痛いのは嫌だし、何しろここ最近は賞金稼ぎはおろか、軍ですら、周りの一般人が多い街中、酷い時は室内で襲撃してくる。

他人に迷惑かけたくないし、おまけにそれで街や市民の皆様に被害が出ても、僕達賞金首(ひがいしゃ)側に見事な程に責任転嫁される。

幸い僕はハクより忠告を受けていたから、あらかじめハクに周囲への被害を最低限にするよう言っておくことができた。

危ない危ない。これ以上賞金が上がったら、困るなんてものじゃあない。僕の精神がいい加減に限界だ。

まったく賞金稼ぎは兎も角、正規軍になら住民を一時的に疎開させる権限くらいはあるだろうに（しかも今は戦時中）。

敵に悟られぬようにするためかどうかは知らないけれど、街中を歩いている兵士たちがいきなり攻撃を仕掛けるのはどうだろう？

日本人の常識からすれば、そういう時はまず長ったらしい逮捕状を読み上げるとか、事前に近辺を封鎖するとかが考え浮かぶと思うんだよね。

警察だか公安だか自衛隊警務科だか、日本の司法取締機関は色々あるだろうけど、そこの辺りにはある程度の秩序と言うか配慮があると思う。

司法関係はさっぱりだから、詳しくは知らないけど。

「……ハク？　その、あんまり怒らないでいてくれると……助かるんだけど」

僕は小声で言いながら、後ろを向いてハクを見つめた。今日のハクは、外行き用の戦闘服じゃあなく、黒と白のメイド服だ。

目の前には、いつも通り（戦闘中以外は）僕より一歩控えた位置で、直立不動の態勢を取っている我が従者。

ここはとある廃屋……だった場所で、今はそれなりに豪華な一戸建てになっている。

ハクが錬金で修理・補強して、結界で隠蔽したものだ。

基本、僕らは帰りたい時に何時（いつ）でも麻帆良に帰れるから、魔法世界（こっち）に寝泊まりする事は無い（因みに各地のゲートは未だに修理どころか手つかずの状態）。

でも、念には念、ということで、幾つか拠点、というよりアジトをハクが用意してくれた。僕が寝ている間に、彼女の分身体が。

此処もその一つだ。

そういえば、ハクには睡眠とか休息は必要ないらしいけど、じゃあ夜は何をしているのかと聞いてみたら、「マスターを御守りしています」と返された事がある。具体的に何をどうしているかは知らないけど。

それで、ハクが怒っている理由が、僕が『紅き翼』に手紙を出したからだ。

内容は、『完全なる世界』の情報ｅｔｃを渡す代わりに、僕の計画に協力してほしい。一度、話し合う機会を設けさせてもらいたい、というもの。

これをハクに頼んで出してもらったんだけど、それからハクはずっと不機嫌だ。

いや、傍から見れば無表情なんだけど、僕ならわかる。

現在進行形で機嫌が悪い。

どうもハクは、『紅き翼』を避けている――というか、毛嫌いしているんだよなぁ。理由を聞いても、「蟲を好きになる理由などありません」の一言でバッサリ。

前に何回か戦ったから、仕方ないと言えば仕方ないのかな？

で、僕の計画と言うのは、別に世界を救うとか、そんな大層なものじゃあない。

フェイトに偉そうなことを言ったけど、要は僕の意見を言っただけ。フェイトを従わせたかったら、とっくにハクに頼んで洗脳してもらうとか……造物主を倒している。

造物主には少し通信で言葉を交わした事はあっても、会った事は無い。けど、ハク曰く、実力的には「雀蜂（スズメバチ）程度」らしい。

何故かって、ハクが言うには「相応の実力者なら、その時点でわかりますが、この世界には蟲の気配しかしません」とのこと。

ハクにとっての“相応の実力者”がどの程度かは知らないけれど、そんなのがいたらとっくに世界は滅んでいると思う。何しろ魔法世界の創造主が、“雀蜂”呼ばわりなんだから。

個人的には傲慢不遜なイメージがあったんだけれど、ヒトの話を聞かないような人でもなかったし、あの人にも、あの人なりの葛藤と

かがあったのはわかった。
心なしか、口調も少し疲れていたようだったし、案外憔悴していたのかもしれない。

少なくとも、変にテンションがおかしいイカレたヒトじゃあなかったのでホッとした。
そんなヒトとワンツーマンで応対できる程、僕は豪胆じゃあない。

……兎に角、僕の計画と言うのは、簡単に言うと各国に潜り込んでいる『完全なる世界（コズモエンテレケイア）』の一員――というにはあまりに捨て駒感・使い走り感が否めない（フェイト談）上層部の一斉摘発。
そして、僕とハクの懸賞金の解除。

最初はハクが殺すとか洗脳するとか言っていたんだけど、殺すのはどうかと思うし（キチンと法によって裁かれた方が、民衆の怒りも沸くと思うし歴史的事象にもなる）、何か雑草の葉の部分だけを刈る様な……無駄足になる気がしてならない。

ハクが言うには、大勢の上部が無くなって“玉突き人事”になっても、大して思想もやることも変わらない後釜が、就任するだけになる可能性が高いと言うし。

それにいきなり各国のトップが“謎の死”を遂げるとか、どう考えても混乱と疑心暗鬼しか生まない。
下手すれば、これが引き金となってまた戦争が起こる可能性すらある。

こうなるともうお手上げ状態。

次に洗脳だけど、わざわざ国家を従えても僕が思うにはメリットなんてないだろうし、それだと結局（見かけは）大戦前に戻るだけだ。民衆や兵士が納得するわけがない。

戦争起こした上層部が、纏めて戦後も権力を維持しているなんて。

しかも、得たものは無し。

“スケープ・ゴート”でもあれば話は別かもしれないけど……そう上手くいくとは考え難い。

ならば、社会的に連中がしでかした（ていうか、しでかしている）事を社会に公表してもらうのが一番手っ取り早い。

そうなれば、民衆の怒りは阿呆な夢見て莫迦やらかした上に向かうし、国も面子を挙げて逮捕・処罰に乗り出すだろう。

しかし、僕ら二人の“犯罪者コンビ”やモロ世界崩壊計画を進めているフェイト達が言っても、誰も聞く耳を持ってくれない。

だからといって知名度（ネームバリュー）ゼロの一般人に変装しても、戯言と嗤われるのがオチ。

政治家や軍人も立場上できないし、やったら色々と禍根を残す。

中立国の連中が言っても同じ事。ていうか、耳を貸すわけが無い。

となると、連合所属とはいえ、今は（フェイト達の陰謀で）犯罪者扱いされ、追われている――それでも有名すぎるほど有名な『紅き翼』に託すのが最善――と結論したわけ。

それで、今は返事を待ちながらのんびりしている状態だ。

「怒っておりません、マスター。……ええ。マスターの御計画に反対する理由などありません」

「……僕が、連中に会うのが、嫌なのか？」

「……ええ」

ハクは珍しく、歯切れが悪そうに言った。
たぶん、色々とあるんだろう。

気になったけど問い質すこともなく、僕は紅茶を一口飲んだ。

「……マスター。マスターの御望みは……本当に、そうなのでしょうか……」

「え？」

何かが聞こえて、僕は再び振り向いた。

其処には相変わらず、無表情で僕を見つめる黒い瞳があった。

第拾弐話　カレの世界と脳内環境（後書き）

ちなみに造物主もフェイト同様榛名に強い興味を持っていて、特にハクには敵わない事を悟っている設定。

フェイトは榛名の行動を手助けしていますが、これも興味（＋友情）によるものです。それと、フェイトは元老院達の事をちょっと使えればいいな的な駒としか見ていないので、摘発されても榛名の行動が見れれば問題なしだと結論しています。

御意見御感想宜しくお願いします。

番外編第壱話　とある妹の閉幕（前書き）

今作初の第三者視点。

そして番外編です。かなり短めです。

番外編第壱話　とある妹の閉幕

日本国のとある県にある、山と海に囲まれた小さな村、露土音村。

此処は、綺羅川　榛名と綺羅川　ハクが人生を歩み始めた世界とは、少し離れた――しかし、何の関わりも無いとは言えない世界。

露土音村は、“現代日本”を体現するにはあまりにも寂れた村だった。

それはもう、地元の名産品と村唯一のカラオケボックスくらいしか無い様な所。

しかし、どういうわけか子供や若者の数は案外多く、学校も小学校から大学まである。

文系の学科と教育科しかない、あまり大規模とは言えない大学の付近を、一人の少女が歩いていた。

少女は地元中学校の制服を着込み、首からイルカのペンダントをぶら下げていた。

黒の髪を肩まで伸ばし、華奢だが女子中学生とは思えない程長身で、肌も白い。

そのため余計に細身に見える。いや、病弱にも見える。

現に、その少女の顔色はかなり悪い。顔立ちは整っているので、美少女と言えるのだが、今は死人にすら見える。

彼女の名は、綺羅川　子日。

数週間前に、兄を亡くした少女である。

綺羅川家は父陸奥（むつ）と母鬼怒（きぬ）、そして長男榛名と長女子日の四人家族だ。
そして、交通事故――運転側の信号無視というしょうも無い理由――で、長男榛名を亡くした。

親馬鹿とも言える程、息子（と娘）に愛情を注いでいた父と母は嘆き悲しんだ。

人口は少なく、車よりも軽トラにトラクタや漁船の方が多い村だ。
電車もバスもほとんどない。
交通事故など、そうそう滅多に起こる事ではないのだ。

友人達も、榛名と言う青年がその“滅多にない事”に当たってしまったことを嘆いた。

が、友人達よりも、そして両親よりも嘆いていたのは――榛名の実の妹、子日だった。

「はぁ……兄さん……。どうして……」

兄が事故に遭った横断歩道を虚ろな目で見ながら、子日は本日何億回かわからぬため息をついた。

生真面目で優等生気質の彼女にとって、成績は良い癖にいつも適当で行き当たりばったり思考だった兄は、表面上は窘めたりしていた相手だった。

しかし、心の奥底ではいつも羨望していた——自慢の兄だった。

引っ込み思案で、優等生だった彼女には、近付き難い雰囲気があった。

対して、優等生だったがいつも柔らかな物腰だった兄には、多くの友人がいた。

幸運なことに（誰にとっての幸運なのかはひとまず置く）恋人はいなかったが、それでも毎日友人達と楽しくやっていた兄は、子日にとって憧れだった。

しかし、その兄との繋がりは突然途絶えた。

何時も身につけるよう、散々言っておいた、誕生日プレゼントのペンダント。

彼女のものと対になっている、片方のイルカはなぜか消えていた。

捜索しても、欠片すら見つからない。

しかし、どう見ても事故のこの状態では、警察も見向きもしなかった。

それだけならまだ良い。
所詮はモノの繋がりだ。

しかし、兄の命まで消えてしまった。
命の繋がりも、心の繋がりも無い。

兄がいた痕跡を残し、残らず消えてしまった。

今年に中学生になったばかりの彼女にとっては、それは酷すぎる現実だった。

彼女は確かに、並の女子中学生よりかは（精神的に）成熟していたし、落ち着いていた。
が、人としてはまだ二十歳にもなっていない少女。

心の強さは、年相応のものでしかない。

「兄さん……貴方を失って……私は、どうすればいいのですか……？」

子日は、まるで未亡人のような雰囲気を纏いながら、フラフラと歩き出した。

余りにも絶望していて、さらにショックによる寝不足が災いしたのか――少女は気付かなかった。

いや、確かに、運動神経が良い方ではないのだが……生存本能が働いていれば、そこは普通に気が付いたはずだ。

鳴り続けるクラクションと、迫ってくる轟音に。

番外編第壱話　とある妹の閉幕（後書き）

子日がどうなるかは……まぁ予想はつくと思いますが……彼女が本編に登場するのは、少なくとも大戦後です。

第拾参話　カレと計画進展（前書き）

紅き翼とのお話編。

といっても、ガトウと詠春くらいしか出番はありません。
ナギ？　ラカン？　アル？　交渉なんて出来そうにないですし。
ゼクトは見た目的に空気に合いませんし。

第拾参話　カレと計画進展

「これは……」

僕の目の前には、『紅き翼』の面々――の中でも比較的マトモな連中――ガトウさんや詠春さんと話している。

勿論僕の後ろでは、ハクが凄い目で『紅き翼』の面々を睨んでいる。

え？　『紅き翼』の好戦的な連中？

とっくにハクにズタボロにされて、アル（本名はアルビレオ＝イマだけど、アルで良いと言われた）が必死で治療している。

……ていうかナギとかラカンとか（さん付けする気にもなれない）の相手はもう疲れたよ。

……いや、正確に言うと見てて疲れた。

ハクがいる限り、誰だって僕に近付けないから、僕自身は戦っていない。勝てる気もしないし。

あんだけハクにぶちのめされ、それでも懲りないヒトなんて初めて見たよ。しかも二人も。

ハクもウンザリした表情だったし……傍から見れば、嫌がる女性に襲いかかるヤバイ人にしか見えないんだよなぁ。

指摘したらヘコむだろうから、言わないけどさ。

で、今渡したのは連合、帝国、王国、アリアドネー他中立国から独立都市、或いは辺境の小国にまで潜り込んだ、『完全なる世界』の

一員からスパイや協力者の詳細から証拠まで全部揃った、ハクが（五秒で）作成した資料。

「……本物か？」

「捜査官なら、それを見分ける能力くらいは御持ちでしょう？　ガトウ＝カグラ＝ヴァンデンバーグさん」

そう言うと、渋い感じの中年捜査官は静かに唸る。

『紅き翼』に加わっただけの事はあり、この人は結構先見の明があると言うか、鋭い。要するに、優秀の部類に入る人だ。

この人にならと思って、資料を渡した。

正直他の面子は、政治的駆け引きなんてできそうにないし。まぁ、それは僕も同じなんだけどさ。

「『紅き翼』は今は犯罪者ですが、それを発布した連合はこの様です。これをバラまけば、貴方達の容疑はたちまち晴れる。どうです？　世界を揺るがすこと確実な、なまじっか戦略兵器よりも使える資料を手にした気分は？」

そこまで言って、ハクが淹れてくれた紅茶を飲む。

ちなみにテーブルを真正面に座るガトウさんと剣士……青山詠春さんの前にも、ハク特製の紅茶が置かれていた。

ハクは渋っていたけど、頼み込むとあの二人にも淹れてくれた。

もっとも、ガトウさんも詠春さんも警戒しているのか、手を付けてはいないけれど、それは仕方が無いと思うし、言ってもどうにもならないだろうからもんくは言わない。

ハクに至ってはガン無視状態だ。
自分が淹れた茶が飲まれようが捨てられようが、どうでもいいのかもしれない。
僕が飲んでいるときは、とても嬉しそうにしているんだけどね。

「この資料が暴かれたら大変だ。何しろこの戦争が、一組織の陰謀で始まったという事が知れ渡るんだから。
現場で戦う兵士、戦時下の経済統制で苦しい生活を送っている市民、家族を失った遺族……。彼らがどのような反応をするかは、貴方にも想像がつくでしょう？」

「……」

「下手すれば暴動……内戦に発展しかねませんが、理性ある者は可及的速やかな終息を望むでしょう。そして、阿呆をやらかした連中は法的に処罰されます。
この世界の法律には詳しくありませんが、国家反逆罪に反乱ｅｔｃ……。良くても長期収監か終身刑、悪ければ極刑でしょうね。
人々が国家への信用を失った時、注目を集めるのは、“集団”或いは“個人”です。それは“英雄”。
即ち……貴方達ですよ」

「……成程」

詠春さんが小声で呟いた。

「確かに此れなら、戦争を終わらせることは可能だが……連中は？
『完全なる世界』は？」

「これを」

僕は二つ目の資料を渡す。

「『完全なる世界』の潜伏地及び計画書です。あくまで一部ですが」

「……信用度は？」

「貴方達が思った通りの信用度ですよ？」

まったく、えらく緊張するけど、こういうときは余裕そうな、飄々としたポーズが肝心だ。提供者の態度によって、情報の信頼度って結構左右されるものなんだよ。

自信無さ気になるのは論外だし、だからと言って完璧だと太鼓判を押しても、かえって信用度は落ちる。

要は、眉唾ものだと思われないためには、信用出来るか出来ないか

……6：4くらいの（相手側の）判定がちょうどイイ。

架空戦記とか読み漁ってて、こんな結論になった交渉術だ。

本来ならハクに丸投げしたいところだけど、一応僕がハクより上の立場なんだし、交渉くらいは僕がやらないと格好がつかない。

それにハクだったら、出会った瞬間交渉相手を血の池に沈めそうで怖い。

ハクは従順……にみえて、いざとなれば問答無用で許可なく（僕が認知できないようにして）殺すようなバイオレンス思考も持っているんだよ。

ていうか、当の本人がそう宣言していた。

ハクは嘘を言わないから、こっちとしては戦々恐々だ。

あと、『完全なる世界』関係の資料については、しっかりと造物主（ライフメイカー）とフェイトに許可を取っておいた。

いや、“許可”と言うよりは“通告”かな？　本人達は唯「是」と返してきただけだ。というより、即答された。

フェイト曰く、僕達が何をどうするのか興味があるので、どう動いたところでノータッチらしい。

今のところ、僕には造物主を倒すつもりもない。あの人にも葛藤とかがあった事ははっきりしたんだし、どうせだったら見届けた方が得策かもしれない。そりゃあ、世界を壊すなんて静観するつもりは

無いけど。

ハクをけしかけるくらいしかできない自分が悲しいけどね。

もっとも、この場合の“倒す”というのは“完全に殺す”と言う意味だから、ハクに頼んで殺さないようにしているだけだ。

だから、ハクに死なない程度に嬲られる可能性が大きいんだよなぁ。でも、そこは勘弁してほしい。

ていうか、僕だって迷惑かけられたんだし、これくらいの罰は受けてほしいよ。色々大変だったんだから（ハクを抑える的な意味で）。

もっとも当の造物主は、せっかく僕等と言う“イレギュラー”（言われた時一瞬ドキッとしたけど……考えてみれば、フェイトと初めて会った時に自分がこの『世界』生まれではないような事を、さらっと言った様な気がする）が関わってきたのを機に、もう少し計画を煮詰めるつもりらしい。

造物主曰く、あの人は万事策が尽きて、強行手段しか残っていなかったから“世界の崩壊”という手段を選んだだけであって、僕達が接近してきた事で新たな選択肢が幾つか生まれたとのこと。

ならば、その選択を吟味・実行するのも悪くは無い……と言う結論に至ったそうだ。

正直、造物主が考えナシの暴走野郎でなくて本当にホッとしている。

まぁ一つの世界を壊して、何億人ものの命を亡くす（“救う”ともいうけど、要するに殺すってことだ）何て行動を取る前なのだし、

普通は慎重に他の手があるかどうか模索するだろうね。

話を戻すけど、フェイト達は『紅き翼』との戦いに乗るつもり満々のようだ。

いっそのことこのまま倒されれば、それを口実に表面上は死ぬ事が出来るからね。

勝ったら勝ったで万々歳だし、負けてもそれを隠れ蓑に出来る。つまり、どっちに転んでも『完全なる世界』（のほんの一握りの超強者）に損は無い。

ちなみに造物主は別名“始まりの魔法使い”といって、此の世界を造った主。そして、僕やハクから見ても次元の違う存在で、要は不死だそうだ。もっというと、造物主を殺せるのはハクだけ。

そしてフェイトも、何と“アーウェルンクス・シリーズ”という造物主印の量産型（“粗悪品”と言う意味ではない）戦力なので、不死ではないけどまた創造できるそうだ。

このシリーズ、今のところ本格稼働しているのは一番目（フェイト）だけで、残りは訓練とか調整とかにあっているらしい。

ていうか、フェイトもかなり強い部類に入ると思うんだけど、それが量産可能ってどんだけだよ。

……いや、我が従者に比べれば、そのチートレベルはずっと低いだろうけどさ。

まぁ、僕自身はフェイトとかなり打ち解けてきているんだし、彼には死んでほしくないのが本音だ。

「で、その代わりに……僕達二人の懸賞金を解除してほしいんですよ。コレで名声があがった貴方達なら、不可能ではないでしょう？」

「だったら、最初から貴方達が公開すればよいのでは？」

いつの間にか敬語口調になっている詠春さんが、ようやく安全だと思ったのかティーカップに手を伸ばした。

……流石剣士とはいえ名家出身。外国の茶葉だけど、飲み方は結構様になっているね。

おっと、こんなこと考えている場合じゃなかった。

「史上最高の賞金首とその主がいっても、信用されませんよ」

「ですが……貴方達は“不殺”――『奇妙な休暇（ストレンジ・ヴァカンス）』として、兵士たちからは感謝されています。

それに、今の我々だって賞金首ですよ？」

「……ふぅ、本音を言いますけどね、僕、英雄になんてなりたくないんですよ。ていうか、世界から称賛を浴びるなんて嫌です」

「……そういうことですか」

「体の良い押し付け役にされた気がするが……これだけのチャンスを前に、四の五の言っていられんな。
今回の取引、応じさせてもらおう」

納得した様子の詠春さんと、決断したようで頷くガトウさん。

よし、これで布石は整ったかな……。

やっぱり、こういう役目は疲れるよ。

口に出したら、多分ハクが「では過労の元を消してきましょう」とかいって飛び出していきそうだから、態度にも口にも出さないけどさ。

第拾参話　カレと計画進展（後書き）

榛名の『完全なる世界』への印象は大分変わっています。

今では怒りも結構収まっていて、世界崩壊を行わないのなら気の合う友人達と言う感じです。

なお、榛名と造物主、そしてフェイトは会う事はあまりありませんが、ちょくちょく（二、三日に一回くらい）連絡を取り合う関係。

造物主、個人的には結構好きなキャラです。

御意見御感想宜しくお願いします。

第拾肆話　カレとカノジョの戦争終結と世界構築（前書き）

三日連続投稿。

今回の内容。

フェイトよ永遠に。以上。

第拾肆話　カレとカノジョの戦争終結と世界構築

人生の中で、はっきりと“チェス盤の回転を悟る瞬間”っていうのは、実は結構ありふれているものだと思いませんか？

何も戦争とか、大統領選挙とか、政党交代とか大そうな話でなくてもいい。

サッカーの試合を観戦中に逆転されて絶叫した時とか、或いは友達と（ゲームとかで）対戦していて最後の最後でドジを踏んだりした時。

だから、それ程騒ぐ事でもないと思うが、それでも野次馬魂が疼くのが現代人。

ニュースも新聞も、『紅き翼』が公開した大スキャンダルで持ちきりだ。

勿論、いきなりマスコミにリークしたわけじゃあない。

二週間前に『紅き翼』や彼らの協力者が軍を動かし、会議やらプライベートやらで忙しい売国者共を一斉逮捕。

証拠は完璧だし、言い逃れも出来ない。全員仲良く監獄行きだ。勿論、それが本物であることの裏付けはばっちり取れている。

ハクの仕事ぶりは本当に見事だから、一ミクロンも反論の余地は無いはずだ。どうやって集めたかは知らないけどさ。

ヘラス帝国やアリアドネーはまだ良かった。帝国皇帝やアリアドネー総長はシロで、クロだったのは取り巻きや高官だけだ。
だから、混乱も事前に通告を受けていた皇帝他が先陣切って終息に動いた。

数少ない例外がメセンブリーナ連合。そしてウェスペルタティア王国。

連合の場合は、元老院そして次期元老院候補、挙句の果てには次期元老院候補まで大部分がクロと来た。
御蔭で一気に政府要職の大部分がすっからかんになるという異常事態。
その所為か、もう即席でも何でもいい程の“玉突き人事”が起こっている。

王国では、あろうことか国王以下要職全員がクロ（正確には国王が操られ、その国王に要職連中が操られていた）で、マトモなのが王女だけだった。
そのためアリカ女王（即位したので王女から女王）は王国に閉じこもりっきりで、対応に追われているらしい。

そして、速やかに終息に向かった帝国やアリアドネーだろうが、混乱が続いている連合や王国だろうが、軍や兵士たちの戦意はガタ落ちだ。

ちなみに現在の戦線は、連合の首都であるメガロメセンブリアの一歩手前。
つまり、帝国が大優勢。
やっぱりというべきか、首都の半壊の復興や麻帆良の土地を借りておくために、湯水の如く使った国庫が限界だったみたいだ。

さらに、連合防衛の要と言っていいグレードブリッジ要塞がハクによって吹き飛ばされたから、もう打つ手が無い。

聞いた話によると、連合はそれでも諦めず、焦土戦術を展開して帝国（と市民）を苦しめていたようだ。

しかし、自分達がそんな非人道的な作戦に手を染めたというのに、それが無意味である事が全世界にばらされたんだから、連合兵が虚脱状態に陥るのは当然のことだと思う。

でも、兵士たちにとって幸いなことに……彼らには、すぐに新たな敵が与えられた。

つまり、『完全なる世界』とそれにそそのかされた祖国（バカ）。

兵達や民衆の怒りがキラウェアも吃驚の大噴火をやらかす前に、反乱を怖れた国の高官たちは必死になって迅速な終結……つまり、罪人たちの迅速で、そして容赦の無い処罰を行った。

連合は、逮捕者達の衣食住を賄う資金すら惜しんだみたいだ。

どれだけ逼迫していたんだよ。

そんでもって、ほとんど“宣告”と変わらない、弁護人すら抜いた“裁判”の後、罪人たちは然るべき刑を受けた。

もっとも、大部分がケラベロスとかいう場所で処刑されたそうだけどね。

そして、最早形だけの“停戦”が宣言されて（とっくに現場の兵士は武器を置いていた）、各国は国を挙げての“悪者退治”に動き出した。

……そんな中、どさくさにまぎれて、“情報提供者”として僕とハクの懸賞金が解除されたんだけど、そんなことは話題にもならなかった。

「魔法世界を救う？
些事ですし、簡単な事です。単に、供給先を“魔法”から火星そのもの“エネルギィ”に替えれば良いのですから」

「……どういうこと？」

「私の力を使い、火星自身が創り出す“星の力”、“星の生命エネルギィ”とでも申しましょうか、それに替えれば良いのです。
レシプロエンジンが駄目なら、核融合炉にすれば良い。的確な喩えとは言えませんが、概ねそのような感じです」

魔法力が枯渇することを知った僕が聞くと、ハクはこんなふうに返してきた。

……マジですか？

「そんなことが、できるの？」

僕がそう言うと、ハクは「心外です」と言わんばかりに眉を少し動かした。

「失礼ながら、私を誰だと思っているのですか？　綺羅川（きらかわ）　ハク。
マスターのみに仕える、マスターだけの従者です。
マスターの願い、全てを叶える力を持ちます。
生命エナジィは、火星が存続している限りは無限にあります。あとはそれを魔力に変換し、魔法世界中を循環するよう配線を接続しなおせば良いのです。
何も魔法力が枯渇すると、火星自体も息絶えるわけではありません。
なお、その際には此の世界の魔力の質・量、住民、地理、何一つ変わらない事を保証いたします」

そう言った後、ハクは少し小声で続けた。

「……本当のことを言うのなら、私が常時此の世界に魔力を供給し続けるのが一番手っ取り早いのですが……私の魔力を吸い、蟲共とその巣が生き永らえるなど、生理的に嫌です。
私の力は、マスターだけに注がれるべきものですから」

……あぁ、納得。
そして、久方ぶりの長広舌。
いや、説明を求めたのは僕だから、文句は言わないけれども。

……やっぱりどこまでいってもハクはハクだ。理由がハクらしすぎる。

それを造物主（ライフメイカー）に伝えたところ、あっさりとＯＫをもらった。
その代わり、「それでもまだ不備が起こる可能性があるから、少しは魔法世界の事を気にかけてほしい」とは言われたけど。

アフターケアは大事だよね。

どうせ此処まで首を突っ込んだんだ。

痛いのとかは嫌だけど、此の世界で初めてできた知人のために（ハクは従者で家族だしね）、一肌脱ぐくらいのことは大丈夫だ。

……やるのはハクであって、僕じゃあないけどね……はぁ……。

「……マスター、どうなさったのですか？　不安の種は、私が消して差し上げますが」

「……あ、うん……ごめん、なんでもないよ」

まさか、今更自分とハクの力の差を嘆いていたなんて言えない。

ていうか、神様にそう頼んだのは僕だし。

「そうですか……御気になさる必要など、ありませんよ、マスター？」

……なぜわかるし……。あぁ、ハクは僕の考えている事を推測できるんだった。

「……そんじゃあま、行きましょうか」

僕の視線の先には、『完全なる世界』と対決する『紅き翼』の面々がいた。

『黄昏の姫巫女』ことアスナ姫。

王国の姫だけど、姫とは名ばかりの体の良い国家戦略兵器だ。

彼女には、“魔法無効化能力”がある。

造物主の当初の計画では、アスナ姫の“能力”を使って魔法世界を破滅（という名の新構築）に乗り出す予定だった。

そして『紅き翼』も世界の面々も、それを本当だと信じている。

だからこそ、連合兵も帝国兵も必死になって立ち向かっている。

多分この先、ずっと睨みあう関係だろうけど。今だけは共闘しているという感じだ。

ていうか、戦果を奪い合っているようにしか見えない。

ナギによりフェイトがやられ、息絶える直前……予定通り、ハクが乱入した。

「……まさか未だに、僕の事をラスボスだとおも――ぶぐちゅッ！？」

「消えろ、蟲」

……うん、トンデモなくグロい事になっている。
だって、文字通りの意味で“潰れている”んだし……フェイトに化けたハクの分身が。

ちなみに本物のフェイトは、僕の横でボロボロの状態で顔を青褪めさせている。

ついでにいうと、ナギと戦っていた時のフェイトは本物だ。
ナギが止めを刺す直前に、ハク（の分身が化けたフェイト）と入れ替わった……というのが種明かし。

分身体が可哀相だけど、ハクは「マスターの計画の礎となって死ぬのなら本望ですし、偽装するだけです。いかに分身体とはいえ、白髪蟲が死ぬような攻撃では、かすり傷一つつきません。幻術で見せかけるだけです」と言っていたから、心の中で御免なさいと言っておこう。

「……本物の僕だったとしても、彼女はああしていたのかな……」

「違うよ。……もっと酷いと思う。連行されて、三日三晩は嬲られたんじゃあないかな？」

「……つくづく、彼女は恐ろしいよ」

「フェイト、絶対にハクを怒らせないでね……」

僕ら二人がしっかりと握手をを交わしている間に、

「ぐぁあああああああああああああああああああああああああああああああッ！！！！！」

「雀蜂が……とっとと消えなさい。私には、マスターの御傍にいるという至上の役目があるのよ」

造物主がハクのサンドバックと化していた。ちなみにあの人は本物です。
作戦前に、ハクが「ようやく鉄槌を下せます」と言って指を鳴らしてた。
御愁傷様です。

ちなみに『紅き翼』の面々は、造物主の先制攻撃とハクの分身体によって、全員戦闘不能の状態になっている。ていうか、ズタボロで転がっている。
あ、吹き飛んだ。

ハクが造物主をぶん殴る度に余波が起きて、そのせいで枯れ葉の様に舞っている『英雄』……ファンが見たら泣く光景だよね。
結界で誰も見れないように、入れないようにしているけどさ。

「そして、僕も泣きそうなんだけど」

「フェイト……ハクを相手にする方法は唯一つ。土下座して自分の

首を切り落とすことくらいだよ」

「……土下座じゃあ駄目なのかい？」

「……前にハクに土下座した人がいるんだけど、その人、ハクに頭を踏み潰された」

「……打つ手なしじゃあないか」

「打つ手がある程、僕の従者は甘くないんだよ」

そう言って、二人揃ってため息をつく。

直後、フェイトが青褪め、ガタガタと震えだした。

そりゃあもう、ナギと殺し合った時の比じゃあないくらい死にそうな顔をしている。

「ど、どうしたの？」

そう言ってフェイトの視線の先を見てみると……。

造物主にパンチのラッシュを叩き込みながら、海王星の芯まで凍りつきそうな、無機質さを極限まで追求したような目でフェイトを睨みつける、返り血を浴びまくった戦闘服姿の我が従者がいた。

血に濡れた、というより血の滴（したた）る純白の長い前髪の間から、死神をも殺せそうな目が覗いている。

うん、超絶怖い。

何が怖いって、鮮血でシャワーを浴びているようなド凄い光景なのに、妙に色気があるというか、妖艶だ。

そのせいか、怖さが百倍増しだ。

「――――――――――――――――蟲　風　情が、舐めた真似を」

めちゃくちゃ離れているのに、ハクのやたらと低い声がこっちにまで届いてきた。

……フェイト、アウトー。

「……フェイト、頑張ってくれ」

「……その質問にイエスと答えられない自分が憎いよ」

そうこうしている内に、ハクが造物主にトドメの一撃を叩き込んだ。

「フ、フハハハハハハハハハハハハハハハハ！　我(ワレ)を倒すかにんげ――」

「黙れ、そして死ね」

「んぬぐぉおおおおおおおおおおおおおおおおお

おおおおおおおおおおおおッ！！！！」

「最後に――――私は人間ではありません。マスターの従者です」

造物主が死……いや、正確には（ハク曰く）百分の九九殺しの状態だけど、とにかく悲鳴を上げながら消え去った。

そして、瀕死の造物主はそのまま離脱。

フェイトが手を振りながら、上手い事口実を見つけてさっさと離脱。

そして僕は

「お疲れさま、ハク」

何時（いつ）の間にやら目の前にいた従者に、労いの言葉をかけたのだった。

汚れ一つない服を纏い、綺麗な白髪を風に揺らす長身美女は、そんな僕に微笑んでくれた。

第拾肆話　カレとカノジョの戦争終結と世界構築（後書き）

大戦編終結です。

章に分けることにします。

次回からは、暫く戦闘シーンは入らないと思います。

御意見御感想宜しくお願いします。

～おまけ～

ハク「……貴方、マスターに謝らせたわね。心の中とはいえ」

フェイト（に化けたハクの分身体）「へ？」

ハク「分身体如きが……生意気ね。マスターに心配をかけるような欠陥品は……」

フェイト「え？　ちょ、まっ」

――――――――――――――――――――――おしおき中――――――――――――――――――――――

ハク「さて、それでは本物の白髪蟲も殺そうかしら。マスターに近付き過ぎよ、汚らわしい」

翌日から二週間、フェイトの姿を見た者はいなかった……。

第拾伍話　カレと戦後報告と新たな問題（前書き）

今回は、大戦編の総まとめの様なもの。

この時点でかなり原作とかけ離れています。また、オリ設定を多数含みますので、御注意ください。

第拾伍話　カレと戦後報告と新たな問題

戦争が終わった後、記念祝典やら戦後処理があったらしいけど、そんなモノは無視してさっさと麻帆良に戻ってきた。それが、今から三カ月前の話。

そして再び続く、僕とハクだけの悠々自適なスローライフ。

うん、やっぱり最高だ。

……クラウゼヴィッツの『戦争論』を読みながら、そんな事を考える今日この頃。

あれからは、フェイトと造物主（ライフメイカー）さらには『紅き翼』の面々と（一部を除いて）別段何も無く、普通に挨拶もせずに帰ってきた。

だから、連中が今何処で何をしているかは知らない。

フェイトからの通信も来ない。

少し心配していたら、ハクが「連絡が取れる様な身体にしておけばよかったですね」と言ってきた。

……スルーしておいた。ゴメンよ、友人。

「“人類の自然の状態は戦争であって平和ではない”……カントの史的環境の中で生きた軍人、クラウゼヴィッツ……か」

何となく、ソファに寝転んで、口に出してみる。

それを、じっと見つめてくる我が従者。

クラウゼヴィッツの『戦争論』といえば、“戦争は政治の延長にしかすぎない”という言葉が有名だ。

勿論、彼が魔法世界での戦闘なんて考慮しているはずも無いんだけれども、今思うと、やっぱり旧世界だろうが魔法世界だろうが、戦争なんて同じようなモノだと思えてくる。

世界崩壊を最終目的とした戦争なんだから、レアケースと思われがちかもしれないけれど、もっとミクロな……国家の崩壊とかを目的とした戦争なら、別段珍しくは無い。

何時(いつ)だって、敗戦国が消滅するのは世界の常識だったりする。

もっとも近代の場合は、“精神的に”消滅するのだから尚性質(タチ)が悪い。

近代的、文明的の皮を被っていて、一見人道的に見えるんだからね。

今回の戦争……巷では“大戦”と呼称されるモノだけど、それも同じだ。

連合と帝国の仲は、今後さらに酷くなるだろう。

第三者から見れば、何れの国も掌で踊らされていただけの莫迦揃い。

だからと言って、恨み怒りが消えるわけじゃあない。

『完全なる世界(コズモエンテレケイア)』が、その怨みを一身に引き受けたわけでもない。

現に、失墜した連合の地位は下手すれば永遠に戻らない。

帝国はまだ良い。連合首都メガロメセンブリアの喉元まで攻め込んだし、最前線が連合寄りだったから、帝都ヘラスを含む都市部の大半が無事だ。

此れはハクから聞いた話なんだけど、寧ろ戦争特需で好景気になっているらしい。

おまけに賢明と言うかなんというか、帝国皇帝は早々に軍縮を宣言し、公共事業費・復興費用や何やらに予算を振り撒けた。

簡単に言うと、軍備に大鉈（おおなた）を振るった。

御蔭で帝国は、早くも復興の兆しを見せている。

何しろ、帝国領土は戦前から変化なしで、戦火に焼かれたのは国境線近くのみ。つまり、帝国勝利・快進撃が大フィーバーする前に、連合が帝国に少し攻め入った時だけだ。

一応、帝国も連合を無視していた……つまり仮想敵国から除外していたわけじゃあない（ていうか、帝国に対抗できる国が連合くらいしかない）ので、国境付近にはそれ程民間人も住んでいなかったみたいだし、疎開プログラムもあった。

寧ろ、連合の領土を獲得した方がエライ事になっていただろう。何しろ戦火で焼け野原や廃墟になった連合領土は、大抵が帝国占領地だったのだから。占領地が新たな領土になるのが、世界の常識。

復興費用を捻り出すのは、いくらなんでも不可能だろうし、旧連合市民が帝国の支配を容認するとも思えない。

そんなこんなで帝国は順調。順風満帆。

寧ろ、疲弊した近隣諸国に資金を貸す余裕すらあったみたいだ。

ぶっちゃけると、帝国の“一人勝ち”状態だ。この景気が、何処まで続くかは知らないけどね。

王国も、浮遊島にあるという地理的利点の御陰で、荒廃はほとんどしていない。内政的にはえらいこっちゃなんだけど。でも、少なくとも死傷者自体はかなり少ないと聞いている。

ちなみにこういった情報は全部ハク経由だから、信憑性は折り紙つきだ。

問題は連合。裏から手を引かれていたとはいえ、最初に帝国に攻め込んだ――つまり喧嘩を吹っ掛けたのは連合だ。

自分達から仕掛けておきながら、首都の鼻先まで奪われて（もう返還されたけど）、帝国の攻撃以上に自分達が行った焦土作戦の被害を受けた領土の復興に金をつぎ込まなければならなくなった。

さらに一方的な負け戦だったのだから、賠償金も得られないし新領土も無い。

要は、単に人命と金を失い、廃墟と化した街や焼け野原を得ただけの戦いとなったわけ。

ついでに、元老院の権威もプライドも地に落ちた。

……うん、悲惨すぎる。

それに、元々金が無くて難儀していたんだから、復興費用もおいそれと出せるわけがない。
だからと言って、このままでは戦火を浴びた都市諸々の連合離脱、中立化、帝国に接近もあり得る。
ていうか、普通に考えればそうなる。

勝手に戦争に巻き込まれ、連合兵士に焦土作戦まで展開され、復興費用は出しませんなんて言われたら普通はキレる。

そうなれば、余裕がある帝国に、金と人員、資材などを借りる可能性が大きい。

それは、帝国の“紐付き”になることを意味している。

帝国もお人好しじゃあないから、無条件で大金を貸すような真似はしないと思う。たぶん、貿易や通商での優遇とか、色々と条件を付けるんだろうなぁ。

そうなれば、連合側にすれば、これらの都市の手綱を取られたも同然――植民地化されるのと大差ない。

勿論、それは新生元老院（下から上に異動しただけなんだけどね）にとっては始動早々大きな汚点となる。

ざっくばらんにいうと、連合には負担を覚悟でこれらの都市を援助するか、斬り捨てて帝国に差し出すかの二択しかない。

前者を選べばプライドを守れる代わりに、貴重な資金資材諸々がさらに消える。後者を選べば資金を手元に残せるが、代わりにプライドを失う。

そしてハクが言うには……連合は、絶対に後者を選ばない。

何故って、そんな事をすれば、民衆の不信感はますます高まり、下手すれば改革、ていうか革命が起こる。

――今の連合は巨大すぎる。もう少しコンパクトになるべきだ。

――或いは、こうした国難においては、強力な中央集権国家である、帝国の様なシステムの方が向いているのではないか？

――自治権が与えられている都市や国家は、ここまでして連合（正確にはメガロメセンブリア）に巻き込まれてやる義理も無いのではないか？

――寧ろ、小規模な都市・国家連合体が幾つも出来た方が、より運営しやすくなるのではないか？

そんな意見が生まれてくる可能性もあると思う。

元はと言えば、亜人（帝国）の脅威（あくまで人類側の主観で）に人類が一致団結するために誕生したのが連合だ。

しかし、連合に加盟していない人類独立都市や小国家は幾つも存在する。これは、連合にいなくとも人類は魔法世界で暮らせることの証明にもなる。

そして、今や連合でも、帝国に国力的な意味で対抗できない。

つまり――連合に加盟していることで生まれるメリットは、今やほとんど無くなり、デメリットのみが残った……ということになる。つまり、相互協力の関係である以上、疲弊した中央（メガロメセンブリア）や戦火に焼かれた都市の援助をせざるを得なくなっている。しかも、中央が勝手に始めた（しかも乗せられた）戦争によって。

はた迷惑もいいところだ。

いっそ帝国につくか、独立する方が良い……正解かどうかは知らないけど、そう考える者が出てもおかしくないんだよね。僕個人の意見としては、さ。

いや、最早意見とかのレヴェルでもないみたいで……ハク曰く、連合の分裂はかなり現実味を帯びているらしいんだよ。

巷では、“大分烈戦争の結果連合が分裂する”という笑えないジョークまで流行っているみたい。

とはいえ、表向きには“正義”を掲げているのがメガロメセンブリア。

“独立”とは、まさに正義の代名詞だ。少なくとも、世間ではそう認知される事が多い。

つまり、それを止める手段を連合（元老院）は持たない。

独立運動を軍を出して止めれば、国中から総スカンを受けることになるのは必至だし、近隣諸国も独立を支援するか、或いは静観するかの選択肢しかない。

そこまで考えて、僕は首を振る。

――止めよう、首を突っ込むようなことじゃあない。

そう、これは関係ない事――だったんだよなぁ。

きっかけは、いつも通りと言うべきか何と言うべきか、ハクからの報告だった。

「連合から、麻帆良使用料についての交渉を求めるとの報告があります」

というもの。

つまり、こうだ。

「復興に使う金も捻り出せないのに、麻帆良の土地賃貸料などとても払えないから、値下げするか、若しくは徴収を一時期保留にしてほしい」という。

うん、予感はしてたんだけれど、やっぱりそう来るか。

でも、こっちとしては少なくとも値下げ交渉は却下。

一度承認すると、済(な)し崩し的にさらなる値下げ交渉をさせられるかもしれない。

そもそも、払いたくなければ麻帆良から引き揚げればいいだけの話だ。

……実現性は低いだろうが、例えば日本のもう一つの魔術組織――“関西呪術協会”に管轄を移行させれば良い。

明治維新のどさくさに紛れて日本に踏み込んで来た“余所者”の麻帆良と違い、呪術協会はニ千年近く前から日本を護ってきた、陰陽師や神官らの末裔によって組織されているんだよね。

よって、日本政府からの支援も受けているし、大戦にも中立（不介入）を貫いていたから、資金・人材ともに兎に角潤沢。戦力も有り余っている。

何より、勢力範囲が違いすぎる。

麻帆良だけを管轄としている関東魔法協会と違い、関西呪術協会は西日本全域を管轄としている。加えて、配下には無いものの東北・北海道などの魔術組織とも繋がりがあり、アラスカやペルーなどの旧世界中の魔術組織とも相互扶助・同盟関係にある。

他にも忍(しのび)の組織とも深い縁があるし、何より日本国の祭(まつりごと)を司る皇室――そして神道(しんとう)の各流派（神社）との繋がりも深い。

にも拘らず、今まで麻帆良（というより“関東魔法協会”）がデカイ顔が出来たのは、連合と言う“超大国”のバックがあったからと

いうだけの事だ。
そのバックが悲鳴を上げている今、東西のパワーバランスはエライ事になっている。

……この情報も全部ハク経由、或いは呪術協会に属している詠春さんからの情報だけどさ。

ちなみに、呪術協会とはすでに協定を結んでいて、もし東西で戦争が起こっても、結界で守られている以外の土地（つまり学園都市）だけ攻撃する事が決められている。
結界で護られているけど、何度も攻撃されると（ハクが）キレる。
さらに、民間人に手を出さない事も、だ。

その代わり、僕（とハク）は呪術協会に手を出さず、学園都市がどうなろうと静観する。
流石に、大勢の学生が巻き込まれて命を落とすのは忍びないからね。

まぁ、学生を護る義務はあくまで麻帆良教師の義務だし、こっちもいちいち出しゃばらない。

ちなみに詠春さんやガトウさんとは、あの交渉以来仲良くなって、前に一緒に飲んだ事もある。
とはいっても、僕は缶一本位が限界だから、唯の雑談会と言ってもいいかもしれないけど。

え？　ハク？
ずっと僕の後ろにいて、詠春さん達に冷めた視線を送っていたけれど。

御蔭であの二人、全然酔えなくて最後まで素面（シラフ）だったよ。

ちなみに、僕は煙草も吸うけど、これも精々一月に一箱（２０本程度）くらい。

ガトウさんが吸ってたやつは、ちょっとキツすぎた。

そろそろ話を戻すけど、とにかく、連合からの値下げ交渉は却下だ。

だからといって、保留も無しだ。

何というか、そのまま踏み倒されそうな気がしてならない。

それに、こういうのもなんだけど、本気で国庫がヤバイのなら、独立したがる都市や小国を手放すなり、軍縮をするなり、旧世界の連合傘下魔法組織を引き揚げさせるなり色々とやりようはあるはずだ。

簡単にできるとは思わないけど、不可能でもないとも思う。

「……ハク、拒否しといて」

「交渉自体を、ですね？　畏まりました」

ハクが優雅に一礼するのを見て、僕はこれからまた連合と揉めるような気がして、大きなため息をついた。

はぁ、何か疲れてきたなぁ。

その所為で……。

そんな僕の姿を、従者がじっと眺めていた事に気付かなかった。

第拾伍話　カレと戦後報告と新たな問題（後書き）

これからネギ襲来（予定）まで、少し長くなる予定です。

ちなみに『戦争論』が出てきたのは、昨日大学図書館で借りたから。

あと『車輪の下』も借りました。

御意見御感想宜しくお願いします。

お気に入り登録数2，０００越え！　再び絶叫しました。

大感激です。有難うございます。

第拾陸話　カレとカノジョの学園都市探検（前書き）

麻帆良学園都市へと繰り出し回。

次話に続きます。

第拾陸話　カレとカノジョの学園都市探検

大戦終結から半年余り。

律儀にも、ハクは、麻帆良とか魔法世界とかの実情を、毎日教えてくれた。

一体、我が従者の情報収集能力はどうなっているんだろう。

聞くとトンデモない答えが返ってきそうだから、聞かないけどさ。

何にしても、相変わらず、（ハク曰く）太陽が吶喊（トッカン）してきても罅（ヒビ）一つはいらない結界に囲まれた麻帆良（ここ）には、来客も何も来なくて――連合からの要請あれこれは来るけど、全無視している――とてつもなく平和だ。

うん、平和だ。

ちなみに最近では、学園都市の方を“麻帆良”と呼び、僕の土地（学園都市）以外の自然地域を“外麻帆良（そと）”と呼ぶ連中が増えているらしい。

まぁ、表記とか色々とややこしいからね。

「……ん～」

「いかがなさいましたか？　マスター」

昼食を食べた後、ソファで本を読みながら唸っていると、一秒以内で食器洗いを終えたハクが近付いてきた。

ちなみに、我が家の家事から食材確保など、基本的に“生産的行為”のほぼ全てを独占しているハクは、けっこう多忙――――でもない。

何故って、それらの行為に費やす時間が、物凄く短いんだよ。掃除、炊事、洗濯ｅｔｃｅｔｃ……。全部の所要時間を足しても、五から一〇分かかるかどうかくらい。

で、それ以外の時間は……ずっと僕の傍にいる。文字通りの意味で。背後に控えているとか、真正面から覗き込んでくるとか、触れてくるとか、抱きついてくるとか……色々あるけど、兎に角僕の傍にいる。

そしていつものように、真正面から零距離で覗き込んでくる、我が従者。

表情を（比較的）変えるようになっても、積極的に言葉話吐き出すようになっても、この所作はずっと変わらない。いつも通りの無表情。何も感じ取れない、黒い瞳。

「なぁ、ハク……提案があるんだけどさ」

「何なりと」

「……学園都市、見に行かない？」

僕の提案に、ハクは小さく首を傾げた。

実は僕、連合に貸してから、学園都市となった麻帆良に行った事は一度も無い。

しかし、もう八〇年代ど真ん中。

いい加減、僕の以前住んでいた村のような……いや、八〇年代の大都市と言った雰囲気になって来ていると思う。

まぁ、ぶっちゃけていうと、前世でもそうそう滅多に行けなかった都会（の様な学園都市）が、すぐ横にあるのだから……見に行きたい。

それに最近、平和になってきたからか、前世での学生ライフが懐かしくなってきたんだよ。

勿論、生徒になるとかじゃあない。ちょっとふらつくだけだ。

平日なら問題だろうけど、幸いにして本日は日曜日。

学園“都市”というからには、学校施設だけでなく、生徒の生活をサポートする施設……スーパーとか、或いは娯楽施設とかもあるだろう。

単に興味があるだけなんだけどね。

「わかりました。但し、認識障害の結界を、マスターと私の周囲に

展開させていただきます。
マスターは、蠅共に纏わりつかれる可能性をお持ちである事をお忘れなく」

ハクは頷いたけど、しっかりと釘を刺してきた。

勿論、納得する他はない。

麻帆良（ていうか関東魔法協会）は、連合の配下組織……でも、その麻帆良が、“元・犯罪者”である僕の土地を借りて成り立っている事を、快く思っていない連中がいることは、僕もハクから聞いていた。

……僕とハクが、具体的にどういう罪をやらかしたのか、まったく聞いていないくせに。

……武力で人様の土地奪うって、そっちも犯罪じゃん。しかも契約破棄。
おまけに今の僕らの賞金（＋手配）は解除されているから、唯の民間人に危害を加えるのと同じ事だし。

あとは、プライドの問題もある。

仮にも大組織が、所有する土地が借り物だなんて格好がつかない。

だからと言って、僕にしても、せっかくの土地を丸々奪われるなんて面白くない。
ハクが用意してくれたものだし、現状でも麻帆良学園都市は上手く機能している。

別段、一般人に苦労をかけているわけではない。
要は、連中に僕らを討てる正当な理由などないんだよ。

「わかっているよ。……ハクこそ、むやみやたらに麻帆良関係者を攻撃しないでくれよ？
そんなことしたら、連中に大義名分を与えてしまう」

「マスター、そうは仰いますが……大義名分が向こうにあることに、何の意味があるのです？
私にとっては、マスターに逆らうモノは害蟲。マスターが正義。それだけです」

……この従者、その内新興宗教でも開きそうだなぁ。

「まさか。マスターを崇拝し、マスターの御許しを請うのは私だけです。有蟲無蟲共が、マスターの足元に跪くことすら……下手すれば、マスターの害悪になるでしょう。
分不相応にも逆らうような腐った蟲よりかは、余程良いですが」

そこまで言って、ハクは小さく微笑した。

「それに、マスターは、そんなことなど望んでいないでしょう？
ならば、私はしません。私は、マスターが御喜びになる事だけをす

るのです」

……最近本格的に、この従者に心を読まれるようになった気がする。

……まぁ、いいか。

口に出す手間が無くなっただけだし。

元々ハクは鋭いから、僕の考えなんてお見通しだろうしね。

「……へぇ、結構発展しているもんだ」

目の前には、先進国の都心部となんら変わらない街並、さらには異国情緒溢れる欧州風の街並みもあった。

「麻帆良学園都市は、麻帆良全土の三分の一程度の広さ――それでも世界有数の学園都市ではありますが――です。数少ない予算も、面積そのものがこの程度では……上手くやりくりできたのだろう、と思われます」

へぇ、皮肉なモノだ。

学園都市の面積を限定したのも僕。その使用料で連合の国庫に影響

を与えているのも僕。いや、全部ハクの提案なんだけれども、名目上は僕ということになっている。

多分当初の予定では、麻帆良そのものを大規模な学園都市にでもする予定だったんだろう。

ところがどっこい、先人がいたため、止むを得ず三分の一程度のサイズに留まった。

でもそのおかげで、限られた予算が学園都市全土に余すことなく広がる事になった。

麻帆良学園都市は、自己完結型都市――――というわけではない。

予算があろうが、（ある意味では）日本国の法の適用外だろうが、学園都市は何処まで行っても学園都市だ。

あくまで、メインは教育・研究機関とその設備。何も麻帆良内で、住民全ての食料を生産しているわけでもない。

そりゃあ、農学関係の学生さんや教師が耕作くらいやっているかもしれないけど、所詮は実習や研究用。品種改良くらいしかできないだろうし、途方も無い数の住民の腹を満たすことなど、夢のまた夢。

結局は、此の国の諸都市と同じように、中央政府や県から支援を受け、交易しないと、研究どころか生命線（ライフライン）の確保すらできない。

唯、麻帆良には、連合という日本国とは一味も二味も違った国家がバックにあるだけ。それだけの違いだ。

でも、バックにしても予算は限られているし、連合が優先すべきは

（普通に考えたら）魔法世界（連合本国）だ。それに、連合傘下の旧世界魔法組織は、何も麻帆良だけじゃあない。

おまけに唯今、連合は絶賛国家崩壊の危機を迎えている。そりゃあもう、解体直前の某雪降る赤色国家みたいな有様だ。

こんな状態でまだ旧世界に固執する元老院（バカ）がいるとしたら、そいつは余程のとんまか、旧世界征服を野望に持つ魔王的なヤツだけだろう。

でも、麻帆良はまだもっている。

どうなることやら。

まぁ、麻帆良が崩壊しても、それは“裏”での話。“表”からすれば、一部の教員・生徒・警備員の集団異動（辞職）が騒がれる程度だろうね。

あとは此の国か、関西呪術協会の庇護下に入るか……そんなところだろう。呪術師にとっても、世界樹は魅力溢れる存在らしいし。

ちなみに、今の僕は普通に大学生が着そうな服……皮ジャンにジーパン。ハクは、いつも通りの黒と白のメイド服。

流石は麻帆良。一般人用の対策として、常時認識障害が発動しているだけの事はある。

メイド服で街中を闊歩する――というよりかは、さり気無く僕の後ろをついてきているハクに、見向きもしない。

……あくまで、“メイド服に関しては”の話だけどね。

顔もすっごく美人で、スタイルも抜群な長身美女なんだから、性別問わずに見つめられてはいる。でも、当のハクは顔色どころか視線すら変化なし。

……つまり、ずっと僕を見ている。

でも、思ったより街中（所謂“娯楽街”）を歩いている人は少ない。休日だけど、私服の少年少女達が思い思いに満喫しているだけだ。

まぁ、大勢の人間にハクが注視されるよりかはずっといいけどね。ハクが注目を浴びるという事は、そのハクが影のように寄り添っている僕にも、色々と注目が集まるということだ。たまったものじゃない。

……そんな事を考えていると、後ろから、小声で何かが聞こえてきた。

「……まさか、此の私が、マスターを蟲共の見世物にするとでも御思いですか？　マスター。

抜かりはありません。一般人や魔法関係者に対する認識障害に加え、認知障害の結界も展開しております。

一時（いっとき）は不愉快な視線を浴びることになるでしょうが、蟲共も我々が視界から消えた数秒後には、私達の存在が頭から消えます。

よって噂になる事も、話のネタにされることも御座いません」

たぶん、僕がそわそわしている事に気付いていたのだろう。

「え？　だったら何で、最初から目にもとまる事が無いくらいの認識障害をかけないんだ？　ハクなら出来るだろうに」

僕もまた、小声で聞き返す。

多分、ハクは僕の質問も予期していたんだろう。即答してくれた。

「無論可能ですし、御命令ならば実行しますが、それなら店に入って、レジに行っても無視されますよ。蟲全てに認知されないのも、マスターが望むことではないでしょう」

成程。確かに、すれ違う人はおろか、店員にまで無視されるのはキツイ。せっかく学園都市までやってきたのに、そんな幽霊みたいな扱いをされたくはない。

僕は小さく頷くと、娯楽街の奥の方へと向かった。

影のように寄り添う、従者を引き攣れて。

妖しげに周囲を睨みつける、美女メイドを引き攣れて。

第拾陸話　カレとカノジョの学園都市探検（後書き）

原作より大幅スケールダウンした麻帆良。

でも、連合が逼迫している今では、そっちの方が都合が良かったりしています。

本作における麻帆良は、大部分をを自然地域（榛名達以外は入れない土地）が占めており、麻帆良学園都市自体の面積は小さめです。

表向きは「自然と共生した次世代型学園都市（笑）」。

ちなみに麻帆良魔法関係者では、真の支配者とも言える榛名達の事は有名。但し、連合首都を半壊させた事とか、連合に不利な事は一切知りません。

真実を知るのは学園長と……タカミチくらいでしょうか。

そのため麻帆良の大部分の魔法関係者にとっては、榛名達は唯の“不法占拠者（笑）”という設定。

御意見御感想宜しくお願いします。

～おまけ　ハク語辞典～

・うちゅうむちゅう［有蟲無蟲］？名？

マスター（とハク自身）以外の全ての存在。蟲。いてもいなくてもいい存在。ていうか、今すぐ消してしまいたい存在を指す。

第拾漆話　カノジョとカレと学園都市勢（前書き）

今回、初めて本編で第三者視点を使いました。途中からです。
前半はハク視点です。

どうでしょうか？

第拾漆話　カノジョとカレと学園都市勢

蟲籠（むしかご）の中というのも、たまには悪くないものです。

マスターが喜ぶのなら、ですけど。

マスターも人間です。下らぬ俗世から、完全に離れるのは困難でしょう。

それに私は、マスターを束縛したくはありません。マスターが俗世を望むのなら、近付く蟲にだけ警戒していればよいだけのことです。

それに、万が一にもマスターが汚れても、私が綺麗にして差し上げれば済む話です。

……ですが、それと蟲について寛容になれるかは、話は別です。

マスターが望む以上、無関係な一般市民に手を出す事は極力抑えますが、“裏”のことを知っている蟲となると、容赦する理由がありません。そもそもしたくもありません。

流石にマスターの御前で殺すような真似はしませんが、死よりも辛い目には遭っていただきます。

蟲に相応しい、苦痛と絶望を。

……私は、学園（ここ）都市が嫌いです。

腐った空気を感じます。

マスターを忌み嫌う、汚らわしい蟲共の空気、そして臭いです。

跪かせる気すら起きない、消したくて堪らなくなる蟲共の巣窟。……連中がいなくなれば、あとは無関係な一般人が残るのみとなり、大分マスターに良い環境となるでしょう。

しかし、現実にはこうです。

此処の“正義”を掲げる連中が、マスターの事をどう思っているかなど知っています。
バレないようにしていますが、不服と言えば不服です。

なぜ、マスターが、マスターを狙う蟲共に、気を遣わなければならないのでしょう。

なぜ、マスターが、マスターを狙う蟲共から、身を隠さなければならないのでしょう。

此の土地はマスターのものです。自分の土地を闊歩するのに、何故イチイチ身を隠さねばならないのか……一般人がいるから、ではありません。
一般的世間の中では、私もマスターも無名。
そこらを歩いている青年Aと従者Bです。

確かにメイド服は珍しいかもしれませんが、異国の者も珍しくない此の学園都市では、目立ちはしますが不自然ではありません。

……小生意気な事に、蟲共は一時期マスター（と私）を手配しました。
ですが、其れはとっくに解除され、同時に罪も消えています。

いえ、元から無かったと言った方が正確でしょうが。

にも拘らず、マスターを敵視する蟲の多い事ときたら、もう呆れしか出て来ません。

おまけに、マスターが此の土地を保有しているのは合法です。明治時代から保有し続けていますし、手続きも手順も万全です。当然、此の国の法律と照らし合わせても、文句を言われる筋もありません。貸す以上は賃金を要請するのも、色々と条件を付けるのもごくごく当たり前のことです。

私も、わざわざ蟲の巣をつくるために、此の地を手に入れたわけではありません。無償で蟲に、譲るわけが無いでしょう。

大体其処まで、マスターの土地で暮らしたくないのなら、さっさと出て行ってほしいものです。若しくは、合法的に金を積んで購入すればいい事です。
所有者が気に喰わないから、土地を奪おうとするとは……どこまでも短慮で低脳。
所詮は蟲です。

正義だ何だと喚く前に、自分達が強盗扱いされている事にも気付かない。

マスターの御前に出すには、あまりにも下等すぎる存在です。

おや、あれは……。

マスターと一緒に本屋に入っていた私は、ふと窓から外を見ました。

此の本屋は、車が通行できる程の大通りに面しているのですが、其処から黒塗りの車が数台、道路を走っていました。

普通、学園都市内とは黒塗りの車が列を組んで走っていれば注目を浴びそうですが、流石認識障害が、鬱陶しい程緻密に展開されている麻帆良学園都市と言うべきか、気にもとめられていませんが――。

「マスター、御取り込み中のところで申し訳ありませんが、あの車の列を御覧ください」

「うん？……なんだアレ、首相でも来ているのか？」

雑誌から顔を挙げ、マスターは首を捻ります。

「全車防弾仕様、おまけに魔力障壁も張られております」

「……つまり、魔法関係者ってこと？」

「おそらくは」

呆けた様にアレらを見つめるマスターに、私は思わず微笑みそうになってしまいましたが、何とか堪えました。

……暫くして、マスターはお気付きになられたのか、私の方を見ます。

「……なぁ、ハク。僕の記憶が正しければ、の話だけどさ……先刻の車が向かっていった方角って……」

「はい、マスターだけの土地、此処の蟲共が“外麻帆良”と呼んでいる場所への方角ですね。
校舎や研究施設とは、真反対の方向です」

「……どう思う？　ハク」

「視察とかではないと思われます。それにしては穏やかではありませんし、乗り込んでいた蟲共の雰囲気が、完全に“出師（すいし）”のそれでした。
此方に攻撃を仕掛ける腹かもしれません」

「向こうに、其れが可能な戦力なんてあるのか？」

「まさか。乗り込んでいるのは、全車合わせて三〇匹が精々でしょう。大した実力者もいませんでした。
……それにしても、軽装ですね」

「へ？　軽装？」

「ええ。マスターも御存知の通り、麻帆良と――もう此の際、外麻帆良と呼びますが――外麻帆良との間には、蟲共では到底打破不可能な結界が張られています。

如何（いか）な低脳な蟲でも、それくらいは知っているはずです。
にも拘らず、連中は重装（重魔法装備）ではありませんでした。大火力のものも持たず、個人携帯用のモノのみです。数個軍団の攻撃でも罅一つ入らない結界相手には、あまりにも役不足です」

私が説明すると、マスターは「成程」と頷きました。

「つまり、無謀ってことか」

「馬鹿ともいえます」

「或いは、本当に知らないのか……超がつく程の自信家か」

「如何致しましょう？」

私が聞くと、マスターは少し考え込むような仕種をしました。

「ハク、今の時間は？」

「はい、マスター。午後四時一九分三八秒です」

「……どの道、夕飯は家で食べるつもりだったし、あらかた買いたいものも買ったし……そろそろ、良いかな」

「畏まりました」

私はマスターに、深々と一礼するのでした。

御任せください、マスター。

全ては、マスターのために。

マスターのためだけに。

「くそっ……」

世界に平和と秩序の構築を目指し、誇り高き“正義の魔法使い”を自称する彼らは、正義を司る者が使うには、あまり上品とはいえない仕種で舌を打った。

学園の最高責任者である学園長に悟られぬよう、わざわざ車と言う旧世界的移動手段を用いてまで、彼らは麻帆良を分断する結界前にやってきた。

その目的は単純だった。

麻帆良の支配者とも言える男――綺羅川（きらかわ）　榛名（はるな）の排除である。

麻帆良学園都市の土地は、余すことなく借り物であった。
世界樹を含め、此の土地は魔法組織が居を構えるにはうってつけの土地である。
其処に、メセンブリーナ連合は目を付けた。

が、思いがけない事が起きた。

麻帆良と呼ばれている地域一体、世界樹や近隣の山地、川、湖沼に至るまで、全てが私有地になっていたのだ。

その事に後から気付いた連合は、地団駄を踏んで悔しがった。

当時は、大日本帝国も土地整理・地域整備に明け暮れていたが、まだまだ介入の余地はあった。
さらに、時の政府（明治政府）も盤石の地位にあるとはいえなかった。これまで長州藩や薩摩藩のみを支配していた彼らに、いきなり列島全土を支配するには無理があったのである。明治大帝の傘があろうとも、だ。

近代化も、万事上手くいったわけではない。江戸時代のシステムより、土地の私有システムは大分変わった。藩も消滅し、県が設置された。混乱するのも当然だろう。

しかし、私有地となった以上は、いくら明治政府相手に交渉しても意味が無い。

しかも、土地所有者の名前などははっきりしているものの、結界が

敷かれ、土地には入れない。

結局のところ、“土地”とは人類共通の資本などではなく――“早い者勝ち”なのだ。先に領有を宣言し、然るべき手続きを取ってしまえば、第三者が介入することは難しくなる。

手っ取り早いのが、武力による侵入だ。

アメリカがスペイン領フィリピンなどを戦争で奪った時と同じように、“勝者”にさえなれば、どんな我儘でも通る。

しかも連合は、その侵略行為を“善意”としている。

――――――――――――――――田舎風情の連中が、連合に土地を接収されるという栄誉を与れるのだ。寧ろ、望んで自ら差し出すべきだろう……と。

彼ら麻帆良勢も、その思想の持ち主だった。

しかし、椅子取りゲームに勝利した綺羅川　榛名は、図々しくも、麻帆良の土地を貸す際、莫大な金を要請した。

それは、日本や旧世界の常識からすれば、ごくごく自然な行為だ。

が、麻帆良勢や連合の考えは違った。

――――――――――――――――麻帆良は連合傘下、関東魔法協会のものとなるのだから、日本の法など知るか！

そう言わんばかりの態度だった。

正義を護る我らの足元を見て、荒稼ぎをしている……視野の狭い連中の榛名像は、このようなものだったのだ。

しかも、彼は交渉に訪れた使者を殺害している。

いくら戦争終結に貢献した（らしい）としても、犯罪者の手配が解除されるなど間違っている。法で裁かない限り、犯罪者は何処まで行っても犯罪者だ。

しかし、彼らの意見は正しくもあったが――それ以上に、間違っていた。

彼らが心酔している“正義”と“法”という前提自体が、間違っていたのである。

そして、彼らはもう一つ、致命的な間違いをしていた。

つまり、相手の力量を――。

「……困ったのう」

麻帆良学園女子中等部にある、学園長室。

そこに、人間離れした風体の老人が、腰を下して頭を抱えていた。

近衛（このえ）　近右衛門（このえもん）。麻帆良の表向き最高権力者、すなわち学園長である。

先刻、彼の元に情報が入った。

魔法世界から派遣されてきた新人教師ら三〇人が、四肢切断、全身の骨が折られ、神経が切られ、脳と心臓と肺を除く全ての器官が潰され、両目と両耳と鼻を無くし、さらに顔中を余すことなく殴打されて、極めつけに、木に一人一人“大きな杭”で縫いつけられた状態で、発見された。

場所は、麻帆良と外麻帆良の境界線。

さらに現場には、彼ら全員が助けられるだけの肉体損傷限定の治療薬が置かれていた。

そして、彼らが麻帆良の“主”を襲撃しようと計画を練っている映像や資料、移動ルートなどのデータもまた、御丁寧に電子データ化されて、麻帆良のメインコンピュータに送られてきた。

そして、賠償として、本年度の賃貸料を三パーセント増額するとの記載、いや“命令”が、同じく電子データとして添付されていた。

応じなければどうなるかは、嫌でもわかる。

例の三〇人は肉体的には死ななかったが、寧ろ完璧に五体満足で治療されたのだが、精神的には完全に壊れていた。

最早解雇し、本国の精神病院に送り込む他、選択肢はない。

相手側に文句を言うわけにもいかない。此方側の一部が暴走した事は、証拠として送られてきている。それは、学園長から見ても、水滴一粒程の抜け目も無いものだった。

そして此れは、「同様のデータを何時でも連合元老院や魔法世界各国・旧世界各国首脳部、果てはマスコミにまでリークできる」という“脅し”でもある。

もし、唯でさえ多い賃貸料が、此方の暴走で上乗せされたとあれば、麻帆良首脳部が責任を追及されるのは勿論、暴走した部下も抑えられない麻帆良とその上層部である連合が、満天下に恥を曝すこととなる。

いや、それ以前に、物理的に制裁されるだろう。

一部では、『紅き翼』すら鎧袖一触（がいしゅういっしょく）にしたという信じ難い噂すら囁かれている、あの『絶望の白（ケール・ヘーメラ）』によって。

麻帆良は壊滅する。少なくとも、“裏”に携（たずさ）わる者は、一人残らず皆殺しだ。

彼女には、其れが可能なのだ。

こんな事が、何度も起こされては堪らない。

「やはり、このままでは……いかんのぅ」

学園長は、小さく呟いた。

第拾漆話　カノジョとカレと学園都市勢（後書き）

本作は基本的に榛名視点かハク視点。
たまに第三者視点か、榛名・ハク以外の一人称視点で構成していくつもりです。

『狐と兄』シリーズでは、なんだかんだで第三者視点が増えてしまい、その反省も兼ねています。

第三者視点は止めてほしいとか、そういう要望があったらお願いします。

御意見御感想宜しくお願いします。

～おまけ　ハク語辞典～

・むし - ピン［蟲ピン］？名？

蟲駆除用の全長三メートル前後、四角錐状の形をした巨大な杭。絶対に壊れない金属で造られており、ハクが許可しない限り、一度打ち込まれると決して抜けない。また、生物に打ち込んだ場合、その生物をそのままの状態で“保存”する事が可能。要するに、この杭を打ち込まれている間は、どれだけ血を流し続けても決して死なない。が、感覚はあるため、苦痛などは感じる。ハクはこれを自身の影の中に、数億本以上保管している。ハクが最も好んで使う“道具”でもある。ホーミング性能も有し、通常は投擲、或いは直接打ち込ませるなどして使うが、剣の代わりにもなる。ちなみに最大射

程約二億キロ（地球〜太陽間の距離より少し長い）、最大追尾時間八〇年強、最大連続射出数三七億本（毎分）、障壁突破効果有り。

第拾捌話　カレへの依頼と王国記譚（前書き）

いい加減に、原作キャラと本格的に絡ませたい。

そう思ってやりました。

第拾捌話　カレへの依頼と王国記譚

「……はい？　何だって？　もう一度言ってくれませんか」

ハク以外の事で当惑したのは、実に何年振りだろうね。

そんなことを考えながら、目の前で（なぜか）正座しているガトウさんを見る。

「……王国で、内乱が起こった」

「王国？……何処ぞの中立国じゃあないですよね？」

「あぁ。ウェスペルタティア王国だ」

ウェスペルタティア王国。浮遊島に建国された、世界最古の伝統的な王国だ。

伝統と格式溢れる雅（みやび）な国……だったんだけれど、最近は汚職や官僚の腐敗や何やらが酷くて、おまけに国政に関わる大部分が戦後処理で“黒”だとわかって、その評判を一気に落とした国。

しかし、マトモな政府関係者は女王、つまりアリカ＝アナルキア＝エンテオフュシア女王だけとなってしまい、政変や内部分裂やらで大変な目にあっているとは聞いていたけど……“内乱”って、何さ？

ていうか、其れ程までの情報……まさか。

「ハク……？」

嫌な予感をひしひし感じながら、恐る恐る後ろを振り返る。
すると案の定、

「ええ。把握しておりました」

花マルあげたいくらい無表情な我が従者が、あっけらかんと答えた。

「なっ……！？」

絶句するガトウさんに、頭を抱える僕。
ハクは、絶賛驚愕中のガトウさんには目もくれず、僕の顔を覗き込んで来た。

「現在、マスターと王国には、さして関係がありません。よって、報告の価値なしと思った故の判断ですが、いけませんでしたか？」

「……いや、怒ってないよ」

「有難うございます。……おしおきなら、後で幾らでも受けます」

……怒ってないって言ったよね？　まぁ、いいか。

「それで、其処の蟲は、マスターに何の御用ですか？」

ハクは一気に視線を冷たくさせ、ガトウさんを睨みつけた。

……ハクの方が怒ってたよ。

絶対アレ、「面倒事持ち込むんだったら、ぶっ殺すぞ」って言ってるよ。目が。

ガトウさんは……あぁ、気力で耐えてる……いや、わざとガトウさんの気力でもギリギリ耐えられるよう、ハクが調節しているんだろう。

だってハクの気迫って、戦場のど真ん中で出せば、全兵士を失神させるくらい凄いんだし。

絶対、本気の欠片も出していないよ。

「王国でアリカ様に牙をむいたのは、俗に“革命派”とも呼ばれる連中だ。保守派と革新派が、最悪の形で混ざり合ったような奴らだな」

ガトウさんがいうには、王国には主に三つの派閥があったそうだ。

一つは“保守派”。伝統を重んじ、（魔法）世界最古の王朝と国家体制をこのまま維持していこうとしている勢力。主に高名な貴族連

中や、王の側近の子孫たち、或いは代々王家に仕えている連中で構成されている。此の派閥は、戦後処理で王家連中や貴族連中が大分減ったので、数としては少ない。

二つ目は“革新派”。現国家体制を“時代錯誤”と称し、新体制…民主国家への再編、或いは地方分権国家などへの移行を目指す連中。数は多いが、目指す理想の国家体系はバラバラなので、厳密に言うと一つの派閥ではない。要するに、纏まりは皆無。

そして三つ目。これが、アリカ王女や現王国主要幹部が属している、“現状維持派”。保守派と違うところは、ありとあらゆる手段を使って現国家体制に意地でも拘るんじゃあなく、“妥協点”として現状維持に留まっていること。国家の再編・変革云々よりも、今は混乱を抑えることに力を入れようとしている。

ところが最近、保守派と革新派が手を組んだらしい。

保守派としては、国家の威信を取り戻したい。が、何しろ魔法世界最古の国が、魔法世界崩壊に一枚も二枚も噛んでいたんだから、威信はどん底なんてものじゃあない。

声高に「伝統の危機である」と叫んでも、「お前らもその伝統とやらを壊そうとしてたじゃあねぇか」と言われれば、言い返す事も出来ない。

魔法世界では、一時期崩壊の危機が迫っていて、『完全なる世界（コズモエンテレケイア）』がそれを救うために動いていたなんて（一般には）知られていない。だから、『完全なる世界』の行為は、完全に“悪”の行為だ。

それに国ぐるみで協力していたんだから、そりゃあ権威は落ちる。

勿論、『完全なる世界』の息がかかった者は、連合や帝国、アリアドネーや中小国にまでいた。だから、権威が失墜していない国の方が少ない。

それでも連合、そして王国の失墜の度合いは群を抜いていた。

民衆はアリカ女王を支持しているが、それでも支持を集めているのは“アリカ女王”であって、“ウェスペルタティア王家”と“王立政府”ではない。此処が、話をややこしくしている。

アリカ女王は、『紅き翼』と共に、戦争を終戦に導いた“英雄”――ということになっている。

だからこそ、国民は女王に従っている。

が、アリカ女王が退位した後はどうなる？

たかが五〇年や一〇〇年では、失った権威は回復しない。記憶は伝承され、記録され、“歴史”、そして“汚点”となる。

それに、自分達はどうなる？

アリカ女王の隠れ蓑にならなければ、未来永劫非難され続けるだけ。

そんな惨めな末路など、貴族や高官が納得するわけがない。

そのためには、自分達も“英雄”にならなければいけない。

“悪”の何かを倒す……それが、一番手っ取り早い。

その生贄（スケープ・ゴート）が、目障りな存在、アリカ女王だってわけだ。

革新派の方としても、現国家体制が存続している限り、国の大規模な変革などできない。王家を存続させるかどうかは兎も角として、せめてある程度の民主化は推し進めたいところだ。

此処に、両陣営の思惑は一致した……のか？　なんか、納得いかないんだけど、ガトウさん曰く、そうらしい。

まぁ、それもガトウさんの見解で、“事実”かどうかは分からない。

「それに、王国の経済は酷い有様だ」

ガトウさんの説明、ていうか釈明は続く。

王国は、確かに戦火自体はそれほどでもない。理由は、浮遊島にある国家という地理的条件が、幸いした結果だった。

でも、メリットとデメリットってのは、紙一重なのが世の中の常道。

浮遊島という地理的条件にも、デメリットはある。

まず資源の問題。

これは島国にもいえることだけど、食料やら物資やら原料やら、兎に角資源が無い。

しかしそれでも、国民を飢えさせない程度には自給が出来ていた。

ところが、戦後の混乱や何やらで、自給率も国庫も減った。

次に流通の問題。

王国は空に浮かぶ国だから、フネで他国と輸出入する必要がある。

でも、貴重な船舶は混乱の最中で、少なくない数が喪失。近隣諸国からチャーターしようにも、戦争が行われた中で、軍艦・民間船問

わず多くが失われた。特に連合の国際戦略艦隊は、ほぼ壊滅状態。

戦時中に優秀な民間船が、軍に徴集される事は、それほど珍しい話じゃあない。当然、軍が徴集した“元”民間船、或いは傭兵契約を結んだ民間船を攻撃しても、国際法違反にはならない。

ましてやこの状況下で、王国に支援する余裕がある国はほとんどない。完全に中立だった国か、或いはヘラス帝国か――。

……ん？

「ヘラス帝国は？　色々な国を復興支援していると聞いたけど？」

「王国は特別だ。というより、王国の位置に問題がある」

え？　ウェスペルタティア王国の位置？

……あ。

思い出したよ……。ウェスペルタティア王国って、ヘラス帝国とメセンブリーナ連合の二大超大国に、ちょうど挟まれた位置にあったんだった。

それってつまり、帝国の支援を王国が受けたら、連合は、自国の目と鼻の先に敵国の潜在的同盟国をが生まれるのを、座視することになるってことだよね。

あぁ、そりゃあ無理だわ。

つまり王国は、この状況下で、何処の国の支援も受けられない状態

ってことか。

「民衆は？　どっちについているんですか？」

「どっちつかずが半分、残りはアリカ様よりといったところか。だが、国民自体は動いていない」

「そりゃあそうだ。民衆の手による革命じゃあなくて、唯の政府の内部争いなんだから」

「其れに国民は懐疑的だ。何が正しくて、何が違うのか。アリカ様は正しいのか？　其れも分からず、混乱している。唯、国外脱出はほとんど考えていないみたいだが」

「究極的な事を言えば、国民にとって“正しい為政者（いせいしゃ）”というのは、つまりは“自分たちを豊かにしてくれる為政者”ですよ。自分達が其れなりに食って、其れなりに生活できれば、殆どの国民は文句は言わない。其れくらいの事は、知っているでしょう？だからと言って、国民が内乱に巻き込まれてやる義理も無いでしょうし」

「あぁ。……全く、変わっちまったものだ」

そう言って、ガトウさんは頭を抱えた。

「それで、ガトウさん。結局、何をどうしてほしいのですか？　まさか、『女王側に立って参戦しろ』とか、『金を貸せ』何て、言いませんよね？」

「勿論だ。王国の事情を旧世界（こっち）に持ち込む気はないし、一個人から金を借りたなんぞ民衆に広まったら、唯でさえ低くなった王国の権威が、底辺まで下がってしまう」

……もうほぼ底辺だと思いますけどね。

そんな言葉が口から出かけたけど、寸でのところで堪えた。

「ハク、こ――」

「紅茶おかわり」と言おうとしたら、すでにティーカップにイイ感じの色の紅茶が注がれていた。

忘れてた。ハクは何時も、僕が頼む前に紅茶とかお菓子とかを用意してくれていたんだっけ。

「“こ”？……あぁ、此の蟲を殺せば良いのですね？」

「……いや、全然違うから。ハク、わかってやっているでしょ？」

「申し訳ありません、マスター。つい本音が」

……ハク、無表情でそういう軽口言われると、言われた方はめちゃくちゃ怖いんだよ？

あと、ガトウさんにも聞こえているから。

ガトウさん震えているじゃん。

ハクのガトウさんを睨みつける目、あれはマジの目だ。太陽をも凍らせるような目だ。

「頼みたいのは、彼女の保護だ」

「彼女……？」

そう言って、ふと横を見ると、

「……こんにち、わ」

……すっっっっっっっっっっっっっっごく見覚えのある少女、いや幼女が、いつの間にかソファをよじ登って、僕の真横に座りこんでいた。

「ア、アスナ姫……」

王国の最高機密（トップ・シークレット）にして国家戦略兵器、完全魔法無効化能力を持つ『黄昏の姫巫女』……であるはずの、アスナ＝ウェスペリーナ＝テオタナシア＝エンテオフュシア姫。

……名前長いよね。何時も思うんだけどさ。

ペタリ、とソファに座ったアスナ姫は、こてんと首を傾げ、置物か何かのように僕を見ている。

何しろ僕には、一〇歳近く年が離れた妹がいたから、こういう子供と遊ぶのは慣れているし、正直、子供は好きだったりする。

造物主（ライフメイカー）をハクがボコボコにぶちのめした後、ちょっと一緒に会った時間があって、少しの間遊んであげた記憶がある。

それにこの子は、雰囲気が妹の子日（ねのひ）に似ていて、ついついかまっちゃったんだよね。

その所為か、大分……いや、ものすごく懐かれた。

ハクも、「子蟲なら問題ないでしょう」と放置していたし、慣れた手つきで、アスナ姫の御世話とかしていたっけ。

「ひ、久しぶり……」

「……うん、ハル、ナに会え、て嬉、しい」

そう言って、フラフラと、いや、ヨロヨロと近付いてくるアスナ姫。

この子はこれまで、ロクでもない扱いを受けていたからか、舌足らずで無感情、感情の起伏もほとんどない。

無表情の幼女がヨロヨロと寄ってくるって、けっこう怖かったりする。

逃げるほど、鬼畜な真似をするつもりはないけどさ。

「ていうか、今までどこにいたの？　全然気付かなかったんだけど」

「……うし、ろ」

「後ろ？」

そう言って後ろを振り向くと、あるのはソファの背凭(せもた)れと壁、そして斜め後ろには、我が従者。

……あぁ、ソファの後ろにいたのか。そりゃ気付かないなぁ。

それで、いつの間にか回り込んで、ソファをよじ登った、と。

ッてちょっと待って。

王国がエライことになっているってのに、何でこんなところにその国の姫がいるのさ？

「聞いてくれないか、キラ」

ガトウさんが済まなそうに言ってくる。
ちなみに、“キラ”というのは僕の事だ。

本名で言うと、ハクがマジギレするから、折衷案でこうなった。『狂乱の主（カオス・マスター）』？　そんな名前でイチイチ呼ばれるなんて、何処の悪の組織の大幹部だよ。

ちなみに、アスナ姫だけは特別。「子供だから許してくれないかな？」ってハクに頼み込んだら、けっこうあっさり許可を貰った。
「鈴蟲（すずむし）の鳴声くらいなら許しましょう」と言っていたけど。

「これは、アリカ様、そしてナギの願いだ。これ以上、アスナ姫を戦に巻き込むようなことは避けたい。
それにもし、アリカ様が失脚でもしてしまったら、アスナ姫は、王族の生き残りとして祭り上げられるか傀儡にされるか、或いは処刑されるか。それでないなら、兵器扱いされるかだろう。
そんなことを許すわけにはいかん。頼む」

そう言って、頭を下げるガトウさん。
……ん？

「ちょっと待ってください。アリカ女王とナギの願い、とは？」

「ん？　あぁ、聞いていなかったか。ナギはアリカ女王と婚約した。非公式だがな。まだ表舞台へ、王家として出すわけにはいかんからな」

へぇ、そうだったのか……。ん？　そう言えば僕、アリカ女王とは一言くらいしか会話していないけどなぁ？

「何で僕なのです？」

「……キラには失礼だろうが、消去法なんだ」

……ハク、眼が物凄く怖いんですけど。

「ナギは世界中を飛び回り、地域紛争の停止に動いている。俺には調査の任務があるし、タカミチは麻帆良で学生をやっている。悪いが、アイツは任せるには子供すぎるからな。詠春は西に戻ったが、関西呪術協会と連合の仲は冷え切っているから危険だし、関西の呪術師は魔法世界出身者に良い顔をしない。
ゼクトは旅に出て消息不明。クルトは連合にいる。連合の下はもっと危険だ。ラカンは暴れまわることしか考えていないし、帝国のテオドラ様の元に預けるのは外交問題となる事確実だ。アルは……アイツ自体が危険だ」

あ。そういえば、アルってロリコンだったっけ。
……うん、アルの下だけは駄目だ。何があっても駄目だ。その時は、悪いけどアルには犠牲になってもらおう。
ハクの本気の蹴りの。

「……つまり、僕しかいない、と？」

「そうだ。キラたちは旧世界、魔法世界各国のどの国にも属していない。関係はあるが、取り込まれてはいない。それにこの家なら、連合軍数個軍団の攻撃も防ぎ切った結界がある。悔しいが、俺にはキラに頼る他、選択肢が無かったんだ。勿論、彼女の養育費や報酬は払おう。王国にも、そのくらいの余裕はある。期間は……済まないが、最低でも二、三〇年は。今回の騒動、其れくらい経たねば、収まりそうにない」

「ならば、アリカ女王ごと――」

「それはできないんだよ。国家の指導者の面子がある」

……僕が如何こう言う話じゃあないか。

「ハク、僕は了承しようと思うんだけど……」

「今回の件」

後ろを向こうとすると、ハクが突然鋭く言った。

……飛び上がるかと思った。僕の心臓が。

「――第三者に漏れていませんか？」

「其れは心配ない。誓って、だ。今回の件は、アリカ様とナギ、そして俺だけで決めた事だ。タカミチも知らん。
アスナ姫の世話も、主にアリカ様だけで行っていた。それに、身代わりも用意してある。
アスナ姫は、存在そのものが最高機密（トップ・シークレット）だったからな」

「そうですか」

ハクは二回頷くと、じっと僕を見た。「任せます」という意味だ。
……珍しく、ハクが僕以外に敬語を使った。

其れを確認すると、僕はガトウさんに向かって、頷いた。
僕だって、知り合いの子供が不幸になるのなんて、出来る限りは避けたいんだよ。

……世話や教育は、ハクに丸投げしよう。子育てなんて無理だ。
遊ぶくらいは、できるけど。

……あぁ、僕って莫迦だ。

ハクに教育を任せちゃったら、あんな性格になるよなぁ……。

何て、後になって後悔するんだけどさ。

第拾捌話　カレへの依頼と王国記譚（後書き）

私が思うに、仮にアリカが処刑されなかったとしても、王国が存続できたかは疑問が残ります。

もともと伝統だけで持っているような国からアスナを取ったら、それこそプライドしか残りません。

そんな国に戦後の混乱が襲えば、こんな感じになる……と思ってこうしました。

あくまで私の独自解釈ですので、罵詈雑言はなるべく無しでお願いします。
あとおかしな設定も、独自設定という事で。

あとアスナはあくまで家族役（みたいなもの）。ヒロインにはなりません。どっちかっていうと、ハクにコキ使われるキャラになる予定です。

御意見御感想宜しくお願いします。

第拾玖話　カレの日常と妹の再誕（前書き）

まず一言。

セクストゥムファンの皆様、申し訳ありません。

第拾玖話　カレの日常と妹の再誕

アスナ（アスナ姫と呼ぶなと言われた）を引き取った後、詠春さんの結婚式に御招待された。

関西呪術協会の人たちは、大多数が僕とハクに好意的だ。
この人たちは、“敵の敵は味方”という論理を知り尽くしているし、この人たちから見れば、僕とハクは連合に金を貢がせるという大金星をやってのけたツワモノ――らしい。

でも一番の理由は、ハクに頼んでやってもらった、魔法世界と旧世界を繋ぐゲートの破壊したことみたいだ。

詠春さん曰く、連合は戦時中、文字通りの意味で戦力を掻き集めるために奔走していたらしい。
まさに藁にも縋る勢いで、中立組織、果てには仮想敵組織にすら、矢の様な催促を送りまくった。勿論ほとんどの組織は、何の実にならない参戦要請をのしつけて返している。

呪術協会もその一つだったんだけど、催促は留まるところを知らず、いい加減ウンザリしていたそうだ。

そんな時にゲートが破壊されたんだから、旧世界中の組織は大手を振って喜んだ。
何しろ、連合の要求を断る絶好の口実が出来たのだから。

そして呪術協会の人たちは、詠春さんを通じて、僕（正確にはハク）が実行犯である事を知っている。

おかげで（良い意味で）絡まれ、強烈な日本酒を飲まされてひっくり返る羽目になった。

気付いた時はハクに膝枕されていて、呪術協会の重鎮全員（詠春さん含む）がズタボロにされ、詠春さんの奥さんや巫女さん達に看病されていた。

ちなみにアスナは、ハクの分身体と何か話し込んでいた。

アスナの話だけれど、彼女はハク（の分身体）が教育を担当している。

その内容はハク曰く「多岐にわたる」らしい。基本的に僕はノータッチで、どんな事をしているのかはよく知らない。

ただこの前、なぜかメイド服で近寄ってきた事があった。

あの時は吃驚したよ。叫ばなかった自分を、誉めてやりたいくらいだ。

ハク曰く「淑女の嗜み」だそうだけど……まぁ、任せた以上は文句は言わない。アスナ本人も、満更じゃあなさそうだったし。

アスナは相変わらず舌足らずで無表情だけど、決して僕とハクの事を嫌っているわけではないみたいだ。まぁ、この性格が一変する事は無いだろうけど、人並みには笑えるような子に育ってほしいと思う。

僕に出来るのは、遊んだり、話をしたりするくらいだけどね。

「……ハルナ、これ」

「ん、有難う」

最近のアスナはこういう風に、ハクと一緒に紅茶を淹れてくれるようになった。

流石に、ハクが淹れてくれるものには到底及ばないけれども、こんなに（見た目は）幼くても、そこそこ美味しい茶を淹れてくれるんだから、文句はない。

「美味しい。頑張ったね」

「……んっ」

褒めて撫でてあげると、無表情ながらも喜んでくれるし……うん、子日（ねのひ）が小さかった頃のことを思い出すなぁ。

……今、軽く寒気がした気がするけど、気のせいか？

「……ん？」

魔法世界のとある場所、地下深くに在る施設で、一人の男が首を傾げた。

いつもは仮面で隠れている素顔を曝し、ローブを身に纏っている長身美形男性は、『完全なる世界（コズモエンテレケイア）』の幹部の一人にして造物主（ライフ・メイカー）の側近、デュナミスだった。

デュナミスの主な仕事は、造物主から与えられた権限を用いての、“アーウェルンクス・シリーズ”の開発と管理だった。

ハクの調整により、今のところ魔法世界（ムンドゥス・マギクス）は、崩壊の兆しを見せていない。

ハクは火星の生命エネルギィの回路を組み替えた際、その一部が、造物主にリアルタイムで流れ、調節できるようにした。
つまり魔法世界への火星からのエネルギィ供給の様子は、造物主でも知る事が出来る。

今のところ造物主は、ハクに三途の川一歩手前まで追い込まれたため、いや、三途の川に腰まで浸かってしまったため、療養に入っている。それは一番目（フェイト）も同じで、現在マトモに動ける幹部は、デュナミスを含む数名だけだ。

戦後の混乱による地域紛争は、今後五～一〇年がピークだろうと思

われた。
それまでに回復できれば良い、とデュナミスは考えていた。
別に下っ端の数は揃っているから、完璧に動けないわけでもない。

もっとも、ハクはそんな事は見越したうえで、精一杯手加減して造物主とフェイトをボコボコにしたのだが。
瀕死だったが生きてはいた幹部デュナミスが、ハクに怒りの矛先を向けられなかったのも、『完全なる世界』が機能停止すれば、榛名（マスター）にとって不都合な事が生じるかもしれない、という懸念があったからだ。

本音を言うと、ハクはデュナミスにも、地獄を見せてやりたかった事だろう。間一髪のところで、彼は最悪の拷問を免れたのだ。

フェイトが受けた様な、蟲ピンで動くことと死ぬこと、痛みで気を失うことと狂うことを封じられ、二週間……三三六時間嬲られ続ける拷問を。

そうとは知らないデュナミスは、戦火に苦しむことになるであろう人々を、少しでも多く救うため、アーウェルンクス・シリーズの稼働への調整を行っていた。

彼の目の前には、規則正しく並んだカプセルのような、繭（まゆ）のような物体。

そしてその中には、カプセル一つにつき一人ずつ、人間が胎児か何かの様に浮かんでいる。
もっとも、その人間は全員、ある程度は成長した姿をしている。
全員が白髪で、だが雰囲気は一人一人違う。容姿も若干異なる。

デュナミスの視線が捉えたのは、その中の一つだった。

中で浮かんでいる人間は、良く見ると顔つきや体形からして女性、いや、少女だとわかる。液体に浸されているが、学生服のような衣服を纏っている。“学生服”といっても、スカートではなくズボンであるが。

そのカプセル、いや、正確には少女の静かに開閉を繰り返す口から、ゴポゴポと音が響いていた。

「――妙だな、まだ自律呼吸を始めるほどの段階（レヴェル）にまでは、達していないはずだが……」

アーウェルンクス・シリーズは、“人形”であるが、限りなく生命に近い。寧ろ生命そのものだ。

食事は摂るし、呼吸もする。感情は表現に乏しいだけで、無いわけではない。データ上では、それぞれに能力以外の特徴――パーソナルな部分での固有能力、“個性”がある事が確認済みだ。

幾ら魔法世界と、その生命を創造した造物主と部下デュナミスと雖（いえど）も、そうそう容易く生み出せる存在ではない。

稼働させるまでには相応の時間や、微調整が欠かせない。

だから少女――“六番目（セクストゥム）”が目覚めるのも、此れは初めてではない。試験稼働や休眠を繰り返しつつ、完全稼働までようやく漕ぎ着けるのだ。

が、少女はまだ其処まで達していないはず。ましてや、まだ“三番目（テルティ・ウム）”ですら稼働していないのに――――――――――――――――――。

「む……」

デュナミスは小さく唸った。少女の鼓動が激しくなったのだ。

そして――――――――――――――――――――――――うっすらと、眼を開けた。

自然とカプセルが消滅し、中を浸していた液体は消え、少女はフワリ、と二本の足で降り立った。

「莫迦な、これ程早く……そして……」

――これ程の性能を……。

それを口には出さず、デュナミスは数歩後ずさり、少女の様子を窺う。

六番目はボーッとした表情のまま頭を掻き、周囲、さらに天井や床まで一通り見やる。

そして、小さく呟いた。

「……兄さん、此の世界に……」

第拾玖話　カレの日常と妹の再誕（後書き）

私の想像する「ちょっと人間味のあるセクストゥム」と、オリキャラ綺羅川　子日のキャラがカブっていることに、最近になって気付きました。

それで二人を出して二人ともヒロイン化させると、個性を分けたり、セリフの描写をしたりするのが、とてもややこしいことになると判断しました。

そこで、詳しい説明は次話の番外編で書きますが、子日はセクストゥムに憑依することになりました。

あと、憑依モノのキャラって一回書いてみたかったんです。

性格は、ちょっと人間味のあるセクストゥムと言ったところです。

また、能力も少し追加します。

御意見御感想宜しくお願いします。

番外編第弐話　とある妹の開幕（前書き）

子日にスポットを当てた一人称版。

彼女の視点も、いずれは本編に出てくると思います。

番外編第弐話　とある妹の開幕

こんにちは、はじめまして。

綺羅川（きらかわ）　子日（ねのひ）です。

露土音（ろどね）村立中学校一年一組。まぁ、一学年一クラスしかないのですが……。美術部です。

趣味は読書。あと絵を描く事。こう見えても、コンクールに出せるレヴェルです。

コンプレックスは一六〇センチの長身と、初対面の人に十中八九「保健室、行く？」とか「大丈夫？」とか言われるくらい、顔とか肌が白い事。

あ、先天性色素欠乏症（アルビノ）ではありませんよ。瞳も髪も真黒です。日に当たっても問題無しです。何故か全然焼けませんけど。

私、周囲からは“生真面目”だとか“優等生”だとか、“テンプレ委員長”だとか言われていますし、自覚はありますけど、表に出せないだけで、結構兄さん――綺羅川（きらかわ）　榛名（はるな）とよく似ているんです。軽いんですよ。表に出せないだけで、家族も私の素顔を知らないと思います。

あ、話題を変えても良いですか？

実は私、先程……って言っていいのかわかりませんけど、兎に角、死にました。

それだけなら、まぁ新しい身体に生まれ変わって、日本か何処かの国に生まれていたんでしょうけど、そうは問屋が下さず、生き返りました。

いえ、正確には違います。

別の人間の魂に入り込んで、其れに成り代わった……簡単に言ってしまうと、“憑依”というもののようです。

というのも、私は死んだ後に、神様に会いました。

……ええ、自分でも、莫迦げた事を言っているくらいの自覚はあります。

その人が言うには、私、というよりも私たち“兄妹”の死が、神様にとって予定外だったようです。そこで、五つの願いを叶え、別の世界の人間に憑依させてくれるそうです。

其れを知った時、歓喜しました。主に私の心が。

だって、また兄さんに会いに行けるのですから。『ネギま』が何だとか言われましたが、そんなのはどうだっていいんです。

私は真っ先に、「兄さんのいる世界に行きたい」と願いました。

これが転生だったら、異分子（イレギュラー）が増えすぎて問題だそうですが、その世界の人間に憑依するのなら、特に問題はないそうです。

どんな人間に憑依するのかと聞いたところ、性別が女性で固定されている以外はランダムだそうです。
特定も可能だそうですが、それも“願い”にカウントされてしまいます。

とはいえ、私は『ネギま』のキャラクタなど知りません。なので、「兄さんと関係を持つ事が可能な人物」ということにしてもらいました。

残る願いは三つですが、困りました。
兄さん以外に、特に望むものがありません。

身体能力とか魔力とかは、漠然とし過ぎて浮かびませんし……第一、無理すぎます。
私、体力の無さは、胸を張って誇れるレヴェルなんです。

……あ、そうだ。父さんと母さんのことを。
あの親馬鹿二人だけをそのまま残して逝きたく――いや、生まれたくないですし。

というわけで、三つ目の願いは「父さんと母さん、そして元々いた世界から、私と兄さんに関する記憶や痕跡を消してほしい」。

これであの両親も、悲しむことは無いでしょう。
もう会えない以上、仕方がありません。これしか思いつきません。

……別に「これで、もうあの世界出身で兄さんのことを知っているのは、兄さん、そして私だけ……」何て腹黒いこと、考えていませんよ？
フフフ。

残りは……「ある程度の敵は倒せる程度の実力にしてください」にしましょうか。殺されるのなんて御免です。

魔法だの何だの言いますけど、要は魔法使いって、たくさんの武器を持っているようなものでしょう？
小銃とかミサイルとか爆弾とか。

そんな人たちに襲われたら、口喧嘩すらした事の無い私では、逃げることもできません。

死ぬなんてまっぴらです。せめて、もう一度兄さんに会って、兄さんの腕の中で死にたいです。
……何を言っているのでしょうか？　赤面モノです。

私の表情、そうそう滅多に変わらないのですけど。
兄さんが死んだ時だけは、号泣して、喚き散らしましたが……当然でしょう？　世界で一番、大切な人を失ったのですから。

最後の五つ目は……そうだ！
兄さんへプレゼントした、イルカのペンダント。
私のと対になっているペア・ペンダント。

これを持っていけるように……。

それで、目を覚ましたら、コレですよ。

ちょっぴり期待していたんですよ？　目を開けたら、兄さんが微笑んでいてくれるって。

……何ですか？　コレ。

何でローブ姿の見知らぬ男が、私を凝視しているんですか？

何か腹が立ってきました。

「……あ」

ポケットに違和感。

探ってみると、そこにはイルカのペンダントが。

用意が良いですね。

さっそく装備しましょう。

「……う……」

瞬間、頭が、いや脳と言うか意識と言うか、色々なものが一気に覚醒し、頭の中で炸裂しました。

まるで、超弩級に強烈なミントの香りを、無理矢理味合わされた気分です。

とはいっても、スッキリ爽快！　何てことにはなりません。刺激は

刺激でも、不快な方の“刺激”です。これは。

……あぁ、思い出しました。

私は“六番目（セクストゥム）”。

またの名を、“水のアーウェルンクス”。

造物主（ライフメイカー）によって生み出された“人形”……となったのですね。

「おはようございます、デュナミス。早速ですが、貴方の心臓と肺と肝臓と腎臓と脾臓（ひぞう）と膵臓（すいぞう）を止めてください。音が五月蠅いです」

生まれたてで、聴覚の操作が上手くいっていないのか、やたらと頭に響き渡ります。

おまけに頭もボーッとします。壊れた添水（そうず）（鹿威し（ししおど））のように、今にもカコカコいいそうです。

目は霞みますし、平衡感覚もオカシイです。

まるで、頭の中でオーケストラと合唱とミュージカルとオペラが一斉に開幕し、ノートルダムの鐘の音がそれに加わったような大音響。

いや、超音響です。

二日酔いの人って、こんな気分なのかもしれません。

「……いきなり毒舌だな、セクストゥム」

「好きで毒舌になっているのではありませんよ。あぁ、頭に響きま

す。あぁ、脳が壊れます。もうちょっと離れてください。
それと、椅子でも何でも良いので用意してくれませんか？　とにかく今は座りたい。いや、できれば横になりたいです。
あと、できればソフトドリンクを一杯」

地べたに座り込むなんて、はしたない真似はしません。

それにしても私、以前と比べてだいぶ舌が回りますね。
苛々しているせいで、思った事がすぐに口から出てしまいます。

まぁいいですか。
相手はコレですし。

少しくらい、八つ当たりさせて下さいよ。
目の前に兄さんがいることを期待していたら、無駄にイケメンのロープ男がいたのですから。

あの後ソファに横になって、少し落ち着きました。
家なら絶対しないでしょうが、今ははしたなくても構いません。要は、兄さんと厳格な母さんに見られてなければ良いのです。

室内で靴を履いたまま、ソファに倒れる。
アメリカンスタイルです。

基本スカートかワンピースだった私にとって、スラックスというの

は中々にして新鮮です。

ソファの前には、小さい正方形のテーブルが一つ。モノクロデザインの、研究施設（ここ）にはマッチしない、でもセンスは悪くないテーブルです。

そのテーブルの上には、レモネードの入ったコップが置かれています。デュナミスが用意してくれました。

美味しかったです。意外と。

見た目は不遜なイメージですけど、意外と面倒見が良い人みたいです。所作がさり気無い辺り、女性をエスコートするのも、案外得意かもしれませんね。

額に手を当てて天井を見ながら、デュナミスに“組織”――『完全（コズモ）なる世界（エンテレケイア）』の動向や、今後の計画について一通り聞きます。

大体頭に入っているのですけど、これ、必要なのですか？　私、“二度手間”は大嫌いなのですが。

天井でくるくる回っているファンを（だから何で研究施設（ここ）にファン（こんなもの）があるんですか？）見ながら、取り敢えず聞いていると……。

「それで、綺羅川　榛名と、その従者の事だが――――――――――」

……はいぃ！？

「ちょ、ちょっと待ってください。その、キラカワって……」

あ、あああああああああああああああ焦るな私！！　ど、同姓同名の他人かもしれない。まさか、本名で此の世界で暮らしているわけ……ありそうですね。

「親から貰った名前を捨てたくない」とか言いそうですし、兄さん。合理的に見えて、意外とそういうところを気にするんですよね、あの人。

「あぁ。協力者、みたいなものだな。一番目が言うには、「変わっているというか、掴みどころが無い。でも、彼がいなくなってはいけないような雰囲気を感じる」とか言っていたな」

……。

……。

……。

……兄さんだぁあああああああああああああああああああああああッ！！！！！！

「掴みどころが無い」、「でもいなくなってはいけないような雰囲気」……間違いない、長年の親友とかから、密かに「アイツは水水母（ミズクラゲ）のような奴だ」とか、「守護霊ってあんな感じだと思う」と

か、「座敷童（くらぼっこ）の大学生ヴァージョン」とか言われていた兄さんだぁああああああああああああああああああああああああッ！！！！！！

いや、確かに「兄さんと関係を持つことが可能な人物」って願いましたけど、関係早ッ！！

……ふぅ、私ったら、はしたないですね。

「それで、お前の任務は――――――」

「あ、もう決めました」

「……何？」

デュナミスが片眉をあげますが、そんな事は気にしません。

「まずは修行です。一通り能力を確認して、そして――――――――協力者に、会ってきます」

フフフフフ、近いうちに、会いに行きますよ、兄さん。

番外編第弐話　とある妹の開幕（後書き）

前話と同時に執筆していたので、早めに更新。

彼女が榛名達に合流するのはもうちょっと先、薬味襲来辺りからです。

それまでは、彼女は榛名達とは別行動です。

御意見御感想宜しくお願いします。

第弐拾話　カノジョの世界情勢把握と情報漏洩（前書き）

ハクの情報収集についての話。

あと、ハクがアスナをどう思っているか……。アスナファンの方々は憤激するかもしれませんが、其処は御許しください。

第弐拾話　カノジョの世界情勢把握と情報漏洩

七面倒とはこのことです。

いえ、面倒など私にかかれば、有って無きがものとなりますが、精神的にという意味です。

マスターの御世話は当然、面倒ではありません。

アスナの教育も、分身体に丸投げしていますし、彼女はかなり優秀です。あらゆる技能（スキル）を、次々と習得しております。

駒が増えることは、良い事です。それが使える駒なら尚更です。

“矛盾”という言葉が有る通り、此の世に完璧な“無敵”など存在しません。

無敵の矛も無敵の盾も、それは限定された条件内での“無敵”に過ぎず、その程度では、マスターを完璧に護る事など敵いません。

例えば私は、我ながら万能だと自負していますが、交渉するのが苦手です。マスター以外と話す事も、碌に出来ません。したくありません。

何でもかんでも強行手段で解決するのは、マスターの望むことではありません。よって時には、マスターと比べるのもおこがましい蟲共と、対等な立場で交渉、協力体制を敷く必要があります。

例えば麻帆良学園都市。例えばメセンブリーナ連合。例えば関西呪術協会。

マスターから周囲の目を逸らせられる存在は、多ければ多いほど良いのです。
だからこそ私は、アスナを鍛えているのです。唯、マスターのためだけに。

それにしても、七面倒なのは麻帆良学園都市側の対応です。
以前、学園若手教師を中心として行われた襲撃は、とっくに解決しています。
ですがここ最近、あの蟲共の鬱陶しさに拍車がかかって来ているのです。

具体的に説明しますと、連中は少人数の部隊を結界付近に送っては、調査や測量をして引き返します。
私の結界は神力や妖力、自然力など魔力以外のエナジィにも依存しており、それらはサイクルによって恒久的に供給され続けます。
要するに、蟲共に解明できる程、ヤワな術式は組んでおりません。

それでも、マスターと私（＋α）が暮らす土地付近でこそこそ嗅ぎ回られるのは、この上なく不愉快です。

しかも連中は、散々こそこそ嗅ぎ回った挙句、すぐに帰っていきます。
つまり、調査以外のことを全くしてこないのです。

挑発のつもりでしょうか？
だとすれば、あまりに低脳すぎます。鬱陶しいほどこの上ありませんが、とはいえ、殺したいとも思いません。
正確には、殺意すら沸く気になりません。

時が経てば経つほど、マスターの素晴らしさと蟲共の低俗さを知ります……やはり、世界はこの程度の存在です。

不快ですが、調べぬわけにはいかないようです。私の好き嫌い（エゴ）でマスターの危険の種を見過ごすなど、決してあってはならない事ですから。

蟲籠（むしかご）の中の蟲を“観察”するのは、退屈で屈辱で不快で悲痛で――――それでも決して、不毛ではない作業なのです。

世界というのは、常に水物である。

しかし、そのような表現は、綺羅川（きらかわ）　ハクには当てはまらない。

彼女は、世界情勢の大半を確実に知る事が出来る。

何故か。

それは彼女が世界中（魔法世界・現実世界問わず）に、分身体を放っているからだ。

そしてその分身体は変化（へんげ）し、世界各国・各機関に潜入している――

わけではない。

確かに潜入すれば、其れなりに情報を得ることが出来るだろう。しかし、結局は“其れなり”でしかない。さらに上手く潜り込めたとしても、都合良く榛名（マスター）にとって有益な情報全てを集められるわけでもない。

組織に於いて、あらゆる情報を好きに出来る役職や立場など限られているからだ。

そして、此れが最大の理由なのだが――潜入した以上は周囲の信任を得るため、ある程度は他者と接触しなければならない。洗脳すれば問題無いのだが、洗脳するくらいなら、潜入などしなくてよい。

ハクにとって、榛名（マスター）以外の存在と接触し続けるなど、苦痛以外の何物でもなかった。

それは、彼女の分身体にとっても同様だ。変化すれば、その姿やモデルとなった者にある程度性格が近付くし、価値観や思想も若干変わる。が、根底――榛名（マスター）への忠誠心や愛――だけは決して変わらない。

仮に変わったとしても、その分身体は真っ先に“欠陥品”として処分されるだろう。分身体は何処まで行っても分身体である。ハク相手では何京人束になっても、掠り傷一つ付けることができない。一秒相手取ることすらできない、ともいえる。

ハクにとっては分身体はおろか、自分自身ですら榛名（はるな）の為だけの道具（ツール）なのだ。“榛名（マスター）の従者”という、榛名（マスター）にとって最高の価値となる事を夢見る道具である。

だから榛名（マスター）の役に立たない分身体など、存在意義（レゾン・デートル）そのものを喪失している。
そんなものに、存在する価値など微塵も無い。それが、ハクの持論だった。

其れは兎も角、ハクの分身体は何をしているのかというと――其処にいるのだ。

空気のように、さり気無く、誰にも見つかる事も無く、そこにいる。
そして、対象の組織或いは国全体を唯々見ている。

分身体とは雖（いえど）も、腐っても鯛。低性能（この“低性能”という表現もハク（オリジナル）と比較しての表現である）の複製（レプリカ）ではあるが、それでも性能（スペック）は、一人一人が最精鋭数十個軍団以上の戦力を持つ。
一人が唯“見る”だけで、大抵の事は把握できる。

そしてハクは、その行為を“観察”と呼んでいた。
蟲籠の中で鳴いている蝉（セミ）を眺めるような、蟷螂（カマキリ）の捕食運動を見つめるような、そんな行為である。
ハクにとっては、文字通りの意味での“観察”なのだ。

分身体は穴が開かないよう、何重にもわたって配置されている。そのため、常時配置されている分身体の数は万を軽く超える。此れはハク自身が、分身体の能力を然程（さほど）信じていないのも一因だった。
ハク（オリジナル）からしてみれば、分身体など唯の“粗悪品”なのだ。

そしてそれらの情報は、全てハク（オリジナル）に集積され、一元管理される。其れは膨大な量だが、ハクにかかれば、図書館で目当ての本を探すくらいの気安さでできる些事だった。

無論、情報管理・選別の真っ最中でも、ハクは決して本来の任務――つまり榛名（マスター）の世話と護衛――を緩めたりしない。

集めた情報をどうするかは、ハクの匙加減の問題だ。榛名（マスター）に関わると思えば伝えるし、無関係だと判断すれば胸の内に留めておく。勿論、榛名（マスター）から命令があれば、その限りではない。

ハクが榛名（マスター）に逐一報告するのも、大戦勃発直前に、榛名（マスター）から命じられたからだ。本来なら報告することなく、秘密裏に対処しておくつもりだった。

綺羅川（きらかわ）　榛名（はるな）の此の行動は、少なくとも此の世界からすれば正解だった。

ハクがする予定だった“対処”とは、要するに――何の見境も無い、理不尽なまでの“徹底駆除”だったからだ。

求める情報は、三秒とかからず私の頭の中に届きました。
ですが、遅い。遅すぎます。
学園の蟲共が動き出す前に、手に入れておくべき情報でした。
あの分身体は欠陥品ですね。後で処分し、代わりを置いておくことにしましょう。

それにしても、此の内容は――――。

「……あの竹節蟲（ナナフシ）が……、全く使えない」

ため息をついて、マスターを見つめ直します。
マスターの御前でため息をつくなど、普通はしません。そんな愚かしい真似は、マスターの従者に似合いません。
そのような愚を犯してしまう程、呆れかえってしまったのです。

「ハク？　何かトラブルか？」

「いえ、些事ですが、些か事が大きくなるかもしれません」

「……と、いうと？」

「連合に、アスナが国外脱出したことがバレました」

「……ガトウさぁあああああああああ

あああああああああああああああああああああああああああああああああんッ！！！！！！！！！！！！！！！！」

途端にマスターは本を投げ捨て、立ち上がって吠えました。

「……敵襲？　ガトウ？……ガトウ、敵？」

ドアからアスナが顔を覗かせ、キョロキョロと周囲を見やりました。

ええアスナ、正解です。許されるのなら、今すぐあのエセ捜査官を殺しに行ってやりたいです。マスターの心を乱すとは……信じ難い、許し難い、度し難い愚行です。

耄碌が始まりましたか……いえ、最初から低脳な蟲でしたね。

「何してんだぁあの人はぁあああああッ！　巫山戯（フザケ）てんのかオイ！！！　アスナの価値がわからないのか！？　とんでもない切り札だ、ジョーカーなんだぞ！！

血眼になって捜して、手中に収めようとするに決まっているじゃあねぇか！！！！　魔法世界中を人質に取れるぞ！！」

マスターはソファから離れ、大股でテーブルの周囲をぐるぐる回った後、私を指差しました。

マスターにしては、落ち着きの無い大仰な態度。

マスターは、いつもパフォーマンスを欲するような性格ではありません。さらにこのような、パフォーマンスの必要性など皆無の場で

することなど、ナンセンスも甚だしい事です。
いつものマスターなら、絶対にしません。

……キュンときます。

「ハク、何処からどうやってどのように漏れたんだ!?　いや、忘れてくれ、そんなことはどうでもいい！　それって、アスナが此処にいることもバレているのか？」

「いえ、其処までは。流石にあの蟲も、アシがつかないようにしたのでしょう。バレる可能性も、ほとんど無いでしょうが……簡単な帰結の結果、安心してられません」

「……そうか、此処に匿うのが一番確実だ。連合だって莫迦じゃあない、思い付く者がいて当然か……」

「蟲の考えることは、他の蟲でも思い付くでしょう。其の為か連合は、真偽を確かめようとしているようです」

「真偽？　調査するということか？」

「はい。無駄な行為ですが。アスナの気配や魔力の遮断は、結界により完璧に行われますし、アスナ自身にも気配・魔力の隠匿を叩き込みました。
存在が最重要度の機密事項であるアスナにとっては、其れが至上命題ですので。
万が一バレて、マスターに御迷惑をかけるわけにはいきません」

「……うん。絶対絶対絶対ゼッタイ、悟らせない」

アスナを睨むと、アスナはコクコクと頷きながら震え上がりました。

此の子蟲はマスターの盾となると同様に、マスターの周囲に蠅を集(たか)らせる生芥(ナマゴミ)の役割も持ち得ます。

つまりは諸刃(もろは)の刃。

マスターの負担となるのなら、此の蟲はすぐに消します。

しかし、そうなればマスターも悲しむでしょう。

ですので、そのような事態を避けるために、アスナには、自身を隠匿するための術を、真っ先に叩き込みました。

やり方ですか？　やれるまでしごいて、やれなかったらノルマを与えるだけです。――――私のサンドバックになるという、何とも軽いノルマです。

出来れば私も、サンドバックになどしたくありません。アスナの肉体は常人よりはるかに頑丈ですが、子蟲は子蟲なので、ふとした拍子に潰れかねませんから。此方としても、調節が面倒なのです。

マスターのためには、仕方が無い行為なのです。

アスナもマスターの安全に繋がるのですから、甘んじて受けるべきでしょう。

其れは兎も角、蟲共から、何かアプローチがあるかもしれません。

注意しなくては。

取り敢えず、あのガトウとかいう蟲は、千分の九九九殺しですね。

第弐拾話　カノジョの世界情勢把握と情報漏洩　（後書き）

注）竹節蟲……ナナフシ。擬態が上手いナナフシ科ナナフシ目の昆虫。捜査官が時には敵陣に潜入して捜査を行うことから、ハクが捜査官ガトウをこう呼んだ。

大学の知り合いと昆虫の話をして、昆虫標本を作った人が私以外ほとんどいなくて、昆虫の名前を知っている人が少なくて仰天しました。

ナナフシって、そんなマイナーなのかな……。

王国の内乱には、連合が一枚噛んでいます。其処からアスナ姫の不在がバレた、と。後はガトウさんのミスです。

ガトウさんの御冥福をお祈りしております。

御意見御感想宜しくお願いします。

感想が２００件超えました！　御感想も御意見も御指摘も、全て嬉しいです。最近はそれ以上にドキドキしてますが。何時も書いて下さる方や随分深く読んでくださる方、アイディアやアイテムをくださる方などたくさんいて、恐悦至極です。

これからも宜しくお願いします。

第弐拾壱話　カレの悩みと京都来訪（前書き）

原作キャラ二人初登場。

刹那ファンの皆様、御免なさい。

髪が白い刹那を妄想（髪はロング）して、私の中のハク像と比較…
…「あれ？　ほぼ同じじゃん」そう思ってやりました。

子日といい、何か今作では白髪女性＝（サブ）ヒロインとなってい
る気が……。

第弐拾壱話　カレの悩みと京都来訪

どうしたものかな。

僕は別に天才じゃあない。

だから、しょっちゅうコペルニクス的転回が起こって、何でも解決なんてことにはならない。

いや、しょっちゅう起こったら、コペルニクス的転回なんて言わないかもしれないけどさ。

アスナの事は……別に此処にいることが突きとめられても、問題があるわけじゃあない。

祖国で内乱が起こったため脱出させ、保護した。

それで十分通じる。

でもこれが、“姫君誘拐”にすり替えられたらちょっとマズイ。

ていうか、嫌だ。

また賞金首になるなんて御免だ。

幾らハクに護ってもらっていても、“絶対防御”の能力があっても、命を狙われている……その居心地の悪さは、辛いなんてものじゃあない。

どうしたものかな。

……これじゃあ、完璧に臆病者（チキン）の思考回路じゃあないか。

いや、元現代日本人の僕にとってはコレが普通だ。危機察知能力が高いというのは、恥ではない……と信じたい。

アリカ女王やガトウさんに頼まれた以上、そしてアスナ自身が僕を頼ってくれている以上、逃げ出すわけにもいかないよね。

この心労……多分ハクは気付いているだろう。でも、あのハクが何も言ってこない。

正確には、“過激なこと”を殆ど言ってこない。

其れが何とも……“嵐の前の静けさ”のようで、凄く怖い。いや、僕は“台風の目”のような存在だから、もうすでにどうにかなっているのかもしれないけどさ。

自分で言うのもなんだけど、僕はポーカーフェイスが得意だ。でもそんなもの、ハクには全く通用しない。

僕以上に僕を知っている、あの万能従者には。

後ろを見ると、じっと僕を見つめている我が従者。

真っ黒な瞳には何の感情も無い。少なくとも、感じ取る事は出来ない。こういう時のハクは大抵――何か考え込んでいる。

「ハク」

「はい、マスター」

取り敢えず呼んでみたら、すぐに反応が返ってきた。

「今、何を考えている？」

「マスターのことを考えております」

「具体的には？」

「マスターの御心労が、少しでも減る方法です」

ドンピシャ。

ハクは、僕に嘘はつかない。言わない事はあっても、嘘はつかない。

聞けば、聞いた分だけ――いや、それ以上のことを答えてくれる。

「と、いうと？」

「まず一つ、マスターの懸念材料を全て解決すること。

二つ、此れ以上の懸念材料の増殖を防ぐこと。

三つ、マスターの御心を癒すこと。

……このくらいでしょうか」

うん、至極真っ当そうだけど……物騒にしか聞こえない。特に一つ目と二つ目。

でも……何かハクの提案を聞いていると、取り乱して悩んでいたのが、莫迦らしく思えてきたなぁ。

或いは……そのために、ハクはこんな言い方をしたのかもしれない。

そんなことを考えながらハクを見つめると、従者はうっすらと笑った。

「マスターを御安心させる方法も癒す方法も、それこそ無数に存在します。幾らでも実行します。マスターのためならば」

そう言って、ハクはそっと僕を抱きしめた。

耳元で、ハクの声が聞こえる。

「勿論……その元を断つのも、決して怠りません」

先刻とは打って変わって、地獄の釜から響くような声。

思わずゾッとする。

「ハク、元って……」

「アスナではありませんよ、マスター。ガトウとかいう蟲でもありません。アレらには、まだまだ使い道がありますから」

無表情に戻った我が従者。

ハクは、アスナがいる（であろう）方角を見やると、暫し目を細めた。

「蟲の起こしたポカは、確かに大きいですが……それ程憂う必要性

もないと愚考いたしますが？」

「それはそうだけどさ……」

ハクの意見は正しい。連合に、再び僕らを賞金首にする胆力があるとは思えない。いや、賞金首にする程、頭がイカレているとは思いたくない。

まぁ、信じるしかないか。

そんなことを考えて数年。

詠春さんから、娘が生まれたとの報告があった。詠春さんの奥さんの木乃魅（このみ）さん、つまり関西呪術協会会長代理から招待状を頂いたので、またまた京都に足を運んだ。

血統を重んじる関西呪術協会では、五摂家の一員である近衛家の方が、詠春さんの血族（つまり青山家）よりも形式的には序列が高い。もっともそんなモノは、大正の時点ですでに形骸していたから、青山家の血を汲む詠春さんも長（トップ）に就任できた。

その代わり木乃魅さんが、長代理として詠春さんを公私ともにサポートしている。

因みに五摂家っていうのは、藤原氏の血を汲む公家のトップ連中のことで、皇室との繋がりも深い。加えて血族独自の神道術や陰陽道

の才能を持つ、要は名実ともに名門中の名門。
近衛家・一条家・二条家・九条家・鷹司家のことだ。

最近では、何処の血族出身かなど大した評価基準にはならないみたいだ。名門出身だろうが何だろうが、使える人間か使えない人間なのかはまた別次元の問題だし、“使える”といっても、誰にも得手不得手ってものがある。

伝統や格式にしがみ付いていては、生き残れないことだってある。勿論、伝統をあっさり捨てろとは言わないし、僕だって日本人だ。伝統の継承が如何に重要で、如何にナイーヴな問題であるかくらいは把握しているつもりだ。

結婚式の時にはあまり話さなかったけど（僕が酒でダウンしていたからね）木乃魅さんは、高貴な姫様を具現化したような人だった。同時に、とても温和な人だった。
ハクが旦那様を眼前で袋叩きにしても、ニコニコ笑っているくらいには。……寧ろ肝が据わっているのかな？

そうそう、詠春さんの娘なんだけど、やっぱり赤ん坊というのは見ていて和む。兎に角和む。
おまけに……とんでもない事なんだけれども。

名付け親に、僕が指定された。
それも、呪術協会の幹部達が揃って見守る中で。

Ｗｈｙ？
そう聞いても、詠春さんは「キラ君に付けて欲しいのです」の一点張りだったし、木乃魅さんには「旦那様の言うことなら、間違いありませんなぁ」と笑顔で言われた。

ハクは興味が無いのか一言も喋らないし、アスナは赤ん坊の頬を突くのに夢中。

散々迷ったんだけど、結局、木乃魅さんの名前と詠春さんの“春”（花が香る季節）から、“木乃香（このか）”となった。

近衛　木乃香、爆誕。

詠春さん達呪術協会の方々がどんちゃん騒ぎしている中、僕はシャワーを浴びに行った。

何故かって？　命名の時に緊張し過ぎて、背中がぐしょぬれになったんだよ。

……唯、呪術協会の皆様。

ハクとアスナが堂々と浴場に入ってくるのを、止めておいてくださいよ。

そうそう、翌日にハクとアスナと一緒に山で森林浴を楽しんでいたら、烏族（天狗）の一団に出くわした。

しかも全員、敗戦国の兵士の様に歩いていたから、何事かと思って聞いてみた。

そしたら、里の有力な豪族の娘に、“禁忌”とされる白烏（はくう）が生まれてしまったらしい。

豪族の人（烏？）は何とか庇おうとしたけど、名家が禁忌を犯すの

は問題。だからといって、捨てたり殺したりするのはさらに問題だし、親としての感情も許されない。

長く里には置いておけないため、取り敢えず連れだした――ということらしい。

先頭にいる長身の男性がその豪族の人、後ろにいる人がその奥さん、後ろに八人程ずらずら並んでいる（大名行列みたいだ）のが家来らしい。

その子は真っ白な翼を持っていて、髪（生まれて間もないのに何故かフサフサだった）も真っ白、眼は真っ赤だった。肌も白い。

……翼さえなければ、先天性色素欠乏症（アルビノ）の子供ですと言えば通用しそうな気がするのは僕だけかな……。

それにしても、瞳の色以外はハクそっくりだ……と思い始めてしまうと、もう駄目だ。

他人事だと思えないし、僕は赤ん坊に弱いんだよ。

妹のおしめを替えてやっていた時からさぁ。

さっそく（ハクに頼んで）交渉してもらい、僕たちに引き取らせてもらうことになった。

育てることが出来なくなった子供を、許可を貰って引き取っただけだから問題も無い。念のため、豪族さん（桜咲（さくらざき）　弾指（だんし）という名前だった）直筆の証書を書いてもらった。

そして、このコ――桜咲（さくらざき）　刹那（せつな）、いや、親権がこっちに移ったから、綺羅川（きらかわ）　刹那（せつな）になるのかな？……後で決めるか。

……ていうか、何かハクの子供と言ったら通じそうなくらいハクに

似ている。絶対口には出さないけどさ。
理由？　襲われそうな気がするから。ハクと、不機嫌そうなアスナに。

京都に行って手に入れたもの。
命名者の称号。赤ん坊。

……あと八つ橋。

第弐拾壱話　カレの悩みと京都来訪（後書き）

木乃香は兎も角、刹那はアスナと同じようなポジションとする予定。つまり、ハクにこき使われる存在。

赤ん坊の時からハクにしごかれる刹那……唯の虐待ですね、こりゃ駄目だ。

木乃香との繋がりも出来ました。ヒロインというより、「頼れるお兄さん」という関係になる予定です。

刹那の生い立ちや髪の色とかは、完璧に捏造です。御留意下さい。

御意見御感想宜しくお願いします。

第弐拾弐話　カレと回天と長代理（前書き）

アスナ・刹那・木乃香の三人娘のフラグ回。

そろそろ原作突入が近いですね。

第弐拾弐話　カレと回天と長代理

ウェスペルタティア王国の内乱は、未だ大混乱の呈を示しているらしい。
そして、ついにハクから凶報（？）が舞い込んできた。

アリカ女王、そしてナギが行方不明になったそうだ。ついでに、ガトウさんとも音信不通。

アリカ女王とナギの婚約（あと子供も生まれたらしい）は、未だ大衆の知るところではない。
取り敢えず、王国には王立政府の代わりに暫定政府が成立。国号は“王国”だけど、“王が不在の王国”という何とも微妙な国家になった。

このままアリカ女王が行方不明のままなら、一〇年とかからず新王家が誕生するか、共和国に再編するだろうね。

幸いと言うか何というか、暫定政府に連合が本格援助を始めた。
取り込もうとする魂胆が見え見えだ。
でも、当然帝国は良い顔をしない。
帝国もまた、暫定政府への援助を行った。

御蔭で、政府も民も飢えることだけは防げている。
その代わり、今や王国は第一次世界大戦時のバルカン半島のような有り様――要は、“火薬庫”状態だ。

もっともハクは、まるで天気予報か何かの様にあっけなく言っていたけどね。「次の戦争は王国が中心となるでしょう」って。

因みにガトウさんが音信不通になった時、咄嗟にハクを問い質した僕は悪くないと思う。
ハクは残念がっていたけどね。「殺せなくなった」って。
――――――――――――――――――――――――――――――
―九割は本気だったと思う。

それと、アスナは漸(ようや)く普通に成長するようになってきた。
だから実年齢は全然違うけど、今の外見年齢は、アスナと刹那は同じくらいだ。

相変わらず、教育方面はハクに丸投げだけどさ。

そんなこんなで四人暮らしをしていた時に、木乃魅(このみ)さんが麻帆良にやってきた。
無論、非公式で。

呪術師、特に日本国内の呪術師は、一部（皇室や幕府・藩お抱え）を除いた殆どが一般民衆と共に生活していた。
その分、民間人から隔離されるように暮らしていた旧世界の西洋魔術師や、魔法が広く知られている魔法世界(むこう)の連中よりかはよっぽど秘匿術や意識が優れているそうだ。

だから学園側に知られず、少人数が侵入することは、それほど難しいことじゃあない。
おまけに今回は麻帆良学園都市に入らず、直接外麻帆良(ここ)に来たから、

見つかる危険性（リスク）はさらに低い。

あと、関西呪術協会の表向きの長は詠春さんとなっていて、木乃魅さんは長代理だ。

でも、詠春さんがあくまで一介の武人（剣士）で、政治家には向かないこと。そしてあくまで余所者（神鳴流）であることもあって、詠春さんは戦闘方面を担当。内政とか外交関係は、木乃魅さんが“補佐”という形で丸々引き受けている。

勿論、正式な場では詠春さんが長になっているから、木乃魅さんが表舞台に出ることはそうそうないけど、敢えて悪い言い方をすれば、政治方面での詠春さんは木乃魅さんの傀儡だ。

当然、詠春さんはそれを自覚しているし、納得もしている。

『紅き翼』という魔法使い側で参戦した詠春さんが、全てを取り仕切る事を下が納得しないなんて、ちょっと考えれば誰でもわかる事だしね。

話を戻すけど、つまりは木乃魅さんが来ると言うことは、そっち方面ということだ。

「……生憎、此方は紅茶と珈琲しか用意しておりません」

ハクがあからさまに不機嫌そうな表情で、木乃魅さんを睨みつけた。

因みに、木乃魅さんは一人で来た。この人、やっぱり胆力がある人だ。

ハクが怒っているのに、ひたすらニコニコしたままだ。

「其れは残念ですなぁ。でも、榛名はん、日本人なら緑茶や抹茶に拘らなぁあかんよ？　ちょうど良い茶葉を御土産に持ってきたから、これを機に、どうや？
ハクはんやったら、並の茶屋より美味しく淹れられそうやし、茶葉もその方が幸せやろうしなぁ」

そうも言いつつ、ハクがぞんざいに置いたティーカップに口を付ける木乃魅さん。やっぱり公家の人だからか、その様子はとても優雅だ。

「……で、どうなさったのですか？　娘自慢ですか？」

「其れも悪くはないし大外れでもないんやけど、ちと違うんよ」

僕の質問に答えるように、木乃魅さんは風呂敷から書類を取り出した。

「実は娘――木乃香を、麻帆良学園に通わせることになりました」

同時に口調も、流暢な標準日本語に変わる。
雰囲気もガラリと変わって、木乃魅さんは目を光らせた。

……あ、厄介事なのは確実かな？

って……今何て言った？

「木乃魅さん……冗談ですよね？」

「……………………仰りたい事は、よぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおくわかるので……あまり突っ込まないでほしいです」

麻帆良学園都市は、関東魔法協会の本部も兼ねている。呪術協会からすれば、仮想敵組織のど真ん中だ。
そこに西の長の娘を送る？
厄介事にしかならないでしょ。

「……理由は？」

「現在呪術協会、そして魔法協会は、“冷戦”とも言える此の状況の打破に動いております」

面倒だから、木乃魅さんの話を要約する。

西と東は、両方共に、此のいがみ合い（そして小規模な小競り合い）を何とかしたいと思っている。

東がそう思っている理由は、極度の戦力不足だ。
連合の財政難と戦力不足の影響で、麻帆良は専守防衛が精一杯――
――いや、それすら妖しい状況。戦争っていうのは、護りに徹していては絶対に勝てない。

長期戦は危険だし、何より麻帆良側にとって“防御に徹する”ということは、学生や民間人を戦禍に放り込む事と同義語だ。
だから、決して許されない。

とはいえ、打って出たところで戦力差は圧倒的なのだから、吶喊（トッカン）しても勝ち目は薄い。ていうか、無い。

そして西の理由は、国外問題と世界樹の問題。
西と東だけでは、確かに西の方が戦力でも地理的にも有利だ。
でも、東との全面戦争は、連合への宣戦布告に等しい。

幾ら呪術協会でも、魔法世界の（弱っているとはいえ）大国を相手にするのは厳しいし、勝てたところでメリットは麻帆良と世界樹の奪取のみ（流石に魔法世界に乗り込もうとする者はいないと思う）。

はっきりいって、割に合わない。
確かに事実上日本全土を影響下に置ける事と霊地、そして世界樹を手に入れられる旨味は大きい。
が、その代償として呪術師サイドに大被害が出ては、元も子もないし、敗戦の可能性も零ではない。

そして、現実世界には呪術協会を良く思っていない魔法組織も少なくなく、魔法世界に構ってばかりもいられない。
アラスカ魔術連合とかの同盟組織も多いけど、敵もまた多い。

戦力の分散は下策中の下策。
だから西としては、とっとと麻帆良とけりを付けて、他の組織の対策に専念したい。

そして、麻帆良には世界樹がある。
世界樹を支配下に置くのは無理だけど、“暴走”させるのはそれ程難しくはないそうだ。
つまり関東魔法協会は、やろうと思えば世界樹を利用して、敵も味方も全て巻き込んでの自爆が可能。

勿論、そんな莫迦げたことをやるとは思えないし（ていうか、そこ貸しているだけで僕の土地だし、世界樹も僕のものなんだけど）、そんなことしたら日本列島どころか東亜（東アジア）が滅びる。
でも、連合ならやりかねない。

まったく、大戦末期にパリに爆弾しかけるよう命じた（各将軍の独断で実行されなかったけど）ヒットラーが可愛く見えてくる。

どうでも良い雑学だけど、各将軍がヒットラーに逆らったのは、ドイツ軍の将軍ってのが大抵プロイセン貴族だったからだ。
ドイツの貴族は武人が多かったけど、それ以上に芸術を愛した人が多い。芸術方面に明るい人にとって、パリを破壊しろなど狂気の沙汰だからね。
ヒットラーも一応画家志望だったんだから、パリの価値くらいわかるだろうけど、やっぱり焦っていたのかねぇ。

……話が逸れた。

でも、西と東の確執はそう容易く収まらない。

そこで、ある種の“交換留学”が行われることになったそうだ。

つまり、東西交流にかこつけて、両方に人質を送り合う。

それで、西からは長の娘の近衛　木乃香。そして教師役として葛葉（くずのは）　刀子（とうこ）さん。

東からは、麻帆良有数の実力者である神多羅木（かたらぎ）という教師と、電子戦のプロ弐集院（にじゅういん）　光（みつる）教諭、瀬流彦（せるひこ）という新任教師と、明石（あかし）という大学教授。

木乃魅さんが言うには、麻帆良学園長は魔法教師を四人も寄越すのを渋っていたみたいだけど、呪術協会は「長の娘を送るのだから、魔法協会もそれなりの面子を寄越すのが常道であろう」と言って、戦力を武器に猛然と言い張ったそうだ。

「いやぁ、あの時の御父さん……近衛　近右衛門学園長の顔色は、溜飲が下がりましたよ」

木乃魅さんはそう言って笑っていたけど、やっぱり近衛家なのに東のトップになった学園長を、木乃魅さんは快く思っていないのかなぁ？

プライベートに関わる事だし、突っ込むのはよしておこう。

「麻帆良の学園長殿は、読みが甘いですなぁ。……麻帆良に木乃香（むすめ）を抱き込んで、魔法と関わらせようとする魂胆が見え見えや」

実は木乃香は、すでに陰陽道については木乃魅さんから教わっている。

詠春さんは反対していたけど、木乃魅さんは「この子は強大すぎる力をもっとる。魔力タンクには、武器が無いとあかん」と言って、詠春さんの言葉を斬り捨てた――――ってハクから聞いた。

でも、その事は呪術協会の上役数人とその部下、あと僕達くらいしか知らない。

「御父さんの気持ちも分からないでもない。要は私と同じやからな。でも、西洋魔法を教え込むのはマイナスや。東西融和どころか、確執に油を注ぐことになる」

東には西洋魔法至上主義者と言う感じの人がいるし、西にも東洋呪術至上主義者と言う感じの人がいる。

大方、学園長の魂胆は、西の長の娘に西洋魔術を覚えさせ、其れを東西融和の象徴とするつもりなんだろうけど、西からすれば、それは暴挙以外の何物でもない。宣戦の理由にすらなる。

「そこで、榛名様達に木乃香をさり気無く……本当にさり気無くで良いので、護衛、そして学園長殿の監視を頼みたいのです」

そう言って、木乃魅さんは深々と頭を下げる。

「う～～～～～～～～～～～ん……」

ハクに任せれば、それで済む話なんだけど……
…あ、そうだ。

これを機に、アスナと刹那を学校に行かせてあげよう。やっぱり、そういうのは必要だと思うし……。
認識障害をかけて、“綺羅川”の名字を使っていてもわからないようにしていれば……問題は無いと思う、きっと。

でも、二人だけじゃあ心配だから、ハクの分身体に護衛とか監視とかを頼もう。

そんな事を考えながら、僕は木乃魅さんに頷いた。

第弐拾弐話　カレと回天と長代理（後書き）

詠春さんの奥さん、木乃魅さんは本作のオリキャラです。詠春さんと違って政治方面を担当。思考も豪胆でリアリズム、木乃香を“裏”から遠ざけるのは愚策として却下したツワモノ。

木乃香達が麻帆良に通う理由はこうなりました。

なお、直接描写はしませんが、ネギは原作通りウェールズ在住。

ザジはもう一人のレイニーディ（ポヨポヨ言ってる人）が普通に『完全なる世界』側で孤児救済などに手を出しているので、「人を知る」ために麻帆良行きで普通にいます。

真名は神多羅木教諭らの代わりに麻帆良に雇われて麻帆良行き。超もスタンスや立場は原作と異なりますが、“とある理由”により麻帆良に来ます。

要は、３－Ａの面子で原作から欠けている人はいません。

増えることはあり得ますが。

御意見御感想宜しくお願いします。

第弐拾参話　カノジョとカレの娘の学園対談（前書き）

テストやレポート提出が近付いてますので、さっさと麻帆良編に入りたいのですが……間に合いそうにありません。
テストが始まったら更新が停止するでしょうし、夏休みになって帰郷したらＰＣ使えないし、如何したものか……。

学園長とのお話編です。

本作の学園長、死亡フラグしか立ってません。

あと、次話から「アスナ」表記を「明日菜」表記に統一します。名字も刹那と共に「綺羅川」とします。

第弐拾参話　カノジョとカレの娘の学園対談

最近、マスターが御喫煙なされる回数が増えています。
私としては大問題です。
健康上は、マスターは実質的な不老不死ですし、常にマスターの健康をチェックして不具合が生じるたびに治療していますので問題ありません。
ですが、此れはマスターのストレスが増加している証。見過ごすことなどできません。

やはり、あの呪術協会長代理が此処に来た時点で、あの雌蟲を始末しておくべきだったのかもしれません。
マスターが首を縦に振らなければ、私は確実に、あの雌蟲を嬲り殺していたでしょう。

もどかしいですね。
マスターが御許しくださるのなら、すぐにでも殺しに行けるのですが……。

いえ……あの雌蟲は今は、いえ、最初からどうでも良い。災厄の種であることなど、此の世の蟲全てがそうなのです。
マスターにとって、無害な蟲など存在しません。駒一号（アスナ）や駒二号（刹那）も例外ではありません。
マスターに完璧に尽くせるのは、私だけです。

そう思いながら、私はマスターの御心労が少しでも減るように、マスターへの御奉仕を続けるしかありません。

マスターが少しでも気持ち良くなって、煩わしい蟲共の記憶が、一時でも離れるように。
私の身体を余すことなく使い、マスターに捧げ尽くすのです。

……あぁ、何か余計なモノまで思い出してきました。
あの煩わしい蟲が……。

数日前、関東魔法協会理事室（麻帆良学園学園長室）に、三人の客人が訪れた。
正確には、二人の少女と一人の青年だった。

少女たち二人は麻帆良学園本校女子小等部への入学試験に合格した新入生で、オレンジがかった明るい髪をストレートにしているオッドアイ少女は綺羅川（きらかわ）　明日菜（あすな）。白髪をストレートにしている紅眼少女は綺羅川（きらかわ）　刹那（せつな）という。
二人揃って、下したばかりの本校女子小等部の制服に身を包んでいる。

一方、残りは黒髪の細身で柔らかな物腰の青年で、黒いスーツに藤色のネクタイを締めている。
いつもは革ジャンとジーンズ姿が多い此の青年は、綺羅川（きらかわ）　榛名（はるな）―

――ではなく、彼の従者である綺羅川（きらかわ）　ハク――――でもなく、正確にはハクの分身体が化けた姿である。

本物の榛名は、本物のハクと共に家に残っていた。

理由は、三人の目の前にいる老人――――学園長に、榛名の能力などを隠しておくためだ。

高位の術師なら、相対するだけで相手の実力はある程度把握できる。

無論、ハクの力で明日菜や刹那の力も含め、隠すことは可能である。が、念には念を、だ。石橋を叩き過ぎて困る事は無い。

アスナや刹那の能力や実力が知られても、痛手とはいえ如何にかなる。が、榛名の能力や実力が知られる事は、大きすぎる痛手――というのが、ハクの見解だった。

後はハクの個人的感情で、本物の榛名の姿を学園長の前に曝したくなかったというのも大きい。

もっとも、明日菜と刹那も、反対する理由は無かったので（それ以前に怖すぎて反対などしたくなかったので）、寧ろ進んで本物の榛名が同行することを反対したのだが。

「それで、関西呪術協会より依頼を受け、我々が近衛（このえ）　木乃香（このか）を護衛することになりました。

とはいえ、実際に護衛するのは彼女たち二人だけです。

なお、“護衛”とは近衛　木乃香に降りかかる危険を排除すること、

彼女への魔法バレを防ぐこと、彼女の肉体・精神面での自由に、束縛からの解放も含まれております」

榛名（ハク）は微笑みながら、学園長に提出した書類の束を確認するよう指で弾く。

何十年も前から榛名だけを見つめ続けていた、ハクだからこそできる所作だ。

榛名の挙動や発言を逐一記憶しているハクにとって、榛名の真似をするなど容易いことである。

その所作は、榛名の娘（書類上は）である明日菜と刹那からして見ても、思わず「本物の榛名だ」と思わせてしまう程自然だった。

そして学園長は、書類に目を落としながら顔面蒼白で震えている。

まさか榛名達が（正確には明日菜と刹那、そしてハクの分身体だけなのだが）木乃香の護衛を担当することになるとは、彼も露程も予測していなかっただろう。

「木乃香の護衛役として人員を送り込ませてほしい」という木乃魅（むすめ）からの要請に、あっさりと許可を出してしまった自分の軽率さを、恨んでいるに違いない。

此れで、木乃香に（魔法関係者が）不用意に接触しては、麻帆良が滅ぼされる可能性すら浮上してきた。

そしてそれは、木乃香の祖父である学園長自身も例外ではない。少なくとも、魔法関係者として接触することは困難――いや、不可能になった。

「木乃香に何かあった場合、此方は契約に基づき報復を行いますし、呪術協会も宣戦布告と受け取ります。
手始めに呪術協会に派遣された或いは派遣予定の魔法協会人員を処刑し、麻帆良に軍団を送り込む予定――とのことです」

一方的な宣言だが、学園長は其れに口出しすらできない。
呪術協会の言い分は至極もっともだし、綺羅川　榛名は麻帆良の裏の支配者だ。
しかも此方には、部下が独断で――とはいえ襲撃をかけたり、“自然調査”にかこつけて無断で結界内の調査にあたった（結果は何の成果も出なかったが）という負い目もある。
此方は土地を借りているだけで、向こうが法的にも実力的にも何もかもが上なのだ。

まさに、絶対的な差だ。勝ち目などありはしないことを、学園長は良くわかっていた。

が、何時の間にやら、その勝ち目も無い相手と呪術協会が手を組んでいたらしい。
いや、単に依頼を受けただけなのだが、それでも麻帆良側からしてみれば、其れはどっちにしたって凶報以外の何物でもない。

「し、しかしの～、綺羅川　榛名君の名は、麻帆良……連合にとっては大きすぎる意味を持つからの～」

そう言って、学園長は糸口を見つけようとする他はなかった。
が、此れは愚策だった。

榛名（ハク）は苦笑して居心地悪そうに頬をかいているが、内心では怒り狂っていた。
榛名に化けても、いや、化けているからこそ、榛名への忠誠心は一ナノメーターも減ってはいない。

因みに、この事は現在進行形（リアルタイム）で即時ハク（本物）に伝わり、彼女は怒りのあまり、榛名を抱きしめてホールドしてしまった事は余談である。

そして明日菜と刹那も無表情ながら、あからさまに不機嫌となった。
明日菜は片眉をあげて唇を噛んでいるし、刹那は額に青筋が浮かんで口元も歪んでいる。

「其れが何です？　別に土地の支配者（オーナー）として、麻帆良の行政につらつら文句を並べるつもりはありませんよ？
それに、其れが如何したのです？　貴方達は、犯罪者の家族や親族は、一人残らず捕縛するのですか？　あ、粛清するの間違いでしたか？」

遠回しな言い方に、榛名（ハク）も皮肉気に返す。
が、その意見は正論だった。
それだけに、学園長は呻くしかできなかった。

何も犯罪者の娘だからと言って、彼女たちを逮捕して裁判にかけたり、攻撃したりすることは許されない。
許されないのだが――――それがまかり通ってしまうのが、“正義の魔法使い”の組織であり、麻帆良であり、メセンブリーナ連合なのだ。

犯罪者の家族・仲間・友達もまた、犯罪者に違わない。だから、我々“正義の魔法使い”が裁きを下す――そんな無茶苦茶な論理を、彼らは信じて疑わない。
無論、例外も多いが。

そもそも“犯罪者”とは何か？　読んで字の如く、“犯罪”を犯した者である。
では、“犯罪”とは何か？

一般に犯罪とは、“刑法その他刑罰法規（要するに法律）に規定される犯罪構成要件に該当する有責且つ違法な行為”と定義される。
敢えて、誤解されかねない程簡単に言うと、法律に違反することが犯罪である。

「何を当たり前なことを」と思うかもしれないが、此処で疑問に思わないだろうか？
犯罪者の家族・親族・知人ｅｔｃであることが犯罪行為など、一体何処の法律に明文化されているというのか。

それ以前に、容疑者の行為が犯罪かどうか（即ち法律に違反しているか否か）は、専門の司法機関（日本国で言うところの裁判所や法務省）の仕事であり、言わば現場レヴェルで対応する“正義の魔法使い”（警察）の仕事（管轄）ではない。

つまり“正義の魔法使い”の行動は、現代日本国で例えるなら、警察官が自分で逮捕状を作成し、自分で犯罪者に発砲したり拘置所に送るなりして、自分で裁判を行い、自分で判決を下すようなものなのだ。

この時点で、現代日本国の常識に染まりきった人間は、思わず唖然として目を瞬(しばたた)せるに違いない。

日本人なら、警察と検察と裁判所が全く別系統の組織であることくらいは御存知だろう。少なくとも、日本国ではそのようなシステムが成り立っている。

本来なら、“正義の魔法使い”もそうであるはずなのだ。が、大抵の者は自分たちの行為が、現場レヴェルでの分を猛烈に越えた行為であることに気付いていない。

そんな歪な組織が、麻帆良であり、連合なのだ。

無論、緊急時に備え、現場（個人）にある程度の裁量権を与えるのは、決して間違ってはいない。

いちいち上に御伺いを立てていれば、捕えられる犯罪者も捕えられなくなる。

が、現在の“正義の魔法使い”の場合は、その裁量権があまりに大きすぎる、というよりかは曖昧すぎるのだ。

「それ以前に、僕……いや、私の罪歴は削除されているはずですが？　犯罪者ですらない者を、おまけに子供を、貴方がたは襲うのですか？」

「……わかった。孫娘を宜しく頼むぞい」

「言われるまでもありません。っていうより、言われる筋合いがありません」

不機嫌そうに榛名（ハク）はそっけなく返した。

無論、彼女の怒りは収まっていない。沸騰寸前だった。

「それで、お主らに頼みたい事が――――」

「あ、却下」

「ほっ！？」

「明日菜、刹那。学園長殿は執務に忙しい。これ以上邪魔するのは失礼だろう。さっさと退散しようじゃあないか」

「はい」

「諒解です」

何故か陸軍式の敬礼で応える明日菜と刹那を引き連れ、榛名（ハク）は学園長室を後にした。

雑音を無視して。

第弐拾参話　カノジョとカレの娘の学園対談（後書き）

ハクは榛名を束縛しているようですが、あくまで榛名を危険に遭わせたくないだけです。
榛名自身も納得しています。

御意見御感想宜しくお願いします。

お気に入り登録数３，０００突破！
夢が叶ったぁ！！　本当に感謝感激です。
最近は、交渉とか対談とか地味な話が続いていますが、此れも布石のため仕方が無いということで。此れから先は原作に突入させ、子日と合流させ、いつも通りのほのぼのを目指します。

第弐拾肆話　娘二人の進学（前書き）

初の刹那視点回です。

明日菜視点も書いてみるつもりです。

今回、いきなり時間が飛びます。中学一年へと。原作突入まであと少しです。

第弐拾肆話　娘二人の進学

私達、つまり綺羅川（きらかわ）　刹那（せつな）と綺羅川（きらかわ）　明日菜（あすな）が、麻帆良学園に入学してから数年が経ちました。

本校では、中学生から寮生活となります。

そのため、私達は中学進学早々、泣く泣くお父様と離れることになってしまいました。

まぁ、此れもお父様とハク様の、私達に経験を積ませるための御好意ですから（ハク様の場合は九割九分九厘悪意でしょうけど）、それに何時までも駄々をこねるような年でもありませんし……ハク様が怖いですし……どの道、護衛対象のこのちゃんが、京都に戻れば任務終了。

精々高校か大学までですから、一〇年かそこらの我慢です。

それに、ハク様に転移術式を教えてもらいましたから、何時でも戻れますので。

１－ＡでのＳＨＲが終わった後、私は寮で同室となった少女と、部屋で荷物整理に明け暮れてました。

ダンボール箱とかに梱包された荷物は、業者の人（お疲れ様です）がリストと一緒に置いていってくれています。

其れを見ながら、私と龍宮（たつみや）　真名（まな）は各々の整理を続けています。

此の真名という少女は“裏”の人間で、旧世界でも屈指のスナイパー。おまけに魔法にも精通している傭兵です。

学園の警備任務にも参加しています。私はしていないのですが……
それでも、小等部の時に少しだけ話をした事があります。
詰まるところ、顔見知り以上同胞未満。

「……何だい、それは？」

「え？　これで……これか？」

後ろから話しかけられ、私はダンボール箱から取り出したものを持ちあげます。
小さい時からお父様やハク様といったように、敬語で話していた相手が多かった私は、つい敬語口調になってしまうことが多々あります。
普通に話すのは明日菜だけなのですが、その明日菜は無口で会話の機会があまりありません。
このちゃんは今は兎も角（クラスメートですし）、昔は滅多に会いませんでした。
おかげで、敬語で話すのが癖のようになってしまいました。
だから、慌てて言い直しました。

「見ての通りだが？」

私が取り出したのは、モコモコした中くらいのサイズのポシェット。

唯、魔眼を持っている真名には、中に入っているものに感付いたようです。

だったら、説明は不要ですよね？

「とんでもないものを、さり気無く装備しているんだね」

「そうか？」

ポシェットのチャックを開けると、棒状のものが何本も飛び出しました。

私が持ってきた、“道具”達の柄などです。

備えあれば憂いなし。

一応、私は剣術を中心に習得しています（習得中と言った方が正しいですけど）が、無手も補助術も何でも、ある程度は習得しています。

手段が多くて、困る事は無いでしょう？

表向きは一般生徒と言うことになっている私と明日菜ですが、何があるかわかりませんから。

「本当に、君は生真面目だね」

「不服か？」

「いや、別に」

そう言って、真名は肩をすくめました。
飄々としている彼女ですが、その実力は本物です。“魔眼”を持ち、私と同じ半異人（ハーフ）である彼女には、すでに私達の立場については話してあります。
同僚（ルームメイト）の彼女の理解と協力が得られるのは、かなり大きいことです。

少なくとも、中立に回ってくれれば問題ありませんよね？
潰す手間が省けますから。

……最近、自分でも思うのですが……考え方が、ハク様に似て来ました。
それとも、ハク様は私達をこう育てるために、色々なことを教えて下さったのでしょうか？

お父様のことは名前しか言っておりませんが、真名曰く「麻帆良（ここ）の真の支配者（オーナー）が綺羅川　榛名だということは、知る人は知っている有名な話」だそうです。

流石は傭兵、といったところでしょうか。

「一度は会ってみたい」と言ってましたし、お父様の周囲に女性が増えるのは感心しませんが、協力の対価として会わせてあげることにしました。
とは言っても、“後払い”なのでまだまだ先です。

……私は悪くありません。ハク様に目をつけられお仕置きされるにしても、棺桶にダイビングするような真似ををした真名が悪いんです。
一応警告はしましたよ？

でも、お父様と繋がりを持てるということは、危機管理的（リスクマネジメント）な意味でも大きいんですよね。
何しろハク様は、お父様の知り合いは殺しはしません。
それに、お父様の傘下に入るということは、此の世で最も強いハク様の庇護対象（あくまで命だけは保障されるという意味ですけど）になるということです。

ハク様に危険視されるという（どうしようもなく）高いリスクを冒してでも、お父様との“繋がり”は魅力的でしょう。

……私からすれば、迷惑千万ですけど。

基本的に、お父様は知り合いには気をかけます。
だからこそ、私達は生きているんですよ。

部屋の整理が済んだ後、私は寮近くの喫茶店で、明日菜と待ち合わせしました。
ちなみに、明日菜はこのちゃんと同室です。
ハク様が学園長を脅し……懇願した成果、というやつです。
私が喫茶店に入ると、すでに窓際の席を明日菜が陣取っていました。

「刹那」

「あ、こんにちわ」

私が軽く手を振ると、明日菜は小さく頷きました。無愛想に見えますが、彼女からすれば、精一杯の誠意です。

「気分はどうだ？」

「重畳」

私が聞くと、明日菜は文庫本から目を離して呟きました。
どう見ても“重畳”だと感じているような仕種ではありませんが、明日菜は大体無表情・無感動を地で行ってますから、それ程珍しくはありません。

「あ……」

「？　どうした？」

「珈琲のミルクが足りない」

「それは不幸な」

「取って来て」

「着いたばかりなんだ、労わってくださいよ」

「さっさと行って来い、伝書鳩」

「……誰が伝書鳩ですか誰が。私は白烏(はくう)だ！　しかも伝書鳩は伝達手段であってパシリじゃあない！」

こんな何の脈略も無い会話も、明日菜の特徴です。

「行け」

「まさかの二文字ですか！？」

「Ｇｏ」

「……ったく、わかりましたよ」

そう言って、私はまだ冷たい椅子から立ち上がりました。
ミルクは……レジ付近の籠の中に入っていたはず。

ええ、どうせ私は綺羅川家のヒエラルキィ最下層ですが、何か？
一番新入りですし、実は一番年下ですし。

ヒエラルキィの構図ですか？
お父様＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞（絶対に越えられない、そもそも越える気すらない壁）＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞ハク様＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞（絶望しか見えない壁）＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞明日菜＞＞＞＞＞私です。

実力的には私と明日菜は拮抗しているんですが、明日菜には……逆らえません、何となく。
……こんなことまで、ハク様に似なくともいいじゃあないですか。
もっとも此の話を真名にしたら、「お前も大概だよ」と言われました。何故？

「はい、ミルク。あ、店員さん、私はアップルティを一つ」

ふぅ、ようやく腰を下せました。
学園都市内にあるだけあって、此の喫茶店は中学生も小学生も気軽に来れるところが良いですね。
おこづかい的にも。

私達も、このちゃんと常時一緒にいるわけではありません。普段はハク様（の分身体）がこのちゃんを見張り、私達は授業中や、一緒に遊んだり勉強をしている時くらいしか一緒にいません。
ハク様ならバレませんけど、私達がやったら唯の常時ストーキングですし、ずっと見張っているのも骨が折れます。
それに、護衛のためとはいえずっとプライベートまで監視するのも、あまり褒められた行為ではありませんし。

私達もそこそこの実力ですからね。このちゃんに何かあったり、学園都市に良からぬ輩が侵入してくれれば、ある程度はわかります。
まぁ、何かあってからでは遅いですけど。

学園の方からして見ても、このちゃんに何かあれば責任問題になります。

能の無い鷹も、愚鷹なりに努力するでしょう。
……多分、ですが。

それに、実は麻帆良内を姿を消して“観察”しているハク様の分身体は、一人や二人ではありません。
私も詳しい事は知りませんが、その配備人数は最低でも二桁だそうです。

……何ですか？　その要塞なんて目じゃない程の警戒網は。

私達二人がかりでも、ハク様の分身体の小指ほどの力も無いのに（比喩ではありません）。

「あぁ、美味しい」

「刹那、現実逃避している目になってる」

「ほっといてください。私だって頑張ってるんだ」

「……あぁ、ハクの規格外さにまいっているんだ」

何故バレましたし。

あぁ、本当に憂鬱です。

生まれてこの方、ずっとずっと憂鬱です。

お父様に会えたことで、全てがチャラになりますが。

第弐拾肆話　娘二人の進学（後書き）

刹那の口調は、敬語時々普通、或いは敬語と普通口調のごっちゃまぜ。
固くもなりすぎてないけど、フランクでもない。
それが本作の刹那です。

あと、明日菜は口数が少ないクール少女です。成績も悪くありません。
刹那も悪くはありません。

悪い結果を出すと、ハクにお仕置きされますから。

御意見御感想宜しくお願いします。

番外編第参話　とある妹の麻帆良行き（前書き）

妹編はとりあえず一区切り。

これから先、子日視点が入るときは、一部を除いてほとんどが本編になります。

番外編第参話　とある妹の麻帆良行き

お久しぶりです。
綺羅川（きらかわ）　子日（ねのひ）改め、ネノヒ＝アーウェルンクスです。
正直どちらでもいいです。

あれから修業したり、此の世界について色々と勉強したりしていたら、何時の間にやら結構な月日が経っておりました。
……それにしても兄さん、結構ヤンチャしまくってますね……。

まぁ、綺羅川（きらかわ）　ハクっていうのは……絶対、兄さんが神様に頼んで頂いたものでしょうね。
兄さんは、自ら危険に突っ込んだりしませんし。

嫉妬？
しませんよ、所詮従者程度ですし。

さて、私は『水のアーウェルンクス』を拝命（このネーミング、どう考えてもやられ役です）しただけあり、魔法も水系統に特化していますが、それだけではありませんでした。

どうやら私は、水に限らず“液体”ならなんでも生み出し、操れるようです。

やろうと思えば、相手の体内の血液やら水分やら体液やらを全部抜きとって、カラッカラにしてやることも可能です。
え？　なぜわかるのか、ですか？　実践したからに決まってるじゃあないですか。
フフフ。

その液体を固形化することも可能でしたが、奈何せん、生み出すのに比べて魔力の消費が激しいです。
いえ、固形化自体は容易いのですが、それを維持しているのが少々骨が折れます。

どうやら私は、魔力量自体が一番目や他の兄弟（シリーズ）よりズバ抜けているそうなのですが、それでも節約するに越したことはありません。

あと、気の量もかなりありましたし、身体能力も前世とは比較になりません。
唯、私には格闘術の知識などありませんから、要は莫迦力に任せることくらいしかできませんけど。
習ってもよかったのですが、正直、能力の把握に手間取りすぎました。

“液体”を生み出し、操れるって、応用範囲が広すぎると思いませんか？
色々試していたら、結構かかってしまいました。

修業は兄さんと出会った後でも幾らでもできますし、一先ずは兄さんへ会うために、現実世界（私は“旧世界”などと言いません。並行世界とはいえ、自分の生まれ故郷が“旧”扱いされるには嫌ですから）へと向かうことにしました。

デュナミス、そして造物主（ライフメイカー）（ウチのボスみたいな人です）など、世

話になった人たちに挨拶をして、私は現実世界に向かいました。
兄さんのことについては、皆さんに色々教えてもらってわかっています。
麻帆良学園都市でしたっけ？　そこに向かう必要がありますね。
強力な結界があるそうですが、軽く神力（なぜか生まれたときから使えるようになってました）を放出すれば、ハク、とかいう従者もわかってくれるでしょう。

この知識は生まれた時から頭に入っていたのですが、神力は私と神の創造物――つまり綺羅川　ハクしか使えないそうです。例外は造物主（ライフメイカー）くらいですが、彼のそれは、私やハクのそれと比べると、純水と泥水程の違いがあるそうです。

要は、神力を見せるだけで、神と関わっていることの証拠となります。
そうすれば、向こうも完全無視で追い返すような真似はしないでしょう。

別に吶喊（トッカン）をかけても良いのですけど、勝てる見込みは薄そうですしね。
何でしたら、太平洋の海水を、一滴残らず叩き込んであげますけど。

……魔法世界の湖で実験したら、普通に出来ました。水を全部空に集め、球状にして、地上に叩き込むことが。
無人島でやって正解でしたね。島半分が抉れるとは思っていませんでした。

兎に角私は欧州から日本へと航空便で向かい、日本国に入りました。
そのまま麻帆良に行き――――――――――――――――――――。

「綺羅川　子日様ですね、御待ちしておりました」

純白の長髪がとても綺麗な、メイドに出迎えられました。

……あ、私の髪も純白でした。

……いやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいや、そんなことよりもなぜバレたんですか。おかしいでしょ、コレ。

「……あの、綺羅川　ハク……さんですか？」

「ええ。綺羅川　子日……様」

……今、「様」の部分が遅れたのって、態(ワザ)とですよね？

…………………………………………………………

……上等じゃあないですか。

…………………………………………………………

…………………………………………………………

…………………………………………………………

……ド畜生ぉおおおおおおおおおおおおおおおおお

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおッ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！
！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

んだテメェはぁ、来日直後にガンつけに来るたぁ上等すぎるわマジで（現在地、羽田空港ターミナル）！！！！

余裕か？　あ？　兄さんを独り占めしている余裕かぁ！？
実妹ナメんな！！
血統に勝るもんは何一つねぇ！
……あ！　今はもう兄さんと血がつながってないじゃあないですか、私！！

…………………だ、だが心の中では実妹です、無問題(モーマンタイ)です無問題(モーマンタイ)。

「はい、そうです。これはこれはご丁寧に。流石は“兄さんの従者”ですね。何時からわかっていたのですか？」
「貴女が覚醒してからです。すぐにわかりました、マスターの妹が此方に来た、と。それに……そのペンダント」

……一番目(エセアニキ)から聞いた通りです。やっぱり兄さんは、私がプレゼントしたペンダントをこっちに持ってきてくれたんですね。
嬉しさのあまり、口元が一ミリ程動くのを感じます。

……フフフ、兄さん以上のポーカーフェイスの使い手、綺羅川　子日を嘗めないでください。
……好きで無表情ではないんですけどね。

「フフフ、それは重畳です。では、とっとと兄さんの許に案内してくださいな」

「ええ。マスターの命令は受けていませんが、仕方がありません」

……オイコラ、露骨に嫌そうにしないでくださいよ。
……殺してやりたくなるじゃあないですか。

「御丁寧な送迎、感謝します」

んなこと一ミリも思っていませんけどね！

「それ程でもありません。好きでやっていることではありませんから」

……ほう。
ええい、口下手で舌が回らぬ自分が憎いですね。
強硬手段は……駄目です、何を考えているんですか、私。

此処は羽田空港ですよ？　こんなところで暴れるわけには――――。

「この様な羽蟲でも、送迎くらいは誠意を持って応対しましょう」

――――――――――――――――――――――――――――――――――グッバイ、羽田空港！　ハロー、廃墟＆死体累々！

「……品の無い御方ですね。兄さんの従者として、恥ずかしくないので―――――――――」

其処まで言った後、私の意識は途絶えました。

次に目を覚ました時は、

「あ、子日！　起きたのか」

兄さんの顔がありました。

……あ、もう死んでもいいです。

番外編第参話　とある妹の麻帆良行き（後書き）

注）子日視点の特徴

口下手で引っ込み思案、加えて基本無表情の子日は、明日菜みたいにクールではなく、単に表に出せないだけです。
テンションが高いのも、心内描写だけで、表情や態度にはおくびも出していません。
ちなみに、ハクに因縁つけてる部分がありますが、あれも心理描写だけで、実際は片眉ひとつ動かしておりません。

要は、心理描写（一人称視点）と実際の言動のギャップが凄まじいのが、子日の特徴です。

御意見御感想宜しくお願いします。

第弐拾伍話　カレと妹の再開と今後（前書き）

テスト期間中ですが、合間を見つけて更新です。今日はレポート提出だけですので。

子日との再会の榛名視点、後半は子日視点です。

原作開始に入ると、どうしても刹那、明日菜や子日、ハクの視点が増えてしまいます。榛名が動きませんから。

そこは御了承下さい。榛名に出番がないわけではありませんので。

第弐拾伍話　カレと妹の再開と今後

ハクから子日の話を聞いたとき、多分僕は久しぶりに仰天したと思う。
だって、普通は此の世界に妹も来ているなんて思わないよね？
ハクが言うには、アーウェルンクスシリーズの一人に憑依して、つまり僕と違って見た目は変わっているそうだ。
でも、ハクが（引き摺りながら）子日を連れてきたときには、何というかすぐにわかった。
ピン、ときたというか、目を回していても（回している理由については聞かないでおいた）直ぐにこの白髪少女が子日だと感付いて、そして正解だった。

目を覚ました後、待っていたのは子日の怒声だった。

「兄さん！！　一体、どれだけ私が、家族が、心配したと思っているのですか！！……本当に本当に本当に本当に本当に本当に本当に本当に本当に本当に本当に本当に本当に本当に、本当に……！！
いえ、不可抗力でしたし、兄さんに吠えてもどうにもなりませんね、忘れてください」

俯く子日は、再び顔をあげて僕を見つめた。
その顔色は無表情だったけど、声の調子は機嫌が良さそうだ。

「ペンダント、持っていてくれたのですね……」

そりゃあ、あれだけ肌身離さずしておくよう念を言われれば……ね。

「どうぞ、子日さん」

「……どうも」

いつの間にか立ち上がっていた子日は、ハクがテーブルに置いたコーヒーカップに近付いていき、その中身を一気に飲み干した。

「……美味しいですね、其処らの喫茶店の珈琲が泥水に思える程には。

……っていうか、ついに様付けですらなくなりましたか。まぁいいでしょう、従者さん」

「当然です。此れは本来なら私が栽培し、厳選したマスター専用のモノですから」

感心したように息を吐く子日と、少し棘のある口調で答えるハク。

いや、ハクは明日菜や刹那にすらこんな口調だから、別に子日だけが嫌いなわけでもないだろうけど。

でも、いつもながら無表情の我が妹は意に反さず、ハクにカップを渡す。

ハクは素直にそれを受け取る。

我が家では、家事は基本的にハクが担当している。
明日菜と刹那が加わった今でもそれは変わらない。
もっとも、明日菜たちが家事ができないというわけでもなく、メイドの作法（だから何でこんなの覚えさせたんだ？）と一緒に一通りの家事育児は習得しているみたいだ。
明日菜たちは今は寮暮らしだし、家事ができて困ることはないだろうしね。

「あー、それで、子日？」

「はい、兄さん」

「これから、どうする？」

「兄さん……私に、ここ以外に行くあてなどありません。ここに住ませてください。……お願いします」

「……うん、僕的には全然問題ない。良いよね、ハク？」

「はい、マスター」

チラリ、とハクのほうを見ると、ハクは即答してくれた。

「有難うございます、兄さん」

「でも、良いのか？　今の子日はアーウェルンクスシリーズで、つまりは『完全なる世界（コズモエンテレケイア）』の一員なんだろう？　仕事があるんじゃあないか？」

「あ、それについては問題ありません」

子日はそういうと、空中で指を動かした。
軽い音とともに、羊皮紙が一枚出てくる。

「どうぞ」

見てみると、御丁寧に英語の筆記体で、［ネノヒ＝アーウェルンクスこと六番目（セクストゥム）を綺羅川　榛名一派専用の連絡員に任ずる］と書かれている。

「無期限の長期任務です。何かあれば呼び出されるかもしれませんが、ある程度は独自裁量が認められています」

つまり、基本的にはずっとここにいても問題ないということだ。

「造物主（ライフメイカー）やデュナミス達には色々と御世話になっていますから、最低限の義理は返そうと思います」

初対面の人間には無愛想に見える子日だけど、彼女はとても生真面目で、それ故に義理はしっかり返す。いきなり造物主（ライフメイカー）を裏切るような真似はしないだろう。

「ところで子日、此処は学園都市だけど……どうする？　ちょうど明日菜と刹那……あぁ、僕が諸事情で預かっている子たちなんだけど……が中一で本校女子中等部に通っている。良かったら行かないかい？」

「学校ですか？　即決はできませんね。考えてみます……。ですが、ちょっと外を歩いてきてもよろしいですか？　兄さん。どんな所か興味もあります」

成程。“百聞は一見に如かず”というし、ロクに知らない学校に通えというのも急すぎる話だ。

「わかった。同行しようか？」

「それには及びません。お気遣いには感謝しますが、兄さんには兄さんのやることがあるのでしょう？　御気を使わなくとも結構です」

そう言って、子日は優雅に一礼すると背を向けた。

……僕のやることって、何かあったっけかなぁ？

兄さんのことを調べるにあたって、もう一つ調べたことがあります。麻帆良学園都市のことです。世界でも最大級の学園都市ですが、実態は関東魔法協会の根城。その背後には、最近色々と混乱しているメセンブリーナ連合が控えています。

しょうもないものがあるかもしれない。兄さんの敵がいるのかもしれない。

荒事は好きではありませんし、血塗れ泥だらけの戦いも性に合いません。私のような者は、アトリエにでも引きこもって創作活動をしているほうが、性に合います。

それに、本当に此処に危険分子がいるのなら、あの従者が片を付けているでしょうし。

しかし、私はとある噂が気になっていました。

『真祖の吸血鬼『闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）』が麻帆良学園都市にいる』

一部の情報屋のグループで、実（まこと）しやかに交わされていた噂。
ですが、世の中こういう荒唐無稽（と思われがち）な噂の中に、真実が溢れているものです。
あの６００万ドルの賞金首は死亡したと伝わっています（既に賞金は取り下げられているので、元・賞金首と言ったほうが正しいですが）が、連合の公式発表程眉唾ものの話もありません。

確かあの従者はその三倍の賞金額（こちらも元ですけど）でした。
だから、雑魚（ザコ）とでも判断して見逃したかもしれません。

……それにしても、さっきは不覚でしたね。頭に血が上り、先制攻撃を受ける可能性をまったく考慮していませんでしたし、何でアレを使おうとしていたのでしょう？
その点では、止めてくれやがったあの従者に感謝するべきでしょうね。

ええと、確かこの近くにログハウスが……ありましたね。

……あれ？
感じる魔力がどうも少なくありませんか？
隠蔽しているにしても、此れは……いや、確かに感じ取れる魔力はあるのですが、その僅かな魔力は何と言うか……そう、あまりに薄っぺらくて、これは……。

ドアが閉められ、微妙に開いた隙間から温（ぬる）い隙間風が吹いているような……まさか、封印でしょうか？

感じから察するに、どう見てもあれは人外（おなかま）の魔力ですよね。
隠蔽するにしても、もう少しはマトモな隠し方をするでしょうし……其方（そちら）の公算が大のようです。

あれ？　だとしたら脅威になり得ませんね。
まさか、従者が……いえ、彼女なら、もっと確実な方法……そう、殲滅に走るでしょう。封印してＥＮＤなど、彼女にしてはお粗末すぎます。

……話を聞くしかありませんか。
あぁ、初対面の人と話すのは、私が苦手なことベスト3に入るのですが……ええい、此れも兄さんとのセカンドライフ（文字通りの意味での）のためです。綺羅川　子日、一世一代の殴り込みでもかけますか。

……取り敢えず、チャイムを鳴らしましょう。

「どちら様でしょうか」

……アンドロイド？　ロボットの方が出てきました。
……早くも予想外ですが、挫けるには早いですね。

「今日は、良い天気ですね。
早速本題に入って恐縮ですが、『闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）』が脅威かどうか確かめに来ました。
あ、申し遅れました。私は子日。綺羅川（きらかわ）　子日（ねのひ）と申します」

こういうのは、素直に言うのが一番です。
腹の探り合いは好きでもありませんし、痛くもない腹を穿（ほじく）られるの

はもっと嫌いです。

私の望みは、兄さんの傍にいることだけですから。

……あ、でもあの従者は消したいかもしれません。

第弐拾伍話　カレと妹の再開と今後（後書き）

次回はエヴァと子日の接触編。それと、ハクがエヴァをどのように見ていたのかも明らかになります。
ハクにとっては、榛名以外は蟲の一言で済ますのですが……。

御意見御感想宜しくお願いします。

総合ＰＶ２，０４４，６８３アクセス、ユニークアクセス数３３６，８３８人有難うございます！
２００万超えた記念としての企画を考えていますが、アイディアが全然浮かびません。
御意見がある方は、御遠慮なくお願いします。可能な限りは、それにお応えしたいと思っております。

第弐拾陸話　妹と『闇の福音』と襲来警報（前書き）

エヴァとのお話編です。

テストとレポートが一段落ついて……いないのですが、時間が空いたので更新します。

第弐拾陸話　妹と『闇の福音』と襲来警報

「……どうぞ」

「お気遣い、有難うございます」

まさか吸血鬼の家に来て、玉露を出されるとは思ってもみませんでした。

まぁ、美味しいから喜んで頂きますけどね。

玉露を淹れてくれたロボットさん――絡繰（からくり）　茶々丸（ちゃちゃまる）さんに頭を下げて、目の前で横柄そうに（正座している）私を見下ろしている『闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）』を見上げます。

「綺羅川　子日といったな」

「はい、そうですが？」

「あの“綺羅川（キラカワ）”か？」

「麻帆良（ここ）に、他の“綺羅川”がいるとは思えませんが」

「――――――――――――――――――――――――――――――――フフ、そうだな」

『闇の福音』――――一見いたいけな少女、いや幼女にみえますが、

保持している力はあまりにも強大――の、はずなのですが……。

「『闇の福音』？　貴女が？　確かに魔族でしょうけど……此の魔力はないでしょう」

殺気を受け流しつつ、もう一口。

……ほ。

一息つくって大切ですね。

「……チ。忌々しいが、魔力が少ないのは本当だ」

「封印でもされましたか？　貴女ともあろうお人が」

「買い被ってくれるじゃあないか、え？　あの綺羅川の姓を持つ者が」

「誤解を招かないでいただきたいのですが、私は其処まで強くありませんよ？
修業も始めて一〇年かそれくらいですし、まだまだ世間知らずのお子様です」

「それにしては大胆不敵な真似をしてくれる。如何に魔力が封じられていようと、此処が私の領域（テリトリィ）であるという点には変わらんし、魔法が使える手段も無数にある。従者もいる」

其処まで言って、『闇の福音』は流し目で横を見ました。

私もつられて見てみると、其処には油断なく構えを取る茶々丸さんの姿が。

「そもそも自身が世間知らずであることを自覚している世間知らず程、性質（タチ）の悪い奴はおらん。
おまけにこの状況下において、貴様はかなり余裕のようだ。自ら虎穴に飛び込んできておいて良く言うわ」

余裕……ではありません。
実は私、対人戦闘を始めとする実戦経験がほとんどありません。
ずっと術の開発や能力の掌握、あとは『完全なる世界（コズモエンテレケイア）』の方々と組み手くらいしかしていません。
まぁ、あれは組み手という名の殺し合い（ガチバトル）でしたが、それでも何回もこなすうちに相手の手の内もわかってきました。

つまり……手の内を知らない相手と戦うのは久しぶりということです。
それも、相手は生半可な実力者ではありません。目の前にいる真祖の吸血鬼然り、ロボット少女然りです。

ですが、此処には“空気”があります。
空気があるということは“水分”もあるわけで、水気があるところなら最高です。
それこそ、四方八方燃え盛る業火に囲まれてもいない限り、私の“能力”は衰えません。

水分がなくとも、自身の水分や血液を操れば良いですし、体術や普

通の西洋魔法も使えます。
手数（カード）なら幾らでもある。問題なのは、それを何時切るか、そもそも切るかどうか、です。

……いや、そもそも最初から喧嘩腰なのも良くありません。兄さんのため、此処で『闇の福音』との関係が悪化するのも考えものです。
今、両者を繋ぐ関係は全く成立していません。
あの従者は彼女たちのことを全く無視していたのでしょうか？

理由は？
脅威になり得ないから？
潰したところでメリットもないから？

……どうせ来るなら、その辺りのことを聞いておくべきでしたね。
答えてくれたかどうかは分かりませんけど。

できれば、此の吸血鬼には兄さん寄りの中立になって欲しいところです。敵対してくれなければそれで良い。

「私のクラスメイトに、二人の綺羅川がいる」

突然、そんなことを言ってくる『闇の福音』。
……二人？

あ、兄さんが言っていましたね……「諸事情で預かっている子たち」と。確か……アスナとセツナでしたっけ？

「あの二人に接触しようと思ったが、ものの見事に無視されたよ。その途端にこれだ」

『闇の福音』は其処まで言って、ようやく腰を下ろしました。

「何がしたいんだ、貴様たちは？　貴様たちが陰で麻帆良を握っていることくらい、私は知っている。
その正体が『狂乱の主（カオス・マスター）』と『絶望の白（ケール・ヘーメラ）』ということもな」

「その言い方には少し語弊がありますね」

「……何？」

「今回のことは私の独断です。
貴女のクラスメイト二人の行動については、私も認知外ですし……」

そもそもまだ、顔合わせもしていませんからね。
まぁ、十中八九、あの従者が二人に指示を出したのでしょうけど。

「それに言ったでしょう？……『脅威かどうか確かめに来た』と」

「ふむ」

思案顔になる『闇の福音』。

「手を出すな、ということか？」

「ええ、概ねそんな感じです」

「私がそんなことをしても、メリットなどないぞ」

「『闇の福音』ともあろうお人が、見当はずれな答えを返しますね。では逆にお聞きしますが、私たちを敵に回さないこと以上のメリットが此の世にありますか？」

「ふむ。言ってくれるじゃあないか」

「間違っていますか？」

「……いいや」

『闇の福音』は組んでいた腕を解き、ニヤリと笑いました。
此れが様になっているのが不思議ですね、見た目幼女なのに。

……いや、私も今はもう長身ではなくなりましたから、あまり人のことは言えませんか。
六番目（セクストゥム）という人外になってしまいましたし。

「万全の状態でなら兎も角として、封印（いまの）された状態で貴様らを敵に

回しても勝ち目は薄いことは確かだ。
そもそもあの『絶望の白』の戦い方を知る者は殆どいないし、『狂乱の主』に至っては魔法使いかどうかも良く分かっておらん。もはや伝説級の存在だな」

「貴女に言われたくはないと思いますよ？　悪い子を食べてしまう、御伽噺の吸血鬼さん」

「人をなまはげみたく言うなッ！」

いや、実際なまはげのような扱いでしょうに、とは勿論声に出しませんし、勝ち目が薄いどころか存在しないことも伝えません。

まぁ、『闇の福音』は相手の実力を見誤る程莫迦ではないでしょうから、直接会えば実力の差に気付くでしょう。

教える義理もありませんしね。

「コホンッ！　それは兎も角、貴様もそっちの類だろう？　どうも創られた感じがする。
魔力を封じられようとも、真祖の吸血鬼である私の研ぎ澄まされた五感は消えん。
貴様の気配や臭いは、人工物のそれだ」

「御明答です。流石は『闇の福音』」

まぁ、教えるつもりはありませんけど。でも、一応は心の中で賛辞

を送っておきましょうか。

「しかし、流石に何も報酬がないのでは、動く気にはなれんな」

「でしたら」

そう、でしたら――――――――――――――――――ん？

……。

何で従者が此処にいるんだぁあああああああああああああああああああああッ！！！？？？

「……何しているんですか、従者」

「羽蟲が籠から出てしまったので、様子を見に」

……本当、イチイチ腹が立つメイド野郎ですよねー。

うっかり殺してしまいそうで怖いです。

従者は『闇の福音』を睨み、何気なく呟きました。

「その封印の解除が報酬――――というのは如何でしょうか」

「――貴様ッ『絶望（ケール）の――――」

「答えなさい」

……あれ？　機嫌が悪いようですね……。

……あ、原因私か！

「……解けるのか？」

「当然です。では……」

そう言って、従者は指を鳴らしました。

あ、パキンと音が響き――解けましたね、此れは。

封印や解呪については門外漢ですが、そのくらいのことはわかります。

「こ、これは……フ、フフ、フハハハハハハハハハハ！！

解けた！！　忌々しいあの莫迦がかけた呪いが、遂に解けたぞ！！！

此の私、エヴァンジェリン＝Ａ＝Ｋ＝マクダウェル、いや、『闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）』の復活だ！！！」

そう言って、今にも小躍りしそうなほどにテンション高く叫ぶ『闇の福音』。

ていうか何ですか、その『ようやく封印が解除されたら主人公たちに倒されたラスボス』みたいな台詞は。ラスボス（笑）臭がぷんぷんするのですが。

……まぁ、いいか。あんなイタイ人は放っときましょう。

「茶々丸さん、もう一杯お願いします」

「はい、綺羅川様」

「あ、綺羅川だと兄さんやそこの白メイドとかぶりますので、子日と呼んでください」

「かしこまりました、子日様」

……何かイイですね、この子。一家に一人欲しいです。

それはそれとして。

「従者、良いんですか？　あの中毒者（ジャンキー）もどきを復活させて」

「問題ありません、アレの力などたかが知れています。それに……」

其処まで言って、従者は漸く私を見ました。

「自身の足元に蜂が出てくれば、蠅共もマスターどころの騒ぎではないでしょう。
そろそろ潮時かと思っていましたし、今はもう明日菜と刹那が学園にいます。
……それに、“厄介な情報”も入っていますから」

「厄介な情報？」

「ええ。……あの蟲共、厄介な遺物を残してくれたものです」

……あぁ、すごく嫌な予感がします。

具体的に言うと……厄介事しか起こさないような人が襲来してくるような、平穏を壊すフラグが立ったような……決めました。

麻帆良学園に通いましょう。そして、兄さんを護らなくては。

第弐拾陸話　妹と『闇の福音』と襲来警報（後書き）

次回からネギ襲来編……もとい、原作突入する予定です。
ネギアンチが多分に入ることもあるかもしれませんので、御注意ください。
子日は２－Ａメンバーに加わる予定です。

２００万超えた記念ですが、グラムサイト2様より頂いた『榛名の誕生日会編』と、ケフィア様より頂いた『明日菜と刹那の教育編』を予定しております。原作突入後、少ししたらそれを書く予定です。
グラムサイト2様、ケフィア様、アイディア有難うございます。

御意見御感想宜しくお願いします。

追加の補足説明
子日の性格や行動についてけっこう言われているのですが、彼女はもともと榛名の消極性をカヴァーするために創作したオリキャラです。
一見思慮深く生真面目で優等生気質なのですが、彼女は兄のことが絡むと急に暴走しがちとなります。
よって短絡的に行動したり、勝手に色々引っかき回したり、思い立ったが吉日という精神で行動するのはある意味では彼女のウリです。
よって、生温かい目で見守って下されば幸いです。

追加の補足説明？
ネギの境遇についてです。悪魔襲撃は原作ままですが、本作のネギは村で両親（ナギ&アリカ）とともに暮らしていました（但し秘匿しています）。そして両親も諸事情で動けなくなっておりまして、麻帆良に来ません。

そのためネギはファザコンではなく、魔力制御も原作よりかはマシになっています。
唯、連合の教育が原作より遥かにナショナリズム（？）傾向にあるため、歪んでいるところは原作よりも歪んでいます（あくまでも少し、ですけど）。
両親も教育に集中できているわけでもないので。
そんな設定です。

第弐拾漆話　娘と英雄の娘の出迎え（前書き）

今回より原作突入します。

第弐拾漆話　娘と英雄の娘の出迎え

「失礼します。綺羅川（きらかわ）　明日菜（あすな）、入ります」

ノックをしてから、扉の向こうへと呼びかける。

「近衛（このえ）　木乃香（このか）、失礼します」

後ろにいる木乃香もそう言うと、即答に近い形でＯＫが出た。
扉を開け、執務机に座っている学園長を見る。

「お呼びでしょうか、学園長」

「うむ。実はのう、明日、此処に新任の教師が来るのじゃ」

「教師、ですか？」

私たちは今、女子中等部二年生だ。そして明日は三学期の始業式となっている。
私たちは寮生活だから、大半が学校が始まる一週間前には実家から学生寮（こっち）に移る。
それに、部活とかあるいは単に面倒だからとかの理由で、長期の休みを寮で過ごす人も珍しくはない。
私と木乃香もその例に洩れず、一週間くらい前に寮に戻ってきた。

片づけやら買い物やら宿題のチェックやらでごたごたしつつ、ようやく落ち着いたのが一昨日（おととい）だ。
あとはまぁ、のんびり本でも読んでようかと思っていたけど、私たちは学園長に呼び出されていた。
いや、正確には学園長の孫の木乃香が呼び出され、同室（ルームメイト）の私はおまけみたいなもの。

「二人には、その先生の出迎えを頼みたいのじゃよ」

「何でですか？　そんなもの、教師や事務員の仕事では？」

「忙しくてのぅ」

忙しいはないだろう。
何のための学園都市だ。学園関係者なんて腐るほどいるだろうに。

「……それで、どういう人なん？」

木乃香が聞いた。

「ちょっと時期が中途半端すぎやせぇへん？」

「此の子じゃ」

黙殺。
そして資料を渡される。“資料”といっても、名前と性別、年齢が書かれたＢ５の紙に、顔写真が添付されているだけ。
資料というより、メモと言ったほうがいいかもしれない。書かれている字も手書きで、御世辞にも丁寧とはいえない字体だ。

一瞥して、私は体がぐらりとゆれるような感覚に陥った。

［ネギ＝スプリングフィールド］

咄嗟に木乃香を見ると、彼女も少し厳しい顔つきになった。

スプリングフィールド？
あの？
ナギの息子……アリカ女王の息子？
私と同じ、王国の血を持つ子？

……冗談がきつすぎる。

王国に未練がないと言えば嘘になる。
道具として使われていたから、ロクな思い出もない。私は悠久の時、ずっと孤独と罪悪感に耐え……てはいないか。
ロクに感情も持たない、廃棄寸前のマネキンだったのだから。
でも、あそこは私の祖国（こきょう）だ。

榛名が言うには、ナギやアリカが行方不明になってからは、殆ど名だけの“王国”になっているそうだ。実際は暫定政府（代理政府）

の下に統治され、連合と帝国の傀儡となっている共和国。

……そのことについては、今更どうしようとも思わない。
ハクが魔法世界のエネルギィ源を火星そのものに組み替えた以上、魔力の枯渇など起こりようがない。魔力そのものが使われていないのだから。

だから、私の魔法無効化能力は、魔法世界の救済に何の役にも立たなくなった。救済の鍵（キーパーソン）から唯の兵器（ウェポン）に早変わり。
表向きは、全く変わっていないけど。

でも、私はもう綺羅川　榛名の娘、綺羅川　明日菜だ。
アスナ＝ウェスペリーナ＝テオタナシア＝エンテオフュシアじゃあない。

現実世界（ここ）で生きていくんだ。

だから……今更ナギの息子なんて、来られても困る。
流石に一応私の血族だし、邪険にしたりはしないけど。
……表向きには、唯の他人だ。

……ちょっと待った。

「学園長……先程、教師と仰いましたよね？」

「問題あるかの？」

大アリだ。

惚ける学園長を見て、心の中で舌を打った。

私は表向きは一般人だ。でも、学園長は、私の正体に感付いているはず。

そもそも麻帆良（ここ）には、私も顔を合わせたことがあるタカミチが教師として働いている（しかもウチの担任）。

でも、タカミチはハクがしっかり釘をさしていたし、それ以前に私や刹那、子日には強力な認識障害ｅｔｃがかけられている（無論、かけたのはハク）。

それは逆にいえば、知っているのはタカミチと学園長だけだということ。

西の刀子先生は、私が“綺羅川”の人間であるということは知っているだろうけど、流石に魔法世界の姫だとは夢想だにしていないだろう。

そんな私、それに家族の面々、木乃香――――こんなイロモノ揃いの学園に、教師、しかも子供が来るとは……子日がたまに呟く「フラグ」というのは、おそらくこんな感じだろう。

「子供が教師……おまけにまだ、数えで一〇歳じゃあないですか。幾らなんでもこれは……」

「おじいちゃん、どういうつもりなん？　そもそも、何でこの子をウチらが出迎えねばならんの？」

「当然、いきなり正規職員にするつもりはないから安心せい。まずは研修をしてもらうつもりじゃ」

「……研修としても、これは……ひょっとしておじいちゃん、日教組（日本教職員組合）にでも喧嘩を売るつもりなん？」

木乃香が呆れたように溜息をつく。

彼女もまた、表向きは一般人だ。しかも私と違って、学園長に知られていない。

此処で「英雄の息子が何しに来たんだ」などとは言えない分、木乃香としては一般論――正攻法で攻めるしかない。

そして、その木乃香の隣にいる私も。

……無駄骨に終わったのは、言うまでもない。

何しろ、もう決定事項なのだから。

……短慮だ。

何処の誰だか知らないが、短慮すぎる。

ナギとアリカは息子と暮らしていたはず、何とも思わなかった？

……いや、止められる手段なんてなかったのか。動けないだろうし。

何しろナギはアリカと結婚してしまった。今は其れが秘匿されているけど、世間に公表されたらナギ、そしてその息子もウェスペルタティア王家に名を連ねることになる。

特に、息子は普通に考えれば王家の後継者と認識されるだろう。

そうなると、彼らの存在は……王家転覆を狙う王国の人々、そして

王国を裏から握ろうとしている連合からしてみれば、邪魔でしかない。

………………こんなときに、ハクから鍛えられた頭が役に立つとは。

勝手に回転してしまう自分の頭が憎い。

現実逃避したくて仕方がない。

………………そんな息子が麻帆良に来たら、それこそ良からぬ連中が餌に引き寄せられるようにやってくる。

一般人がいて、子供もいて――――――――――――――――何より、榛名とハクがいる此処に。

そんなことになれば、ハクは……「此の子蟲は餌にしかなりませんね。それも害蟲の……消しましょう」とか何とか言うに決まっている。

……止める？　ハクを？

無理無理無理無理無理無理、死んでも無理。天元突破しても、逆立ちしても、北半球と南半球が逆になっても無理。

あの人を一秒止めている間に、私は軽く三〇桁は殺される。

いや、それでも止められない。多分、あの人の足の動きをコンマ一秒止められたら、それだけで私は自分を褒めちぎりながら血の海に沈むことになるだろう。

ハクを止められるのは、榛名だけ。

その榛名にしても、ネギをかばう理由がない。

「子供を殺すな」くらいしか言わないだろう。

……それはつまり、殺さなければ何をしてもどうなろうとも良いという意味。

いや、いやいやいやいや、ちょっと待て。落ち着け綺羅川　明日菜。本当にハクがナギの息子……もうネギでいいか、ネギを始末するつもりなら、そもそも麻帆良に入れないだろう。

ハクの分身は、文字通りの意味で世界中にいる。
そしてネギは、連合王国（イギリス）ウェールズから日本に向かうらしい。
イギリスから日本までの移動ルートで、ハク（の分身体）がネギを探し出して始末するなど、東京の都心で信号機を探すのと同じくらい簡単だ。

もし、本当にネギが麻帆良に来たら、それはハクが容認したこと……少なくとも即殺するつもりはないということだろう。

「まったく、関東は何を考えておるんや！　ウチのクラスの副担任に『千の呪文の男（サウザンドマスター）』の息子を就任させるやなんて！！」

それで、先程から木乃香が激怒している。
それはもう、いつもの大和撫子も裸足で逃げ出すくらいぽわぽわした雰囲気など、水平線の彼方にブン投げてきたかのようだ。

「あとでおかあさ――――いや、関西呪術協会長代理に報告してやるわ！
唯でさえ一触即発なのに……ガソリンタンクに松明放り込むような真似、してくれおってからに――――」

木乃香の言葉遣いはかなり荒い。
当たり前のことだ。
東と西は、それはもう、千切れかけた藁のような友好関係を結んでいる。そしてその藁が完全に千切れれば、待っているのは魔法と呪術の応酬――戦争だ。
そしてそれに、一般人が巻き込まれない保証などどこにもない。

「まぁまぁ、このちゃん」

刹那が宥めるように木乃香の肩を叩く。
その表情には、苦笑と諦観がありありと見受けられた。

「英雄の息子だろうが、要は無視しておればいいのでしょう？　なら問題ない、世話を任されるよりかはずっとマシです。
担任は高畑（たかはた）先生のままでしょうし……敵が攻めてきたとしても、そんなのは英雄の息子を麻帆良に送った魔法使い側の責任でしょうし」

「刹那……最近、ハク以上に榛名に似てきてない？」

「最近わかってきましたからね。
お父様と幸せになるか、化生（けしょう）や屑共の骸（むくろ）の中に埋もれ、喰い荒されるか」

そう言って、刹那はシニカルな笑みを浮かべたまま肩をすくめた。

現在、私たちは駅の前にいる。時間は例のナギの息子が来る……予定の一〇分前だ。
ちなみに、認識障害結界や遮音結界その他諸々をを敷いているから、今にもちゃぶ台返ししそうな剣幕の木乃香や、「暇だ」と言って平然と真剣を抜いて素振りする刹那を見られることも聞かれることもない。
ちなみに私は、そんな二人を見ながらボーッと街の喧騒を眺めている。

「ほら、そろそろ来るかと――――」

「あ、来た」

私が視線を向けると同時に、刹那が結界を解除する。
目の前でキョロキョロしているのは、何と言うか……そう、フルートを仕舞うような長方形のケースを背負い、車輪がついた旅行鞄をカラコロ引き摺っている赤毛の少年だった。

懐に仕舞ってあった写真と見比べ、私たちは少年の下に向かう。

流石に、本人を怒鳴りつける気はないのだろう。木乃香は既に、ぽわぽわしたいつも通りの微笑を浮かべ、刹那は凛々しく顔を引き締めている。

私？　鏡を見てないからわからないけど、おそらく無表情だろう。
こういう性分なのだ。

「もし、君は、ネギ＝スプリングフィールドですか？」

刹那が話しかける。

すると、少年はかしこまったように直立不動の姿勢になり、頭を下げた。

「はい、ネギ＝スプリングフィールドです。麻帆良学園に教師として赴任してきました」

第弐拾漆話　娘と英雄の娘の出迎え（後書き）

ネギは副担任候補として研修予定。無論、原作通り試験に合格すれば正式に副担任になります。
担任はタカミチのまま。

ネギは原作よりかは秘匿を意識しています。そのため、長方形のケースに杖を仕舞い、旅行鞄に魔法具やらなにやらを詰め込んでいます。
さらに、麻帆良に入った時点で障壁を切っています。
但し、重い荷物を持つために身体強化は使っています。

御意見御感想宜しくお願いします。

第弐拾捌話　娘二人の動揺（前書き）

前半明日菜視点、後半刹那視点。

此の二人はセット扱いが多いと思います。それに、子日や木乃香がプラスされます。

第弐拾捌話　娘二人の動揺

ネギを学園長室に送り届けた後、私たちはさっさと退散して教室に向かった。
廊下を歩いている最中、刹那がこんなことを言ってきた。

「ハク様は、何を考えているのでしょう？」

その顔は、無表情としかめっ面と当惑の表情を足して三で割ったような感じになっている。

勿論、刹那は口を開く直前に認識障害やら会話内容変換やらの結界を展開している。
まぁ、秘匿を意識するなら常識だろう。
……麻帆良（ここ）や連合（むこう）の魔法使いは、ほとんど意識していないが。
確か、結界の展開術式もロクに習っていないはずだ。

「あれが来ることが分かっていたなら、我々に一言くらい言っても良かったでしょうに」

「さてね」

刹那の意見に対する私の答えは、自分から見てもそっけないものだったが、仕方がない。
私自身、かなり混乱しているのだから。

念話で教室にいるはずの子日（彼女は二年一学期の時に私たちのクラスに転入してきた）に状況を知らせながら、私は刹那へ振り向く。

「ここであだこうだ言っても推測の域を出ないだけ。言ったところで仕方がない。
少なくとも、あのハクが全く知らずにナギの息子を見過ごしたとは到底考えられない」

「正論だが……聞いたところで、答えてくれるとも思いません」

ふぅ、とため息をつきながら、刹那はこめかみをトントンと叩いている。

「ハク様も麻帆良に教師か生徒として潜入していてくれれば……まだ良いのですが」

「せっちゃん、ハクさんに、そないな期待するだけ無駄やで？」

後ろの二人の会話を聞きつつ、心の中で同意する。

本物（オリジナル）のハクは榛名とともに家にいるし、分身体は“意識”のみの存在となって、麻帆良に分散配置されている。
いつも、ハクは周囲を“観察”している。
それはあくまで“観察”しているだけだから、感情が籠ることもない。監視カメラに見られているのと同じようなもの。

だから、私たちにもハクの視線や気配を感じ取ることはできない。

だから、怖い。

木乃香は兎も角、仮にも一〇年ほどずっと一緒に暮らしている私と刹那を見る時でさえ、ハクは感情の一つも持たない。

ハクにとって、私たちも一緒。

蟲。

ハクがそう呼んでいる、榛名に害を与える存在。

それに、私たちも含まれている。

私たちが平然と生きていられるのは、榛名が私たちを気にかけてくれているから。

でも、ハクにとって――――榛名に隠れて私たちを始末し、榛名の頭から私たちに関する記憶や痕跡を消すことなんて、それこそ造作もないこと。

それを実行しないのは、単に榛名の意思を優先しているだけ。あの人に、私たちへの配慮など微塵も無い。

しかも、ハクは榛名以外の人間と接触することを極度に嫌う。

だから、変化して麻帆良に潜入するようなことはしない。それ以外にも理由はある（らしい）けど。

つまり、ハクに頼むのは無い物ねだり。それも危険な賭けでもある。

……それでも、刹那の言うことにも一理ある。

「もしかしたら……」

情報の流出を恐れた？
私たちの反応を自然なものにしたかった？
学園側の対応を見たかった？
それとも、唯の嫌がらせ？
或いは――――――

「まさか、ね」

私は小さく呟いた。
そう、幾らなんでもこの考えはないだろう。

……私たちに丸投げ、なんて。

観察眼は、私より真名の方が優れています。
そう判断した私は、ネギ先生の歓迎会を終えた後に寮室で真名に話しかけました。

「どうで……どうだろう、ネギ先生は？」

「才能はあるようだし、礼儀もなかなか様になってはいるね。外面に限れば、だが」

真名はなぜか御機嫌でした。

サムズアップしながら（どっちの意味かは判断しかねます）、笑顔で私を見ました。

「……どうしたんだ？　やけに御機嫌じゃあないか」

「実は、この前榛名さんからこんなものを貰ってね」

そう言って、真名が胸ポケットから取り出したのは一枚のカードでした。

銀色の、見た目は何とも味気ないカードですが……私たちにとっては、かなり意味が大きいカードです。

「真名も貰ったのか？」

「と、いうことは、刹那もかい？」

「あぁ、ずっと前にな」

そう言いながら、私もポケットから同じカードを取り出しました。

真名の要望通り、長期休暇などを利用して、彼女はお父様とハク様に会うことになりました。

色々話をしたようですが、結構仲が良くなったようです。

元々彼女は傭兵です。「優秀な傭兵は軍の憲兵以上に鼻が利き、命の捨て所や誰につくのがビジネスチャンスに繋がるかをわきまえている」――――とハク様も言っていました。

後から聞いた話によると、真名はハク様の殺気にひるんだものの、臆せずにいたようです。

……私ですか？

すでにトラウマと化しているため無理です。同じ土俵にすら立てませんよ。

小さい時からボコボコにされていれば、そうなります。

そんなこともあってか、私たち綺羅川一家と真名は良好（？）な関係を築いているわけです。

そしてこのカード、私たちはそのままの意味で“護符（タリズマン）”と呼んでいるのですが、要は自動で防御壁を張れるというものです。

もっというと、これはお父様の“絶対防御”の能力が籠っているカードです。

詳しい仕組みは私にはよくわからないのですが、バッテリー式で最大一〇分間、お父様の“絶対防御”と同じモノがカードを保持している人に展開されます。

名前の通り、いざという時のための御守りです。

「話を戻そう、ネギ先生の件だが……今は何とも言えないが、我がクラスの副担任に就任したのは……あまり良い兆候とは言えないね」

笑顔から急に真面目な表情になり、真名は目を光らせました。

「麻帆良と連合の真意はある程度推測できる。いや、連合がネギ先生の麻帆良行きを容認するとも思えないから、麻帆良の独断か……本当に偶然か。

兎も角、私じゃあないが、此処は静観が得策だね」

「静観？」

「良いかい、刹那。

麻帆良は言わずもがなだ。榛名さんや君たちにむやみに関わればどうなるか、わからないほど莫迦じゃあない。

対して君たちだってそうだ。君たちが麻帆良にちょっかいを出しても、面倒事を増やすだけとなる」

「それはその通りだ、言われるまでも無い。言われるまでも無いのだが……現に麻帆良は、私たちどころかこのちゃんにも手を出しているじゃあないか」

「問題はそこだ」

私の反論に、真名は大きく頷き返して「我が意得たり！」といった

表情になりました。

「これは私が仕入れた情報なんだが……ほんの少し前、学園(ここ)で大きな問題が取り沙汰されていたんだ」

「問題、とは？」

「ネギ先生の住居さ」

当たり前の話ですが、ネギ先生がメルディアナ魔法学校の卒業試験として麻帆良で教師をすることは、ずっと前から決められていたことです。
当然、麻帆良学園もネギ先生の受け入れ用意に奔走することになったようです。

「噂では、一時期ネギ先生を明日菜と木乃香の部屋に同居させようとする考えもあったらしい」

「……はぁーッ！？」

思わず素っ頓狂な声をあげ、我ながら間抜け面で真名を凝視してしまった私は悪くないと思います。

「信じ難いだろが、本当だ。まぁ、流石に綺羅川家が動き出して、西も目を光らせ始めた以上は取り止めになったそうだが。

ネギ先生は、職員寮で高畑先生と同居するそうだよ」

「そ、そうですか……」

あ、頭が痛いです……ついでに胃も。

「あまりに短慮。あまりに不用心。あまりに無謀。
何か思惑がないか勘ぐらない方がおかしいだろう？」

「確かに……」

「つまり、学園側には何か隠された目的・思惑があるのではないか……ということさ。
まぁ、何にしても、無謀なことには変わりはないけどね。
高畑先生も学園長も良くやるよ。私は、龍の巣に手を突っ込む趣味はないからね」

「その目的がはっきりするまでは、迂闊に動くのは得策ではない……と」

私はなんだか急に憂鬱な気分になり、ベッドに倒れこみました。

ああ憂鬱です。三学期の初っ端から憂鬱です。

取り敢えずお父様に伝えるため、私はポケットから携帯を取り出したのでした。

第弐拾捌話　娘二人の動揺（後書き）

真名の推測は、あくまで真名自身の推測の域を出ません。仮説ともいえます。

護符（タリズマン）の詳しいシステムについてはそのうち描写する予定です。現在、保持者は明日菜・刹那・子日・木乃香・真名の五人。

御意見と御感想宜しくお願いします。

第弐拾玖話　妹の奮闘と先生観察　（前書き）

前話の補足説明。

ネギはのどかを普通に（軽く身体強化しましたが）助けました。明日菜にも目撃されていません。

今話はドッジボール編です。

第弐拾玖話　妹の奮闘と先生観察

前世の時の私にとって、体育がある日は不幸の誕生日でした。
私は運動神経がからっきしで、走れば転び、ドッジボールは真っ先に脱落し、サッカーは適度にＤＦの位置を動き回っていました。

此の世界にやって来た今も、それは変わりません。

勿論、以前とは運動神経は比較にならないのですが、どうも苦手意識がこびり付いてしまっているというか、嫌悪感があるというか。
高い戦闘能力を持つと言っても、同時にスポーツが得意になるわけでもないのです。

要するに、今も昔も体育の授業は嫌です。

「子日、行こう」

明日菜に呼ばれ、私は渋々ながら頷き返しました。
嫌いですが、出なくて良い理由にはなりません。

帰っていいですか？
何か目の前で、数人がもめています。
クラス委員長の雪広（ゆきひろ）　あやかさんを中心とした我がクラスのグルー

プと、あれは……ウルスラの制服を着込んだ女子高校生の方々が何故か一触即発の状態でモメています。

ちなみに、此処は女子中等部校舎屋上にあるバレーコートです。

バレーは苦手なんですよね。

十中八九、顔面セーブする羽目になりますから。

……逃避している場合じゃあないですね。

私は前世の時はクラス委員長とかを務めていましたが、麻帆良に来てからはその役目を雪広さんに譲っています。

私が今まで委員長とか務めていたのは、周囲に推薦されたというのが大きく、自ら望んだことはありません。苦痛だったというわけではありませんが。

しかし、このクラスにはやたらと気合十分で立候補してくれる方――まぁ雪広さんなのですが――がいてくれたおかげで、私が委員長になることはありませんでした。

ですが、どうも雪広さんは熱いというか何というか、高飛車というか自信家というか……“我が強い”というのが一番適切ですかね、兎に角そういうところがありまして……冷静さに欠ける人です。

まぁ、このクラスで“没・個性”を探すほうが難しいですし、我が強くなければ率いることなどできないのですけど。

兎に角、これは……ええと、高畑先生は……所用でいないのでした。

ああもう、本当に何で担任やっているのか分からないくらい役立たずですね。

じゃあ、スプリングフィールド先生は……って、体育の授業にあの先生がいるわけないじゃあないですか。あの人副担任ですし、英語

教師ですし。

横を見ると、明日菜が私を流し目で見ていました。

Ｇｏ？

行けと？

私、人見知りなのですが……ふぅ、委員長時代を思い出しますね。

「はぁー……わかりましたよ。明日菜、刹那、フォロー頼みましたよ」

「やる気はないけど、わかった」

「え？　私もですか？」

流石にあれは……抗争が勃発しそうな勢いですし、いい加減に止めておきましょうか。

ていうか、貴女たち、どれだけやりたくないんですか。

本ッ当に可愛げのない……。まぁ、あの従者に比べれば京倍マシですけど。

「雪広さん、そして皆さん、一先ず落ち着いてください」

「子日さん？」

「ネノ、どうしたの？」

人垣をかきわけ（決して威圧してどいてもらっているわけではありません。無表情で相手を見つめるだけです）中心部へと向かいます。ちなみに、“ネノ”とは私の渾名です、双子の鳴滝（なるたき）姉妹がつけてくれました。
前世では名字＋さん付けがデフォルトだった時と比べると、なかなか新鮮でイイですね。

「雪広さん、委員長である貴女が率先して噛み付いてどうするんですか？」

「うッ……しかしですね、子日さん……」

「しかしも案山子（かかし）もありません。校内で問題が起こった場合、大抵は喧嘩両成敗になります。どちらが先かなど然程（さほど）重視されませんよ」

「それは……」

「貴女方も、です」

言い淀む雪広さんを取り敢えず無視し、ウルスラ女子高生の方々に向き直ります。

理由を聞くと、自習が如何（どう）とかいっていましたので、懇切丁寧に説明しておきます。
向こうは自習でしょうが、此方は正規の通常授業。先生はいなくとも、その点に変わりはありません。

故に、優先順位なら此方にあります。
それに、高等部の生徒が此方に出張ってくるのも妙な話です。

「申し訳ありませんが、無断での使用を不用意に認めるわけにはまいりません。御退出を願います。
最悪の場合……」

「子日さん、子日さん」

其処まで言って、肩を刹那に叩かれました。
彼女の指先を見ると……。

「スプリングフィールド先生」

慌てた様子で汗をかきながら、屋上へ通じる扉から出てきたのは、
此方の副担任でした。
そして、その後ろには、

「お前達、何をしておるか！」

「げっ」

あの人は……推測ですが、ウルスラ女子高生たちの担任か、広域指導員かその辺りでしょう。

あとで聞いた話なのですが、スプリングフィールド先生は私たちより少し前に来て、この騒ぎを見るや否や引っ込んでいったそうです。おそらく、自分では収拾不能と判断して応援を呼びに行ったのでしょう。
ウルスラの校舎は、此処から然程離れてはいません。

その応援の先生はスプリングフィールド先生と私たちに頭を下げ、私たちも下げ返しました。
乱闘騒ぎ直前になったのも事実ですからね。

そして招かざる客＋αが帰った後、ネギ先生は号令をかけました。
体育の教師が都合でいなかったため、彼が任されたようです。

私の部屋は、女子寮の古くて物置扱いになっていた部屋です。一人部屋です。
最初はクラスメイトの長谷川（はせがわ）さんと同室になる予定でしたが、後から来ておいて部屋に居座るというのも嫌でしたから（長谷川さん自身は凄く良い人でした）、無理を言ってちょっと自費で改装させてもらいました。
修業時代に色々と稼ぎましたからね。水を操って宝石を研磨したりとか。
まぁ、標準的な女子寮の部屋に戻しただけですけど。

スプリングフィールド先生のことは、兄さんから色々と聞いていま

す。

教師としても人間としても、評価はできても尊敬はできない……そんな感じですね。

同年代の子供に比べれば、優れた部分も色々とあるでしょうけど。

見たところ、拙いなりに真面目にやっていますし其処は評価できますが……魔法使いとしての点は、どうでしょう？

秘匿に関しては今のところ文句ありませんが、それはあくまで最低基準です。秘匿されなければ話になりません。

実力に関しても、ある程度は把握できます。ていうより、戦うことを想定する意味もありません。

問題なのは、魔法使いとしての矜持や価値観です。

私たちや兄さんのことが万一にも知られたとき、どうなることか……あまり想像したくありませんね。

……しゃしゃりでてきた私が言うのも何ですが、学園は何を考えているのでしょう？

案外、何も考えていないのかもしれませんね。

さて……兄さんを護ると意気込んで来たわけですが、普通に学園生活を満喫してしまってますね。

まぁ、私自身中学くらいは卒業しておきたいですし、兄さんもそれを望んでいるでしょうし……此れは此れで一向に構わないのですが……。

考えてみれば、先生だけでなく学園全体で何らかのアクションを起こす可能性もあるわけですし、今回ばかりは迂闊に動くのは下策で

すね。

そもそも、先生に私のことを話しても、コンタクトを取ってもメリットは何一つありませんし。

私の予感が正しければ、スプリングフィールド先生が正式に教師になった時点で、何かが起こる気がします。

……どのようにして決めるのでしょうか？

この時点で、どうにも嫌な予感がするのですが。

第弐拾玖話　妹の奮闘と先生観察　（後書き）

今週末に実家に帰省するため、更新が一時期途絶えます。
来月まで更新できなくなるかもしれませんが、御容赦ください。

次回は２００万アクセス突破記念を投稿する予定です。

御意見御感想宜しくお願いします。

３００万アクセス突破記念　過ぎゆく日々（前書き）

更新が一時途絶えてしまって申し訳ありませんでした。

２００万記念……と言いたいところなのですが、一カ月の間に３００万を超えてしまいました。

よって、３００万突破ということで。

なんてこったい。

３００万アクセス突破記念　過ぎゆく日々

？榛名の誕生日会編？

綺羅川（きらかわ）　榛名（はるな）――まぁ、要するに僕のことなんだけど――の場合、誕生日はどうなっているのかというと、前世の時に母から産み落とされた日がそのままなっている。

此方の世界にやって来た日にしようとも考えたんだけど、自分の“誕生”した瞬間をはっきりと記憶しているのは、どうにもしっくりこない。

まぁ、どうでもよかった、というのが本音だった――――んだけれど。

誕生日というものは、本人が自覚していようがいまいが、本人にとって特別だろうが歯牙にもかけない事だろうが、生きている限りは毎年やってくる。

そんな当たり前のことを、我が従者は思い出させてくれた。

綺羅川（きらかわ）　ハクが、いつも通りの夕食を食べ終えた後、ワンホールのケーキを用意してくれた。

最初はデザートだと思ったけど、薄く笑ったハクから「御誕生日おめでとうございます」と言われて、僕はようやくそれに気付いたわけだ。

それが、僕とハクの記念すべき第一回目の誕生日。

その後も、ハクは毎年毎年様々な方法で僕の誕生日を祝ってくれた。ケーキが豪勢になったり、二人でダンスを踊ったり、ハクが歌を歌ってくれたりとか。

でも、こういう奴っていうのは、大概“一周”するものだ。つまり、豪華にしよう、その次の年はもっと豪華にしよう……とかそんな感じになっていくうちに、いつの間にか原点復帰して、シンプルな（味気ないという意味じゃあない。当然だけどさ）ものになってしまう、というわけだ。

“規格外”という点では、誰かに引けを取らないどころか、大人げない程の完全独走で突っ走っている我が従者も、その点においては例外ではなかったらしい。

最近はケーキと紅茶のセットだけとプレゼントという、無人島で二人でバカンスしていた頃に比べれば、随分と誕生日らしいものに変わりつつある。

もっとも、それは明日菜とか刹那といった新たな面子が加わって、僕が知る“誕生日パーティ”というものに近付いた（近付かざるを得なかった……ともいえるかもしれないけど）というのも、多分関係しているだろうけど。

前世の時は、まぁ大学生だったし、カラオケ行ったり飲み屋に行ったりして祝うのが、僕と遊び仲間らの常だった。

加古林（かこばやし）とか姑獲鳥塚（うぶめづか）とかは騒がしいのが好きなタイプだったし、生真面目な染流（そめながし）も誕生日祝いくらいは騒ぐのを容認していた。

勿論、“長いものには巻かれろ”がモットーの僕としては、誘われ

ればついていくし、自分が主人公だったら即答で是を唱えてたからね。

そんなわけなんだけど。

僕の誕生日パーティは、明日菜や刹那が来て以来原点復帰して……同時に、ちょっと荒っぽくなった。

綺羅川　ハクは、榛名のサポートのために生まれた存在である。それは、何も戦闘に限った話ではない。家事などの生活面をサポートするという分野においても、彼女は文字通りの意味での“万能”だった。

その能力（ちから）は、尽くすべきマスターの誕生日ケーキを作るという些細な（しかし、彼女にとっては重大な）場面においても、いかんなく発揮されている。

といっても、所要時間は精々二、三分。

それだけで、テーブルの上にはホールケーキが置かれて甘い匂いを漂わせる。

ハクにとって、榛名のケーキを作ることは完遂しなければならない重要な仕事だが、それに現(うつつ)をぬかしすぎても良い仕事では無い。彼女の第一の仕事は、榛名の傍に寄り添い、榛名を護り続けることだ。

手抜きはしない。が、時間をかけたりもしない。

ハクは、樞人形(カラクリ)よりも感情の籠っていない瞳を、テーブルの上のケーキに向けた。

正確には、ケーキの前に「複数の」という描写が入るだろう。

テーブルの中央に陣取った綺麗な造形のケーキを挟むように（牽制してるように見えなくもないのが不思議である）、手作り感溢れるケーキが一個ずつ置かれている。

ダージリンの香りがポットから漂ってきたのを確認しつつ、ハクは無機質な瞳を、真横に向けた。

そこにはエプロンを脱ぎながら、一仕事をやり終えた後のような達成感に満ち満ちた顔の綺羅川(きらかわ)　刹那(せつな)と、無表情だが何処か嬉しげな表情の綺羅川(きらかわ)　明日菜(あすな)の姿があった。

「……」

「え？　ハク様？」

此処に来て、刹那はハクの視線を感じて顔を蒼褪めさせた。

ハクのことを知っているのなら、ハクは刹那に何の興味も持ってお

らず、言葉を発しないのも単に言葉を発する必要性が無いだけだと気付くのだが、それでも怖いモノは怖いのである。

綺羅川家のキッチンは広い。

三人が占領して同時に料理をしても、それ程支障はない（はず）。

大体、刹那たちが目障りだったら、ハクはとっくに二人を叩き出していただろう。文字通りの意味で、である。

無論、刹那と明日菜もそれを承知しているから、ハクが二人のキッチンへの“侵入”を許可した時点で、二人はケーキ作りに精を出すことにしたのだが……。

「……」

案の定、ハクは刹那達から視線をずらし、ティーポットに視線を戻した。榛名の舌の適温となるよう調整しているのだろう。

それを確認し、刹那と明日菜は互いを見合わせ、あからさまにホッとしたように肩をすくめあった。

綺羅川家では、（榛名を除いて）ハクの機嫌を損ねれば、生存確率は確定的に下がるのである。

「あとは、プレゼントが……受け取ってもらえるといいな」

明日菜のこの一言を、周囲の二人は聞かなかったことにしておくようだ。

というより、全員同じようなことを考えていたからだろう。

訪れた沈黙は、榛名が階段から下りてくる音が響くまでは、その場を支配し続けていた。

?明日菜と刹那の教育編?

「拷問と訓練の違いって、何だと思います?」

綺羅川　刹那をしてこう言わしめたのが、綺羅川　ハクによる刹那と明日菜の教育である――――などと、ちょっと現在の状況を客観視ｓ――――

「あ、刹那、死んだ」

ウンザリしたような悟りきったような口調が耳に入ると同時に、私は激しい痛みに悶絶する羽目になりました。

……ええ、どうせ私には、説明なんてできませんよ。客観視したうえでの論理的説明なんて到底無理ですよ。血反吐吐いて倒れているほうが、性に合ってますよ。

なんて考えているうちに、顔面に膝蹴りを喰らわされ、私は数回転しながら吹き飛びました。

「……進歩なし、ですか」

顔をあげると、いつの間にか目の前にいたハク様が溜息をついています。

明日菜は……うん、予想通り、血の海に沈んでいますね。

「本気の刹那（セツナ）も出していない私相手に、〇，一秒で一万回殺されるとは……それでは、マスターの足元に跪く資格すらありません」

身体のけがや疲労感が回復していくのを感じ、私は立ち上がりました。

足元に転がっていた太刀を拾い、私は再び構えを取ります。

負けたくない。

勝ち目なんてあるわけもない――――でも。

どんなに憂鬱でも、報いなきゃいけない人がいる。

「……それで良いのです」

長い脚で地に立ち、長い手を私に向けながら、ハク様は無表情のまま命じました。

「進み続ければ、貴女もそれなりに輝くでしょう。しかし――――」

其処まで言って、ハクは一息ついた。
そして、戦闘服に包まれた美しい身体は、刹那という少女を喰い殺す牙となる。

「そろそろ、マスターのティータイムの時間ですので、とっとと消えなさい」

その言葉とともに、私の意識は完全に途絶えた。

「……たまーに、普通に家事の教育とかあるから、拷問とはまた別でしょう？」

「明日菜……。ですが、実戦訓練などの戦闘訓練によっては、最早拷問のレヴェルですよ……。実際、それまがいなこともされたではないですか。対拷問訓練ってヤツです」

「ああー。……でも、あんな拷問を例としてやるのは、ハクだけだと思う」

３００万アクセス突破記念　過ぎゆく日々（後書き）

次話からは本編です。
ハクと榛名もようやく出てきます。

御意見御感想宜しくお願いします。

第参拾話　カレとカノジョたちと図書館騒乱（未遂）（前書き）

図書館島編です。

此の後は吸血鬼編をやりたいと思います。ちゃっちゃと済ますかじっくりやるかでまた悩んでいます。

ていうか、どうしても榛名とハクの出番が減ってしまいます。仕方がないですよね……。

第参拾話　カレとカノジョたちと図書館騒乱（未遂）

家のテラスに置かれたチェアーに腰掛け、夕日の光を浴びながら、漂ってくる珈琲の香りと湯気を見ながら、大きく伸びをする。

「……平和だねぇ」

「はい、マスター」

後ろで控えているハクの方を見ると、相変わらずの無表情……でも、何処か幸せそうな表情で首肯してくれた。

「ハク、どうだい？」

「どう、とは？」

「最近の麻帆良の様子だよ。刹那や明日菜、子日は元気かな？」

「はい」

即答。

それを自信・確信から来るものなのか、或いはどうでも良いから即答したのかはわからない。でも、ハクは何だかんだで彼女たちの面倒を見ていてくれているし、ハク曰く「そこそこの強さ」だから大丈夫だと思う。

「麻帆良側は？」

「上層部は、特に。ネギ＝スプリングフィールドの実習が進んでいるくらいでしょうか」

また即答。

「ハクは、ネギのことをどう思う？」

「――蟲を引き寄せる、汚泥のような蜜だと」

「御免、聞いた僕が悪かった」

「？　マスターが悪い？　そんなことがあり得るのですか？」

本気でわからないように、真顔で首を傾げた。純白の長髪が揺れ、その仕草だけでもトンデモなく妖艶だ。

いや、絶対本気で言っている。

「でも、ネギ君自体は問題起こしていないんだろう？」

「いるだけで問題になります。此れで本人も問題児だったら、とうの昔に消しています」

そう言って、さも当然のように頷くハク。

「……そう言えば、そろそろ三学期も終わりだったっけなぁ……。テスト、大丈夫かな？」

「問題無いでしょう。アレらもマスターの家族という立場ですので、マスターの御顔に泥をするような真似はしないでしょう。もしすれば、その時は――――」

……話題を変えても、結局はこうなるのか。

瞳に剣呑な光を宿したハクを見ながら、そんなことを考えて苦笑した。

その時、コポ、と音が聞こえた。

「ん？」

音のした方を見る。

テラスから見下ろせる位置にある、ハクがわざわざ作り上げた小さな池だ。

そこから、コポコポと泡が噴き出している。

よく見ようとチェアーから身を乗り出すと、パシャ、と音を立てて、池から何かが飛び出した。

「あっ」

僕が声を上げるより早く、ハクが動いた。
トンデモない速さで移動し、飛び出してきたソレを手刀で薙払う。
薙払われたソレは、ピシャ、と音を立てて散った。周囲に飛沫（しぶき）が飛び散る。

「……水？」

飛び出してきたのは、水の塊だったようだ。
と、飛び散った水飛沫が再び集まって、手鏡サイズの長方形の水の膜になった。水の膜の表面はフルフルと振動し、波紋が広がる。同時に

［もしもし、兄さん？　聞こえていますか？］

……あぁ、成程。
水の膜という時点でそんな気がしていたけど、どうやら子日の差し金らしい。

「子日か？」

［はい、綺羅川　子日です。突然申し訳ありませんが、些か妙な事態になりまして、ですね……］

いつも冷静な妹にしては、どうも歯切れが悪い言い方だった。

「……あぁ、貴女でしたか。てっきりマスターを狙う蟲の攻撃かと」

［……いけしゃあしゃあといってくれますね……。従者、貴女知っていたでしょう。大体、本当に敵の攻撃だったら貴女が張っている結界に阻まれて、家（そちら）に届きすらしないでしょうに］

「貴女こそ御寛ぎ中（コーヒー・ブレーク）のマスターの邪魔をしておきながら、良くも言えるものです。」

子日とハクは、どうもたまにギスギスするところがある。

まぁ、妹は口数も少ないし生真面目で、積極的に他者と関わっていくタイプでもない。上手く馴染めず、緊張しているんだろう。

これぱっかりは、時間が解決してくれるのを待つしかない。

［……それは兄さんに謝罪すべきことです。重ね重ね申し訳ありません、兄さん。

ええとですね……クラスメイトの数人が、図書館島に行こうとしているのですが」

「は？」

そう言って僕は、夕暮れが過ぎ、そろそろ宵の明星（金星）が見えそうになった空を見上げた。

「ええと、図書館島はこの時間帯は……？」

「ギリギリ開いていますが、彼女たちは夜に行くことになりそうです。今はまだ、見回りの先生や警備員がいますから」

「そもそも、どうしてそんな話が？」

「それが……」

そう言って話し始めた子日の声を聞きながら、僕はチラリとハクを見た。

ハクは「余計なことしやがって」と言わんばかりに目を細め、図書館島の方角を見つめている。が、すぐに視線を僕に移した。

「図書館島周囲一帯の警戒網を強化しました」

「あぁ、有難う」

「恐悦至極です、マスター」

相も変わらず、仕事が早い。

それにしても……子日の説明に、僕はズッコケそうになった。

曰く、子日たちのクラスは学年成績で万年最下位らしい。それで何故だか知らないけど、今回の期末テストで最下位だったクラスは解散、その中でもさらに低い者たちは小学生からやり直しなどという噂が流れたそうだ。

しかも、その最下位から脱出させることがネギ先生の試験らしい。

［入浴中に綾瀬（あやせ）さんたちがそんな話をしていまして……。

その最中、図書館島には“頭が良くなる本”があるとかないとかという噂も入ってきまして、綾瀬さんたちがやる気になってしまいまして。

私と明日菜・木乃香・刹那も誘われたのですが、断っておきました。

私は一応止めたのですが……あの調子では……］

僕は素直に吃驚した。まさか、根っからの委員長気質であるウチの妹でさえも、手綱を握りきれない猛者共がいたとは。

前世の時の子日は無口だが、いざとなればクラスに活を入れたり、暴走を止めたりすることで、教師陣からの評価がかなり良かったはずだ。

「その時はまぁ、莫迦な人たちが莫迦をやらかすなの思いで済ませたのですが、今になって考えてみると……どうにもきな臭い感じがします」

「きな臭いって、噂が？」

「いえ、噂の広がりようです」

明日菜が聞きまわったところ、最下位クラス解散の噂も図書館島の噂も、知っているのは２－Ａ（妹たちのクラス）と２－Ａ関係者くらいで、隣のクラスにすら伝わっていなかったらしい。

何とも限定的な噂だ。

そんな噂が期末テスト数日前に、しかもネギ先生の試験が行われる期末テストの時に、ネギ先生が担当しているクラスにだけ広まる……。

確かにきな臭い。

いや、妙だ。

「つまり、子日はこう言いたいのかい？

この噂は、生徒たちを図書館島に誘導するために、何者かが仕組んだことだ、と」

「はい。フラ……いえ、“虫の知らせ”のような嫌な予感を感じるのです」

「……ネギ先生に報告は？」

「それが、職員寮に行っても応答なしなんです。連絡先も知りませんし……」

連絡網は高畑君に繋がるようになっているらしく、ネギ先生の連絡先は（多分）みんな知らないそうだ。で、肝心の高畑君は例によって出張中。

「……危険だな。学園側は、その……えーっとアヤセ……さんだっけ？　その人たちを巻き込むつもりなのかもしれない」

「え？」

「子日は、図書館島に行ったことは？」

「ありませんが」

「一度行けば子日ならわかると思う。辺りは魔道式トラップだらけ。地下に行く毎に魔法書や封印指定の禁書がゴロゴロ。おまけに今の司書はアルビレオ＝イマだ」

「……全力で止めます」

「うん、そうした方がいいと思う」

子日との通話を終えた後、僕はハクを見た。

「学園側も無茶するねぇ。どうやら憂慮すべきは、ネギ君よりも学園上層部みたいだ」

「はい、マスター。まるで、死にかけの蟲に覚醒剤を飲ませたような結果になったようです。御命令ならば誘蛾灯に誘われた蛾の目を覚まさせ、イカれた蟲を潰してきますが」

「……ううん、多分子日がやってくれるよ。明日菜や刹那、木乃香も……ね」

子日から無理矢理に図書館島へ行く途中だった生徒たちを止めたという連絡を受け取ったのは、それから数時間たった後だった。

第参拾話　カレとカノジョたちと図書館騒乱（未遂）（後書き）

はい、行ってすらいない図書館島編終了です。
明日菜・刹那・木乃香・子日。マトモな四人がいたら止めていたでしょう、下手すれば犯罪行為になってしょっぴかれることくらいは想像つくでしょうし。

ゴーレム操作してスタンバってた学園長はお疲れさまでした（笑）。

ちなみに、ネギは会議室で他の科目の教師たちと対策プリントをつくっていました。

御意見御感想宜しくお願いします。

第参拾壱話　娘たちと夜の帳（前書き）

桜通りの吸血鬼編、一話目。
結局数話かけてやることに。

今回は言わば出撃編のような感じで。本格的に始まるのは次話以降です。

第参拾壱話　娘たちと夜の帳

テストが終わり、進級……３－Ａ生徒となりました。
あの後、ネギ先生やクラスで成績上位の連中が奮闘し（地味に私も含まれているのですが）、我がクラスは学年一位を獲得しました。

「“桜通りの吸血鬼”？」

「ああ」

寮屋で銃を磨いていた真名が、突然そんなことを言い出しました。

「近頃噂の都市伝説というか、何というか……まぁ、噂だな」

「噂か」

「噂だ」

小さくため息を零し、私は改めて真名を見ます。
傭兵の言う“噂”というのは、それなりの根拠というか真実味があるものです。

「……エヴァンジェリン＝Ａ＝Ｋ＝マクダウェル？」

「まぁ、そうなるな。少なくとも私は、件の吸血鬼（ヒト）以外にアテがない」

そう言って、肩をすくめる真名。

ちなみに今彼女が磨いている銃は、ハク様が彼女に渡した銃です。
色々渡していましたが……絶対、（色んな意味で）凶悪な銃なんでしょうね。
引き金（トリガ）が勝手にひかれて真名の眉間を撃ち抜いても、私は驚きませんよ。

まぁ、此れは依頼の前払いのようなものです。ハク様は真名も“駒”の一員に加える気満々のようですし、真名本人も満更ではなさそうでしたから。

……真名はお父様のことをかなり気に入っているようですし、お父様も私たちの友達に会えて嬉しそうでしたから。
お父様が真名のことを覚えている限り、ハク様は真名を消さないでしょう。

「すると、何か？
悪名高き『闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）』様が、今時になって吸血行為をしていると？
確か今日、佐々木（ささき）さんが倒れていたが……それか？」

「妖しさ一〇割だけどね」

「どういうことだ？」

私が尋ねると、真名はシニカルとも嘲笑ともつかない表情で天井を見上げました。

「考えてもみてくれ。
あの６００年生きているとされる『闇の福音』が、吸血行為を学園関係者に見つかって、噂の的になるようなヘマをやらかすと思うか？　幾ら学園生徒や教師の多くが、彼女の正体を知らないからといって。
それに、もし『闇の福音』が本格的に動き出したとしたら、学園側のアクションがあまりに拙い――というよりかは、無さすぎないか？」

「成程」

言われて見ればその通りです。
私と明日菜の任務はこのちゃんの護衛。最近は、真名も雇って此れに協力してもらっています。
そのため、常に学園の動向については目を光らせていますが、今のところ、本格的に動き出した兆候は見られません。
ハク様なら何か知っているでしょうけど、あのハク様が私たちにすんなり情報を伝えるわけがありませんから、断言はできませんけど。

自惚れるつもりはありませんが、私たちに悟られずに本格的にアクションを仕掛けるのは、学園側にとっては相当骨が折れるはず……です。
ん？

「じゃあ、ガセということか？」

「……ところがそうとも言い切れない」

「は？」

私が尋ね返すと、真名は首を横に振りました。その表情は達観したような苦笑したような表情でした。

「ネギ先生さ」

「ネギ先生がどうし――――あ」

ポカン、と。

だらしなく口を開けてしまった私は、最近お決まりのポーズとなってしまったかのように頭を抱えました。

ストレス社会の弊害、というやつですね。

『闇の福音』は、英雄『千の呪文の男（サウザンド・マスター）』つまりナギ＝スプリングフィールドに『登校地獄』の呪いをかけられ、麻帆良（ここ）にいる。

麻帆良にいる“関係者”なら、知っていてもおかしくない話です。

当然、私も知っています。

「怨恨……いや、解呪か。呪いを解くのに、かけたものの血縁者の

血とは……随分と前時代的な発想だが、まぁ、千年前の解呪法だろうが、効果が無いわけではないからな」

「……だが、『闇の福音』の封印は、ハクさんがすでに解いたと聞いている。子日はそう言っていたが……」

「子日さんが嘘をついているとは言わないが、何しろ解いたのは魔法関係者達の間では『絶望の白（ケール・ヘーメラ）』と呼ばれているハク様だ。……百戦錬磨で海千山千の吸血鬼（エヴァンジェリン）が、そう容易く信用するとも思えない」

小首を傾げた真名に、自分の考えを説きます。

ハク様なら、解呪したと見せかけてさらに凶悪な呪いをかけることなど容易いはずです。

子日さん曰く「従者にとって『闇の福音』は兄さんから目を離させるための格好の囮」だそうです。確かに、それは間違っていないでしょう。『闇の福音』の復活は、学園にとっては足元に火がついたようなものでしょうから。

学園側は潜在的脅威である私たちや西のことは一先ず置いて、現在進行形で切羽詰まった脅威である『闇の福音』のことを優先せざるを得なくなります。

よって、お父様にちょっかいをかける余裕もなくなる。

それが、ハク様の考え（のはず）です。

でも、全てじゃあないし、ハク様と『闇の福音』との間に信頼関係などあるはずもありません。『闇の福音』は莫迦ではない。慢心は

あるでしょうが、乗り越えた修羅場の数だけ、真名以上に鼻が利くでしょう。
ハク様と敵対すればどうなるか、そのデメリットくらいは想像できるはず。実際は、それを一京倍した恐ろしさですけど。
でも、完全に従うのはプライドが許さない。

つまり、妥協（屈服ともいえますが）しておいて、こっそりと独自に動く。

ハク様と『闇の福音』との協定は、解呪の代わりに綺羅川家に手を出すな……とか、そういう話だったと思います。
別に、ネギ先生への攻撃を禁止したわけではありません。

ネギ先生の血を手に入れ、改めて完全に解呪できたかどうか確かめる。
怨恨も晴らせて一石二鳥――――といった感じですかね。

「で、どうする？　トントン拍子に進めば、今夜にはネギ先生と『闇の福音』が接触するぞ」

真名からの質問に返答する代わりに、私は携帯電話を取り出しました。

夜の帳が降りてきかけた頃、刹那から着信が来た。

「はい、明日菜。どうしたの？」

［あ、明日菜。時間、空いているか？］

［空いていなければ、作る］

そう言いながら、机に広げていたノートを閉じ、その上にシャープペンを放り投げる。

ベッドに転がりながら本を読んでいる木乃香をチラリと見つつ、私は刹那の話に耳を傾けた。

「エヴァンジェリンが、動いている……と？」

［ああ。しかも、学園側は今のところノータッチだと思う。大かた、ネギ先生に実戦訓練でも積ませようというのだろうな。或いは“戦果”か］

「思い切ったことを……」

口に出して、些か呆れた。言葉にしてみると、それがトンデモないことだということがよくわかる。
才能があろうが『英雄の息子』だろうが、一〇歳の子供を『闇の福音』と戦わせる？
冒険を通り越して暴挙だ。

エヴァンジェリンは、確かに強い。
特に、復活している今は。
だが、ブランクというものがある。一五年間封印されていて、いきなり全盛期まで盛り返すのは厳しいだろう。

今なら、いや、全盛期の状態だとしても、学園長とタカミチ、そして麻帆良の全戦力をかき集めれば、玉砕覚悟で吶喊（トッカン）すれば勝率は零では無いと思う。

なのに、動かない。まきちゃん（佐々木まき絵）が吸血されたのは、魔法関係者からすれば一目瞭然だ。そして、麻帆良で吸血行為をするものと言えば唯一人、エヴァンジェリンだけだ。
学園長が何も知らないわけはないし、周囲の魔法関係者も感付いているはず。
だけど、動かない。学園長が説得して抑えているのか、或いは戦力が揃わなくて動くに動けないのかはしらないけど、兎に角動いていない。

つまり、ネギに丸投げということだ。

「……刹那」

［はい、何ですか？］

「ハクに報告すれば……どうにかなると思う？」

［どうにかなるって……え！　明日菜、本気で言っているのですか？］

自分でも、あり得ないことを言っているという自覚はある。

ハクは、私たちよりもよっぽど早く、よっぽど的確な情報を手に入れて吟味しているだろう。

ハクが榛名から命令された内容は、“近衛　木乃香の護衛”。その一点だけ。

そしてエヴァンジェリンは、木乃香に手を出していない。いや、出す可能性はかなり低い。

ハクがネギを助ける……あり得ない。ハクにとっては、寧ろネギが消えた方がメリットが大きいのだから。

［ハク様がネギ先生を助けに『闇の福音』と対決？　それこそまさかだ。此の首を賭けたっていい。

お父様が命じれば話は別だけど……それは……］

「わかっている」

私は強く言った。出来る限り、気迫を込めて。

電話の向こうで、刹那が息をのむのが分かる。

そう、それは最大の禁じ手。

榛名に連絡し、助けを求める。
そうすれば、榛名はハクに命じるだろう。「ネギ君を助けてほしい」と。そして、ハクは其れを実行する。

でも、それは……榛名に無理矢理、ネギに関心を持たせること。そして、榛名をハクを動かすための“道具”とするようなものだ。
ハクは其れを知れば、私たちを殺すだろう。頼まれたら断れない、榛名の押しの弱さに付け込んだ……最悪の行為をした“敵”として。
そして……私たちも、そんなことをすれば自分が許せなくなる。
自殺など、生温いこともできなくなるくらい、自分を恨みながらハクに拷問され、死ぬことになるだろう。

でも……このままネギを見捨てるのは、幾らなんでも……いや、見捨てるのは仕方がないかもしれないけど、今は……。
仕方がない、か。ネギがエヴァンジェリンにマトモに喧嘩を売るほど莫迦じゃあないことを祈るしかない。
どちらにしろ、ネギは立場上ハクに消される可能性が途轍もなく高い。だったら、今エヴァンジェリンに消された方がまだ楽かもしれない。いや、断言できる。楽だ。

「……でる、か？」

低い声で、刹那が聞いてきた。
私たちのことがネギにバレるのは避けなくてはならない。が、少し見守るくらいなら許されるだろう。

「……うん」

私は刹那に、そして私たちを“観察”しているであろうハクに向かって頷いた。

第参拾壱話　娘たちと夜の帳（後書き）

明日菜たちは、榛名に頼りすぎてもいけないというある種の脅迫概念みたいなものを持っています。

明日菜の中では、ネギよりも榛名や家族との平穏の方がよほど大切ですし、榛名に手を出すのなら容赦はしません。ですが、嫌ってもいませんので、見守るくらいはしたい、という気持ちです。

御意見御感想宜しくお願いします。

補足説明：ネギの件

本作はアンチネギを明言しています。ハクとしては、今すぐネギを消しても良いのですが、“口実”（ネギの問題行動）が起こるまでは放置。

明日菜は親族以上の感情をネギに持っていません。一応心配はしますが、ハクがいる麻帆良に来た時点で諦めています。

今回、明日菜がネギを助けようとしたのも情が動いたというか、ちょっと混乱したからです。ハクに頼もうとしたのも気の迷いのようなもの。明日菜と刹那が持つ脅迫概念（榛名を頼りすぎてはいけない）を描写するためだけにこうなるようにしただけですので、「何故明日菜がネギを庇うんだ」と疑問に思った方にいらぬ混乱を与えてしまい、申し訳ありません。

あと、真名は説明役として出しただけです。吸血鬼事件での出番はほとんど終了（予定）。少なくとも、戦闘はしません。真名の立ち位置は綺羅川家よりの中立、といったところです。

第参拾弐話　娘達と英雄の息子のカリカチュア（前書き）

ネギフルボッコの回（序の口編）。

此の後もっとボコられます。

第参拾弐話　娘達と英雄の息子のカリカチュア

認識障害を展開した後、私は寮の前で刹那と合流した。

「真名は？」

「疲れたから寝る、と」

そう言って、肩をすくめる刹那。

「……ゴメン、夜に急に面倒なこと頼んじゃって」

私が頭を下げると、刹那は驚いたような表情をする。

……何故かカチンときたが、此処は大人しく頭を下げておこう。

「構いませんよ、此れで問題が起これば、私たちでネギ先生を処理できるのですがね……」

そう言って、エヘラエヘラと笑う刹那。

相も変わらず楽観的というか、諦観しているというか。

刹那は私を指して、よく「ハク様に似てきましたね」と言うが、私から言わせてもらうと、一番ハクと榛名の影響を受けているのは刹那だと思う。

其れに刹那の一言は、一応ネギのことを案じて、の一言だった。
私たちからすれば、ネギを大して怪我させずに捕縛するなど容易いことだ。
だが、仮にハクがやったとなると多分……あの『蟲ピン』でネギの四肢と腹を撃ち止めたりするだろう。
あれは尋常なく苦しい。……私もやられたことがあるからよくわかる。

記憶を処理したりする場合も言わずもがな。
もう、ネギが問題を起こすことが前提だが、エヴァンジェリンと絡んだ時点で大問題だ。九割九分絡むことになるだろう。

……もっとも刹那の場合は、ネギに良い感情を抱いていない。邪魔者にしか見えていないだろう。
だから口ではネギのためというニュアンスを込めて言っているが、内心では邪魔者処理ができてラッキーとか考えていると思う。
……私もほぼそれに共感しているのが、何とも笑えない。

ネギが常識人なら、エヴァンジェリンの現行犯を視認したうえで、真っ先に被害者の安全を確保。誰か先生を呼ぶだろう。
麻帆良が関東魔法協会本部であることは別に（魔法使い側には）秘匿されてもいないし、当然ネギもそれを知っているはずだ。
少なくとも学園長が魔法関係者であることは確実だから、まずは学園長に知らせれば衛生部隊が派遣されてくるだろう。
或いは、追撃部隊のおでましか。エヴァンジェリンが逃走した場合、だけど。

もっとも、それはエヴァンジェリンがネギの一連の行動を全て座視した場合だ。

流石に一般生徒に吸血行為を行ったことは、学園側とて無視できない。なら、目撃者の口を封じることも考えるだろう。
いやいやいや、そもそもエヴァンジェリンの狙いがネギ自身だとすれば、あくまでネギを誘い込むためだけに吸血行為をすればいいだけで、ネギが来たら当然、ネギを襲う。

……あれ？　もう終わってない？
ネギと封印が解除されたエヴァンジェリンが対面した場合のことなど、考えるまでもなくネギの詰みだ。

「刹那……ネギ、如何なると思う？」

「え？　ハク様に殺されて仕舞いでしょう？」

何を当然な、という表情で小首を傾げる刹那。

「あー……うん、ゴメン、私が莫迦だった」

本当、救えない。
ネギは此処に修業先が決まっていた時点で、死が確定していたわけだ。

エヴァンジェリンは予想通り、桜通りで３－Ａの生徒本屋ちゃん（宮崎（みやざき）　のどか）を襲った。
あ……よく見ると、文字通り“一口”飲んだだけだ。あれなら余程の貧血持ちでも害にはならないだろう。
すると、其処にネギが現れた。
何か大声で話し合っているが、要は平行線。押し問答だ。
大体、よく知らない子供に「悪いことはやめろ」と言われてやめるような人種が、犯罪など犯すわけがない。
特に、犯（や）る気満々の超弩級（メジャーリーガー）犯罪者は。

「と、兎に角、学園長に知らせないと……」

そう言って、一旦距離を取って念話を使うネギ。だが……

「フン、そんなことを許すと思うか！」

エヴァが『氷爆』を使ってネギを牽制……いや、攻撃している。
あぁ、あれは仕留めにかかってるな……。もう、此れは戦いじゃない。鷹によるヒヨコ狩りだ。

「うわぁ！！」

何とかかわしつつ、ネギも応戦に入る。
それにしても……。

「教本通り（マニュアル）だな。実戦経験が全くと言っていいほどないと見える。まぁ、数えで一〇の子供が実戦経験豊富であればそれはそれで問題だが、『闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）』を相手取るにはどう足掻（あが）いても無理だ」

私の横で興味深げに観察している刹那が、顎に手をあてながら呟いている。其れは、私も思っていることを全部言ってくれていた。

「くっ！　仕方がありません。僕一人でも貴女を捕縛してみせます！　一般人への吸血行為、到底許せるものではありません！！」

が、ネギは悪い意味で期待を裏切ってくれた。
其処は可能性は低かろうとも、“逃げる”ことに全力を使うべきだろうに……。少なくとも、“勝てる”可能性よりかは幾分かマシのはず。

「ほう？　私は吸血鬼だ。血を吸うのは食事と一緒……人間が肉や魚を喰うのと同じだ」

「だからと言って、教師として、生徒を襲った危険を見過ごすことはできません！　“立派な魔法使い（マギステル・マギ）”を目指す者として！！」

あっちゃー……。
思わず頭を抱えた。

隣の刹那を見ると、「こりゃ駄目だ」と言わんばかりに肩をすくめて首を振っている。
エヴァンジェリンの意見も間違っておらず、ネギの言葉も正論だ。
が、時として、正論ほど場をややこしくさせるものもないのだ。……って、前に榛名が言っていたけど、今ならその通りだとわかる。
榛名、凄いよ。
人生勉強。

何て現実逃避している場合じゃない。
ネギは、さっきのやり取りで完全に頭に血が上っているようだ。
本屋ちゃんを担いでとっとと逃げろー。と心の中で叫んでみる。何か、端のようで寝転がされている本屋ちゃんの背中が痛々しい。演劇でのやられ役って、ああいう感じなんだろうなぁ、とか考えた。

「フン、お綺麗な自慢の正義論は余所でやってくれ。私はもう吸血を終えた。もう此処にとどまる意味などない……茶々丸！」

「イエス、マスター」

「ネギ先生を丁重に御持て成ししてやれ」

「はい我が主（イエス・マスター）。御意（アズ・ユー・ウィッシュ）のままに」

「か、絡繰（からくり）さん！？　魔法使い（ミニステル・マギ）の従者だったのですか！？」

「はい。失礼します、ネギ先生」

そう言って、茶々丸さんはネギに一気に近付くと、何処からか取り

出したハリセンでスパンと叩いた。

「……あれって、前に子日が暇つぶしに制作したものよね、確か特殊な水で浸した紙でできている……」

「子日さんは茶々丸さんと仲が良かったから……その時、渡したのか？」

私と刹那がそんな会話をしている間に、ハリセンでボコボコにされていくネギ。

……ひょっとして、近接戦闘の訓練をまったくしていない？

エヴァンジェリンも帰るとか言っておきながら、きっと何処かから腹を抱えながら見ているのだろう。何しろ、自分に呪いをかけたナバ（カ）ギの息子がハリセンでボコボコにされているのだから、さぞかし溜飲が下がるというものだろう。

まぁ、茶々丸さんが素手（ロボパワー）でブン殴ったりすれば、ネギも骨折じゃあ済まないだろうから、此れでも手加減している方だろうけど。

確かあのハリセンも、普通のハリセンより壊れにくい以外は唯のハリセンだったはずだし。

一方的（ワンサイド・ゲーム）ネギ叩きを終えた茶々丸さんは、気絶したネギに律義に礼をし、さらに律義なことに周囲を片付け、本屋ちゃんを何処かに運んでいった。保健室にでも向かったのだろう。

「……あぁ、予想通り過ぎて泣けてきました」

そう言ってため息を吐く刹那の肩を叩きながら、私も心の中で涙を流していた。
勿論、こんな茶番についてきてしまった自分たちへの涙だった。

ところでネギは、魔法教師に回収されていた。
やっぱり全部把握していたのか……まさか、此れ、学園側の陰謀とか？
だったら本気で泣く。

第参拾弐話　娘達と英雄の息子のカリカチュア（後書き）

・子日ハリセン（Ｍk（マーク）．１）

子日が暇つぶしと武器制作の実験を兼ねて作った特製ハリセン。子日が生み出した特殊な水で浸した紙からできている。丈夫で鉄柱に叩きつけてもびくともしないが、威力は唯のハリセン。

なお、茶々丸が持っていたのはＭｋ．１であり、水の刃を発生させられるＭｋ．２や、威力をトンカチ並みにしたＭｋ．３などの改良型も存在する。

ネギを呼ぶ餌扱いされ、当のネギからは半ば存在を忘れられかけた本屋ちゃん憐れ。

ネギアンチが決まっている以上、せめてネギとの関係をあまり持たないことで助けてあげたい……と思っています。

そして、ネギの弱さと吶喊ぶりに涙を流す明日菜と刹那。

原作でものどかは木乃香と明日菜に丸投げしていましたが、襲われた生徒を生徒に任せて犯人を追うってのはどうかと私は思っています。

御意見御感想宜しくお願いします。

第参拾参話　動き出す英雄の息子（前書き）

今回は始めが明日菜視点、残りが第三者視点でお送りします。

第参拾参話　動き出す英雄の息子

翌日。
酷く落ち込みながらも、何とか授業をしていた（生徒に落ち込んでいたと悟られる時点で問題だと思うが）ネギは、サラリと従者（パートナ）を求める発言をしたりとか、いつも以上に注意力が欠けていた。一〇歳の子供にそれ以上求めるのは酷かもしれないが、生憎とそんな言葉で許される世界でも無いのだ。

パートナ云々でまきちゃんとか鳴滝（なるたき）姉妹とか委員長とかが騒いでいるのを傍目で見ていると、学園結界（ハクのそれと比べたらシャボン玉くらいの強度しかないが）に侵入したものがいるのを感じた。

「何か来た？」

「感（反応）のサイズからして、ヒトではないな。小動物……若しくは使い魔・式神辺りだろう」

「アレかもしれないな」

「あれ？」

刹那と話し合っていると、刹那の横で我関せずと突っ立っていた真名が口を開いた。

「オコジョ妖精」

「あぁー……」

オコジョ妖精。猫妖精（ケット・シー）に並ぶメジャーな妖精の一種だ。オコジョ妖精と言う種族もいるが、それだけではない。

魔法世界には“オコジョ刑”と言う刑罰がある。文字通りの意味でオコジョにされ無償奉仕をやらされるか、収監所に収監される刑罰だ。彼らも、オコジョ妖精の一種となる。

オコジョ妖精には特定の人物に関する他者からの好意を計り取ることができたり、特定の魔法使いの運命的なパートナーの存在を感じ取ることができたりする能力があるという。早い話が、使い魔としてなかなか優秀な存在だ。

「誰かのオコジョ妖精が、紛れ込んだのかな？」

「……その“誰か”について、物凄く嫌な予感がするんだが」

刹那の勘はよく当たる。

後になって、そのことを嫌というほど思い知ることになった。

ネギ＝スプリングフィールドは、父親と母親とともにウェールズに住んでいた。
しかし、とある事情（ネギは知らない）によりほぼ隠居している状態で、ネギも周囲のほとんどの人間に両親と暮らしていることを隠していた。そして両親は、スタン老やメルディアナ校長にネギを預けてはしょっちゅう雲隠れしていた。今も、何処で何をしているのかはよく分かっていない。
しかし、ある程度の常識は（主に母親から）教わっていた。魔法の秘匿や危険性などだ。

が、常識はあくまで常識、それも限定された常識だった。
自身が受け持つ生徒に凶悪な元賞金首がいるなど、完全にネギに対処できる“常識”の範疇を超えていた。
そして、自身が完膚なきまでに（しかも従者に）敗北したという事実に打ちのめされていたネギには、学園長に報告するという基本的なことすら失念していた。

「なんとかしなきゃ……“立派な魔法使い（マギステル・マギ）”になるために……」

ネギの両親は教育を半ば他者に丸投げしていたせいで気付きもしなかったが、昨今の連合配下の魔法教育機関の教育は酷いものだった。
経済破綻、戦争の敗北によるメセンブリーナ連合の崩壊（分裂）の危機を防ぐため、戦争の大敗をできる限り隠蔽し、生徒に愛国心や西洋魔法使い絶対主義を骨の髄まで叩き込んでいた。

幸いなことに現実世界では、すでに連合に見切りをつけている組織も多かった。

が、周囲を敵に囲まれた麻帆良学園（関東魔法協会）は、連合との縁が切れればそれこそ終わりだ。しかし、こんな戦時教育まがいなメチャクチャな教育は、何とか防ぐことができた。

元々、日本出身者も多い麻帆良で、本国（連合）への愛国心を育てること自体が無茶だったのだ。

しかし、メルディアナは防げなかった。

“英雄の息子”がいるのだから、ネギのカリキュラムは全て逐一連合からのケチがつき、酷い時には本国から直接教師・講師・監督官が送られた。

勿論メルディアナは反発した。内政干渉も甚だしいものだったから当然と言えよう。

が、結局本国には逆らえなかった。

連合の教育は、魔法戦力が絶対的に不足していたことから、魔法使いを増やすことに焦点が与えられた。簡単に言うと、“立派な魔法使い（マギステル・マギ）”にならないと役立たずの屑……そんな空気を作りだしたのである。

帝国の脅威をひたすらに叫び、魔法使いを“国防の要”とし、連合のために魔法を使うことこそを“正義”とする。“立派な魔法使い（マギステル・マギ）”は“称号”ではなく、全ての魔法使いの“義務”である……そんな風潮が生まれるようにしたのである。

無論、実際の戦争を知る者は此れを冷笑したが、戦後生まれのティーンズは此の影響を少なからず受けていた。

それこそ、ネギのように“立派な魔法使い（マギステル・マギ）”にならなくてはならな

い脅迫概念まがいなものを持つ程度には。

「何とかしてマクダウェルさんを……あの人を止めれば、僕は……」

ネギの中で、使命感が業火の如く燃え盛っていた。もっとも、それが“使命感”などではなく“野心”であることに、当のネギは気付いていない。

「兄貴、ネギの兄貴！　助けにきやしたぜ！！」

その日、絡繰（からくり）　茶々丸（ちゃちゃまる）は散歩をしていた。何時も通りにやたらとトラブルに巻き込まれつつ、何食わぬ顔でそれを解決しながら茶々丸は何時ものように猫に餌をあげていた。

「……絡繰さん」

多分に緊張を含んだ声で個体識別名称（なまえ）を呼ばれ、彼女は振り返った。
其処には、肩にオコジョ妖精を乗せたネギ＝スプリングフィールドが立っていた。
その気迫に並々ならぬ気配を感じた茶々丸は、如何考えても友好ムードではない空気を感じ取りつつ、警戒態勢を取る。

「絡繰さん……マクダウェルさんを止めるのに、協力してくれませんか？　このままでは、生徒に危険が及びますし……僕も、覚悟をしなくてはなりません」

覚悟、とは何だろう？　と茶々丸の人工知能（AI）は考える。
無論、“覚悟”という単語の意味を考えているわけではない。その言葉を此処で言い放った、ネギの真意を考えているのだ。
魔法世界でも屈指の実力者『闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）』に挑みかかる覚悟か、それとも……生徒を傷付け、最悪の場合は殺害する覚悟だろうか。
或いは……自分（ネギ）が殺される覚悟、か。

「協力してくれますか？」

何処の世界に魔法発動体（杖）を此方に向け、威圧するような態度での“懇願”を「Ｙｅｓ」で返す人がいるのだろう、と茶々丸は思う。
もっとも、自分はエヴァンジェリン＝Ａ＝Ｋ＝マクダウェルに従うだけの従者である以上、例え平身低頭で頼みこまれたとしても「Ｙｅｓ」という選択肢などないのだが。

「そうですか……では、仕方がありません。“立派な魔法使い（マギステル・マギ）”を目指す者として、貴女を捕縛させて頂きます！！
ラス・テルマ・スキル・マギステル――――」

どんな理由ですかと、思わず口に出しかけつつ、茶々丸も武装を展開する。
まさか、“立派な魔法使い（マギステル・マギ）”を目指す者全員に逮捕権や執行権が与えられているわけではないだろう、と考えながら。
しかし、この戦い――――そもそも戦ってもいないのだが――――に、突発的な乱入者が現れたことは、双方にとって誤算だった。
ネギ、そしてオコジョ妖精アルベール＝カモミールがバッタリと倒れたのである。

「認識阻害すら無しの魔法使用、加えて……生徒に対する暴力行為未遂、見過ごせませんね」

綺羅川（きらかわ）　子日（ねのひ）は純白の髪を揺らしながら、地面の中から現れた。

第参拾参話　動き出す英雄の息子（後書き）

連合の教育の犠牲者ともいえるネギですが、本作ではネギアンチを貫きます。

子日は茶々丸と仲が良く、猫への餌やり場で待ち合わせをしていた時に尾行中のネギを探知。咄嗟に隠れて様子を窺っていました。そしてネギが攻撃に入ろうとしたので、催眠魔法でネギとカモを眠らせました。

ネギとカモの最悪コンビ結成。魔法協会のリミットが加速する……！！

御意見御感想宜しくお願いします。

第参拾肆話　妹と娘達の不燃ピリオド（前書き）

吸血鬼編は本話で終了です。本作ではあくまでネギは脇役ですので、ネギの戦闘などの詳しい描写はあまりしません。

あと、今回は短いです。

第参拾肆話　妹と娘達の不燃ピリオド

「幾ら喧嘩を吹っ掛けられたからとはいえ、白昼堂々結界も張らずに攻撃を仕掛けるのは厳禁でしょうに……人通りが少ないとはいえ此処は学園。近くに人がいない保証などありません」

綺羅川（きらかわ）　子日（ねのひ）は倒れたネギ＝スプリングフィールドとオコジョ妖精アルベール＝カモミールを抱えて、茶々丸を見た。

「……茶々丸さん」

「……子日さん」

子日は茶々丸を見ると、静かにため息を吐いた。

「……貴女が『闇の福音（マスター）』の命令とはいえ、スプリングフィールド先生を攻撃したのも事実。先に仕掛けたのは『闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）』の方ですので、私は茶々丸さんを被害者とするつもりはありません」

「……妥当な判断です」

「……まぁ、今回の件を学園側が仕組んだのなら、茶々丸さんや『闇の福音』は罪には問われないでしょうね。
一応、学園側にバレないように色々と細工をしていますが、問題無いでしょう。西と東の間で交わされた人員交換派遣協定……これに

より、優秀な麻帆良教員の大部分が西に行きました。代わりに麻帆良にやってきたのは、本国から体の良い左遷となった連中です。

こういった場合（ケース）の“左遷された者”には大きく分けて三種類あります。優秀すぎた故に疎まれ、謀略にに巻き込まれた者。そこそこ優秀でも世渡りが上手くいかず、生け贄（スケープ・ゴート）にされた者。そして、正真正銘の大莫迦者。この三種類です。

麻帆良に送られてきた連中はほとんどが三番目ですかね。今のところ、麻帆良に残っている戦力でマトモなのは学園長を除いて……高畑先生、ガンドルフィーニ先生、シスター・シャークティくらいでしょうかね。後は新人か西洋魔法絶対主義者か、或いは本国至上主義者（ナショナリスト）が殆どです。」

其処まで言って、子日は無表情だった顔を皮肉げに少し歪めた。

「つまり、麻帆良の警備・監視網はかなり落ち込んでいます。誤魔化すのはそうそう難しいことではありません」

「……」

それを茶々丸は無言で返す。彼女にとって、子日は大事な親友だった。だが、彼女は従者の立場だ。マスターの命令に従わなくてはならない。

それでも――――

「……助けていただき、有難うございました」

「私は喧嘩が始まりそうでしたので、仲裁しただけです」

子日はネギとカモを抱えたまま、茶々丸に背を向けて歩き出した。

「ネギ先生、目に見えて落ち込んでいるな……」

「なんでも、再びエヴァンジェリンに決闘を挑み込んで……完膚なきまでにやられたらしい。魔法教師が結構騒いでいたよ」

真名の言葉を聞いて、私は頭を抱えました。もう今月に入っただけでも何十回目になるのでしょう……数えるのも鬱になります。

「『英雄の息子』だろうが何だろうが、一〇歳の子供が『闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）』に勝てるわけがないでしょうに……。そんなこともわからないのか？　連合から派遣されてきた教師連中は」

「封印状態なら大丈夫だと思っていた節があるな。そうは問屋がおろさなかったわけだが」

「……？　学園側は掴んでいなかったのか？」

だとしたら、ハク様の『闇の福音』を囮にするというお考えが根底から歪んでしまいますが……。

「勿論気付いていたさ。だがな、刹那。封印が解除された『闇の福音』を一〇歳の子供と戦わせようなどという案は、マトモな人間の思考からは出てこないだろう」

「……成程、反対を警戒し、上層部……学園長だけで握りつぶしていたということか」

となるとやはり、学園側の狙いはネギ先生に実戦経験を積ませること、そしてあわよくば倒して英雄の息子の経歴（キャリア）に“箔”をつけること。或いはネギ先生と『闇の福音』に関係を持たせること、ですか。……馬鹿馬鹿しい。英雄譚じゃあるまいし、戦えば友情が芽生えるとでも思っているのでしょうか？

私でしたら、自分を封じた男の息子になど、良い感情を抱けませんよ。戦えば、溝はさらに増すでしょうね。しかも結果は、ネギ先生の惨敗で終わってますし。

まぁ、『闇の福音』は女子供を殺さない主義とは聞きますけど、“主義”は所詮何処まで行っても“主義”です。別に女子供を殺せば、自分が死ぬわけでもない。殺す手段だってそれこそ無数にあります。

「……まぁ、そこらのことはもういいだろう」

そう、ネギ先生のことは明日菜からしてみればそこそこの心配事かもしれませんが……私にとってはどうでもよいことです。お父様に頼まれたのなら吝かではありませんが……。
それよりも、今は。

「修学旅行……か……」

問題なのは、その行き先です。よりによって京都ですからね……。
いや、一般人のみのクラスでしたら、何の問題も無いわけなのですが……関係者も多く、担任と副担任ともに魔法関係者である我が３－Ａ。
クラスではハワイ行き派と京都行き派でモメにモメて、結局は京都に決定しました。
だから仕方がないと言えば仕方がないのですが、学園側が関西呪術協会を本気で警戒しているのならば、そもそも京都など“候補”にも挙がらないでしょう。
今や関西呪術協会は麻帆良以外の日本全土を手中に収めていると言っても過言ではありませんが、本山の京都でなければ、まだ目を瞑れたでしょうに。

「……やっぱり嫌な予感がする」

後になって、私は悟ることになります。自分の勘は、取り敢えず信じた方が賢明だと。

第参拾肆話　妹と娘達の不燃ピリオド（後書き）

修学旅行編は原作とかなりかけ離れることとなります。

補足説明：吸血鬼事件

ネギはエヴァに決闘を申し込むも惨敗（＋血も吸われる）。魔法先生（連合から派遣された西洋魔法絶対主義者）の手で回収された後、学園長から一連の事件が解決したと知らされる（エヴァがネギと戦う価値がなくなったと判断したため）。さらに、京都にナギの別荘がある事を知らせる。

吸血鬼事件は学園長が裏で糸を引いていた事件。エヴァは報復ができ、血も吸えるから了承。学園長はエヴァの封印が解けたことを知っていながら隠蔽。封印が無くとも、エヴァなら手加減すると思っていた。しかし、エヴァは手加減しつつも終始ネギを圧倒。

明日菜と刹那はネギの決闘では（ネギが自ら望んだのに加え、決闘を妨害するのは流石にまずいと思ったから）見物すらせずにノータッチ。

御意見御感想宜しくお願いします。

第参拾伍話　カレとカノジョの旅行計画　（前書き）

修学旅行編スタート。
長丁場、原作無視のオリジナル展開になると思いますので、御注意ください。

第参拾伍話　カレとカノジョの旅行計画

「ハク、用意は？」

「万全です」

家から一歩出て、ハクの方を振り返った。其処には、相変わらず白と黒を基調としたメイド服姿のハクが荷物を持って立っていた。

修学旅行の行き先が京都になったと聞いた時、久しぶりに怒鳴ってしまったのは記憶に新しい。

普通に考えればあり得ない事。僕だって天才じゃあないんだから、学園側の行動を万事予測できるわけでもない。そもそも予測することだってない。ハクがいつも的確な情報をくれるから、だけどね。

関西呪術協会は、関東魔法協会への対応に関して大まかに三つの派閥に分かれている。

長である詠春（えいしゅん）さん、そして長代理の木乃魅（このみ）さんが筆頭となっている最大の派閥、“合同派”。

これは旧穏健派と旧強硬派の大部分が合併してできた比較的新しい派閥で、穏健でも強硬でもない、つまり簡単に喧嘩を売ったりはしないが、だからといって軟弱な態度もとらない派閥。この合同派だけで、関西呪術協会及びその下部組織の連中の八割を占めている。

そして残りの二つは“強硬派”と“穏健派”。此の二つの派閥は主要メンバーの大部分が合同派に鞍替えしたことで、最早発言するのがやっと。前者は指折りの過激思想屋、後者は指折りの非戦思想屋しかいない。

要するに、殆ど形だけのモノとなっている。

言いかえれば、合同派の方針が関西呪術協会の対関東外交方針そのものになる。おまけに協会内で内政・外交を握っているのが、合同派筆頭である木乃魅さんだ。

詠春さんはどちらかというと穏健派よりだけど、あの人は神鳴流を始めとする武力関係を率いるのがやっとだから、外交問題にはノータッチだ。

何が言いたいのかというと、関西呪術協会は関東魔法協会の魔法教師派遣にOKを出すほど甘くない、ということ。

「やっかいなことになったなぁ、ハク。

麻帆良はネギ君の派遣を強行する気満々だ。多分、木乃魅さんは部隊を差し向け、ネギ君を確保するだろう。西は許可を未だに出していないみたいだし。

問題なのは、その時に西がどういう対応をしてくるか、だ。単にネギ君を捕える程度で済ますといいけど……」

「無能揃いですね、マスター。

無礼を承知で言わせて頂きますが、あの蟲共を排除すべきではないでしょうか。マスターの御命令さえあれば――――」

ハクはとことん、僕以外の人間に辛辣だ。それは東も西も無い。

ハクにしてみれば、東と西に差は無いかもしれないなぁ、どっちにしたって、“煩わしい蟲”以外の何物でもないのかもしれないし……。

でも、僕にとっては西の人たちは、宴会にも参加させて頂いた仲だ。こういうのも何だけど、東のヒト達より余程大切にしたい。

問題なのは、その西の暴れ馬連中の矛先が一般人や木乃香にまで及ぶことだ。

西に限らず、組織というモノはそう簡単に一枚岩にならない。現在の長や長代理、体制などに反発する者がいて当然だ。

そう言った連中が、木乃香や一般人に手を出さない保証はない。

そんなことは木乃香だって自覚している。でも、彼女は今のところ長の座を継ぐ気満々だ。狙われるのが怖くて、帰郷もできないのでは将来部下となる（可能性が高い）連中に対して示しがつかない、という困った事情もある。

「待ってくれ、ハク。ハクの言うことはもっともだし、仕方がないと思う。……でも、やるならもっとあとがいい。

此れは僕の考えだけど……ネギ君は、いっそ今のうちに西に捕まってくれた方がいい。それなら、責任はネギ君じゃあなく、ネギ君の京都行きを強行した学園側に生じる。その場合、ネギ君は上司の命令と教師の義務により、生徒の引率をするだけだからね。

そしたら、其れを理由にネギ君を堂々と本国（連合）若しくはウェールズに送り返すことができる。というより、本国が進んでネギ君を手中に置こうとするだろうし。

それが失敗した後でも、幾らでも手はある……そうだろう？　殺すのは……どうも、ね。せめて魔法を使えなくさせる程度で……かなぁ。

まぁ、最終的にはハクに任せるけどさ」

「では、麻帆良学園側はどうしますか？」

「……ハクがやるまでも無く、西に潰されるよ。こんな事をするなら、ね」

「成程、卓見です」

不満があるのか、反対なのか、或いは納得してくれているのか。
そんなことは、無表情のハクからは全く読みとれない。読み取らせてくれない。
不満があっても、最後には必ず僕の言うことを聞いてくれる。其れが分かっていながら、こんな事を頼む僕も相当に性質が悪いんだろうなぁ。

京都旅行へ行きたいと言い出した時には、ハクは二つ返事で了承してくれた。
でも、京都で何があっても関わる必要はないことを力説されたし、釘も刺された。

「京都でのトラブルは、木乃香や明日菜、刹那、、妹様、あと雇うのなら龍宮　真名に対処させれば済みます。確かにあれらだけでは不満が残りますが、京都にも私の分身体が幾つも控えていますので、いざとなればそれらが対処できます。
勿論、本体(わたし)は常にマスターの御側に控え、マスターに尽くし、マスターを護り、マスターの旅行が少しでも快適になる事に努めます。

ですので、なにも御心配いりません。
マスターが明日菜たちに全てを任せることを心苦しく感じておられるのなら、そんなことに御気を病む必要は全くございません。マスターに尽くせるのならあれらも本分でしょうし、近衛　木乃香とて……子蟲は子蟲でも、少しは自衛ができる子蟲です。唯蜂に喰われるのを待つだけの蛹（サナギ）とは違う。ほんの少しは飛べる蛾（ガ）なのですから」

わかってはいたけど、ハクに隠し事なんてできない。僕のことを僕以上に知っているんだから。
相も変わらず凄いというか酷いというかわからない喩えに苦笑しながら、僕は頷くしかなかった。

大体、僕が乗り込んでいっても盾の役割を果たす事くらいしかできない。戦闘の指揮なんて当然できないし、明日菜たちの足を引っ張ることくらいにしかならないことなんてわかりきっている。
まぁ、ハクに言ったら激怒する類の話だけどさ。

だから、此れは純粋な旅行だ。心配性の平凡男と、従者のぶらり旅。京都は日本人の心だ。急に行きたくなったって、別に全然問題ないと思う。うん、問題無い。

「わかってるって。
兎も角、さ。ワープなんて無粋なことはしないで、ちゃんと新幹線で行こうよ。埼玉から京都までの道のりを楽しまないと損だ。」

「勿論、手配済みです。明日菜たちの出発は三日後となります。ホテルも、明日菜たちが宿泊予定の旅館とは別ですが、それ程離れていない、それでいてより豪華な旅館を手配いたしました。

旅行プランも一応作成しておりますが、無論マスターの御自由にどうぞ。なお、現地の向こう一週間の天気予測ですが――――」

……本当に、何処までも万能でハイスペックな従者だよ、ハクは……。

其れに、天気予測？　天気予知の間違いだろうに。ハクの“予測”が外れたことなど、今まで一度たりともないんだから。戦争の行方からプロ野球の試合結果まで。

気が利きすぎるのも困りものだよなぁ、と少し思う。

や、大して困っていない、て言うか困っているのかすらよくわからないんだけどさ。

「ところでさ、ハク」

「はい、マスター」

「京都も、メイド服姿なの？」

「振袖にでも着替えましょうか？」

「……いや、もう、何でもいいや」

明日菜たちには、後で温泉旅行でもプレゼントしてあげよう。

そう誓いながら、僕とハクは駅に向かって歩き出した。

第参拾伍話　カレとカノジョの旅行計画　（後書き）

榛名とハク、３－Ａより三日はやく京都行きです。
こっちはのんびりほのぼのと旅が楽しめそうですが、明日菜たちは如何なる事やら。
そろそろ明日菜たちの戦闘シーンも書きたい（書けるといいなぁ）
皐月二八でした。

御意見御感想宜しくお願いします。

第参拾陸話　カレとカノジョの本山行き（前書き）

千草さん登場回。彼女は（主人公勢の）敵にはなりません。小太郎や月詠は……喧嘩っ早いからどうなるか……。

第参拾陸話　カレとカノジョの本山行き

「ん、こんなところかな」

「はい、マスター」

京都のとあるホテル。そこのかなり豪勢……うん、個人的にはちょっと豪勢過ぎる部屋に荷物を置いて、一息つく。
一服したいところだけど、此処まで豪勢だと安物煙草の煙を吐くのも何となく気が引けてしまう。
取り敢えず、ハクに紅茶を――――

「どうぞ、ごゆるりと」

頼むまでもなかったか。いつものことなんだけど、どうにも慣れない。
苦笑しながら一口飲む。うん、美味しい。
何時も通り、僕から一歩下がった位置で直立不動で立っているメイド服姿の我が従者を一瞥して、大きく伸びをした。

「お疲れですか？　マスター」

「ん、問題無いよ」

部屋の奥には大きな窓があり、其処からは京都の町並みが一望できる。枯山水（かれさんすい）でもあれば最高だけど、高層ホテルの一室に其処まで求めるわけにもいかない。此処を選んだのは、ハクなりの理由がある事だろうし。

「此処からはちょうど、明日菜たちが宿泊予定の旅館を確認できます。お優しいマスターは、明日菜たちを心配するかと思いまして」

聞くよりも早く、ハクは答えてくれた。……此れは、流石にもう慣れたよ。

「修学旅行の予定なんて結構前から決められているし、宿泊には当然手続きが必要だ。どっかの国のＶＩＰが来るなら兎も角、唯の修学旅行で其処まで旅館側が厳重に情報管理するとも思えないし、宿泊先を調べるのにそれ程手古摺るとも思えないし……。此処は京都。木乃香やネギ君を狙う者がいるとすれば、関西呪術協会が関わっている可能性が高いと思う。だとすれば、此処はまさに独壇場（ホームグラウンド）だ」

「つまり、宿泊先の旅館に予め（あらかじ）何かを仕掛けておくか……３－Ａ到着後に何かをする可能性が高い、ということですね」

「旅館は動かないからね。警備している人がいたとしても、“裏”の人間なんて警戒しているわけがない。……あの旅館に、関係者がいなければ……だけど」

「います」

「……は？」

「いますよ、呪術協会の関係者が。従業員の中に」

あっけらかんと言われ、思わずハクの顔をまじまじと見つめる。

そんな僕に、ハクは顔を少し朱に染めながら、うっすらと笑顔を返してくれた。

「え？　本当にいるの？」

「当然です。麻帆良の修学旅行には魔法教員が引率として加わります。ならば、呪術協会が警戒するのは自明の理です。

そうなれば呪術協会は、修学旅行の計画（プラン）……何処に泊まり、何処を見学する予定なのかを調査します。そしてそれらを把握すれば、其処に予め呪術協会の者を潜入させるなり何らかの対策を取るのもまた常道（セオリィ）……当然のことと言えましょう」

ハクの説明を聞いて、思わず納得してしまった。

「……それもそうか。え？　じゃあ心配無いのかなぁ？」

「勿論です。マスターはごゆるりと、旅行と観光を満喫してくださればそれで良いかと。

その御手を煩わせるようなことも、いらぬ御心配を与えることも、私は決して許しはしません」

キッパリと。凄く断言された。
有無を言わさず、という感じだ。あと目が怖い。
邪魔者は絶対に潰してやる、と言わんばかりの目だ。

「……ハク」

「はい、マスター」

「じゃあ、京都に来たついでに挨拶に行こうか」

せっかくなんだし、ね。

近衛家本家。関西呪術協会の総本山。通称、“本山”。
兎に角物凄い御屋敷で、お手伝いさん（という名の戦闘員）を含めると二〇〇人近くの人員が常駐している。麻帆良を除く日本のほぼ全土を掌握している呪術協会の繁栄を象徴するかの如く、強固な結界と優秀な警備員に護られた屋敷は輝いて見えた。
其処の一室。応接室、いや客間とでもいうのか、やたらと広い座敷で、僕とハクは詠春さんと木乃魅さんと対面した。

「お久しぶりですね、キラ君、従者さん」

「ええ、お久しぶりです。息災ですか？　顔色は優れないようですが」

「ははは。長という大任に一〇年以上就いていれば、顔色も悪くなりますよ」

「木乃魅さんは本日も麗しく、御元気そうで」

「嬉しいなぁ、榛名はん。そう言ってくれると有難いわぁ」

そんな挨拶を交わしながら、一服する。

と、パタパタと廊下より音が響いた。「失礼します」と聞き覚えのある声に、スーッと襖が開かれる音。

「長、長代理、御話し中に失礼します」

眼鏡をかけた女性が、お辞儀をしながら入って来た。

……ん？

もしかして、此の人……。

「千草（ちぐさ）ちゃん……？」

「え？……は、榛名さん！　えろう久しぶりじゃあないですか！！」

パタパタと寄って来て、

「あぐっ」

バシッと畳の上を転がる女性。
いや、コケたわけじゃあなく、ハクに足を引っ掛けられた……と思う。早すぎて全く見えないけど、一瞬ハクが動いた気がした。
ハクは、今も僕の後ろで控えている。

「あったぁあああああ……」

「全く、不躾な」

不快気に息を吐くと、ハクは頭をさすって起き上がる女性――――
天ヶ崎(あまがさき)　千草(ちぐさ)ちゃんを睨んだ。

「オマケに性懲りもなく、マスターの名を呼ぶとは……殺されたいようね」

「ヒ、ヒィ！？　ちょ、ちょっと待ってぇなぁ、従者さん！！」

起き上がりかけたまま高速で後退するという、何とも器用な真似をやってのけた千草ちゃんを見て、噴き出しそうになるのを何とかこ

らえた。

……絶対に言わないけど、何か新喜劇のコントみたいになってる……。

千草ちゃんは、関西呪術協会の上役（つまり幹部）の一人である天ヶ崎万葉さんと、その奥さんである撫子さんの一人娘だ。

天ヶ崎家はそこそこ名門（要するに“中堅”）の陰陽師の家系で、その中でも特に使役系や召喚系の術式に優れている家系。

大戦が終わった後、西に出向いた時の宴会で万葉さんと撫子さん……そして子供だった頃の千草ちゃんに出会ったんだけど、それ以降はたまに会うくらいでかれこれ……もう一〇年くらいは会っていないのかな？

「まぁまぁ、ハク……。

それで千草ちゃん、本当に久しぶりだけど……用は？」

「あっ……え、え～と……」

姿勢を正した千草ちゃんは、苦笑している詠春さんと口元を隠して笑っている木乃魅さんに向き直った。

「報告します、“強硬派”はメセンブリーナ連合の手の者と接触……やはり、例の鬼神を復活させ、本山と東を強襲するつもりのようです」

「そうですか……。リョウメンスクナ。あれクラスを蘇らせるには、

木乃香を……」

「いえ、それはわかりません」

「？　と言いますと？」

「それが……連中の会議に参加してきましたが、木乃香お嬢様に関する議論も無ければ、報告も一切上がってきませんでした。なお、この情報はすでに式神を通じて木乃香お嬢様に通達済みです。ただ、強硬派は本山の通信記録を監視している可能性もありますので、私が直接此処に御報告に参りました。そのため、少々遅れました」

そう言って、申し訳なさそうに頭を下げる千草ちゃん。それを木乃魅さんは手で制すと、

「御苦労やったなぁ、おおきに。悪いけど、引き続き強硬派の動向に、目を光らせておいてや。表向き千草ちゃん及び天ヶ崎家は、“強硬派”に属していることになっとるからなぁ」

「はい」

千草ちゃんは僕の方を見て、何やら言いたげに眉を下げたけど、そのまま座敷を後にした。

「……大変なようですね」

「組織内に反乱分子が潜んでいるようで、お恥ずかしい限りや」

そう言って、自嘲するように微笑む木乃魅さん。

「まぁ、此れはウチらの問題や。なぁ、旦那様」

「ええ。武力事は私の管轄。神鳴流を始めとする各部隊の動員は既に済んでいます。
此れを機に本山に弓引く者を一掃し、さらに東の暴挙の数々に終止符を打つつもりです」

大丈夫そうだ、と思いながらも、妙に嫌な予感がする。
でも、それを口に出すほど、確信できるものではなかった。

第参拾陸話　カレとカノジョの本山行き（後書き）

大戦初期でハクが早々にゲートを破壊したため、天ヶ崎夫妻は死んでいません。
なので千草もそこまで東を嫌っていませんが、自分たちの組織の敵なので快く思っているわけでもない。そんなところです。

あと、天ヶ崎夫妻の名前は適当に決めました。

御意見御感想宜しくお願いします。

第参拾漆話　カレとカノジョと嵐の前触れ　（前書き）

まだ序盤的な話です。
修学旅行で３－Ａが京都についたあたりから、本格的に動き出すのかと。今が榛名とハクの絡みを書くチャンスなんですよね……関わりようがありませんから。

第参拾漆話　カレとカノジョと嵐の前触れ

「……ふぅ、温泉は良いなぁ」

本山を出て少し観光した後、ホテルに戻って温泉に浸かっていた。
詠春さんたちは泊まる事を進めてくれたけど、流石に荒事が起こっている最中の本山に居座るほど、僕も図太くない。
それに、ハクも「巻き込ませる気か」と言わんばかりに怒ってたし。

それにしても、たまには京都でのんびるするのもオツなものだ。……いつものんびりまったりしているけど、其処はスルーしておこう。

湯から上半身を出して、夕闇を堪能しながら涼しげな風をあびる。
濡れた身体が少し冷えるけど、その冷たさが心地いい。

……僕以外に従業員しかいないのも、ハクが貸し切ってくれたからだ。貸し切ったと言っても、ホテルのワンフロアと温泉の使用時間を三時間程だけで、流石のハクもホテルを丸々貸し切ってはいなかった。
もっとも、それも（おそらくは）ハクが「人がいなさすぎるとかえって落ち着かない」という僕の心内をちゃんと汲み取ってくれた結果だと思う。
……別に、一部屋借りるだけで全然問題なかったんだけどね。慣れて来ているのか、「あ、そうなんだ」で済ませてしまった自分が怖い。適応力的な意味で。

例によって、御金とかの管理は全部ハクがしてくれている。ていうか、僕はそもそも碌に外出しない（正確には結界内から、だけど）

から、財布も持ち歩かない。勿論、外出するときは持っていくけど。

「あー……」

まぁ、そんなことは、温泉を堪能している僕にはどうでもいいわけで。ハクのことなんてこれっぽっちも疑っていないから、僕が言うまでもなく丸投げしている。
寧ろ、僕がハクに完全におんぶにだっこ状態だし。
そんなことをつらつら考えていると、

「……あれ？」

何となく、妙な気を感じた。
いや、別に良く似ているが違う世界に来てしまったとかそんなＳＦ丸出しの出来事が起こったわけでも、錯覚でもない。

「マスター」

「うぉう！！？」

急に、真後ろから声がかけられた。いや、耳元だ。肩にはらりと柔らかいものがかかった。暫くして、絹のようなハクの髪だと気付いた。

思わずずり落ちそうになったけど、ハクが支えてくれた。
振り向くと、いつも通り白と黒のメイド服をきっちり着こなす我が従者。
慌てて下半身にタオルを巻きつつ、僕は周囲を見渡す。

「何だ？　一体何が起こっているんだ？」

「マスター、京都の“地脈”が少し変わりました。人為的なものでしょう」

「地脈、だって？」

地脈。別名“竜脈”とも呼ばれる大地のエネルギィ。つまるところ気だ。
地脈は万物に影響を与えるエネルギィであると共に、万物から影響を受けて成り立っている。そのため、地脈は地形などのさまざまな環境により、その流れの方向や陰陽の性質を異にする。
また、地脈がもっとも影響を受けるのは人間の気、生命エネルギィだ。地脈の上に生きた人間たちの記憶を、その地脈は記憶している。その記憶の性質は、地脈の性質に大きな影響を与える。
ちなみに、地脈が竜脈とも呼ばれているのは、“竜”が生命の象徴だからだ。

地脈は風水、そして陰陽道において重要なポイントとなる。

「変える……それはまた、えらいことを……」

当然、そんなものを変えるのは只事では済まない。地脈の影響が色濃ければその地や住民の家は栄える。反対に地脈が途切れると、その地は衰退する。

いや、正確に言うと、“意のままに”変えるのが只事では済まない。ハク曰く、地脈というのは生きている以上、どうしても変わっていく。それに、生命であるからには何らかの異常……まぁ、病気にかかることもあるそうだ。

実は陰陽師の仕事の中には、此の地脈の調査や治療が、結構重要な地位を占めている。

陰陽師というと、退魔というイメージが強いかもしれない。かくいう僕も、後は占いくらいしか思いつかない。

でもまぁ、考えてみれば、呪術の応酬やら魑魅魍魎の事件やらがそう頻繁に起こるわけもない。近代(むかし)以前は兎も角、今は頻発していたらとっくに周知の事実になっていただろうし。

要するに、現代(いま)の陰陽師は大体地脈関係で働いているとのことだ。

其れは兎も角、此処で重要なのは、陰陽師は地脈を治す事は出来ても変える事は難しいということだ。

地脈が病気になった場合、その症例は大きく分けて二つ。エネルギィが足りなすぎるか、増えすぎているかだ。前者の場合は、周囲から集め其れを繋ぎ止める。後者の場合は、散らせて量を調節する。

ハクが言うには、此れくらいならまぁ、高位の術者なら一人で、そ

こそこの術者でも三、四人いれば可能なことらしい。

ところが、此の地脈を都合の良いように変えるとなると話は別。まず、物理的に難しい。

地脈の流れが変になり、それを戻すならまだ楽だ。が、人間様の都合で変えるのは、例えるなら濁流の流れを無理矢理変えるようなもので、手間もエネルギィも何もかもかかりすぎる。

次に、影響が予測しきれない。

地脈というのは、それこそ人間の血管のように幾重にもわたって広がり、分岐し、合流している。

おまけに生きていて、ゆっくりとだけど位置や流れが変わり、また突然枯渇したり溢れ出たりする。

勿論、此の地脈が何処をどう流れているのか把握することは陰陽師や呪術師にとっては悲願で、一大事業でもある。だから、数千年にもわたって観測・調査・記録されている。

それらの資料は各血族でも管理しているけど、今は殆どが関西呪術協会の、そういったことを専門としている人たちが管理しているそうだ。

そんなややこしすぎる地脈を無理矢理組み替えた場合、どんな障害が出るかわかったものじゃあない。

「で、どうしてまたこんなことを?」

「エネルギィを集め、何かに使うつもりでしょう。おそらくはリョウメンスクナかと」

「リョウメンスクナ?」

それなら詠春さんから聞いたことがある。何でも、かつて『紅き翼』の面々に封印させられた鬼神だとか。

「そんな物騒なモノの封印を解こうっていうのかなぁ？　地脈で？　可能なの？」

「京都の地脈は優れた陰陽師を生む風土ではありますが、同時に魔を引き寄せるエネルギィもあります。陰陽道は陰と陽、つまりプラスとマイナスが紙一重の関係にあります。……まぁ、詳しい説明は無意味ですのでざっくばらんに説明させて頂きますと、可能です」

いつの間にか、僕は浴衣姿で廊下に立っていた。どうやらハクに着せられたみたいだ。……いや、こんなことはしょっちゅうだよ？　別に考えに没頭していたわけじゃあなくてさ、わからないんだって、本当に。

「で、どうするの？」

「地脈の治療は呪術協会の専売特許。呪術協会の内紛が関係していると思われますので、向こうに任せるのが得策だと」

要するに、「手前の尻は自分で拭け」理論だった。まぁ、ハクがそう言うなら。緊急事態だったら、とっくにハク……の分身体さんが動いているだろうし。や、今動いているのかは知らないけどさ。

「マスターはごゆるりと。先程は御入浴の邪魔をして、申し訳ありませんでした。
無理矢理組み替えた結果、ほんの数秒ですが地脈が乱れました。よって、マスターの御側に参り、避難させて頂きました」

深々と頭を下げる我が従者。無表情だけど、怒っているのがよくわかる。
……あ、此れ大戦の時並みにキレてるや。

……頼むから、ハクを抑える僕の身にもなって欲しい。

「お詫びとして、今日は私がそのお背中を流し――――」

「あ、そうだ、ハク」

「はい、マスター」

ふぅ。……此れが、「咄嗟の話題転換」。ハクは僕の言うことは取り敢えず答えてくれるから、ハクの言葉をさえぎるときには結構有効な手段だ。
少なくとも、大声で止めたり叫ぶよりかは。

「仮に、今からリョウメンスクナに地脈を注いだとして……復活には、どれくらいかかる？」

「後先考えずに只管(ひたすら)注ぎ込めば三〇分、慎重に周囲の土地住民その他諸々への影響を考慮すれば五日から六日かと」

「……それってつまり、明日菜たちの修学旅行の真っ最中には解除準備が整う、ということ？」

「そうなります。寧ろ、それが狙いかと」

「……そうかぁ……」

今のうちにハクに頼んでなんとかしてもらうこともできるだろうけど……やはりハクの言った通り、詠春さんたちに任せるのが得策、かな。

今回のことが呪術協会の反逆だとすれば、其処に介入するのもどうかと思うし……。

明日菜たちのことは心配だけど、ハクが大丈夫だろうと判断していることは確かだ。

そうじゃあないなら、ハクならさっさと鬼神を消しそうだし。

まぁ、僕が行ったって出来ることなんてないし……。

「ハク、頼むよ」

「御任せください、マスター」

頼もしげに一礼するハクを見て、僕はもう一回温泉に入る事にした。

……ハクに入ってこないよう、釘をさして。

第参拾漆話　カレとカノジョと嵐の前触れ　（後書き）

木乃香が狙われなかった場合、どうやってリョウメンスクナを復活させるかという回でした。
ちなみに木乃香が狙われないのは、綺羅川が護衛役についていることが知れ渡っているから。

考えてみれば、幾ら強大とはいえ個人の内蔵魔力に頼るのもどうかなぁ、と思いまして。
京都に元からあったエネルギィ使う方が確実じゃあないか？　と。

御意見御感想宜しくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6538t/

魔法先生ネギま！〜カレカノ・ライフ〜

2011年10月9日02時30分発行